

## 古代詩歌における季節表現の形成

著者	隋 源遠
発行年	2015
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2014
報告番号	12102甲第7199号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00127768">http://hdl.handle.net/2241/00127768</a>

筑波大学博士（文学）学位請求論文

# 古代詩歌における季節表現の形成

隋 源遠

二〇一四年度

# 目次

凡例	v
序章	1
第一節 自然暦の時代から暦法の時代	2
第二節 太陰太陽暦の四季観と自然暦の季節感	5
第三節 季節詠と「立春」	7
第四節 立春関連詠作研究の可能性	9
第五節 各章の概要	11
第一部	17
第一章 古代詩歌における年内立春詠の成立	18
はじめに	18
第一節 年内立春詠と新年立春詠	18
第二節 中国文学における「年内立春」	21
第三節 『萬葉集』における「年内立春」	26
第四節 『古今集』における「年内立春」	29
第五節 『菅家文草』及び『菅家後集』における「年内立春」	31
おわりに	34
第二章 和歌における「春の徴としての霞（かすみ）」の成立	38
はじめに	38
第一節 成立の背景とその在来性	40
第二節 太陰太陽暦との関連	47
第三節 中国文学との関連	51

第四節 理知への傾斜	54
おわりに	57
第三章 古代日本漢文学における「煙霞」の受容	62
はじめに	62
第一節 「霞」の表現史	64
第二節 詩語「煙霞」の成立	68
第三節 『懷風藻』における「煙霞」	74
第四節 勅撰三集における「煙霞」	77
おわりに	81
第二部	87
第一章 平安和歌における年内立春詠の展開	88
はじめに	88
第一節 初期の私家集における年内立春詠	89
第二節 『永久百首』と冬の年内立春詠	93
第三節 『月詣集』と雑の年内立春詠	99
おわりに	102
第二章 平安和歌における立春関連詠作の展開	107
はじめに	107
第一節 「立春」を表すことば	109
第二節 立春関連詠作の題詠化	112
第三節 立春関連詠作の基盤	115
第四節 立春関連詠作の風景	120
第五節 立春関連詠作の周辺	129

おわりに	134
第三章 唐詩における立春関連詠作の展開	137
はじめに	137
第一節 初唐の立春関連詠作	142
第二節 盛唐の立春関連詠作	144
第三節 中唐の立春関連詠作	147
第四節 晩唐の立春関連詠作	149
第五節 成立の背景と詠作の姿勢	150
おわりに	153
第三部	156
第一章 菅原道真の年内立春詠	157
はじめに	157
第一節 「立春」——「閑客」の苦悶と希望	158
第二節 「元年立春」——「遷客」の絶望と忠貞	167
おわりに	173
第二章 紀貫之「袖ひちてむすびし水」の解釈	176
はじめに	176
第一節 問題の所在	177
第二節 「三季の説」の成立と納涼詠	178
第三節 「むすびし水」の季節性	184
おわりに	189
終章	193
第一節 和歌の立春と唐詩の立春	194

第二節	和歌の伝統と日本漢詩の伝統	197
第三節	季節表現の形成と太陰太陽暦の受容	200
参考文献		204
一.	単行本（電子化資料も含む）	204
二.	論文	218
三.	インターネット資料	221
初出一覧		223
付録		i
平安和歌の立春関連詠作一覧		ii

## 凡例

一・引用和歌集の書名に『○○和歌集』とある場合、「和歌」の二文字は省略する。（例…『古今和歌集』↓『古今集』、『月詣和歌集』↓『月詣集』）。

一・私家集の書名は、『新編私家集大成』（古典ライブラリー版）の分類に従い、歌人名の後に「集」を加える形で表記する。（例…『新編私家集大成』の「貫之」は『貫之集』と表記する）

一・引用の略称と異なった、一般的に知られる呼称を持つ文献に関しては、各章の一回目の引用箇所はその呼称を略称後の○の中で記す。

（例…『俊頼集』「（散木奇歌集）」

一・巻数、部立、作品番号の掲載原則は以下のとおり。

勅撰集…巻数、部立、歌番号

私撰集…巻数、部立（ある場合）、歌番号

定数歌集、歌合…巻数、部立（ある場合）、歌番号

私家集…歌番号

『白氏文集』…巻数A、作品番号A／巻数B、作品番号B

『白氏文集』以外の別集…巻数

『全唐詩』…巻数、作品番号

その他の中国文献については、適宜判断する。

一・『万葉集』の「万」は「萬」で表記する。歌番号は小島憲之氏・木下正俊氏・東野治之氏校注・訳『万葉集（全四冊）』（新編日本古典文学全集6～9、小学館、一九九四～一九九六）による。

一・私家集の歌番号は『新編私家集大成』（古典ライブラリー版）による。

一・私家集、『万葉集』以外の歌集（勅撰集、私撰集、定数歌集、歌合など）の歌番号は『新編国歌大観』（古典ライブラリー版）による。

一・『白氏文集』の巻数Aは那波本、作品番号Aは花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』（朋友書店、一九七四）、巻数B及び作品番号Bは謝思煒氏校注『白居易詩集校注』（中華書局、二〇〇六）による。

一・『全唐詩』の巻数及び作品番号は陳貽欣氏主編『増訂注釈全唐詩』（文化芸術出版社、二〇〇二）による。

一・使用テキストについては、各章の末尾に記す。



# 序章

# 序章

## 第一節 自然暦の時代から暦法の時代

古代日本の季節認識は、中国から伝来した太陰太陽暦の実施を境に、自然暦の時代と太陰太陽暦の時代とに二分することができる。ただし、「自然暦」とは、いわゆる暦法をいうものではない。したがって、ここで言う自然暦の時代とは即ち暦法以前の時代を指す。自然暦の時代の年月感覚については、資料がほとんど残されていないため、その実態を把握することは困難である。しかし、季節や年月といった暦の感覚は、かなり古い時代からあったと考えられる。暦の起源について、能田忠亮氏は次のように述べた。

鳥獣のような動物でさえも、ちょうど太陽と一致した自然の暦への適合性をもっているのであるから、まして人類に於ては、かなり早くから暦の考えは時の考えと共に発達したに相違ない。いかに未開時代の人類であっても、自然現象に対して驚異の眼を持っていた。そして人類が地上に生活している限り、その身近に起る自然現象の影響が大きければ大きいほど、それに注意をむけるのは当然のことである<sup>1)</sup>。

そういった自然の動植物の変化や気象現象の発生から得た自然暦の知識が、農業の発生とともに発達していくと考えられる。これについて細井浩志氏は、次のように述べている。

農業では、季節ごとに必要な農作業があります。春は田を耕して代掻きをし、一方で種籾から苗代で稲を育てます。そして、現在の暦の5〜6月ころに、育てた苗で、水をはった回に田植えをします。そして雑草を抜いたり虫を追ったりと手入れをしつつ、秋になると田の水を抜いて、稲刈りをします。それから、寒い季節が過ぎると、また春がやってきます。こうした作物の成長は、太陽の位置の違いに基づく、日照時間の差で起こるものです。この季節ごとの温度や、気象の違いを利用して、農業を営む地域には、1年というサイクルと、季節という区分が生まれます。

つまり、遅くとも農耕社会が成立した弥生時代には既に、日本は発達した自然暦の知識を手に入れたと考えられる。しかし、自然暦は「その地域の微妙な自然環境の違いに左右」される性格をもつため、「社会の広域化と複雑化」に対応できない問題があると細井氏は指摘する。社会の進歩とともに、暦がもたらす時間感覚は、「ただ農事を順序よく行うためばかりではなく」、「その民俗の歴史・祭典・政令・宗教・年中行事などに」も深く関わっていくので、全国通用の暦法が必要されるのは必然の流れである。そこで日本の季節感に決定的な影響を与える決断が下された。日本は自ら暦法を作るのではなく、中国の暦法を利用することを選択したのである。

暦法に関する最古の記事は『日本書紀』欽明紀に見られる。

（十四年）六月、遣<sub>二</sub>内臣<sub>一</sub>使<sub>二</sub>於百濟<sub>一</sub>、仍賜<sub>二</sub>良馬二匹・同船二隻・弓五十張・箭五十具<sub>一</sub>。勅云「所<sub>レ</sub>請軍者随<sub>二</sub>王所<sub>レ</sub>須<sub>一</sub>。」別勅「医博士・易博士・曆博士等、宜<sub>二</sub>依<sub>レ</sub>番上下<sub>一</sub>。今上件色人正當<sub>二</sub>相代年月<sub>一</sub>、宜<sub>下</sub>付<sub>二</sub>還使<sub>一</sub>相代<sub>上</sub>。又卜書・曆本・種々藥物、可<sub>二</sub>付送<sub>一</sub>。」

それによると、欽明十四年（五五三）、日本は百濟に対して曆博士と曆本とを要求した。そして十五年二月の記事には曆博士固徳王保孫が易博士、医博士、採薬師などとともに来日したと記されている。この時に伝来した暦法は元嘉暦と考えられる。

ただし、実際の暦の使用は、欽明朝より前から既に始まっていたと考えられる。小川清彦氏は、『日本書紀』の記事に付けられた年月日を調査し、安康元年（四五四）以降の日付が元嘉暦に基づいていると指摘する。そして近年出土した稻荷山古墳鉄剣銘や、和歌山県五条市の隅田八幡宮所蔵の鏡銘に中国暦法による暦日表記が確認され、五世紀の日本で暦法が使用されていた可能性を示した。さらに岡田氏、細井氏

がそれぞれの著書で、五世紀の巨大古墳の建設に、暦法の使用が欠かせないと指摘する<sup>30</sup>。ただし、二氏は五世紀の倭国に、元嘉暦での計算ができる人物がいたかどうかについて疑問視しており、推古十年の観勒来朝までは、交替的に来朝する百済の暦博士の力を借りて、暦法を運用していたと見ている<sup>31</sup>。

しかし暦法の運用を明記する記事が見られるのは、ずっと後のことである。日本における太陰太陽暦の実施年に関する記録は、『日本書紀』と『政事要略』とに見られる。『政事要略』は「儒伝云、以<sup>二</sup>小治田朝十二年歲次甲子正月戊申朔<sup>一</sup>、始用<sup>二</sup>曆日<sup>一</sup>」とあり、これによれば推古十二年（六〇四）が暦法を使用する最初の年となる。一方の『日本書紀』は、持統四年（六九〇）の記録に「甲申、奉<sup>レ</sup>勅始行<sup>二</sup>元嘉暦与儀鳳曆<sup>一</sup>」と見られる。国文学研究において、長い間この持統四年説が主流となっていた<sup>32</sup>。しかし二〇〇三年に、奈良県の石神遺跡から持統三年の具注暦の断簡が発見され、頒暦はそれ以前から行われていたことが明らかになった<sup>33</sup>。この断簡は、現存唯一の元嘉暦の実物と見られる<sup>34</sup>。そうすると、持統四年の勅は岡田氏のいうように「元嘉暦と儀鳳暦の併用を開始したこと」を意味するものとなる<sup>35</sup>。そして元嘉暦の伝来と習得を記載する記事は、『日本書紀』推古十年にある。

冬十月、百済僧觀勒来之、仍貢<sup>二</sup>曆本及天文地理書并遁甲方術之書<sup>一</sup>也。是時、選<sup>二</sup>書生三四人<sup>一</sup>、以俾<sup>レ</sup>学<sup>二</sup>習於觀勒<sup>一</sup>矣。陽胡史祖玉陳習<sup>二</sup>曆法<sup>一</sup>。大友村主高聰学<sup>二</sup>天文遁甲<sup>一</sup>。山背臣日立学<sup>二</sup>方術<sup>一</sup>。皆学<sup>レ</sup>以成<sup>レ</sup>業。

これによれば、陽胡史祖玉陳という日本人が、百済の僧觀勒から暦法を学び、その知識を会得したのである。それならば、その二年後に、暦法が運用されはじめたとする『政事要略』の記事の信憑性も見えてくる。しかしこの推古十二年の暦法の運用が、正式な頒暦かどうかは疑問である。岡田芳朗氏は、その推古十二年を頒暦が始まった年とするが<sup>36</sup>、細井氏のいうように、全国向けの頒暦には、紙製造業の発達や、地方における暦法の浸透が欠かせないので、七世紀初頭推古朝において、その条件が整っているかどうかは疑問である<sup>37</sup>。具注暦は、月日や季節にのみならず、陰陽、五行、吉凶などの要素も含まれているので、その運用には高度な漢文の教養が必要とされる。その点からも、推古朝における具注暦の運用は都を中心とする一部の地域に限定され、地方においてはその簡易版の暦が使用されていた可能性が高いと考えられ

る。具注暦の正式な頒暦について、細井氏は、『日本書記』天武天皇四年（六七五）四月の天武天皇詔にある「亦四月朔以後、九月三十日以前、莫<sub>レ</sub>置<sub>二</sub>比満沙伎理梁<sub>一</sub>」の条を引いて、「これは、暦日を指定した命令であり、広範囲に同一の暦が普及していることを前提としています」として、天武天皇の時代には確実に頒暦が行われたという考えを示した<sup>16)</sup>。

以上の説を整理すると、日本は五世紀あたりから、中国の暦法を使用し始め、そして六世紀には、朝廷から百済に暦博士と暦本とを要請することが行われた。七世紀初頭から、朝鮮僧侶から暦法の知識を会得し、国内での暦法計算、作成事業をスタートした。そして遅くても天武朝あたりから、中国に習って全国向けの公式の頒暦を行ったという。頒暦により、太陰太陽暦の知識が日本社会に浸透し、日本は、最終的に暦法時代に入ったのである。

## 第二節 太陰太陽暦の四季観と自然暦の季節感

古代日本が使用する中国の太陰太陽暦は、月日だけではなく季節をも厳密に規定する暦法である、そこに内包される四季規定は、二元的四季観とも言われている<sup>17)</sup>。これを表にすると、次のようになる。

【表一】二元的四季観

冬	孟冬月、仲冬月、季冬月	立冬、節分
秋	孟秋月、仲秋月、季秋月	立秋、節分
夏	孟夏月、仲夏月、季夏月	立夏、節分
春	孟春月、仲春月、季春月	立春、節分
暦月の四季		節月の四季

全国範囲の頒暦は、日本社会における太陰太陽暦の四季観の浸透を加速させた。しかしその浸透は一つの大きな問題を伴っている。太陰太陽暦によって規定された四季は、中国の中原地方の自然暦の感覚に基づいてできたものである。実際の日本の自然暦の季節感との間にズレがあるからだ。両者のズレは、中国の中原地方の季節感を反映する「七十二候」（旧候）と、江戸時代の暦学者渋川春海が日本の実情に合わせて改訂した「本朝七十二候」（新候）との区別からも窺える。たとえば、「鶯」の鳴き始める時期を示す旧候の「倉庚鳴」は八番目に位置するのに対して、新候の「黄鶯睨睨」は二番目に位置する。両者の間には三十日の差がある。また旧候十番目の「玄鳥至」は、新候では十三番目になっている。両者の間には十五日の差がある。そしてズレがあるのは七十二候だけではない。つい最近、日本気象協会が、日本版二十四節気を新しく作ろうと、専門委員会を設置して議論させたことがある。結果は、「いにしえより伝わる二十四節気の重みを重要視し」、「二十四節気とは別になじみのあることばや、最近の風物詩となることばを選び「季節のことば36選」を選定すること」に留まったが、その委員会に参加した長谷川權氏によると、気象協会側は気温グラフなどの資料を用意し、日本と中国の黄河のあたりとの間にはちようどう一ヶ月の季節のズレがあるとして、二十四節気の改定を薦めたようだ。地域によって差はあるが、中国の太陰太陽暦に規定された四季と日本の実際の季節との間には、およそ十五日から一ヶ月程度のズレがあると考えられる。しかし、高度な文明を象徴するこの太陰太陽暦における季節規定を、日本在来の季節感をもって改訂することは、暦法の知見において劣勢の位置にいる大和政権にとっては、とうてい不可能である。古代日本は、この実際の季節とズレのある中国の四季観を受け入れるしかなかった。そうすると、この季節感と四季観とのズレを、どう対処するのが問題となる。中国の暦法を変えることができないなら、日本の季節感をそれに適応させるしかない。そこで従来の自然暦の季節感を太陰太陽暦の新しい四季観の中において改めて位置付ける動きが起きたのではないかと考えられる。そしてこの過程で形成されたのが、古代日本詩歌の季節詠である。

### 第三節 季節詠と「立春」

和歌における季節詠は、『萬葉集』において創出されたものである。小川靖彦氏の言うように、「萬葉集において「季節歌」というジャンルは、決して固定するものではなく、生成しつつあるものであった」<sup>53</sup>。その草創期に位置するのは『萬葉集』第二期に相当する持統朝である。

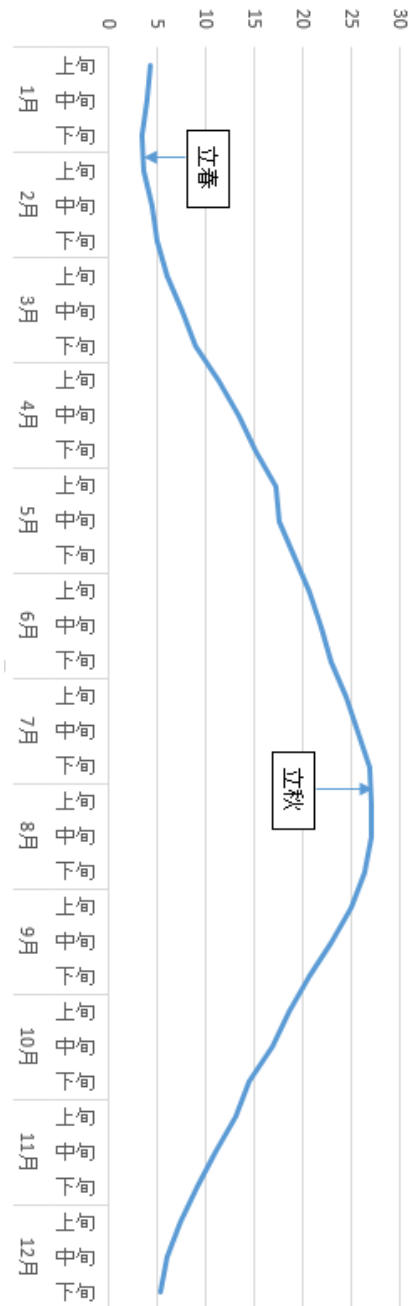
第一節において述べたように、持統朝の日本は既に頒暦の時代に入っている。この時代の「季節歌は天皇・皇族を中心とする、少数の限られた作者にしか作られていない。（中略）未だ一握りの教養人たちの試みる先端的な文学であった」<sup>54</sup>。それを代表するものは、『百人一首』にも選ばれた持統天皇歌「春過ぎて夏来るらし白たへの衣干したり天の香具山」（巻一、二八）と人麻呂歌集の季節詠である。持統天皇歌に暦法の知が含まれていることは、既に内田賢徳氏の指摘がある<sup>55</sup>。一方の人麻呂歌集の季節詠は、「立春」に由来すると考えられる新しい和語「春たつ」（巻十、一八二二）の創出が注目される。「立春」は二十四節気の中において、春の始まる日を意味する節である。この節が、日本の季節詠の草創期において注目された背景には、自然暦の季節感と太陰太陽暦の四季観とのズレが関係していると考えられる。

日本の季節感と中国の四季観との間にズレがあると言っても、それは暦上が夏なのに実際は冬だというような大差ではない。春夏秋冬を三ヶ月ずつの季節として考える際、一ヶ月のズレがあるということは、残りの二ヶ月の季節があつてということになる。ズレよりも、重なっている部分が多いから、長年利用されてきたのである。そしてこのズレが特に意識されやすいのは、寒暖が交替する冬春、夏秋の間ではないかと考えられる。表二は、気象庁のデータに基づいて作成したものである<sup>56</sup>。古代の気候とは多少の差があるが、一つの参考にはなるだろう。表二から分かるように、中国の暦法にいう立春、立秋は、持統朝の中心部である大和地方ではほぼ真冬、真夏に当たる。この季節のズレをどう理解するのは、自然暦の感覚に馴染んでいる日本貴族にとっての大きな問題であるに違いない。寒い時期に来る「立春」が何をもつて春の節といえるのか。「春立つ」を使った季節歌は、そういった暦法のズレに対するたゆまぬ思索の中で生まれきたものと考えられる。なお、「秋立つ」という「立秋」に由来する和語も、『萬葉集』の人麻呂歌の用例（巻一、三八）が最古である。一方、感知される季節のズレ

が比較的弱い「立夏」と「立冬」とに関しては、『萬葉集』において和語化されることはなかった。

そして『萬葉集』において注目された「立春」と「立秋」という二つの節気のうち、古代和歌史において特に多くの歌を誕生させたのは「立春」の方である。したがって、「立春」を詠む和歌は、古代日本詩歌の季節表現における、伝来の四季観と在来の季節感との和漢融合の構造を考える際の有効な考察対象の一つと考えられる。

【表二】奈良市の平均気温(℃) 一九八一～二〇一〇





#### 第四節 立春関連詠作研究の可能性

従来の研究は、「立春」が古代和歌においてどのように詠まれていたのかに注目することが少なかった。個別の歌に関する論は見られるが、古代和歌における立春関連詠作の表現史をテーマとして扱うものは見当たらない。多くの詠作を残した古代和歌の立春関連詠が従来の研究においてそれほど重視されなかったのは、この題材が一見さほど大きな問題を含むようには見えないことが関連しているのかもしれない。この題材が二十四節氣に出自を持つことは明白であり、それを日本の和歌の題材としてとったことも、古代日本における太陰太陽暦の運用で説明がつく。太陰太陽暦の四季観と自然暦の季節感とのズレを捉えて初めて、この題材が和歌の季節詠において注目された事象の背後にある、日本の独自性が見えてくるのである。そして古代和歌における立春関連詠作は、以下の視点から見た時にも、興味深いものがある。

一般的な考えとして、和歌における季節詠の誕生の背景には、六朝初唐文学における季節詠の大きな影響があると考えられる。中国文学における季節表現は、既に六朝時代において高い水準に達していたからだ。中国文化の摂取に積極的であった日本の歌人達が、中国文学の季節詠に啓発され、和歌における季節詠の創作を試み始めたと考えられる。「立春」は中国から伝来した季節の概念であることを考えると、それを詠んだ和歌も中国文学における立春関連詠作の影響を受けたことが、当然予想されるであろう。しかしながら、実際にこれらの詠作を検討してみると、中国と日本との立春関連詠作の関連性は、それほど緊密なものではないことが判明する。これについては第二部第三章において詳論するが、六朝詩及び唐詩に現存する「立春」の用例を見ると、「立春」が春の始めというよりも、一つの節日として詠まれていた例が多いことが分かる。この点は、春の季節歌題として詠まれることが一般的である古代和歌の立春関連詠作とは異なる。つまり、和歌における立春関連詠作は「季節詠」に偏るのに対して、中国の漢詩における立春関連詠作は「節日詠」が主流である。しかし従来の研究は、この日中の詩歌における立春関連詠作の創作実態の差について、ほとんど触れることはなかった。同じく二十四節氣から取った題材であっても、和歌における「立春」と中国漢詩における「立春」との間には、少なからぬ差異が存在する。そしてその差異を分析することで、和歌の季節表現の

独自性が見えてくるのではないかと考えられる。

また、「梅」、「時鳥」、「紅葉」、「雪」といった、景物をテーマにする一般的な季節詠と違って、「立春」というテーマの中には景物の要素が含まれていない。「雨水」、「白露」などと違って、「立春」は動植物や気象現象との関連性が薄い節気である。しかし特殊な例を除いて、季節詠の一般的な構造において、景物は欠かせない要素である。古代日本の歌人達は、どのようにして、「立春」にふさわしい景物を詠出したのか。これもまた興味深い問題である。

そして『萬葉集』と『古今集』とを繋ぐ季節の題材という点から見ても、「立春」という題材は貴重である。『萬葉集』と『古今集』との間に、国風暗黒時代とも称される日本漢文学の隆盛期が存在する。それに伴う和歌創作の低迷が、『萬葉集』以来の和歌伝統の継承を妨げることとなり、その結果、『萬葉集』と『古今集』との間に、和歌の伝統の断層が生成されたのである。季節詠の草創期である『萬葉集』第二期から「春たつ」という形で登場し、『古今集』においても巻頭に飾られ、そして平安和歌において多くの詠作を誕生させた「立春」は、この断層に跨っている数少ない季節詠のテーマの一つである。この意味において、立春関連詠作は上代和歌と中古和歌とを繋ぐ題材として、古代日本の詩歌における季節表現の形成を考える際の貴重な材料であると言える。

ただし、忘れてはいけなのは、古代日本詩歌には和歌という伝統以外にも、漢詩という伝統が存在しているということである。和歌は日本固有の文学様式として存在しているのに対して、漢詩は中国から伝来した様式である。長い日本文学の歴史の中で、この両者は互いに影響し合いながらも、各々の伝統を維持し続けていたのである。古代日本詩歌の季節表現の形成は、主に和歌によってできたものだが、日本漢詩も一定の役割を發揮していると考えられる。「立春」に関して言えば、『和漢朗詠集』と『新撰朗詠集』という平安時代に編纂された二つのアンソロジーの「立春」の部に、日本人が作った漢詩文が複数選ばれていることが注目し値する。そのうち、菅原道真の二首の年内立春詠が、完全な形を保ったまま『菅家文草』並び『菅家後集』に収録されているので、稀に見る古代日本漢詩の立春関連題材として独特な魅力をもつ。立春を詠んだこれら日本漢詩をも視野にいとると、古代日本詩歌における立春関連詠作の形成の過程がより全面的に捉えられるだけでなく、

その中にある日本の独自性も一層明確に見えてくるのではないかと考えられる。

## 第五節 各章の概要

以上の考えを踏まえて、本論文は、成立論、展開論、作品論の三部八章によって構成される。

第一部は、立春関連の詠作の成立を考察する。第一章は太陰太陽暦の十二月立春を題材とする和歌と漢詩における年内立春詠の成立についてである。年内立春を意識した作品は、日本の和歌、漢詩、及び中国の漢詩において確認される。太陰太陽暦の重層的構造によって普通に発生するこの現象を、古代日中の歌人と詩人とは、それぞれどのように捉えていたのか。『萬葉集』、『古今集』、『菅家文草』並びに『菅家後集』、及び唐代宋代の漢詩の中に存在する年内立春を意識した作品を調査分析した上で、日本と中国における年内立春詠の成立はそれぞれ独立したものであると論ずる。第二章は和歌における「春の徴としてのかすみ」詠の成立を論ずる。この題材は平安和歌の立春詠において、重要な位置を占めるものである。中国文学の自然観において、本来「立春」と直接の関係を持たない「かすみ」類の景物が日本において、「立春」と関連付けられている問題を、在来の自然暦の季節感、伝来した太陰太陽暦の影響、そして「かすみ」の訓字である「霞」の文学性といった角度から考察する。その上で、「春の徴としてのかすみ」は、在来の自然暦の季節感を有する「かすみ」が、伝来した太陰太陽暦を検証する景物に選ばれたために誕生した表現であると論ずる。第三章は外示的な意味において「かすみ」と類似する漢語「煙霞」の、古代日本における受容を考察する。この章の前半は中国における朝焼けや夕焼けのような赤い雲気を表す「霞」から、もややかすみを表現する「煙霞」が生まれた経緯を考察する。小学書だけでは説明できないこの問題を、『楚辞』から始まる中国文学における「霞」の表現史から検討し、当時の中国において、「霞」が遊仙隠逸の志向を内包する文学性の高い表現として認識されていたことを明らかにする。その遊仙隠逸の思想を背景に持つ、六朝における山水文学の隆盛は、山水世界に適した新しい「霞」の表現の誕生を促し、その結果、山水世界の雲煙美を表す「煙霞」

が創出されたと論ずる。それを踏まえた上で、章の後半において、古代日本漢文学における「煙霞」の受容と展開とを考察する。中国の類例を引用しながら、『懷風藻』と勅撰三集『凌雲集』、『文華秀麗集』、『経国集』とに見られる「煙霞」受容の様態を分析し、両者の差異を考察する。『懷風藻』に関しては、その中における「煙霞」の用例は、初唐の詩人王勃の別集からの利用借用が多いことと、「煙霞」に内包されている詩語としてのイメージを十全に踏まえられていない例が存在していることを指摘する。勅撰三集に関しては、その中の用例を遊仙逸逸のもの、仏教的なもの、そして山水を賞美する立場で詠まれたものに分類し、唐代の類例を挙げながら、その表現の正確性を指摘する。以上の考察を踏まえ、勅撰三集に見られる「煙霞」に対する理解のあり方が、『懷風藻』の時代に比して深まったものであることを指摘し、そこから窺える、漢詩文制作のたゆまぬ努力と、唐風謳歌の時代精神を反映した漢籍に対する積極的な摂取の姿勢とは、注目すべきものであると論じる。

以上の成立論を踏まえ、第二部では、和歌及び漢詩における「立春」の展開を考察する。第一章は従来あまり注目されてこなかった、平安時代における年内立春詠の展開を考察する。『古今集』巻頭の在原元方詠「年のうちに春はきにけりひととせをこそとやいはむことしとやいはむ」の後、年内立春を題材とする作品が再び勅撰和歌集の巻頭歌に選ばれたのは、白河院に却下された『金葉集』初度本を除くと、『古今集』の成立から三世紀も経た九番目の『新勅撰集』である。晴れの舞台から長くその姿を消していた年内立春詠だが、その創作は平安時代の私家集と私撰集とによって継承されている。これらの作品は、『古今集』巻頭歌の影響をどのように受け、そして巻頭歌にない、年内立春詠にふさわしい季節表現を創出したのかという問題を、部立、参考歌、景物の詠出などの点から考察する。その上で、『古今集』以降の平安時代における年内立春詠の展開は、元方詠の影響を受けつつも、発想、表現、抒情の面において、様々な新しい要素を取り入れていることを明らかにし、元方詠の影響は、より内面的で、いわば詠作の前提として存在していることを論ずる。第二章は、平安時代における立春詠の展開を考察する。年内立春詠とは異なり、『古今集』以降の平安時代において、立春詠は数多く制作されている。しかし「立春」もやはり「年内立春」と同じく、景物が含まれていない独特の季節歌題である。本章はまず平安和歌における立春関連詠作の様態を詞書から分析し、その題

詠化の経緯を考察する。次はこれらの立春関連詠作における『萬葉集』、『古今集』の影響を考察する。そしてこの二つの歌集によって提示したかすみ、鶯、東風解凍という三つの立春詠のパターンの、平安和歌における展開様相を考察する。最後は立春関連詠作の周辺に、様々な始春題材の歌が存在することを指摘し、平安時代における立春関連詠作の流れは、決して立春をテーマにした歌のみによってできたものではなく、その周辺にある歌と交渉しながら形成したものであることを論ずる。第三章は、唐詩における立春関連詠作の展開を考察する。本章は、初唐、盛唐、中唐、晩唐における立春関連詠作の展開の様相を考察し、その中に見られる「立春」と関連する動植物、気象現象、及び民俗表現を整理し、唐詩に見られる中国の詩における立春像を概観する。

以上の二部を踏まえて、個別の作品を論ずるのが第三部である。ここでは、和歌と漢詩との作品に焦点を当て、作品研究という視座で、立春及び年内立春を詠む作品を考察する。第一章は、従来の研究においてそれほど注目されていなかった菅原道真の二首の年内立春詩、「立春在十二月廿六日」(『菅家文草』巻四、二七八)と「元年立春 十二月十九日」(『菅家後集』、四九二)とを論ずる。この二首は、いずれも年内立春の表現を巧みに運用し、高い完成度と抒情性を実現した作品である。と同時に、地方滞在時代の道真の心境を理解するためにも、重要な手掛かりとなる作品と考えられる。本章では、従来の注釈を再検討し、両詩における白居易詩の影響を明らかにするとともに、律令用語の導入や、「偏」字の用法などの点から、両詩に見られる道真の独自性を指摘する。そして讃岐時代のほかの詠作に見られる心情描写と「立春」詩との関連性及び大宰府時期の「詠開元詔書」(『菅家後集』、四七九)と「元年立春」詩との繋がりなどの点から、両詩の抒情の特質を考察し、「立春」詩を讃岐守という「閑客」の位置にいる道真の苦悶と希望とを表す作品、「元年立春」詩を大宰府に左遷された「遷客」である道真の絶望と忠貞とを表す作品としてそれぞれ位置づけて論ずる。第二章は、名歌として知られている紀貫之の「袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつけふのかぜやとくらむ」(『古今集』巻一・春上、二二)を論ずる。従来の研究及び注釈は、挙ってこの歌の中に「春夏冬」という三季の心が存在すると解釈していたが、この歌の立春詠の性格から考えると、何故その中に夏の納涼の思いを入れたのかは理解に苦しむ。本章では、まず「三季の心」という説は中世の古今集注釈史において形成されたものであることを明らかにし、その背後には『古今集』の歌を

深読みしようとする志向性があると説く。その上で、貫之の時代に、夏の水を楽しむ納涼詠がまだ成立していないことと、貫之自身が春の水を汲む歌を残していることを指摘し、「水を結ぶ」という動作に、納涼に繋がる必然性がないことを明らかにする。そして立春の水が「若水」として、年中行事において特別な意味を有するものであることと、当該歌の影響を受けた院政期の歌の中に、「若水」が歌ことばとして使用されていることを指摘し、「むすびし水」を立春の水として解釈する合理性を主張する。以上を踏まえて、従来の注釈が主張した「三季の心」の説が貫之詠に対する誤読であり、当該歌は一年ぶりに東風によって解凍される立春の水との出会いを喜ぶものであると結論づける。道真の年内立春詠論が、埋もれた名作の価値を見出すことを一つの目的とすれば、貫之の立春歌論は、名作の知られざる真実を究明することを目的とした論である。

終章においては、本論で取り上げていた古代日本の立春和歌と中国唐代の立春関連漢詩とを比較することで、両者の共通点と差異とを明らかにし、中国の暦法観、文学表現を取り入れながらも、「立春霞詠」、「年内立春詠」のような題材を生み出した古代和歌の独自性を論ずる。一方、古代日本の漢詩は、日本のものでありながらもやはり和歌よりも中国の漢詩に近いものであることを、道真の二首の年内立春詠や勅選三集における「烟霞」の使用を通じて論ずる。

以上の三部八章の考察を通じて、古代日本詩歌における季節表現の形成の一端を解明したいと考える。

## 【注】

<sup>1</sup> 能田忠亮氏『暦』（至文堂、一九五七）三ページ。

<sup>2</sup> 細井浩志氏『日本史を学ぶための〈古代の暦〉入門』（吉川弘文館、二〇一四）四ページ。

<sup>3</sup> 同右。五五ページ。

- 
- 4 注一能田氏著書、八ページ。
- 5 注一能田氏著書第四章第二節。岡田芳朗氏『暦ものがたり』（角川学芸出版、二〇一二）第二章。注二細井氏著書第Ⅱ部第二章第二節。
- 6 斎藤国治氏編『小川清彦著作集—古天文・暦日の研究』（皓星社、一九九七）第十九章。
- 7 注五岡田氏著書第一章、注二細井氏著書第Ⅱ部第二章第二節。
- 8 注五岡田氏著書第一章、注二細井氏著書第Ⅱ部第一章第二節。
- 9 注五岡田氏著書第二章、注二細井氏著書第Ⅱ部第二章第二節。
- 10 芳賀紀雄氏「典籍受容の諸問題」（『萬葉集における中国文学の受容』、塙書房、二〇〇三）。
- 11 石橋茂登氏・市大樹氏・竹内亮氏・富永里菜氏・小谷徳彦氏「石神遺跡（第15次）の調査—第122次」（『奈良文化財研究所紀要』二〇〇三、二〇〇三）。
- 12 同右。岡田芳朗氏「日本最古の暦—持統三年木簡暦」（『歴史研究』五〇三、二〇〇三）。
- 13 注五岡田氏著書、三二ページ。
- 14 注五岡田氏著書第二章。
- 15 注二細井氏著書、七二〜七三ページ。
- 16 同右、七三ページ。
- 17 田中新一氏『平安朝文学に見る二元的四季観』（風間書房、一九九〇）。
- 18 日本気象協会ニュース「日本版二十四節気—日本気象協会は新しい季節のことばの提案に取り組みます—」（[www.jwa.or.jp/news/2011/02/post-000206.html](http://www.jwa.or.jp/news/2011/02/post-000206.html)）。
- 19 ウェブサイト「暦の上では」（[24setuki.com](http://24setuki.com)）。

※ 岡田芳朗氏・宇多喜代子氏・長谷川耀氏「緊急座談会―そうなる！？二十四節気―」（『俳句』六一―九、二〇一二）。

※ 小川靖彦氏「人麻呂歌集の季節歌」（神野志隆光氏・坂本信幸氏企画編集『セミナー万葉の歌人と作品2・柿本人麻呂2』和泉書院、一九九九）。

※ 同右。

※ 内田賢徳氏『萬葉の知―成立と以前』（塙書房、一九九二）第五章。

※ 気象庁ホームページ「過去の地域平均気象データ検索」による（[www.data.jma.go.jp](http://www.data.jma.go.jp)）。

※ 例えば『古今集』巻頭歌を論ずる、新井栄蔵氏「春立ちける日―古今集巻頭歌私見―」（『文学』四四―二、一九七六）、神尾暢子氏「在原元方の立春映像」（『王朝国語の表現映像』新典社、一九八二）などが見られる。

#### 〔引用本文〕

『萬葉集』は『萬葉集（全四冊）』小島憲之氏・木下正俊氏・東野治之氏校注・訳（新編日本古典文学全集6～9、小学館、一九九四～一九九六）、『古今集』は『新編国歌大観』（古典ライブラリー版）、『日本書紀』は『日本書紀（全三冊）』（新編日本古典文学全集2～4、小学館、一九九四～九八）、『政事要略』は黒板勝美氏編『新訂増補国史大系（巻二十八）』（吉川弘文館、一九六四）によった。なお漢字、仮名については一部を改めた。



# 第一部

# 第一章 古代詩歌における年内立春詠の成立

## はじめに

本章では、「年内立春」という日中共通の暦法現象を題材にした詩歌の成立について考察する。

年内立春はある年の立春がその前の年の十二月に来るといふ現象である。これは古代中国の太陰太陽暦の暦月節月の二重構造によって発生する暦法現象であり、中国の暦法を採用した古代日本においてもよく発生する。この暦法現象を意識した詩歌は日中両国の古典文献の中に確認できる。

日本の年内立春詠について、個別の作品に関する先行論はあるが、和漢比較の視点からその性格を考察するものは見当たらない。一方中国の年内立春詠に関する研究は、ほぼ空白のままである。年内立春は中国と日本とにおいてそれぞれどのように詠まれていたのか。本章は日中両国の初期の年内立春詠を調査し、和漢比較という視点から、日本の年内立春詠の成立背景とその独自性を明らかにしたい。

## 第一節 年内立春詠と新年立春詠

年内立春詠が一つの詠作のジャンルとして成り立つ前提には、年内立春を一般の立春と区別する意識の存在がある。ここにいう一般の立

春とは、すなわち正月に来る立春のことである。十二月に来る立春を年内立春と名付けるとすれば、正月に来る立春は新年立春と呼ぶことができる。

一首の漢詩、あるいは和歌が年内立春詠かどうかは、以下の三つの部分から判断できる。まずは詩題、あるいは詞書に年内立春のことが書かれていることである。中国の場合、このような例は唐代にはなく、北宋になって初めて現れる。北宋の別集から数例をあげると、「季冬立春日、侍宴垂拱殿契丹使預会」（宋庠『元憲集』卷七）、「和二十二弟揚臘月立春」（趙抃『清獻集』卷三）、「十二月十六日立春」（晁說之『景迂生集』卷五）などがそれである。日本の場合、「ふるとしに春たちける日よめる」という詞書を持つ『古今集』巻頭歌はそれである。

次は題注から年内立春のことが判明する例である。これに関しては、菅原道真の二首があげられる。即ち『菅家文集』巻四、二七八の「立春」（題注「在十二月廿六日」）、及び『菅家後集』四九二の「元年立春」（題注「十二月十九日立春」）である。この種の例は北宋までの漢詩、及び平安和歌からは発見することができなかった。

最後は、詩の本文から、年内立春を意識したことが判明する例である。この種の例は、初唐にある。

奉和立春遊苑迎春一応制

灞浹長安恒近日、殷正臘月早迎新。

池魚戲葉仍含凍、宮女裁花已作春。

向苑雲疑承翠幄、入林風若起青蘋。

年年斗柄東無限、願挹瓊觴壽北辰。

（初唐韋元旦『全唐詩』卷五十八、一八）

これは中宗時代の修文館学士の一人である韋元旦の応制作である。傍線部の「殷正」は古代王朝殷の正朔という意味で、殷は季冬月を正月とするので、その正月は唐暦の十二月に相当する。「殷正臘月早迎新」は十二月早々に新春を迎えることを意味する。なおこの景龍二年

十二月立春の日に制作された君臣唱和の立春関連詠作は『全唐詩』に計八首収録されているが、明確な年内立春意識が読み取れるのはこの一首のみである。一方和歌の例に関して、次の大伴家持詠はそれに相当する。

二十三日に、治部少輔大原今城真人の宅にして宴する歌一首

月数めばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春たちぬとか

〔萬葉集〕卷二十、四四九二

この歌については、第三節において詳述する。

年内立春は非常に頻繁に発生する暦法現象であるため、一首一首の詠作の年を考証していけば、更に多くの年内立春の年に詠まれた立春関連詠作が現れてくると予想される。しかし「年内立春詠」は詠み手が年内立春と新年立春とを区別する意識を持っていることを前提にした分類であり、そうした区別意識がなければ、「年内立春詠」という範疇の設定は無意味になってしまう。なので、年内立春の日に詠まれた立春関連詠作を一概に年内立春詠として見ることはできないと考える。そういう意味で言えば、先に分類した三種類のうちにも、年内立春詠と言えない作品が存在する。次の北宋強至の詩はその例である。

臘月二十三日、群牧使元内翰・曾龍図、同日拜樞参之命、是日立春

洗馬池辺喜気俱、二公同日上雲衢。

北門学士参台鼎、内閣才臣貳斗樞。

曉殿春風迎<sub>レ</sub>拜舞、晚街霽日照<sub>レ</sub>伝呼。

回<sub>レ</sub>頭応<sub>レ</sub>笑<sub>二</sub>磋砣客<sub>一</sub>、養<sub>レ</sub>拙長甘<sub>レ</sub>伴<sub>二</sub>圍夫<sub>一</sub>。

（北宋強至『祠部集』卷十）

詩題から分かるように、これは十二月二十三日の年内立春の日の詠作である。全詩において、春に関する描写は傍線部の二句しか見出

せないが、その中に年内立春を意識した表現は見られない。詩題の注記がなければ、この作品は年内立春を詠んだものかどうかはわからない。詩題にある「臘月二十三日」を、「同日拝「樞参之命」」というめでたい出来事の日付として記されたものとみなせば、強至詩は年内の立春を特別視していないものとなる。

一方、和歌の場合にも、次の藤原俊成歌のような、わかりづらい例が存在する。

家に十首歌人々によませける時、立春の歌とてよめる

年の内に春たちぬとや吉野山霞かかれる峯の白雪

《俊成集》一《長秋詠藻》、二〇二

この歌は、賀茂重保編『月詣集』と藤原為家撰『続後撰集』において、同じく巻頭歌として入集した。しかし部立や詞書から考えると、歌題の捉え方は明らかに異なっている。『月詣集』の場合、この歌は「立春の心をよめる」という詞書を持って、新年立春の歌として正月の巻頭に置かれている。一方『続後撰集』の場合、この歌は「年の内に春たつ心をよみ侍りける」という詞書をもって、春上の部に属する年内立春詠として配置されている。このように、詞書に年内立春かどうかが明示されていない場合、歌によっては判別が困難な例も存在する。強至詩や俊成歌のような例もあるが、一首の漢詩、和歌が年内立春詠かどうかは、概ね詩題（詞書）、題下注、本文の表現から判断することができる。

## 第二節 中国文学における「年内立春」

年内立春を意識した和歌は『萬葉集』に見られ、『古今集』において明確なテーマになる。また日本漢詩においても、『菅家文章』、『菅原後集』に一首ずつ年内立春詠が見られる。これらの日本の詠作に直接的な影響を与える中国漢詩が存在するのであれば、それは唐あるいは

唐以前のものでなければならぬ。しかし「年内立春を詩に詠んだ例は中国にも唐代までのものには容易に見出だし得ない」と言われるほど、その用例が少ないのである。「立春」をキーワードに『全唐詩』に検索を掛けて、ヒットした計五十六首の立春関連詠作を分析すると、明確な年内立春意識が読み取れるのは前述の初唐韋元旦例のみである。このように、現存の文献から見て、中国よりも日本の方が、年内立春という現象に対して、高い関心を持っているという印象を受ける。

では「立春」が含まれていない詩の中に、年内立春詠と言える例が存在するのだろうか。これについて、小町谷照彦氏は唐人王湾「次北固山下」の「海日生残夜、江春入旧年」の二句を中国における年内立春詠の先例としてあげていた。しかしそれに対して、岡本泰子氏の反論が見られる。氏は「次北固山下」に関する日中両国の諸注釈を整理、検討した上で、「江春入旧年」は「江南の地は暖かいゆえ冬のうちに既に春めいている」という意味を表す一句と説いた。

「次北固山下」の「江春入旧年」という句は、王湾のもう一首の詩「江南意」の中にも確認できる。「江南意」は『日本国見在書目録』にも名が見える唐人選唐詩集『河岳英靈集』に収められる作品である。しかし今までの研究ではこの詩に注目するものはなかった。そのため、今回は「江南意」における「江春入旧年」の意味を検討してみたいと考える。

#### 江南意

南国多新意、東行伺早天。

潮平兩岸失、風正一帆懸。

海日生殘夜、江春入旧年。

從來觀氣象、惟向此中偏。

（『河岳英靈集』卷下）

まず詩の首聯に注目したい。ここにある「南国」の「新意」は正に全詩の主旨を示している。それを念頭に置いて全詩を通読してみると、

頸聯の「海日生<sup>二</sup>残夜<sup>一</sup>、江春入<sup>二</sup>旧年<sup>一</sup>」の二句がその江南の新意を表す箇所であることが容易に分かる。もしこの二句を普通の海上の日出と年内立春として解釈すれば、南北の差が無くなり、何が江南の新意なのか分からなくなってしまう。ここに言う「残夜」という表現は北方の生活に慣れていた詩人が持つ夜の時間認識だと思われる。詩人が常識として認識している「夜」の時間帯には北方では考えられない日出が起こった<sup>10</sup>。それこそが江南の新意ではないか。つまり、これは実景である日出と観念である夜との対立によって、江南の新意を描き出す手法である。それが分かれば、次の「江春入<sup>二</sup>旧年<sup>一</sup>」の意味も容易に把握できる。「江春」は実感としての春の感覚であり、それに対して「旧年」は即ち年末という曆月上の認識である。北方の常識から考えると、年末は名実ともに冬であるが、同じ時期でも江南は既に春の雰囲気が漂ってきた。まるで春が冬である年末に入ったような感じである。これが詩人の言う江南の新意ではないか。尾聯では、この北方と違った江南の新意の原因が詠われる。「今までの自分の経験から言えば、気象はいつも江南を最肩している」という認識がここから読み取れよう。以上述べたように、「江南意」の言う「江春入<sup>二</sup>旧年<sup>一</sup>」は江南地方における、実感としての春の到来の早さを表す一句である。後の北宋韋驥の年内立春詠「臘月十八日乙卯立春、丁卯会飲、開元呈<sup>二</sup>信道中丞<sup>一</sup>」<sup>11</sup>（『錢塘集』卷七）に「数声晚角催<sup>二</sup>残照<sup>一</sup>、三日新春入<sup>二</sup>旧年<sup>一</sup>」という、王灣句と類似した表現が見られるが、少なくとも王灣の詩の中には年内立春の意識がなかったと思われる。

では「江南意」以外の例はどうだろうか。太陰太陽曆の仕組み上、十三ヶ月の長さを持つ閏年の年末には必ず立春が入るので、その閏月と関連する表現を『全唐詩』から探した結果、次のような例を見つけた。盛唐玄宗皇帝「初入<sup>二</sup>秦川路<sup>一</sup>逢<sup>二</sup>寒食<sup>一</sup>」の「去年余<sup>レ</sup>閏今春早、曙色和風著花草」（『全唐詩』卷三、一二）、中唐李翱「奉<sup>レ</sup>酬<sup>二</sup>劉言史宴<sup>二</sup>光風亭<sup>一</sup>」の「閏余春早景沈沈、禊飲風亭恣<sup>二</sup>賞心<sup>一</sup>」（『全唐詩』卷三百五十八、五）<sup>12</sup>、晚唐李頻「冬夜酬范秘書」の「命嗟<sup>二</sup>清世蹇<sup>一</sup>、春覺<sup>二</sup>閏冬暄<sup>一</sup>」（『全唐詩』卷五百八十、五五）などである。どれも年内立春の日に詠んだものではないが、前年の閏月の影響で立春が十二月に入る現象を意識したものと考えられる。「立春」と「閏」という二つのキーワードで検索してみたが、検索の方法を変えれば、また新しい年内立春詠の唐詩が現れてくるかもしれない。しかし、こういった唐代の年内立春詠が、日本の年内立春詩歌の創作に影響を与えているかどうかは疑問である。中国の詩人は、年内立春という現象を述べる

ことはあっても、それを訝しむことはしない。唐詩において年内立春の特徴は「春が早い」で表現されることがほとんどである。冬と春との併存を問題視するものもなければ、新年か旧年かと面白がるものもない。これは中国初期の年内立春詠と日本初期の年内立春詠との一つの大きな差である。日本の歌人達は年内立春における節月と暦月とのズレを訝しく見つめているのに対して、中国の詩人達は、年内立春を一種の当然の暦法現象として受け止めているのである。

現存の文献からみて、日本における中国の年内立春詠の受容例として唯一あげられるのは、『和漢朗詠集』巻頭の伝公乗億の賦である。『和漢朗詠集』の立春部を一覧すると次のとおりになる。

逐<sup>レ</sup>吹潜開、不<sup>レ</sup>待<sup>二</sup>芳菲之候<sup>一</sup>。

迎<sup>レ</sup>春乍変、将<sup>レ</sup>希<sup>二</sup>雨露之恩<sup>一</sup>。

立春日内園進<sup>レ</sup>花賦

(一)

池凍東頭風度解、窓梅北面雪封寒。

篤茂

(二)

年の内うちに春はきにけり一年を去年とやいはむ今年とやいはむ

元方

(三)

柳無<sup>二</sup>氣力<sup>一</sup>一条先動、池有<sup>二</sup>波文<sup>一</sup>氷尽開。

白

(四)

今日不<sup>レ</sup>知誰計会、春風春水一時来。

同上

(五)

夜向<sup>二</sup>残更<sup>一</sup>寒磬尽、春生<sup>二</sup>香火<sup>一</sup>暁炉燃。

良春道



袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらん

紀貫之

(六)

春たつといふばかりにやみ吉野の山もかすみて今日はみゆらむ

忠岑

(八)

和歌と漢詩との配列を見れば、立春の部は一番から三番の年内立春と四番から八番の通常立春とに分かれていることが分かる。しかしこの冒頭の賦の作者について、古来紀淑望説と公乗億説の二説が存在するので、唐代の詠作と断言することができない。これについて川口久雄氏、菅野禮行氏が紀淑望説を取ったのに対して<sup>23</sup>、三木雅博氏が『和漢朗詠集』の「賦句」における題名・作者注記の特徴から公乗億説を取った<sup>24</sup>。公乗億の作とすれば唐人の用例になるが、この賦を年内立春詠の先例として見ることはやはり困難である。『和漢朗詠集』が取った賦句の意味を分析してみれば、年内立春を表す表現は見出せないことが分かる。公任がこの四句を年内立春の作として取った根拠は結局判然としないが、あえて言えば、賦句にある春を待たず咲く梅の花という表現と、年内立春の新年を待たずやってくる春という現象との共通性にあるものと考えられる。ちなみに年内立春詠の特徴が見出せないという点は、二番の篤茂の句においても同じである。三木氏が指摘した、『和漢朗詠集』の賦句の処置における臨機応変な特徴を考えると、この「立春日内園進<sup>レ</sup>花賦」を年内立春の作として取ったのも、公任が「唐人賦句を完全に自家薬籠中のものとして自由自在に操作」<sup>25</sup>した結果だと思われる。

平安後期に編纂された『新撰朗詠集』の立春の部も、『和漢朗詠集』と同様に年内立春と通常立春とに分かれている。年内立春の和歌の前に漢詩二聯が置かれているが、何れも後掲する道真の年内立春詠である。そうすると『和漢朗詠集』の撰者である藤原公任であっても、『新撰朗詠集』の撰者である藤原基俊であっても、中国の年内立春詠の用例を発見できなかったと考えたほうが自然であろう。ちなみに日本において『古今集』巻頭歌の影響もあって、平安中期以降、「旧年立春」は歌題の一つとして確立されたが、「旧年立春」という熟語は中国に

はなく、和製漢語であることも今回の調査で判明した。その点からも、日本の年内立春詠の独自性が窺える。

以上の点から総合的に見て、日本における年内立春詠の成立は、中国における年内立春を詠んだ漢詩から直接的な影響を受けた可能性はそれほど高くないことが分かる。古代日本詩歌における年内立春詠の成立は、太陰太陽暦の二元的構造を受容した段階で発生した日本独自のものと考えられる。

### 第三節 『萬葉集』における「年内立春」

和歌における年内立春詠の濫觴が、『萬葉集』巻二十にあることは、契沖が『古今餘材抄』において指摘したとおりである<sup>10)</sup>。

十二月十八日に、大監物三形王の宅にして宴する歌三首

み雪ふる冬は今日のみ鶯のなかむ春へは明日にし有らし

右の一首、主人三形王

(四四八八)

うちなびく春をちかみかぬばたまの今夜の月夜かすみたるらむ

右の一首、大蔵大輔甘南備伊香真人

(四四八九)

あらたまの年ゆきがへり春たたばまづ我がやどに鶯はなけ

右の一首、右中弁大伴宿禰家持

(四四九〇)

右は天平宝字元年十二月十八日の三形王の宅での宴歌三首である。湯浅吉美氏の『日本暦日便覧』によると、「その年の十二月十九日に立春があるので、この三首は立春の前日の詠作ということになる。

傍線部の「冬は今日のみ」や「春たたば」などの表現は、これらの歌が翌日の立春を意識した詠作であることを表していよう。しかしここで注目したいのは、年内立春詠の特徴がこの三首の歌にはないという点である。四四八八番の歌にある「冬は今日のみ」というのは節気における冬は今日で終わりという意識に基づいた表現であり、暦月との関連性は認めがたい。次の二首の歌においても、年内立春の表現は見出せない。確かに年内立春に関する詠作であるが、この三首の歌の表現から、年内立春を通常の立春と区別する意識は見出せない。大浜真幸氏が指摘するように、右の三首の季節表現は「題詞の日付を離れば暦月的にも節月的にも理解可能であり、（中略）年末の詠と見ても立春前日の詠と見ても一首の意味が成立してしまう」<sup>180</sup>。つまりこの三首の詠作は、まだ年内立春の特徴をうまく捉えていない段階での作品である。

和歌史において、年内立春を特別視する意識が初めて確認されるのは『萬葉集』巻二十にある次の家持歌である。

二十三日に、治部少輔大原今城真人の宅にして宴する歌一首

月数めばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春たちぬとか

右の一首、右中弁大伴宿禰家持が作

（四四九二）

右の歌は前掲の三首と同様に天平宝字元年の十二月の作品である。日付は二十三日、即ち立春の四日後の歌である。この歌について、『新編日本古典文学全集』は「立春後、四日を経ており、年内立春の矛盾をついた点で、古今集冒頭の「去年とやいはむ今年とやいはむ」を先取りしている」<sup>181</sup>と指摘する。前掲の三首と明らかに違うのは、この歌に年内立春の特徴を見事に詠出したことである。太陰太陽暦の二元的四季構造と、立春を春の第一義とする季節認識になじむ人間なら、歌の表現から、これは年内立春を意識した詠作であること

は容易に察知できる。それを証する例として、平安末期の歌人藤原教長の私家集にある、

讃岐院、百首の歌たてまつれとおほせられしとき、旧年立春をよめる

月よめばまだ冬ながら咲にけるこの花のみか春のしるしは

『教長集』、一二二

が挙げられる。傍線部は明らかに家持歌を踏まえた表現である。関守次男氏が、家持歌は「もはや季節の実感を楽しむのではなくて、季節についての観念的知識そのものを楽しんでゐる」<sup>82</sup>と指摘する。ここで留意しておきたいのは、家持自身も前掲の天平宝字元年十二月十八日の三形王の宅での宴に出席し、歌を残していたということである。その場で詠んだ四四九〇番歌にはまだ「年内立春」を特別視する表現がない。この点について大浜氏は次のように論じた。

年内立春の文学的興趣を一首（四四九〇番歌）に明確に表現し切れていない曖昧さが存していたのであり、家持は、その点に会心の作とは到底言えないもどかしさを覚えたものと思われる。そこで、家持は、時と場を移した今城宅の宴席で、年内立春という二元的季節の巡り合わせが持つ興趣を十全に表現した四四九二歌を、その意味では前作③や①②（四四八八～四四九〇の三首）をも凌ぐ作であるとの自負を持つて披露に及んだのであらう<sup>83</sup>。

この歌を通じて、家持は「季節の二元性を一首に併存させる手法を確立した」<sup>84</sup>とともに、和歌における年内立春詠の創出に成功したと言えよう。そしてその背景には、家持が持つ暦法に対する関心が存在すると考えられる。田中新一氏のいうように、「二十四節気意識を文学の世界に導入したのが家持であつた」<sup>85</sup>。「最初には季節的風物に興味をもつてゐたのが、次第に季節的行事に興味を覚えるやうになる（中略）それが更に進むと、今度は単に暦の上の季節的变化に興味をいだくやうになる」<sup>86</sup>という関守氏の指摘があるように、『萬葉集』の年内立春詠の成立は、家持が持つ二元的四季観に対する興味と深くかわつていると考えられる。こうして家持は節氣と暦月とのズレに目を向け、通常の立春詠にない、年内立春詠の独特な面白みを醸出することに成功した。また、天平宝字元年十二月十八日の三形王の

宅で詠まれた宴歌三首も、『萬葉集』の年内立春詠の誕生を促す重要な作品として評価すべきであろう。このように、和歌における年内立春詠の成立は、太陰太陽暦を受容する過程で、節月の四季と暦月の四季とのズレに面白みを感じた家持によって実現したものと考えられる。

#### 第四節 『古今集』における「年内立春」

家持歌の次に見られる年内立春詠は『古今集』巻頭歌である。この歌は年内立春の当日に詠んだ最初の和歌でもある。

ふる年に春立ちける日よめる

在原元方

年の内に春はきにけり一年を去年とやいはむ今年とやいはむ

『古今集』巻一・春上、一

元方歌の一つの大きな特徴は、景物が一切登場しない点である。家持歌は春の徴である霞を詠出することで、「冬か春か」という疑問を解決した。それに対して、元方歌はただその季節のズレから生じた年のとらえ方を問うているのみである。神尾暢子氏が論じたように「万葉の年内立春は、春季の開幕である。立春という季節の転換には、そのことを検証しうる風物が存在する。だが、元方の年内立春には、そのことがない。しかも、立春ということで、春季は確実に到来しているのである」<sup>30</sup>。家持の歌では、春の到来を検証する重要な根拠として、景色の春霞に着目したのに対して、元方の歌ではそのような意識はない。歌人は立春が春の第一義という観念的認識を据えつつ、太陰太陽暦においては実によりふれた節気と暦月とのズレに機知を感じ、年内立春という現象を現実の一切の景物や人事から隔絶させ、今年か去年かという疑問に帰着させた。そしてこの疑問は、太陰太陽暦による季節指定を実感ではなく、理屈で考える傾向を持つ日本人だからこそ、思いつくものである。元方によって実現した理のみの年内立春詠は古今風の理知を示しつつ、これ以上ないほど観念的な世界の創出に成功

した。藤原俊成が『古来風躰抄』（再撰本）において、「この歌まことに理つよく、又をかしくもきこえて、ありがたくよめる歌なり」と絶賛したのも、日本ならではの発想に共感したためと考えられる。实景に頼ることなく、年内立春における節氣と暦月とのズレだけに注目した元方歌は和歌における年内立春詠のさらなる展開を実現した一首である。

歌の発想にある年内立春を暦月と節氣とのズレとして見る趣向は、中国で作られた太陰太陽暦の原理とは異なる論理である。古代中国では、立春が元日前後に現れることは、決して暦月と節氣のズレではなく、むしろ一種当然の現象として認識している。後漢蔡邕の『月令章句』には、

孟春以<sub>二</sub>立春<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>節、驚蟄為<sub>レ</sub>中。中必在<sub>二</sub>其月<sub>一</sub>、節不<sub>三</sub>必在<sub>二</sub>其月<sub>一</sub>。扱、孟春之驚蟄在<sub>二</sub>十六日以後<sub>一</sub>、立春在<sub>二</sub>正月<sub>一</sub>。驚蟄在<sub>二</sub>二十五日  
前<sub>一</sub>、立春在<sub>二</sub>往年十二月<sub>一</sub>。

とある。傍線部に示したように、立春は必ずしも正月にある必要はないとされている。考えてみれば、立春と元日が同じ日でなければ、年末年始には必ず節氣と暦月の季節の重なりが起こる。年内立春の場合、立春から元日までの間は節氣の春と暦月の冬が重なることとなり、通常の立春の場合、元日から立春までの間は暦月の春と節氣の冬が重なる。そして季冬月立春があるように、季春月立夏、季夏月立秋、季秋月立冬などの現象も頻繁に起きる。太陰太陽暦の構造上、暦月と節氣とのズレがどうしても避けられないからだ。日本において季冬月立春がとりわけ注目されたのは、節月の春が年を跨ぐ現象が発生することと、序章において述べた、在来の自然暦の季節感と伝来の太陰太陽暦の四季観とのズレが、立春の日に意識されやすいことと関連していると考えられる。元方が提出した疑問は確かに回答不能ではあるが、ありふれた現象にことさら理を通そうとする、その姿勢には理知の極北とも言えるさまがある。「去年とやいはむ今年とやいはむ」は暦法上の四季措定に敏感であった日本だからこそ、生まれた発想であろう。

## 第五節 『菅家文章』及び『菅家後集』における「年内立春」

『萬葉集』と『古今集』との間に位置するのは、菅原道真の二首の年内立春詩である。

立春 在十二月廿六日

偏因<sub>二</sub>曆注<sub>一</sub>覺<sub>二</sub>春來<sub>一</sub>、物色人心尚冷灰。

誣告浪從<sub>二</sub>氷下<sub>一</sub>動、暗思花在<sub>二</sub>雪中<sub>一</sub>開。

浮雲自後寒夜暖<sub>〆</sub>、壯日如今去不<sub>レ</sub>廻。

消息窮通皆有<sub>レ</sub>運、莫<sub>レ</sub>言堦<sub>レ</sub>戸不<sub>レ</sub>驚<sub>レ</sub>雷。

（『菅家文章』卷四、二七八）

元年立春 十二月十九日

天慙<sub>二</sub>長寒万物凋<sub>一</sub>、晚冬催立早春朝。

浅深何氷水猶結、高卑無<sub>二</sub>山雪不<sub>レ</sub>消。

根拔樹応<sub>二</sub>花思断<sub>一</sub>、骨傷魚豈浪情揺。

偏憑<sub>二</sub>延喜開元曆<sub>一</sub>、東北廻<sub>レ</sub>頭拝<sub>二</sub>斗杓<sub>一</sub>。

（『菅家後集』、四九二）

『菅家文章』の詠作（二七八）は道真が讃岐守に在任当時の作で、『菅家後集』の詠作（四九二）は大宰府に流された後の作品である。ともに地方官として在任する時の作であることが注目される。創作背景には大差があるものの、地方に留まった道真の複雑な心境によって詠まれたこの二首は、何れも景と情とを巧妙に一体化させた、完成度の高い作品である。この二首に対する具体的な考察は第三章第一章に譲

るとして、本節ではこの二首の中に見られる太陰太陽暦に対する捉え方について見て行きたい。

まず注目したいのは道真の詩にある、中国の詠作と明らかに異質な暦に対する強い依存意識である。「立春」詩の首聯にある「偏因<sub>二</sub>曆注一<sub>一</sub>覺<sub>二</sub>春來<sub>一</sub>」という表現や「元年立春」詩の尾聯にある「偏憑<sub>二</sub>延喜開元曆<sub>一</sub>」はその意識の現れである。この二句から見れば、両詩において、ひたすら暦に頼るといふ姿勢は一貫していると言えよう。具注暦は、制定から頒行までは全て朝廷によって行われるため、強い公的性格を有している。そこには一年の時間を一元的に管理しようとする朝廷の意志が存在し、いわば王権の絶対性を象徴する重要な物である。この意味において、両詩に見られる暦に対する強い依存意識には、地方官としても王化の一端を担う道真の、中央官僚的な経世思想が存在するといえよう。このように、道真の年内立春詠の中に見られる暦に対する強い依存意識の背景には、平安貴族の朝廷に対する強い帰属意識が介在していると考えられる。

もう一つ注目したい特徴は、太陰太陽暦における「立春」を春の第一義として認識する点である。確かに景色描写が一切ない元方の歌と比べ、道真詩の景物表現は多彩である。しかしその中で春の実景というべき物は一つもなく、全てが想像の景である。「立春」詩の頷聯にある「氷の下から動く浪」、「雪の中に咲く花」はいずれも詩人の空想によつて創りあげられたものであつて、「元年立春」詩に見られる至る所の氷と雪とが融けてしまうという表現も想像にほかならない。その緊張に満ちた対比を生み出した背景には、立春を春の第一義とする季節観の働きが認められる。前掲した神尾暢子氏の言葉を借りると「立春ということ、春季は確実に到来している」<sup>93</sup>のである。「誣告浪從<sub>二</sub>氷下<sub>一</sub>動、暗思花在<sub>二</sub>雪中<sub>一</sub>開」や「浅深何水氷猶結、高卑無<sub>二</sub>山雪不<sub>レ</sub>消」といった想像の基盤には、あの貫之の立春詠の名作「袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつ今日の風やとくらむ」(『古今集』巻一・春上、二)と共通した、実景に頼らず立春だけを根拠に春の到来を認知する日本的な太陰太陽暦認識が存在していると見られる。中国の詩作における立春は確かに春の始めという意味もあるが、現実の景色を凌駕するまでの春の第一義として掲げられることは稀である。觀念へ傾斜しがちな日本の漢詩と和歌との立春表現に比べて、中国の文人達の立春詠は実景を詠むものが圧倒的に多い。この点については第二部第三章において考察する。



最後に注目したいのは両詩の題下注である。『菅家文章』と『菅家後集』の中に、日付が書かれる題下注は全部で九例を数えるが、そのうち、事情を記さず、日付のみが書かれたものは六例あり、一覧すると次の通りになる。

『菅家文章』の例

「立春【在<sub>二</sub>十二月廿六日<sub>一</sub>】」（卷四、二七八）（【<sub>二</sub>内は題下注

「賦<sub>二</sub>雨夜紗灯<sub>一</sub>、応<sub>レ</sub>製【并<sub>レ</sub>序。于<sub>レ</sub>時九月十日】」（卷五、三八〇）

『菅家後集』の例

「秋夜【九月十五日】」（四八五）

「哭<sub>二</sub>奥州藤使君<sub>一</sub>【九月廿二日、四十韻】」（四八六）

「聴<sub>二</sub>寺鐘<sub>一</sub>【二月十七日】」（四九一）

「元年立春【十二月十九日】」（四九二）

まず「立春」、「元年立春」以外の四例の日付の意味を見てみよう。「賦<sub>二</sub>雨夜紗灯<sub>一</sub>、応<sub>レ</sub>製」の題下注「于<sub>レ</sub>時九月十日」はこの詩の詩序に書かれている「重陽後朝」の密宴を意識したものと見られる<sup>28</sup>。

「秋夜」の題下注「九月十五日」については、この詩の頸聯「月光似<sub>レ</sub>鏡無<sub>レ</sub>明<sub>レ</sub>罪、風氣如<sub>レ</sub>刀不<sub>レ</sub>破<sub>レ</sub>愁」にある月の描写との関連性に注目したい。上句の「鏡のような月の光」は他ならぬ満月を描いた表現であり、その時期を書き記すために、九月十五日という題下注が添えられたと考えられる。

「哭<sub>二</sub>奥州藤使君<sub>一</sub>」の題下注の意味は藤使君（藤原滋美）の死と関連していよう。九月二十二日と詩との関連性は「葬来十五旬、程去三千里。廻環多<sub>二</sub>日月<sub>一</sub>、重複幾山水」の二聯に窺える。大事な訃報は、葬式から実に十五旬も経った、この九月二十二日にやっと大宰府に届いた。道真がその気持ちを重く見て、時間の長さや距離の遠さを表すために、この題下注を書いたのではないか。つまりこれは、詩人が

訃報のあまりの遅れに驚きと悔しさを覚えたために書かれたものだと考えられる。

「聴『寺鐘』」の「二月十七日」という題下注は、川口久雄氏が指摘するとおり、十二月十七日の誤写と考えられ、詩の中身が示すように、仏名懺悔会を意識したものと見られる<sup>29)</sup>。

このように、『菅家文草』と『菅家後集』とにおける、日付のみの題下注には、一貫して作者の創作の意図が認められる。「立春」と「元年立春」との二首の題下注も、十二月の立春という詠作の時期を特別視したために書かれたものと考えられる。

以上の考察を通じて、道真の二首の年内立春詠に、日本的暦法認識が存在していることは明らかになった。この性格は元方詠においても確認できる。しかし、元方歌と道真詩とが詠出した年内立春には大きな相異も存在する。景物描写を一切しない元方と比べて、道真は想像の春と現実の冬との鮮烈な対比を構築し、漢詩ならではの年内立春像の創出に成功した。元方歌が理知の極北に辿りついたとすれば、道真詩は想像の妙境に入ったと言えよう。こうした意味で、道真のこの二首の漢詩は、年内立春詠を想像豊かな詩想空間に導いた詠作として評価できよう。

## おわりに

序章において述べたように、中国の太陰太陽暦の措定と日本在来の季節感との間にはズレが存在する。そのため、日本は在来の季節感を新しい四季観の中において改めて位置づけなければならなかったのである。暦法上の二元的四季構造に敏感である文学感覚は、その過程で磨かれていたと考えられる。日本における年内立春詠は、太陰太陽暦における二元的四季構造に対する高い関心の中で生まれたものと言える。

一方、中国の場合、太陰太陽暦の二元的四季構造は、むしろ一種当然の常識として認識されている。そのため、中国の年内立春詠を見て

も、そこには、『萬葉集』の家持詠や『古今集』巻頭歌のように、節月の春と暦月の冬とが重なる現象をズレとして面白がることはなく、あ  
るのは、年内の立春を事実のまま叙述する姿勢である。韋元旦詩の「殷正臘月早迎<sub>レ</sub>新」はその典型的な例である。実景重視の傾向が見られ  
る中国の文人達にとって、現実的違和感をほとんどたらない年内立春という現象の面白みは、それほど感じられていなかったのではあ  
う。

以上述べたように、確かに年内立春は暦法の伝来とともに発生する現象ではあるが、古代日本詩歌における年内立春詠の成立は、中国の  
太陰太陽暦を受容した段階で形成された日本独自の季節観と深く関わるものであったと結論付けたい。

## 【注】

<sup>1</sup> この問題について神尾暢子氏「在原元方と立春映像―歳内立春と古今巻頭―」（『王朝国語の表現映像』新典社、一九八二）に、平安朝百  
二十年間における年内立春の回数に対する調査があり、それによると年内立春の頻度は約一・七年に一回ほどである。湯浅吉美氏の『日  
本暦日便覧増補版』（汲古書院、一九九〇）も参照。

<sup>2</sup> 陳貽焮氏主編『増訂注釈全唐詩』（文化芸術出版社、二〇〇一）当該詩注。

<sup>3</sup> これらの詠作についての整理は、第二部第三章にある。

<sup>4</sup> 底本の「圍失」を「圍夫」に改めた。

<sup>5</sup> 小島憲之氏・山本登朗氏『菅原道真』（研文出版、一九九八）八五ページ。

<sup>6</sup> 唐代の立春関連詠作の整理は、第二部第三章を参照。

<sup>7</sup> 小町谷照彦氏「古今和歌集評釈―11年のうちに春は来にけり」（『国文学』二八一―一九八三）。

<sup>8</sup> 岡田泰子氏「王湾『次北固山下』「江春入旧年」の句をめぐる「年内立春」の詩歌の源泉としての可否」『学芸国語国文学』一九、一九八四）。

<sup>9</sup> 同右。

<sup>10</sup> 中国科学院国家授時中心のデータ ([www.time.ac.cn/serve/sunriseset/](http://www.time.ac.cn/serve/sunriseset/)) によると、詩人のいる場所を北固山辺りと想定すれば、当時の都である長安との日出時間の差は約四十五分である。

<sup>11</sup> 詩題にある二つの干支表記は「三日新春入二旧年」に合わないので、片方が誤りと考えられる。

<sup>12</sup> 同句は中唐劉言史「奉酬」(『全唐詩』卷四百五十七、四五) にも見られる。

<sup>13</sup> 川口久雄氏・志田延義氏校注・訳『和漢朗詠集・梁塵秘抄』(日本古典文学大系73、岩波書店、一九六五)、菅野禮行氏校注・訳『和漢朗詠集』(新編日本古典文学全集19、小学館、一九九九)。

<sup>14</sup> 三木雅博氏『和漢朗詠集とその享受』(勉誠社、一九九五) 附編第二章。

<sup>15</sup> 同右。三七八ページ。

<sup>16</sup> 『古今餘材抄』(久松潜一氏監修『契沖全集』(8) 岩波書店、一九七三) 卷頭歌注にある。

<sup>17</sup> 注一を参照。

<sup>18</sup> 大浜真幸氏「天平宝字三年正月一日の宴歌」(神野志隆光氏・坂本信幸氏企画編集『セミナー万葉の歌人と作品9・大伴家持2』(和泉書院、二〇〇三)。

<sup>19</sup> 小島憲之氏・木下正俊氏・東野治之氏校注・訳『萬葉集』(4) (新編日本古典文学全集9、小学館、一九九六) 当該歌注。

<sup>20</sup> 関守次男氏『和歌文学积考』(笠間書院、一九七九) 一三五ページ。

<sup>21</sup> 注一八に同じ、括弧内は筆者注。

註一八に同じ。

註 田中新一氏『平安朝文学に見る二元的四季観』（風間書房、一九九〇）九九ページ。

註二〇に同じ。

註 注一神尾氏著書、四七九ページ。

註 『菅家文章』の主要な写本及び版本は「夜」に作るが、『新撰朗詠集』では「応」として引用している。対句構成から考えてあるいは古態を残したものかと思われる。詳しくは第三編第二章を参照。

註 注二五に同じ。

註 波戸岡旭氏『宮廷詩人 菅原道真―『菅家文章』・『菅家後集』の世界』（笠間書院、二〇〇五）の「九月十日」詩考」を参照。

註 川口久雄氏校注『菅家文章・菅家後集』（日本古典文学大系72、岩波書店、一九六六）。

#### 〔引用本文〕

『萬葉集』は『萬葉集（全四冊）』小島憲之氏・木下正俊氏・東野治之氏校注・訳（新編日本古典文学全集6～9、小学館、一九九四～一九九六）、『古今集』、『続後撰集』、『月詣集』、『和漢朗詠集』は『新編国歌大観』（古典ライブラリー版）、『俊成集』は『新編私家集大成』（古典ライブラリー版）、『古来風躰抄』（再撰本）は佐々木信綱氏編『日本歌学大系（2）』（風間書房、一九六二）、『菅家文章』、『菅家後集』は川口久雄氏校注『菅家文章・菅家後集』（日本古典文学大系72、岩波書店、一九六六）、『月令章句』は『拜經堂叢書』（東方文化学院京都研究所、一九三五）に、『元憲集』、『清献集』、『景迂生集』、『錢塘集』、『祠部集』は『文淵閣四庫全書電子版』（迪志文化出版）、『全唐詩』は『全唐詩』（中華書局、一九六〇）、『河岳英靈集』は王克讓氏校注『河嶽英靈集注』（巴蜀書社、二〇〇六）によった。なお漢字、仮名については一部を改めた。

## 第二章 和歌における「春の徴としての霞（かすみ）」の成立

### はじめに

本章では、日本独自の立春題材「春の徴としての霞<sup>かすみ</sup>」の成立について考察する。

古代和歌の中には、「春の徴としての霞<sup>かすみ</sup>」という題材が存在する。試しに八代集の巻頭歌群から、それをテーマとする歌を掲出すると、

平定文が家歌合によみ侍りける

壬生忠岑

春<sup>はる</sup>たつといふばかりにやみ吉野の山もかすみて今朝は見ゆらん

『拾遺集』巻一・春、二

みちのくにに侍りける時、春<sup>はる</sup>たつ日よみ侍りける

光朝法師母

いでてみよ今は霞もたちぬらん春はこれよりすぐるところそきけ

『後拾遺集』巻一・春上、二

堀河院の御時百首歌めしけるに、立春の心をよみ侍ける 藤原顕仲朝臣

いつしかとあけゆく空のかすめるは天の戸よりや春<sup>はる</sup>はたつらん

春たちける日よみ侍りける

源俊頼朝臣

春のくる朝の原を見わたせば霞も今日ぞ立ちはじめける

『千載集』卷一・春上、一

春たつ心をよみ侍りける

摂政太政大臣

み吉野は山もかすみて白雪のふりにし里に春はきにけり

『新古今集』卷一・春上、一

などである。八代集の例のみを列挙したが、「春の徴としての霞」詠の典型的な特徴——霞と立春との関連性——を一渡り見渡すには十分である。傍線部で示した通り、全ての用例の中に立春を意味する言葉「春立つ」が存在する。このように、「春の徴としての霞」という題材は古代和歌の立春詠の中において重要な位置を占めていることは明白である。

では春と霞とが同じ日に立たなければならぬ必然性はどこにあるのだろうか、言い換えれば、立春と霞とは何故関連付けられたのだろうか。古代和歌において、「春の徴としての霞」は多く詠まれた題材であるだけに、その表現が定型化するまでの経緯に関する考察が必要であろう。周知の通り、霞が歌ことばとして詠まれたのは、『萬葉集』が最初である。しかもその中には、既に霞の到来を春の徴として認識する「冬過ぎて春来るらし朝日さす春日の山に霞たなびく」（卷十・春雑歌・詠霞、一八四四）といったような歌が見られる。この『萬葉集』を源とする春の徴としての「霞」は、如何にして成立し、暦法概念である「立春」と関連付けられたのか。以下いくつかの視点からこの問題について考察を加えてみる。なお、和語の「霞」と漢語の「霞」とを区別するため、以下の論述において、引用文を除いて、和語の場合は「かすみ」、漢語の場合は「霞」と表記する。

## 第一節 成立の背景とその在来性

『萬葉集』の「かすみ」は、複合語を含めて全部で七十八例を数える。詠作の年代を見ると、巻二に収められた磐姫皇后の相聞歌（八八）が最古のものであるが、後人仮託という見方が一般的である。次に古いのは巻一にある舒明朝の作とされる軍王の歌（五）だが、これに関しては人麻呂以降の作とする稲岡耕二氏の説が有力である<sup>2</sup>。時代が確かな作品の中では、人麻呂の「近江荒都歌」（巻一、二九）が最古の作である。

春草の 繁く生ひたる 霞立ち 春日の霧れる ももしきの 大宮所 見れば悲しも

「かすみ」が詠まれた部分のみを引用したが、この歌において、既に「かすみ」が春の景物として詠まれていたことが分かる。そして「かすみ」を春の徴として詠む最古の歌も、巻十の巻頭歌として人麻呂歌集非略体歌の中に登場する。

ひさかたの天の香具山この夕霞霏霰がすみたなびく春立つらしも

（巻十・春雑歌、一八一二）

人麻呂の時代はいわゆる和歌における季節詠が生成する時代であり、その時代において、「かすみ」が既に既に春の徴としての性格を有していたのである。

周知の通り『萬葉集』における季節詠の成立は、中国文学による影響が大きい。そしてその季節詠が成立する最初の段階において、春の徴としての「かすみ」が詠まれたのである。したがって「かすみ」の季節感を考える際、まず中国文学による影響を見極める必要がある。結論から言えば、和歌における春の徴としての「かすみ」は、六朝初唐文学の中に見られる春の季節感からは一步離れたものである。既に渡瀬昌忠氏によって指摘されているように、「かすみ」は、その訓字である「霞」もしくは意味的に近いと考えられる「霧」の、中国文学におけるイメージとかなり異なっている<sup>3</sup>。氏は『玉台新詠』や『藝文類聚』などの用例を検討し、「中国六朝の詩賦において（中略）霞と霧



とは季節感の明確な気象でなかったことが明らかであろう」と指摘した上で、六朝文学圏の季節感とは「人麻呂歌集非略体歌部の季節分類者の季節感をば直接に生み出したものではなかった」とし、「非略体歌の季節感とは、それらからの影響の外に、いちはやく独自に創造的に、一步を踏みだしているのだ」と論じた<sup>30</sup>。氏の考察に加えてより広く六朝初唐の用例を視野に入れて検討して見ても、やはり中国文学における「霞」、「靄」、「煙」、「霧」など水気類景物から、氏の言うとおり明確な季節感を見出すことは困難である。

要するに、『萬葉集』における「かすみ」の季節感とは、その訓字である「霞」及び類義語と考えられる「靄」、「煙」、「霧」などの、中国文学の中における性格とは異なるものと考えられる。とすると「かすみ」に内包される季節感とは、日本在来のものである可能性が高いと言わねばなるまい。一八一二番歌における「かすみ」と「香具山」との関係性に注目した井手至氏が「天の香具山は、皇都のある大和の「物実」とも考えられる中心的な存在であった。してみれば、その山の風物は、大和の風物を代表するものと言ってよいことになる。天の香具山に見いだされる季節的な風物の変化は、大和全体の季節の転移をいちやく表示するものと考えられたのである。(中略)その山に霞がたなびいたことは、大和に春の来たことを確かめるよすがとなったものと思われる」と述べ、在来の季節感の中における「かすみ」の働きを認め<sup>31</sup>た。

「かすみ」の在来性は、「かすみたなびく」及び「かすみたつ」という二つの表現からも窺える。『萬葉集』における「かすみ」の状態を表す動詞を調べると、ほぼすべてが「たなびく」と「たつ」とに集中していることが分かる。<sup>32</sup>この二語について、萬葉前期では、「たつ」が「立」、「たなびく」が「軽引」もしくは「霏靄」と表記されている。「霏靄」については第三節に譲るとして、それ以外の訓字について検討してみると、六朝初唐文学において、水気類の景物の「たつ」や「たなびく」といった状態を、「立」もしくは「軽引」で表現する用例はないことが分かる。萬葉後期に入ると、「たなびく」の訓字に、「蒙」(巻七、一二二四、一二四四、巻十二、三〇三二)と「被」(巻十一、二四二六)とが用いられるようになったが、何れも当該歌に詠まれた山との関連で選ばれたものと考えられ、必ずしも「たなびく」の原意に忠実な訓字とは言えない。「たなびく」と類似する漢語表現を文脈から判断して挙げると、東晋褚爽「禊賦」(『藝文類聚』巻四・三月三日)

の「輕霞舒<sub>三</sub>於<sub>二</sub>翠崖<sub>一</sub>」、白雲映<sub>二</sub>乎青天<sub>一</sub>」や、東晋湛方生「弔<sub>レ</sub>鶴文」（『藝文類聚』卷九十・玄鵠）の「望<sub>二</sub>雲舒<sub>一</sub>而息<sub>レ</sub>翮、仰<sub>二</sub>朝霞<sub>一</sub>而晨征<sub>一</sub>」に見られる「舒」が考えられる。一方の「たつ」は、西晋嵇含「悦<sub>レ</sub>晴詩」（『藝文類聚』卷二・霽）の「勁風歸<sub>二</sub>巽林<sub>一</sub>、玄雲起<sub>二</sub>重基<sub>一</sub>」や、後魏温子升「春日臨<sub>レ</sub>池詩」（『藝文類聚』卷九・池）の「光風動<sub>二</sub>春樹<sub>一</sub>」、丹霞起<sub>二</sub>暮陰<sub>一</sub>に見られる「起」に相当する表現と見られる。しかし『萬葉集』において「たなびく」を「舒」、「たつ」を「起」と表記する例はない。もし「かすみ」を修飾するこの二つの動詞が漢文の訓読に由来するものとすれば、何故「舒」、「起」を差し置いて、雲気類の景物を表現する際にほとんど使用されていない「輕引」、「霏霏」、「立」を使つたのか、理解し難いものがある。以上の点から総合的に考えると、「霞輕引（霞霏霏）」も「霞立」も、漢籍の表現を訓読して成立した訓字ではなく、日本固有の表現「かすみたつ」、「かすみたなびく」に漢字を当てたものと考えられる。

「かすみ」という景物の成立について、「ひとしく農事年の始め（春）の国見の対象であつた雲・霞・霧は、曆法の施行とともに分化・固定した皇子の季節行事において、初春の国見の景物としては霞が中心となり雲・霧はしだいに春から疎外され、新たに瞩目の雪が加わつた」とする論は渡瀬氏に見られるが、十分な説得力を持つかどうかは疑問である。春に見る景物と、春の基準とされる景物とは違う。国見において観察された景物という点だけで、これらの景物に内包されている季節感が等しいと説くことは、説得力を欠く。『萬葉集』において「かすみ」が春の徴になつたのに対して、雲が結局季節を問わず詠われているのも、もとより雲が季節感の明確ではない景物と認識されているためと考えられる。

一方「かすみ」の成立を、その中に内包される神話性に求め、「霞」は始源的には春をもたらす神の来訪した兆し」とする高野正美氏の論も見られるが、それに関しても疑問点が残る。『萬葉集』に「かすみ」を神の来訪した兆しとして詠む歌はなく、氏が注目する「神代より言い継ぎ来たる 神奈備の 三諸の山は 春されば 春霞立ち 秋往けば 紅にほふ」（卷十三、三三二七）は「春はかすみ、秋はもみち」という季節意識が古くから存在していたことを示す例としては最適だが、「かすみ」と「もみち」とが神の仕業とする説を支える材料としては不十分である。同じことは氏が根拠とする『古事記』（応神）の「秋山之下氷壮士」「春山之霞壮士」説話においても言える。「かすみ」

に神話性が内包されていることは十分に考えられるが、それが「神の来訪した兆し」であるかどうかは疑問である。

渡瀬氏と高野氏はそれぞれの視点で「かすみ」の成立に関する論を展開したが、その中に共通するものは季節感の存在を認めた点である。国見の時期が自然暦の年頭に集中することは、当時において、その時期を年頭として認識し得る季節感が存在したことを意味する。一方、季節の発生を神の仕業とする考えの中にも、当然季節感というものが含まれている。では何故本来姿も形もない季節が認識されたのだろうか。暦法伝来以前の時代を含めてこの問題を考慮すると、やはり自然暦が重要なポイントとなる。自然暦の季節感は「日のかげの長短、月のみちかけ、及び草木の開花・結実・落葉、あるいは降雪などの自然現象」を見て、季節を認知するものである。その季節感の中にこそ本源的な「かすみ」が存在しているのではないだろうか。国見で見た景物であつても、神話性の強い景物であつても、その景物に自然暦の季節感が内包されていなければ、到底季節の指針にはなりえない。

記紀が成立する以前の、日本の季節感を考える際、重要な意味を持つのは、農耕社会が既に弥生時代において成立していたという事実である。農耕社会の成立は、季節に対する理解が一定のレベルに達していたことを示す。『三国志』（魏書・倭人伝）裴松之注に引かれた『魏略』逸文「其俗不知正歳四節」、但計「春耕秋收」為「年紀」は、暦が伝来する以前の日本の季節感を記録する文献として有名である。季節に対する認識がなければ、そもそも農作業が成り立たない。当時の日本において、中国のような季節を厳密に四分する意識がなくても、農業活動を維持するための季節感はかなり研ぎ澄まされていたに違いない。書ける文字がなくとも、農耕社会を支える季節感の中に、季節認識としての「はる」と景色としての「かすみ」が口語として存在し、それが関係付けられていると考えても不自然ではない。神代から語り継がれた三諸山の「かすみ」と「もみち」とを詠んだ前掲三二七番歌は、その可能性を示す好例である。

ただし、農耕社会における季節感が、全て農耕という行為と結びついているという考え方は正確ではない。農耕の成立は、季節に対する認識のレベルの高さを示すものであつて、季節風物に対する認識の範疇を限定するものではない。農耕文化の土壌で培った季節感だからといって、それを詩歌の中で表す場合に、農耕の記述を伴う必要はない。中国の季節感も農耕文化を土壌とする季節感といえるが、中国文学

に詠まれた農耕関連の季節風物は、決して多くはないのである。

「かすみ」を在来の自然暦の「はる」の季節感を有する景物と考える場合、触れなければならないのは『萬葉集』における「かすみ」の季節性である。これは従来から議論されている問題であり、その焦点は春ではない歌の中に見られる「かすみ」をどう説明するかにある。しかし春以外の歌に登場することは、必ずしも「かすみ」のもつ「はる」の季節感を否定するものではない。この問題を説明するため中国の季節感を反映する『礼記』『月令』における「虹」と「雷」とに関する記述を見てみよう。それによると「仲春之月」に「雷乃發聲」、「季春之月」に「虹始見」があり、そして「仲秋之月」に「雷始收聲」、「孟冬之月」に「虹藏不見」がある。つまり、雷の発生期間が二月から八月まで、虹の発生期間は三月から十月までというのである。両者共に複数の季節に渡って発生する自然現象であるが、と同時に、雷は仲春月、虹は季春月と対応する性格をも持っている。雷の発生を仲春月の徴、虹の現れを季春月の徴として見ても、問題はない。「かすみ」においても同じである。確かに「かすみ」を詠む歌は各季節に渡るが、それを春以外の季節の徴として詠む例はない。そして冬の「かすみ」が詠まれたのは年内の立春を念頭に置いた四四九二番歌のみである。したがって集中において、冬の「かすみ」は実質的には存在しないということになる。春にはじめて観測されるという性質から言って、「かすみ」は春と冬とを区別する指標に適していると言えよう。そしてそのことと「かすみ」が夏秋においても観測されていることは矛盾しない。集中において「かすみ」が、春に限定されずに詠まれたことは、むしろ「かすみ」の持つ、自然暦の景物としての性格を如実に表していると考えられる。

では実際の歌から、「かすみ」の在来性を見てみよう。

卷向の檜原に立てる春霞の凡にし思はばなづみ来めやも

(一八一三)

古の人の植ゑけむ杉が枝に霞たなびく春は来ぬらし

(一八一四)

児らが手を卷向山に春されば木の葉凌ぎて霞たなびく

(二八一五)

玉かぎる夕さり来れば獵人の弓月が岳に霞たなびく

(二八一六)

今朝行きて明日は来む云子鹿丹朝妻山に霞たなびく

(二八一七)

児らが名にかけの宜しき朝妻の片山崖に霞たなびく

(二八一八)

右、柿本朝臣人麻呂が歌集に出でたり。

この六首は、前掲一八一二番歌に続く人麻呂歌集歌である。この歌群に関して特に注目したいのは、一八一四番歌である。この歌は、一八一二番歌と同じく、「かすみ」の視認をもって春の到来を「らし」で推定する歌である。両歌の類似した構造から、一八一四番歌における「古の人の植ゑけむ杉が枝」が、一八一二番歌における「天の香具山」に相当する働きをしていることが推測できる。つまり、詠み手にとつて「古の人の植ゑけむ杉」は、「皇都のある大和の「物実」とも考えられる中心的な存在であった」香具山に劣らぬ神聖さが認められるものであったと考えられる。杉の神聖性は、「石上布留の神杉神びにし我やさらさら恋にあひにける」(巻十・春雑歌・問答、一九二七)といった歌からも窺えるが、一八一四番歌に即してその特性を読み解くと、この杉は、単なる自生のものではなく、特定の伝承を持った、古と今とを繋ぐものであると考えられる。このような特性を有している杉だからこそ、その枝にかかる「かすみ」が、香具山にかかる「かすみ」に相当するものと見られたのであろう。この歌は、当時において、春の到来を由緒正しい神聖な杉の枝にかかる「かすみ」で判断する方法が有効と見なされ得たことを示す。大事なのは、この方法から、伝来の暦法の要素を見出すことは困難だという点である。一八一二番歌が

そうであるように、この歌における「かすみ」を春の徴としてみる方法も、在来の季節感を反映したものと見られる。

一八一二番歌を含めたこの人麻呂歌集歌群を全体として見る際、「かすみ」の在来性を反映する以下の二つの特徴が注目される。一つは前述した一八一四番歌を除いて、すべての歌に「かすみ」の発生場所（傍線部分）が明示されている点である。歌に残された僅かな叙景の文句の中に、場所をあえて書き記すことは、「かすみ」が観察された場所と、「かすみ」が観察された事実とが、同等な重みを持つことを意味する。太陰太陽暦の四季観は、世界全体を対象とする一括的な指定であるのに対して、自然暦はその場所の風物の変化を根拠に、時の流れを判断する性格を持っている。したがって、これらの歌に見られる、「かすみ」の発生する場所の具体性を重要視した詠作の方法は、自然暦の季節感覚に近いものと見られる。

第二の特徴は、歌における叙景には、平明かつ素朴なものが多いという点である。その性格は、一八一八番歌において特に鮮明である。地名に掛かる序詞を除くと、歌の本文は「朝妻の片山崖に霞たなびく」のみとなる。訓に疑問が残るが、一八一七番歌もこれと類似していると考えられる。確かに和歌における季節詠は、中国文学の刺激を受けて誕生したものだが、その初期の段階において大事なものは、中国文学のような技巧の凝った四季描写を和歌において再現するのではなく、季節の風物だけを主題とする季節詠を創り出したことである。そこで「かすみ」が選ばれたのは、まだ日本の自然感覚に十分に馴染んでいない漢籍の風物に比べ、在来の季節感の中で機能する「かすみ」の方がより季節の実感をもたせる景物であったからと考えられる。しかし漢籍からの表現とは違って、今まで文学表現として注目されていなかった「かすみ」は、歌ことばとして未熟な段階にある。それを歌にした結果、このような平明かつ素朴な叙景が成立したと考えられる。

以上の二つの特徴から見ると、「かすみ」は太陰太陽暦が伝来する以前の、農耕社会における自然暦の季節感の中において、「はる」を代表する景物として認識されていた可能性が高いと言わなければならない。本来自然暦の季節感の中で重要な役割を持っていた在来性の強い景物であったからこそ、「かすみ」は季節歌というジャンルが形成された最初の段階において、いち早く歌ことばとしての成長を遂げたと考えられる。

では、在来の季節感の中に存在していない「立春」が、なぜ「かすみ」と関連付けられたのだろうか。この問題を考えるためには、「かすみ」と太陰太陽暦との関連性という視点からの検討が必要となる。

## 第二節 太陰太陽暦との関連

自然暦の季節感は古くから存在するが、歌の世界における季節詠の成立は、中国文化の伝来と深く関係している。渡瀬昌忠氏が人麻呂歌集非略体歌論を展開する際に指摘したように、歌における四季意識の発生は、太陰太陽暦の頒行という時代背景と深い関係があると考えられる<sup>10</sup>。序章で述べたように、持統朝は、頒暦が行われた時代である。持統天皇の「春過ぎて夏来るらし白たへの衣干したり天の香具山」（巻一、二八）があるように、その時代において、初めて鮮明な季節感を持つ歌が現れたのである。内田賢徳氏は、この歌の中に「暦法の知が実感と矛盾することなく、そこへと迎えられている充足とそれを祝福する喜びのあること、そしてその背後に暦法の知の矛盾への不安の潜むこと」が存在すると指摘し<sup>11</sup>、歌における太陰太陽暦の影響を認めた。二八番歌がそうであるように、季節歌というジャンルが生成しつつある持統朝あたりの作品における四季の表現は、太陰太陽暦の知識と深く関連していると考えられる。

一方、頒暦以前から存在していた自然暦の季節感は、前掲の『魏略』逸文の記述に近いものと考えられる。自然暦における一年の感覚については諸説あるが、その構造は中国の中原地方の四季をベースに作られた太陰太陽暦と異なるのは確かであろう<sup>12</sup>。その季節感が頒暦の実施に伴う暦法知識の普及によって革新され、日本において、四季をほぼ均等に分ける二元的四季観が成立したのである<sup>13</sup>。しかし明治時代の改暦が社会に大きな影響を与えたのと同じように、新暦の頒行は、常に戸惑いを伴うものである。まして太陰太陽暦は、中国の中原地方の気候をベースに作られたものであるため、二十四節気を含めた季節区分は日本の気候との齟齬も大きい。しかし当時の日本は、この実際の気候と異なる太陰太陽暦によって示された新しい四季観に、ただ順応するのみであった。こういった順応は、旧来の季節感を、新しい

四季観の中において改めて位置づけることをも意味している。この背景の中で、立春と対応する「かすみ」が創出されたのではないか。つまり「かすみ」は、古い季節感と新しい四季観との架け橋になったのである。

太陰太陽暦の実施とともに、季節の到来を「立つ」で表す「春立つ」と「秋立つ」という二つの歌ことは創出された。「春立つ」と「秋立つ」とが創出されたのに、「夏立つ」と「冬立つ」とが創出されなかったのは、日本の農耕社会にとって春と秋とはとりわけ重要な季節であるためとも考えられる。

新井栄蔵氏の考察によると、季節の到来を「立つ」と表現した作品の中で、最古のものは持統三年（五年のあたりに制作されたと考えられる）人麻呂の吉野行幸従駕の讃歌（巻一、三八）、その次に古いのは文武四年の作と考えられる明日香皇女殯宮の挽歌である（巻二、一九六）<sup>50</sup>。以上の二首は何れも「秋立つ（秋立てば）」の用例だが、前掲の人麻呂歌集歌（二八一）も人麻呂の作とすれば、「春立つ」と「秋立つ」という二語は、人麻呂による造語である蓋然性が高い。いずれにせよ、この二語の登場は、当時の季節歌に対する頒暦の影響を如実に物語っていると考えられる。問題は、その「春立つ」「秋立つ」が「立春」「立秋」の直訳かどうかである。これについて、「春立つ」が「立春」に由来する言葉とする意見のほかに、漢語「春立」による訳語とする説や、単に漢語「立春」と似ただけの和語だとする説も見られる。小島憲之氏は「春立」説に対して否定的な意見を示す一方、和語説に対して「黒白は決めにくい」としながら、「漢語「立春・立秋」と「春立つ・秋立つ」は、いつのまにか萬葉びとの間に結ばれた」と、和漢の交渉がその中にあったという考えを示した<sup>51</sup>。太陰太陽暦の頒行という、「春立つ」が歌ことばとして登場する時代背景を念頭に置くと、やはりそこには「立春」という具注暦に記載される二十四節気用語との深い関わりがあると考えるべきであろう。

現代のように、毎日の気温変化が古代とは比較にならないほど精確に把握されると、古人のように暦を見て四季を把握する必要がなくなる。春がいつくるのか、地域によって、人によって判断が様々である。現代の我々が持つこの季節感、ある意味自然暦の季節感に近いと言える。人々が注目するのは、実際に生活している地域の季節であり、余所の季節に対する関心は薄い。これと対照的なのは、世界全体の



季節を一元的に規定する、境界がはっきりしている太陰太陽暦の四季観である。実際の気候とは関係なく、節気、或いは晦朔によって、一つ一つの季節が整然と区分され、移りゆく季節が立春や立秋に出くわすと一瞬で終了し、一方新しい季節もその節分を起点に、一気に動き出すのである。季節が一瞬にして変化するという太陰太陽暦の性格が、「春立つ」、「秋立つ」によってよく表現されていると言える。

しかし新井栄蔵氏は一八一二歌などに見られる「春立つらしも」という確信を持った推定を含めた表現を挙げ、次のように論じた。

本朝では、立春を撰取しながらもそのハルタツは、立春ならぬ春來相当の、そして〈ハル(ガ)クル・ハル(ガ)スギル〉相当のものとして〈ハル(ガ)タツ〉であり続けたのである<sup>1)</sup>。

確かに曆上において定められた立春を、「らし」を持つて表現するのはいささか違和感がある。しかし本論冒頭に掲げた歌群が示すように、平安和歌において、「春立ちける日」が「立春日」の和訳であることは明白であり、歌題が「立春の心」である作品を見ても、結果は同じである。前述の、歌ことばとしての「春立つ」の誕生と、太陰太陽暦の頒行との関連性を考えれば、「春立つ」を「立春ならぬ春來相当のものとする新井氏の論は、やはり再検討の余地がある。岩下武彦氏が新井説について、ある程度の同意を示しつつも、和語の「春立つ」は、やはり「相対的なお「立春」により近い表現」と論じたように<sup>2)</sup>、「春立つらしも」といった確信をもった推定表現に関しては、そこに含まれる「立春」の意味を否定しさるのではなく、視点を変える必要があると考える。

そこで注目したいのは次の大伴家持の歌である。

二十三日に、治部少輔大原今城真人の宅にして宴する歌一首

月数めばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春立ちぬとか

(卷二十、四四九二)

「霞たなびく春立ちぬとか」は人麻呂歌集にある「霞霏霏春立つらしも」と同じく、景色の「かすみ」を見て「春立つ」を判断するものである。しかしその表現の背後には、曆法上における立春に対する意識が介在している。『日本暦日便覧』によれば、この年(天平宝字元年)

は十二月十九日が立春の日である<sup>30</sup>。家持詠は十二月十八日に詠まれたもう一つの歌群（四四八八～四四九一）と同様に、この十二月の立春を意識した詠作と考えられる<sup>31</sup>。「春立つ」という表現は、その十二月十八日の歌群における家持詠（四四九〇）の中にも見られる。

あらたまの年ゆきがへり春たたばまづ我がやどに驚はなけ

（巻二十、四四九〇）

傍線部の「春立たば」が翌日の立春を意識した表現であることは明白である。そして問題となる四四九二歌も、前半では暦月から見るといまだ冬のうちであると言いながらも、後半では「かすみ」を根拠に、春の到来を確認したのである。立春日そのものは既に過ぎていたが、歌人はその春到来の事実を、「かすみ」をもって改めて検証したのである。在来の季節感を有する「かすみ」が、伝来の四季観を検証する際の一つの根拠となったのである。そしてこの歌から得られた発想を初期の「かすみ」の詠作に援用してみると、和歌における季節詠というジャンルが形成した最初の段階において、何故「かすみ」がいち早く登場したのかも理解できよう。人麻呂歌集の「霞たなびく春たつらしも」における香具山の「かすみ」が、暦法上の立春の正確性を示す最適の根拠であり、それを目にした歌人が「霞たなびく春たちぬとか」と歌ったのである。

このような表現は、本節の前半にも論じたように、新しい暦法の導入によって発生した、二つの季節認識（自然暦による在来の季節感と、太陰太陽暦が定められた新しい四季観）が衝突し、そして融合した産物と考えられる。人麻呂歌集の「春立つらしも」は、「かすみ」の発生という客観的な根拠に基づいて、暦法上の「立春」の確からしさに裏付けられた表現である。一方の家持の「春立ちぬとか」は、「立春」が既に三日前にやってきたという知識を「かすみ」をもって再確認する表現である。「らし」、「とか」は、歌人達が自然暦の季節感、つまり「かすみ」を春の景物とする認識をもって、春は立春から始まる季節というような太陰太陽暦によって定められた新しい四季区分の正確性を検証する過程を示す表現である。そこに詠まれた「春立つ」という言葉は「立春日によって始まる春」という意味を含むもので、立春の本意とはややずれるが、太陰太陽暦の四季観を反映した言葉であることは確かであろう。

『萬葉集』第二期になると、正式の頒曆による影響で、新しい季節区分意識を反映する作品が次々と制作された。季節の発生を「たつ」と表現したのも、その時代的傾向を端的に示すものである。太陰太陽曆の区分法が主流となりつつある中、季節を区切りのあるものと認識し始めた歌人達は、その季節の区切りに対応できるような、いわば検証的な機能を持つ風物を求め、そこで在来の季節感を表す「かすみ」が選ばれたのではないかと考えられる。

### 第三節 中国文学との関連

中国文学との関連性という視点から「春の徴としてのかすみ」という歌表現の成立を考えると、「かすみ」とその訓字である「霞」との関連性は大きな問題となる。中国語で一般的に朝焼け、夕焼けという意味を表わす「霞」は、何故「かすみ」の訓字になったのか。この問題について近年では、鄧慶真氏が『萬葉集』の中で「霞」を「かすみ」と訓まれたのは、「かすみ」という和語を他と同様、漢字一字で当てようとする傾向の中で、「霞」の赤いイメージよりも、「かすみ」と一致する他の特徴を重視した結果」と論ずるが、「かすみ」と「霞」とにおける色の違いの問題について、十分な説明がされているとは言えない<sup>29)</sup>。そもそも中国文学における「霞」の用例が全て赤い雲氣に限定されているかという点、決してそうではない。合山究氏が指摘したように、漢籍における「霞」の表現には「いわゆる「かすみ」に近いとみられる「青霞」、「翠霞」、「白霞」、「蒼霞」、「碧霞」なども」存在する<sup>30)</sup>。また次章において詳述するが、六朝初唐において山水世界の雲氣を表す際に頻繁に使用されている「煙霞」が、『懷風藻』から受容されている事実にも留意しておきたい。これについては次章において述べる。更に目を引くのは、「煙」「青」「翠」などの前置語を持たず「霞」の一文字で「かすみ」に相当する意味を表す、大津皇子「春苑言宴」(『懷風藻』四)の「澄徹苔水深、曖曖霞峯遠」である。このような用例は、中国文学の中には容易に見いだせない。雲氣に覆われた峯が遠くに見えるという下句の趣向が『萬葉集』の「遠山に霞たなびきや遠に妹が目見ねば我恋ひにけり」(巻十一・寄物陳思、二四二六)と類似し

ている点から考えると、あるいは「かすみ」のイメージを反映した和習的な表現かもしれない。小島憲之氏は、この例を「霞」に対する誤用と考えているが<sup>13</sup>、こういった表現が可能となった背景には、やはりまず赤くない「霞」の用例の受容があると考えられる。同氏の考察によると、『懷風藻』において、赤くない「霞」の用例はこのほかにも文武天皇「詠月」（二五）の「月舟移<sup>14</sup>霧渚<sup>15</sup>、楓檝泛<sup>16</sup>霞浜<sup>17</sup>」や、吉田宜「從<sup>18</sup>駕吉野宮」（八〇）の「雲卷三舟谷、霞開八石洲」などがあげられる<sup>19</sup>。このように、中国文学における赤くない「霞」の受容は、既に『懷風藻』の段階において発生したのである。この赤くない「霞」に対する受容が、「霞」と「かすみ」とを結ぶ直接的な要因と考えられる。

古代日本文学に見られる赤くない「霞」の積極的な受容と対照的なのは、赤い「霞」の典型的な用例である「朝霞」に対する消極的な姿勢である。上代文学に大きな影響を与えたと言われる『文選』、『玉台新詠』、『藝文類聚』において、「煙霞」を圧倒するほどの用例数を見るこの表現だが、『懷風藻』及び勅撰三集の現存本文においては、一切の用例が見出せず、聖武天皇の『雑集』や空海の『性靈集』（ともに「煙霞」の用例が存在する）を入れても結果は同じである<sup>20</sup>。ちなみに『萬葉集』にも「朝霞<sup>21</sup>たなびく野辺にあしひきの山ほととぎすいつか来鳴かむ」（巻十・夏雑歌、一九四〇）のような「朝霞<sup>あさかすみ</sup>」の用例が存在するが、それは「あさ」の訓字「朝」と「かすみ」の訓字「霞」とを合わせただけのものであり、中国文学における「朝焼け」を意味する「朝霞」とは異なる表現と考えられる。

この「朝霞」と「煙霞」との受容の差は、当時の中国文学の潮流——「煙霞」の流行——に敏感であった日本漢文学の性格を反映するものでもあるが、一方では、日本において、「かすみ」に近い赤くない「霞」の方が馴染みやすかったという理由もあげられる。

「かすみ」の訓字として選ばれたのが、「朝霞」、「丹霞」、「赤霞」の「霞」ではなく、「煙霞」、「青霞」、「霞峯」の「霞」だとすれば、その対応関係が理にかなっていることは理解できる。

ここに至って、「かすみ」と「霞」との訓字の論理は一応明白となったが、まだ一つ疑問が残る。狩谷掖斎が『箋注倭名抄』（巻一・天地部風雨類）で「霞（中略）和名加須美」に対して、「又加須美、謂<sup>22</sup>春日靄氣<sup>23</sup>」と注釈しているように、単に小学書の字義から考える

と、「かすみ」の意味に近い「靄」という文字が存在する。上代の歌人達が「かすみ」の訓字を選別する際、それを採らず「霞」を採ったのは何故だろうか。理由の一つとして考えられるのは漢籍における受容環境の差である。単純な比較になってしまいが、古代日本においてよく利用されている類書『藝文類聚』を調べると、一九七にも上る「霞」の用例数に対して、「靄」の用例数は僅か一四（そのうち形容語の「靄靄」が四例）に留まっている。この傾向は六朝初唐全般の詩文作品においても見て取れるので、「靄」より「霞」の方が受容されやすい環境にあったことは確かであろう。そして『藝文類聚』における用例の多さが示すように、「霞」という文字は、韻文、駢文の対句の中でよく使用されている、言わば文学性の高い表現と見られる。辞書的な意味から言えば、「霞」は一種の自然現象を意味する言葉だが、天文気象をテーマとする『史記』『天官書』や『漢書』『天文志』に「霞」の記述はなく、雲、雪、雨、雷、虹、霧などを収めた『藝文類聚』の天部においても「霞」の項目は存在しない。それと対照的なのは、韻文、駢文の作品における「霞」の用例数の多さである。『藝文類聚』の用例数は前述のとおりで、史書における「霞」の用例を調べると、唐までに成立した正史における「霞」の用例は全て引用文の中にあり、しかもそのうち賦の用例が一番多いということが判明する<sup>80</sup>。このように当時の中国文学において、「霞」は単なる自然現象を表すことばとしてよりも、文学性の高い表現として使用されている傾向が存在する。そしてその高い文学性こそが、「霞」を「かすみ」の訓字にしたもう一つの理由ではないかと推測する。

この「霞」と関連して注目したいのは、一八一二番歌などにおいて使われている「たなびく」の訓字「霏霰」である。この「霏霰」に関して、これを人麻呂が漢語「霏微」に基づいて作った造語とする論が小島憲之氏に見られるが<sup>81</sup>、「霏微」を「霏霰」と写すテキストが人麻呂の目に掛かり、そこから「霏霰」が選ばれたという可能性も否定できない。時代がかなり下ってしまいが、北宋蘇轍「雪中呈範景仁侍郎」(『欒城集』巻六)には「霏霰本無<sub>レ</sub>着、積疊巧相因」という詠雪の一聯がある。ここの「霏霰」は「霏微」の同義語と考えられる。ほかに南宋薛季宣「雁蕩山賦」(『浪語集』巻三)の「霏霰雨霧之飄散、晃朗白虹之下墜」や元方回「十九日甲戌晴、己卯晚又雨。二首(その一)」(『桐江統集』巻十八)の「豈宜<sub>二</sub>真洶湧<sub>一</sub>、止可<sub>二</sub>略霏霰<sub>一</sub>」などが見られる。「霏」は用例が非常に少ない文字で、『四庫

『全書』を調べると小学書以外の用例は全部で九例しかない。しかもその用例のうち七例が「霏微」の語形で使用されている。これによると、中国文学において、本来通用関係ではない「微」と「霏」とが「霏微（霏微）」と表記される時にだけは通用するという現象がある。人麻呂が「たなびく」の表意の訓字を考えた時に、わざと固定表現である「霏微」の「微」を珍しい文字である「霏」に変えたとは考え難い。したがって、「霏微<sup>たなびく</sup>」という表現は、人麻呂による造語というよりは、「霏微」という表記を持つテキストに由来するとする方が自然と考える。

第一節に論じた「軽引」とは違って、漢籍における「霏微」の用例に、梁何遜「七召」(『文苑英華』卷三百五十二)の「雨散漫以霑<sup>レ</sup>服、雲霏微而襲<sup>レ</sup>宇」や、小島憲之氏が指摘した梁王僧孺「侍宴詩」(『藝文類聚』卷三十九・燕会)の「散漫輕煙轉、霏微商雲散」といったような、雲を表す例は僅かながら見られる<sup>88)</sup>。しかし本来雨や雪の状態を表す表現である「霏微」と異なると、『萬葉集』の「たなびく」はもっぱら「かすみ」や「くも」の状態を表現している。したがって両者の関係は、「たなびく」に「霏微」を当てたと考えるべきである。では、なぜ動詞「たなびく」の訓字を選定する際、第一節で挙げた「舒」ではなく、一般的に状態を表す形容語として用いられているこの「霏微」を選んだのか。理由の一つは、「霏微」に内包される高い文学性——韻文、駢文の対句表現に適した疊韻語——が日本において認識されたためと考えられる。

このように、一八一二番歌における、春の徴としての「霞霏微<sup>かすみたなびく</sup>」が創出された背景には、在来の季節感を表すこの和語を、漢籍の季節表現に劣らないものに仕立てようという、当時の歌人達の苦心があると推測される。

#### 第四節 理知への傾斜

こうして成立した「春の徴としてのかすみ」だが、持統朝以降における、具注暦の浸透によって、徐々に実景的なものから離れて、理知

的なものへと変化し始めたのである。おおむね奈良時代のものと見られる卷十の出典不明歌群の中に、次の二首が見られる。

昨日こそ年は果てしか春霞春日の山にはや立ちにけり

(卷十・春雑歌・詠<sub>レ</sub>霞、一八四三)

うぐひすの春になるらし春日山霞たなびく夜目に見れども

(卷十・春雑歌・詠<sub>レ</sub>霞、一八四五)

「かすみ」の立つ場所が一八一二番歌の香具山から春日山に変わったが、その春日山の歌における働きが一八一二番歌における香具山と類似していることは井手至氏によって指摘されている<sup>28</sup>。

一八四三番歌は、新しい年が始まるその日に、「春霞」が早くも立ちこめていると詠み上げている。あたかも「かすみ」が具注暦の仕組みを理解しているかのように描いている。ここに描かれた自然暦の季節感と具注暦の四季指定とが合致する場面を一種の偶然と見なすこともできるが、その理想的な合致を描くことこそが歌人の目的ではないかと考える。この種の合致を歌うことは、伝来した中国の暦法の正確性を称揚する効果をもたらすとともに、自然の風物を新しい四季指定の基準に従属させる機能をも持っている。「かすみ」は、暦法上の春の到来を検証するための根拠から、暦法上の春によって支配される景物へと変化したのである。そしてその理知への変貌が一層鮮明となったのは、次の一八四五番歌である。この歌に「万葉後期の季節感をあらわす新しい枕詞」と言われる「うぐひすの」が見られる<sup>29</sup>。その「うぐひすの春」は果たしてどういうものなのか。それを考えるため、次の歌が参考になる。

み雪降る冬は今日のみうぐひすの鳴かむ春へは明日にしあるらし

(卷二十、四四八八)

この三形王の歌は、第二節においても言及した、立春前日に当たる天平宝字元年十二月十八日の宴において詠まれたものである。「冬は今日のみ」と詠んだのは、今日が節分であるからにはかならない。そして明日の立春に出会うものこそが「うぐひすの鳴かむ春へ」である。こ

の三形王詠に見られる、「うぐひす」と「立春」とを関係付ける認識は、前掲家持詠の四四九〇番歌においても読み取れる。一八四五番歌における「うぐひすの春」も、こういった認識に基づいた表現と見られる。この歌において、その「うぐひすの春」の到来を裏付けるかのように、春日山に「かすみ」がたなびいている。注目したいのは、「夜目にみれども」という、多少の不確定性を含む表現である。その頼りない夜目を通じて、歌人が本当に「かすみ」を見ていたのかどうかは疑問である。しかし暦法上における春の到来は確実なもので、「かすみ」が見えたと主張する歌人の背後には、暦法本位の四季観が浸透しつつある状況が想像される。「かすみ」を春の到来の検証根拠とする手法において、この歌は人麻呂歌集の歌と同じであるが、その検証において用いられた、夜目で見た「かすみ」の信憑性を支えたのは、暦法優位の四季認識にほかならない。すなわち、「かすみを見て春を知る」から「春が来るとかすみが見えるようになる」へと変わったのである。この傾向が更に進むと、次のような歌が生まれることとなる。

うちなびく春を近みかぬばたまの今夜の月夜かすみたるらむ

(巻二十、四四八九)

この甘南備真人伊香の歌は前掲の家持詠(四四九〇)と同じく、天平宝字元年十二月十八日(立春前日)の宴会の際に制作されたものである。「今夜の月夜霞みたる」の原因として挙げられたのは、明日が立春であるという暦法の知識に基づいた「春を近みか」である。暦法の法則の中に景が位置づけられたのである。そしてこの歌における「月にかかるかすみ」は前掲の人麻呂歌集歌群(一八一二―一八一八)や一八四三、一八四五番歌に見られる「かすみ」とは、やや異質であるとも言える。ここにおいて、香具山、朝妻山、巻向山、春日山といった「かすみ」の発生する場所が取り上げられず、「かすむ」という状態だけに焦点が当てられている。井手至氏の言葉を借りれば、この歌において歌人が求めているのは、もはや従来の「大和全体の季節の転移をいちやく表示する」機能を持つ「かすみ」ではなく、伝来した具注暦の四季区分に対応させた新しい「かすみ」である。四季が暦法によって明確に定められたこの時代、「かすみ」が持つ季節の指針としての機能が弱まり、在来の季節感が暦法に規定された新しい四季観念に従属することになった。太陰太陽暦の四季観が貴族社会に浸透した結



果、四四八九番歌のような理知的な季節詠が誕生したと考えられる。

## おわりに

『萬葉集』において「春の徴としての霞」が成立し、「かすみ」と「立春」とを結ぶ理論的な基盤が整えられた。そしてこの萬葉の「かすみ」を平安の「かすみ」に連接する歌が、次の『古今集』歌である。

題しらず

よみ人しらず

春霞たてるやいづこみよし野の吉野の山に雪は降りつつ

『古今集』巻一・春上、三

一見多雪地帯の吉野山に「かすみ」が見えないと愚痴っているように見えるこの歌だが、『古今集』の配列及び歌意の解説によって、「春の徴としてかすみ」を詠んだその性格が明らかになる。『古今集』における歌の配列から見ると、この歌は、在原元方の年内立春詠（一番歌）と紀貫之の立春詠（二番歌）の後、「二条のきさきの春のはじめの御歌」（四番歌）の前に位置する。『古今集』の四季の部は、撰者達の分類意識による、季節の推移を模した歌群配置が特徴的な点は周知の通りである。そして以下の二点から、四番歌は一、二番歌と同様に、立春を意識した詠作であることが分かる。即ち一番歌にある「年のうちに春はきにけり」と四番歌にある「雪のうちに春はきにけり」とは立春の到来を意味する同型の表現として見られる点、四番歌の「鶯のこほれる涙今やとくらむ」という表現が二番歌の「水のこほれるを春立つ今日の風やとくらむ」と同じく「東風解凍」を踏まえる点である。「東風解凍」は七十二候の冒頭に位置するもので、具注暦においては二十四節気の「立春」と対応している。つまり具注暦において「立春」と「東風解凍」とは必ず同じ日に記されるものである。その点を踏まえて二条後の表現を考えると、その歌は貫之歌と同じく、具注暦における東風解凍と立春との関連性を意識した作品であることが分かる。一、

二、四番歌に立春に対する意識が読み取れるのであれば、季節の歌題を時間の流れに沿った形で類聚する『古今集』の編纂性格から考えて、三番歌も立春と関連する作品として配列されている可能性が高い。次に歌意から検討してみると、「この歌は吉野山の雪景色の中で春を待ち望む心を詠んだもので、霞の立ち、棚引くさまに春を察知する万葉歌とは違う」という意見が高野正美氏に見られるが<sup>3</sup>、雪が降り続ける吉野にはどこにも「かすみ」の姿が見えないという、三番歌の平明な歌意の背後には「春が来るとかすみがつと皆がいうが、そのかすみはどこに立っているのだろう」という歌心があると考えられる。歌人が期待しているのは、まさに「春の徴としてのかすみ」ではないだろうか。「立春になるとかすみ立つ（たなびく）」という季節観に反論するところに、この歌の趣旨がある。前節に述べたように、『万葉集』において既に理知的な「かすみ」詠が成立しているので、その観念を踏まえて、当該歌が制作されたと考えられる。配列、歌意、そしてこの歌を踏まえた立春詠——冒頭で掲げた『拾遺集』巻頭歌——を作った『古今集』撰者である忠岑の意図などから考えると、この読人しらずの歌は、『万葉集』における「春の徴としてのかすみ」を継承した詠として、『古今集』春上の三番目に位置づけられたと考えられる。こうして平安和歌史に登場した「春の徴としてのかすみ」は、本章の冒頭で掲げた『拾遺集』巻頭歌を経て、和歌の立春関連詠作の最もポピュラーの題材の一つになったのである。

## 【注】

<sup>1</sup> 稲岡耕二氏『万葉集の作品と方法』（岩波書店、一九八五）第二章第一節。

<sup>2</sup> 渡瀬昌忠氏『人麻呂歌集非略体歌論上』（渡瀬昌忠著作集<sup>3</sup>、おうふう、二〇〇二）、第二章第七節。

<sup>3</sup> 同右、二七七ページ、二七九～二八〇ページ。

<sup>4</sup> 井手至氏『遊文録・説話民俗篇』（和泉書院、二〇〇四）九九～一〇〇ページ。

- 5 「たなびく」三十五例、「たつ」二十六例、その次に多いのは「ある」の三例。
- 6 注二に同じ、二二三ページ。
- 7 高野正美氏「霞」の表現史」（多田一臣氏編『万葉への文学史・万葉からの文学史』笠間書院、二〇〇一）。
- 8 能田忠亮氏『暦』（至文堂、一九五七）、四〇五ページ。
- 9 『万葉集』における「かすみ」の季節性に関する論文は、井上富蔵氏「霞」考―万葉集用語の研究―（『国文学攷』二三、一九六〇）、城崎陽子氏「万葉の霞」（古典と民俗学の会編集『古典と民俗学論集（桜井満先生追悼）』おうふう、一九九七）などが見られる。
- 10 注二に同じ、第二章第六節。
- 11 内田賢徳氏『万葉の知―成立と以前』（塙書房、一九九二）三八八ページ。
- 12 古代の自然暦の時間感覚に関する考察は、柳田国男氏「民間暦小考」（『柳田国男全集（16）』、筑摩書房、一九九〇）に見られる。
- 13 二元的四季観は、節月（二十四節気）と暦月とによる四季観のことである。
- 14 新井栄蔵氏「万葉集季節観攷―漢語（立春）と和語（ハルタツ）」（『万葉集研究（五）』、塙書房、一九七六）。
- 15 小島憲之氏「漢語の撰取―漢語「立春・立秋」と「春立つ・秋立つ」など―」（『万葉』一三五、一九九〇）。
- 16 注一四に同じ。
- 17 岩下武彦氏「人麻呂歌集と季節表現―「春立つ」をめぐる―」（西條勉編『書くことの文学』笠間書院、二〇〇一）。
- 18 湯浅吉美氏編『日本暦日便覧増補版』（汲古書院、一九九〇）。
- 19 『万葉代匠記』（精撰本）四四八八番歌の注に「十九日、立春ニテ有ケルナルヘシ。下ノ二十三日の哥（四四九二）ヲ合セテ見ルヘシ」とある。
- 20 鄧慶真氏「漢字「霞」の古代日本での受容―『万葉集』と漢籍との比較研究を通して」（『皇学館論叢』三三―二、二〇〇〇）。

<sup>21</sup> 合山究氏『雲烟の国——風土から見た中国文化論』（東方書店、一九九三）。本論文第二部第三章をも参照。

<sup>22</sup> 小島憲之氏「上代に於ける詩と歌——「霞」（カ）と「霞」（かすみ）をめぐる——」（美夫君志会編『万葉学論攷松田好夫先生追悼論文集』、続群書類従完成会、一九九〇）。

<sup>23</sup> 同右。

<sup>24</sup> 合田時江氏編『聖武天皇『雑集』漢字総索引』（清文堂出版、一九九三）、静慈円氏編『性霊集一字索引』（東方出版、一九九一）による。

<sup>25</sup> 中央研究院瀚典全文検索系統 ([hanji.sinica.edu.tw](http://hanji.sinica.edu.tw)) によると、全二十三例のうち、賦の十五例は一番多い。

<sup>26</sup> 小島憲之氏『上代日本文学与中国文学（中）』（塙書房、一九六四）第四章第一節。

<sup>27</sup> 『文淵閣四庫全書電子版』（迪志文化出版）。

<sup>28</sup> 小島憲之氏「暮年三省——「罪微」再考——」（『美夫君志』二六、一九八二）。

<sup>29</sup> 品田悦一氏「萬葉集の卷々」（稲岡耕二氏篇『萬葉集事典』学燈社、一九九九）。

<sup>30</sup> 注四に同じ。

<sup>31</sup> 阿蘇瑞枝氏『萬葉集全注卷十』（有斐閣、一九八九）当該歌注。

<sup>32</sup> 注四に同じ。

<sup>33</sup> 注七に同じ。

#### 〔引用本文〕

『萬葉集』は『萬葉集（全四冊）』小島憲之氏・木下正俊氏・東野治之氏校注・訳（新編日本古典文学全集6～9、小学館、一九九四～一九

九六）、『拾遺集』、『後拾遺集』、『金葉集』二度本、『千載集』、『新古今集』は『新編国歌大観』（古典ライブラリー版）、小島憲之氏校注『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』（日本古典文学大系69、岩波書店、一九六四）、『箋注倭名抄』は野口恒重氏編『箋注倭名類聚抄』（曙社出版部、一九三〇）に、『礼記』は『十三經注疏』（芸文印書館、一九七九）、『三国志』は『三国志』（中華書局、一九五九）、『藝文類聚』は『藝文類聚』（上海古籍出版社、一九八二）、『欒城集』、『浪語集』、『桐江統集』は『文淵閣四庫全書電子版』（迪志文化出版）、『文選』は『文選』（上海古籍出版社、一九八六）、『文苑英華』は『文苑英華』（中華書局、一九八二）によった。なお漢字、仮名については一部を改めた。

### 第三章 古代日本漢文学における「煙霞」の受容

#### はじめに

本章では外示的な意味において「かすみ」に近い「煙霞」という詩語の成立、及びその古代日本漢文学における受容状況について考察する。

古代日本漢文学において、「煙霞」はよく見られる表現の一つである。この詩語「煙霞」を多用する傾向は日本最古の漢詩集『懷風藻』から確認できるが、それがより明確化したのは唐風文化が盛んであった嵯峨天皇の時代である。いわゆる勅選三集の『凌雲集』、『文華秀麗集』、『経国集』における「霞」の表現を整理すると、次の表一になる。

【表一】 勅撰三集の「霞」

用例	数
煙霞	11
煙霞霧	1
江霞	1
霞昭	1
雲霞	1
昇霞	1
早霞	1
拾霞	1
挹霞	1
霞	1
合計	20

この表一から分かるように、当時の日本にける「霞」を含む表現の受容は、ほぼ「煙霞」だけに集中している。では何故日本において「煙霞」は頻繁に使用されたのか。古代日本漢文学に大きな影響を与えたと考えられる『文選』及び『藝文類聚』における「霞」の使用状況を

調べると、次のような結果が見出だせる。

【表一】『藝文類聚』の「霞」 【表二】『文選』の「霞」

用例	数
朝霞	29
丹霞	19
煙霞	14
雲霞	13
輕霞	6
以下略	
合計	197例

用例	数
朝霞	10
雲霞	4
霞	3
青霞	3
丹霞	3
以下略	
合計	47例
煙霞	0

「煙霞」の用例数に関して両者はかなりの差が見られるが、「朝霞」の用例数が最も多いという点においては一致している。しかし表一から分かるように、この「霞」の本義——「赤黄雲」（『篆隸万象名義』）——を表す「朝霞」は、勅選三集において一例もない。『懷風藻』を入れても結果は変わらない。したがって、日本で「煙霞」が多用された理由は、この二つの作品からの受容という観点だけでは説明できないと考えられる。小島憲之氏は、勅撰三集の「煙霞」を解釈する際、しばしば『玉台新詠』に所収の齊王融「巫山高」の「煙霞乍舒卷、蕪芳自断続」を引用するが、『玉台新詠』における「霞」の使用傾向も、『藝文類聚』と『文選』とに類似している。日本において「煙霞」が多用された理由を考える場合、「巫山高」による影響もやはり限定的なものと考えるべきであろう。

しかしここで視点を変えて、六朝及び唐代における、詩語としての「煙霞」の使用頻度を調べると、この問題が直ちに解決へ向う。『先秦漢魏晉南北朝詩』によると、東晋まではゼロであった「煙霞」の用例数が、南北朝に入ると急激に増え、伝統の詩語である「朝霞」の倍以上に達しているのである。そしてその勢いは、唐に入っても衰えず、『全唐詩』を見ると、実に四百例以上の「煙霞」が確認される。「霞」の用例の総数は千六百余りなので、四例に一例は「煙霞」である計算となる。一方、「朝霞」の用例数は三十にも満たないという少なさである。この六朝及び唐代の漢詩に見られる「煙霞」を多用する傾向は、概ね日本のそれと一致していると言える。その点から見ると、個別

の作品における具体的な受容状況は別として、勅撰三集などに見られる「煙霞」を多用する現象は、劉宋以降の漢詩に見られる、「煙霞」の流行という流れを汲むものと見て、まず問題はないだろう。

かすみ、もやとして解釈されることの多い「煙霞」は、小学書に書かれている「霞」の意味から一步離れた語義を持つ。第二節で詳論するが、六朝唐代の文学に見られる「煙霞」は、隱居空間の風物、天上世界の雲気、山水世界的美景を表す表現として使用されている。中国文学に見られる「煙霞」のこういった多彩なイメージが、古代日本漢文学においてどの程度吸収、受容されていたのかは、興味深い問題である。しかし従来の研究は、この問題に対して、必ずしも十分な注意を払ってきたとは言えない。波戸岡旭氏が『懷風藻』に見える煙霞――その六朝及び初唐詩との関連――と題する論文において、「雲」、「霧」、「煙」、「霞」を含む表現を一括して「煙霞」と考えているのはその一例である。確かに外示的な意味において、「雲」、「霧」、「煙」、「霞」は類似しているが、氏があげた「松煙」、「夕霧」では表せない、「煙霞」独自の意味もあるので、形態上の類似から、「煙霞」とそれ以外の雲煙を表す語とを一括して考える氏の捉え方は素直に従えないところがある。一方、「煙霞」とそれ以外の赤いイメージを持つ「霞」とを二分する見方が小島憲之氏に見られるが、その場合、何故赤い「霞」から「煙霞」が生まれたのかについて、なお説明が必要とを感じる。本章は「霞」の表現史という視点から、「煙霞」の中にある重層的なイメージと、成立の背景とを考察する。それを踏まえた上で、詩語「煙霞」の受容史という視点から、時代とともに発展する古代日本漢文学の様相を分析する。

## 第一節 「霞」の表現史

文学表現としての「霞」の始発は古く、『楚辞』『遠遊』まで遡ることができる。中国文学における「霞」、及び「煙霞」の詩語としての意



味は、この作品の中に見られる「朝霞」という語の使用されている文脈、場面と深く関連している。以下、後漢王逸が注した『楚辞章句』を参照しながら、「遠遊」における「朝霞」の性格を考察する。

「遠遊」成立の経緯と内容の概要とを著す題注において、王逸は次のように述べている。

遠遊者、屈原之所<sub>レ</sub>作也。屈原履<sub>二</sub>方直之行<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>容<sub>二</sub>於世<sub>一</sub>。上為<sub>三</sub>讒佞所<sub>二</sub>譖毀<sub>一</sub>、下為<sub>三</sub>俗人所<sub>二</sub>困極<sub>一</sub>。章<sub>二</sub>皇山沢<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>告訴<sub>一</sub>。乃深惟<sub>二</sub>元一<sub>一</sub>、修<sub>二</sub>執恬漠<sub>一</sub>、思欲<sub>レ</sub>濟<sub>レ</sub>世、則意中憤然。文采鋪發、遂叙<sub>二</sub>妙思<sub>一</sub>。託<sub>二</sub>配仙人<sub>一</sub>、与俱遊戯。周<sub>二</sub>歷天地<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>不到<sub>一</sub>。

この題注の大意は次のとおりである。方直の行いを履む屈原は「讒佞」、「俗人」に苦しめられ、世に入れてもらえず、訴えるところなく、山沢に彷徨っていた。そこで彼は万物の本源を深思し、淡泊の心を培ったが、結局濟世の思いが実現できず、深い憤懣を抱いた。その鬱憤が、創作の原動力となり、仙人と共に天地に遊戯する「遠遊」という作品を作るに至った、という。王逸注の言うように、「遠遊」は世を捨てた賢者の昇仙体験を述べる作品である。「朝霞」は、その遊仙の願望が実現したところに登場する。参考のため、本文の後ろに王逸の注（二内）も加える。

軒轅不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>攀援<sub>一</sub>兮、吾將<sub>下</sub>從<sub>二</sub>王喬<sub>一</sub>而娛戲<sub>上</sub>。【上從<sub>二</sub>真人<sub>一</sub>、与戲娛也。】

餐<sub>二</sub>六氣<sub>一</sub>而飲<sub>二</sub>沆瀣<sub>一</sub>兮、【遠棄<sub>二</sub>五穀<sub>一</sub>、吸<sub>二</sub>道滋<sub>一</sub>也。】漱<sub>二</sub>正陽<sub>一</sub>而含<sub>二</sub>朝霞<sub>一</sub>。【餐<sub>二</sub>吞日精<sub>一</sub>、食<sub>二</sub>元符<sub>一</sub>也。『陵陽子明經』言、春食<sub>二</sub>朝霞<sub>一</sub>。朝霞者、日始欲<sub>レ</sub>出赤黃氣也。秋食<sub>二</sub>淪陰<sub>一</sub>。淪陰者、日没以後赤黃氣也。冬飲<sub>二</sub>沆瀣<sub>一</sub>。沆瀣者、北方夜半氣也。夏食<sub>二</sub>正陽<sub>一</sub>。正陽者、南方日中氣也。并<sub>二</sub>天地玄黃之氣<sub>一</sub>、是為<sub>二</sub>六

氣<sub>一</sub>也。】

保<sub>二</sub>神明之清澄<sub>一</sub>兮、【常吞<sub>二</sub>天地之英華<sub>一</sub>也。】精氣入而羸穢除。【納<sub>レ</sub>新吐<sub>レ</sub>故、垢濁清也。】

引用本文の大意は「軒轅皇帝は頼れないので、私は仙人の王子喬に従い、遊びに行く。天地にある六種類の気を服用し、「沆瀣」と「正陽」と「朝霞」とを飲食する。こういった精気を吸うことで、穢れが排除され、精神の清澄が保持できる」というものである。王逸の注によると、「沆瀣」と「正陽」と「朝霞」とはいずれも気の名前である。

このように、「遠遊」において、「朝霞」は、俗世から離れたという思いによつて触発された遊仙の行為の中で登場するものである。確かに辞書的な意味で言えば、「朝霞」は朝焼けである。しかし朝焼けを食べる仙人が実際に存在するはずもなく、ここの「朝霞」は実景から一歩離れた、想像世界における景物であることも確かである。そしてこの「遠遊」と同質の表現が、同じく遊仙の世界を描く前漢司馬相如の「大人賦」(『史記』卷百十七・司馬相如列伝)の中にも確認できる。

呼吸沆瀣兮餐朝霞兮、咀嚙芝英兮噉瓊華。

このように、『文選』、『玉台新詠』などに「朝霞」を多用する現象が見られるのは、この語が本来『楚辞』や司馬相如の賦から来た、言わば由緒正しい出典を持つ表現であるからである。

この二例の「朝霞」が後の中国文学史における「霞」の位置づけに大きな影響を与えたと考えられる。六朝の文献における「霞」の用例を調べると、遊仙と隠逸とのイメージを持つ用例が数多く確認できる。明らかに「遠遊」、「大人賦」の「朝霞」を踏まえた例として、西晋嵇康「琴賦」(『文選』卷十八・音楽下)の「餐沆瀣兮帶朝霞」、眇翩翩兮薄天遊」や、梁沈約「赤松澗詩」(『藝文類聚』卷七十八・仙道)の「渴就華池飲、飢向朝霞食」などがあげられる。その他、「霞」を神仙の服として詠んだ魏曹植「五遊詠」(『藝文類聚』卷七十八・仙道)の「披我丹霞衣、襲我素霓裳」や昇天の手段として詠んだ西晋張華「詠蕭史詩」(『藝文類聚』卷七十八・仙道)の「火粒願排棄、霞霧好登攀」などの例も見られる。張華の例と類似した表現は「遠遊」の「載宮魄」而登霞兮、掩浮雲而上征」が挙げら

れる。このように、六朝文学に、「遠遊」や「大人賦」の「朝霞」に内包される遊仙的なイメージを汲んだ「霞」の用例は、多く見られるのである。

一方、俗世を離れ、隱遁への志向を表す文脈において、「霞」が使用されている例も多い。『南齊書』『高逸列伝』（卷五十四）の中に見られる顧歡の発言、「臣志尽<sub>二</sub>幽深<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>与<sub>二</sub>榮勢<sub>一</sub>、自足<sub>二</sub>雲霞<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>須<sub>二</sub>祿養<sub>一</sub>」がその一例である。これは朝廷の任用を辞退する際の発言で、その大意は「自分の志は俗世と離れた奥深いところにあり、榮華、權勢などに関心を持たず、雲霞の中で自足し、俸祿を必要としない」というものである。ここでの「雲霞」は、隱遁する山林の世界そのものを指す表現と見られる。類似の表現は、北魏李諧「述身賦」〔『魏書』卷六十五・李諧列伝〕の「雖<sub>三</sub>邇侯<sub>二</sub>塵滓<sub>一</sub>、而賞<sub>二</sub>許雲霞<sub>一</sub>、栖<sub>二</sub>閑虚<sub>一</sub>以築<sub>レ</sub>館、背<sub>二</sub>城闕<sub>一</sub>而為<sub>レ</sub>家」や梁陶弘景「又答<sub>二</sub>趙英才書<sub>一</sub>」〔『藝文類聚』卷三十七・隱逸下〕の「巖下鄙人、守<sub>二</sub>一介之志<sub>一</sub>、非<sub>二</sub>敢蔑<sub>レ</sub>榮嗤<sub>レ</sub>俗、自致<sub>二</sub>雲霞<sub>一</sub>、蓋任<sub>二</sub>性靈<sub>一</sub>而直往、保<sub>二</sub>無用<sub>一</sub>以得<sub>レ</sub>閑」などがあげられる。こういった隱逸趣向を内包する「霞」が六朝文学に多く見られることも、その濫觴である「朝霞」が「遠遊」において、俗を捨てた詩人が服用するものとして描かれていることと関連していると考えられる。

そして駢文の濫觴とも言うべき『楚辭』及び大賦の開拓者である司馬相如の作品において使われたため、「霞」はのちの文人達に文学性の高い表現として認識されるようになったのである。その意味で、辰巳正明氏が下野虫麻呂「秋日於<sub>二</sub>長王宅<sub>一</sub>宴<sub>二</sub>新羅客<sub>一</sub>」〔『懷風藻』、六五〕の序文に見られる「煙霞」を「美しい煙や霞」（後掲）として解釈することは正鵠を射ていると言える。六朝の用例を調べると、「霞」が美しい人や物の喩えとして使用される例が確認される。数例をあげると、宓妃の美しさを描く魏曹植「洛神賦」〔『文選』卷十九・情〕の「遠而望<sub>レ</sub>之、皎若<sub>三</sub>太陽昇<sub>二</sub>朝霞<sub>一</sub>。迫而察<sub>レ</sub>之、灼若<sub>三</sub>芙蕖出<sub>二</sub>緑波<sub>一</sub>」や、景福殿の壮麗さを描く魏何晏「景福殿賦」〔『文選』卷十一・宮殿〕の「遠而望<sub>レ</sub>之、若<sub>下</sub>摘<sub>二</sub>朱霞<sub>一</sub>而耀<sub>中</sub>天文<sub>上</sub>。迫而察<sub>レ</sub>之、若<sub>下</sub>仰<sub>二</sub>崇山<sub>一</sub>而戴<sub>中</sub>垂雲<sub>上</sub>」や、言論の素晴らしさを表す西晋陸機「擬<sub>二</sub>今日良

宴會」(『文選』卷三十・雜擬上)の「高談一何綺、蔚若朝霞爛」などがそれである。もちろん、美しい自然の風景を描く対句の中でも、「霞」は登場する。魏曹丕「芙蓉池作」(『文選』卷二十一・遊覽)の「丹霞夾明月、華星出雲間」や齊謝朓「晚登三山還望京邑」(『文選』卷二十七・行旅下)の「余霞散成綺、澄江靜如練」など、枚挙にいとまがない。

以上で見てきたように、六朝における「霞」は、単なる「赤い雲気」という自然現象ではなく、遊仙隱逸の精神を内包する、高い文学性を有する用語として使用されていることが分かる。文学表現としての「霞」が持っているこれらのイメージが、後に創出される表現である「煙霞」に継承されていくのである。

## 第二節 詩語「煙霞」の成立

「煙霞」は、六朝における山水文学の隆盛を背景に誕生した詩語である。その詩語の生まれる前提には、山水世界を隱逸や遊仙志向の、実践や体験の場として捉える、当時の文人達の考え方がある。山水文学隆盛を支える遊仙隱逸思想の影響は、既に小尾郊一氏によって指摘されている。

かかる山水詩の出現は、山林に隱逸したり、山水に散懷したりした結果できたもので、当時の隱逸思想、あるいは老莊思想、あるいは神仙思想、あるいは快樂思想の流行の結果の所産でもある。

山水世界が隱逸思想、老莊思想、神仙思想、快樂思想と結ばれているからこそ、古くから遊仙隱逸のイメージを有する「霞」が山水世界の雲煙を表す文字として選ばれたのである。そしてその場合、「霞」が持つ山水世界の雲煙と異なる「赤い」イメージは、さほど大きな阻害にはならなかったとも考えられる。赤くない「霞」の用例は、既に六朝前期の東晋に見出し得る。

撫<sub>二</sub>淩波<sub>一</sub>而鳧躍、吸<sub>二</sub>翠霞<sub>一</sub>而夭矯。

(東晋郭璞「江賦」『文選』卷十二・江海)

郭璞の例は仙人達が、水面の上で遊戯し、みどりの霞を吸い、鳧のように飛び上がる情景を描いたものである。注目したいのは、ここの「翠霞」が「遠遊」や「大人賦」において詠まれた「朝霞」と同じく、仙人たちの食べ物として描かれていることである。色こそ違えど、「遠遊」や「大人賦」などに見られる「含<sub>二</sub>朝霞<sub>一</sub>」、「餐<sub>二</sub>朝霞<sub>一</sub>」の仙人のイメージを理解しているのであれば、ここに描かれている「吸<sub>二</sub>翠霞<sub>一</sub>」の仙人についても容易に理解できるはずである。これと類似する例は、隠者として名高い竹林七賢の一人である嵇康が、青い霞のようなすぐれた思想を抱きながら、無念の死へ赴いたことを描く梁江淹「恨賦」の「鬱<sub>二</sub>青霞之奇意<sub>一</sub>、入<sub>二</sub>修夜之不<sub>レ</sub>暘<sub>一</sub>」がある。ここの「鬱」は体の中でこもるという意味で、その背後に「青霞」を摂取する隠者嵇康像があることは想像に難くない。これもやはり「遠遊」の「餐<sub>二</sub>朝霞<sub>一</sub>」に遡れる例である。

文学作品の中で使用されていることばが、その本義から見てずれている例は、和歌の中にも存在する。

桜の花のもとにて、年の老いぬることを嘆きてよめる

紀友則

色も香もおなじ昔にさくらめど年ふる人ぞあらたまりける

(『古今集』巻一・春上、五七)

『古今集』に唯一の桜の香りを詠んだ歌である。周知のように、桜は香りの非常に弱い花で、梅と違って香る花として詠まれることは稀である。ここに桜の香りが詠まれたのは、『古今餘材抄』を始めとする諸注釈の指摘のとおり、初唐劉希夷「代悲白頭翁」の「年々歳々花相似、歳々年々人不<sub>レ</sub>同」による影響で、「自然の不変と人間の変移との対比を主題」<sup>60</sup>に創作した結果である。劉希夷詩を念頭に置いてこの歌を

読めば、香る花としての「桜」が持ちだされた理由も理解できよう。和歌における「香る桜」と、中国及び日本の漢文学における「赤くない霞」とは、ことばの本義で問いただと、どれも一見矛盾するような表現だが、いずれも先蹤例の発想を受けて、そのことばの意味を文学空間の中で再構築したものと見られる。

実作における字義の改変は、六朝の山水文学の中からほかに類例が見出される。「霞」と同じく雲煙美を表すことばとして使用されている「煙」と「嵐」とがそれである。これらについて既に合山究氏による指摘がある<sup>25</sup>。氏は六朝における雲煙美の発見を「最も象徴的に示すものとして」、「本来「火気」の意であった「煙(烟)」の字が、このころから「もや・かすみ」の意でも多く用いられるようになった」<sup>26</sup>となったことと、「もともと「山の嵐」の意であったと見られる「嵐」の字が、同じく「もや・かすみ」の意で用いられるようになった」<sup>27</sup>ことを挙げている<sup>28</sup>。このように、実際中国文学の中において発生する字義の変容は、小学書に書かれている意味より遙かに多彩多様である。

「霞」の場合、明らかに赤くない「青霞」、「翠霞」、「白霞」、「蒼霞」、「碧霞」などの例もあれば、「春霞」、「川霞」、「山霞」のような色が容易に判断できない例もあると合山氏は指摘する<sup>29</sup>。このように、中国文学に見られる「霞」の色としての特徴は、必ずしも小学書に規定されているほど厳密なものではなかった。「煙霞」に関しても、一般的に白いイメージを持っているのは、「煙」も「霞」も、山水世界の雲煙美を表すことばとしてよく使用されていることと、「煙霞」もやはりそういった場面において屢々使用されていることに原因があると考えられる。とはいえ、「雄筆壮詞、煙霞照灼」(初唐王勃「秋晚入洛於畢公宅別道王宴序」)といった例があるように、一概に白い雲気とは言えないところもある。しかし白っぽい水煙を表す「煙」と結びつくことによってできた「煙霞」が持つ詩語としての汎用性は、時間的限定を持つ「朝霞」、「晨霞」、色彩的限定を持つ「丹霞」、「青霞」、場所的限定を持つ「山霞」、「松霞」に比して、優れていることも事実である。天上の雲気、地上の水煙、場合によっては隠逸の志向そのものをも表せる「煙霞」だからこそ、六朝唐代の漢詩文に多用された

なのである。実際の用例から、その性格を見てみよう。

まず注目するのは、遊仙隱逸の性格を持つ「煙霞」である。前述のように、「霞」が山水世界の雲煙美を表す詩語として選ばれたのは、「遠遊」の「朝霞」に由来する、「霞」の遊仙、隱逸のイメージが、山水世界を神仙思想、隱逸思想と結ぶ創作側の志向性と一致したことが要因だと考えられる。山水世界に隱逸、遊仙体験を求める六朝の文人達にとって、「霞」の持つ色の特徴よりも、言志的な要素を多く含むその遊仙、隱逸のイメージの方が、魅力的であったのであろう。水煙に包まれる山水世界を隱逸思想、老莊思想、神仙思想、快樂思想と結びつけるようとする六朝以降の文人達にとって、「霞」に内包される遊仙、隱逸的なイメージを全面的に継承した「煙霞」は、実にうってつけの詩語である。六朝においてこの種の「煙霞」の用例はもつとも多い。部類が明確な『藝文類聚』から例をあげると、

先生浩浩、唯神<sub>レ</sub>其道<sub>一</sub>。泉石依<sub>レ</sub>情、煙霞入<sub>レ</sub>抱

（齊孔稚珪「褚先生百玉碑」『藝文類聚』卷三十七・隱逸）

飄飄入<sub>二</sub>倒景<sub>一</sub>、出沒上<sub>二</sub>煙霞<sub>一</sub>

（北周庾信「道士步虛詞」『藝文類聚』卷七十八・仙道）

が典型的なものである。隱者褚伯玉を賛える孔稚珪の碑文は、「泉石」と「煙霞」とを隱者の生活と密接な関連性を有する景物として描いている。一方、道士が昇天する場面を描く庾信の詩は、天上にある神仙境を表す表現として「煙霞」を使用している。この二例は、「煙霞」に内包される遊仙隱逸的な性格を読み取りやすい例だが、それ以外にも、一見景色描写のように見える「煙霞」が、前後の文脈からして神仙、あるいは隱遁のイメージを内包する表現であると判断できる例は多く見られる。日本において有名な初唐張文成『遊仙窟』冒頭の「煙霞子細、泉石分明、実天上之靈奇、乃人間之妙絶」はその一例である。この一文だけでは、旅行中の風景に対する描写のようにも見受けられる

が、実は主人公のこれからの遊仙体験を暗示する役割を担うものである。その「煙霞」は神仙世界の景物というイメージを含む表現と見られる。時代が下ると、この種の性格を観念化した新しい詩語「煙霞志」、「煙霞客」、「煙霞侶」が次々と創出され、中唐白居易「重題」（『白氏文集』卷十六、九九六／卷十六、九七〇）の「早年薄有<sub>二</sub>煙霞志<sub>一</sub>、歳晚深諳<sub>二</sub>世俗情<sub>一</sub>」はその一例である。

この遊仙隱逸の「煙霞」と深く関連しているのは、仏教の世界と関わる「煙霞」である。もとより山水世界に修行の場所を設ける点において、道教と仏教とは相通じるものがある。また世俗から離れる志向性に関しても、両者は類似していると言える。そして仏も神仙も、超越的な「神」として認識されている存在である。以上の共通点から、道教の「煙霞」を仏教的世界に援用する可能性を、六朝の文人達が見出したのである。この種の「煙霞」は南朝以降における仏教の流行を背景に誕生したもので、例として、

煙霞時出沒、神仙乍來往。

（梁王台卿「和下望<sub>二</sub>同泰寺浮図<sub>一</sub>詩」『藝文類聚』卷七十六・内典）

近<sub>二</sub>于華岳<sub>一</sub>創<sub>二</sub>僧宇<sub>一</sub>。此山蘊<sub>二</sub>蓄奇秘<sub>一</sub>、控<sub>二</sub>接烟霞<sub>一</sub>。

（初唐褚亮「与<sub>二</sub>暹律師等<sub>一</sub>書」『広弘明集』卷二十八上）

などが挙げられる。仏教関係の作品を収めた『藝文類聚』内典部の王台卿の詩は、同泰寺の仏塔を見た時の感想を述べるものである。本来仏教の表現を使うべきところだが、実際使用されているのは、「神仙」と「煙霞」とである。これは仏教の神秘性、神聖性を道教の固有表現で表す例である。次の例は『広弘明集』に収録されている書状である。作者褚亮が、華岳の近くに寺院を建造する理由として、「煙霞」の存在を挙げている。「煙霞」を俗世と離れた修行の場所にある景物とする考えは、本来道教的なものである。例として道観の様子を描く梁元帝「南岳衡山九真館碑」の「簫鼓騰空、煙霞相接、星辰奪<sub>レ</sub>采、燈燭非<sub>レ</sub>明」（『藝文類聚』卷七十八・仙道）が挙げられる。その「煙霞」は、



道観である九真館周辺にある、神秘性を持つ景物として描かれている。楮亮の書状においてこの種の「煙霞」が注目されたのは、その性格が仏教的な視点から見た場合でも、重要な意味を持つためと考えられる。このように、六朝において、道教的な性格が強い「煙霞」が、仏教の神秘性、神聖性を表す場合にも、使用されているのである。

一方、前述の遊仙隱逸、あるいは仏教の性格がそれほど鮮明ではない「煙霞」も存在する。この種の「煙霞」は、「霞」の高い文学性を継承し、山水世界の雲煙美を賞美する際によく使用されている。梁劉孝綽「侍宴集賢堂」二應令詩一『藝文類聚』卷三十九・燕会の「壺人告二漏晚一、煙霞起將レ夕」や、隋柳顧言「奉和晚日楊子江」二應教一『文苑英華』卷百七十九の「千里煙霞色、四望江山春」や、唐太宗皇帝「帝京篇」（其の五）の「煙霞交隱映、花鳥自參差」などがその例である。劉孝綽詩や柳顧言詩の詩題が示すように、この種の「煙霞」は、應令、奉和のような公的な性格を持つ作品の中でよく登場する。そういった「煙霞」には、儒家の仁智山水の思想を反映したものが多い。太宗の「帝京篇」はその一例である。

ここまで、中国における「霞」と「煙霞」との成立及び表現の歴史を概観した。この多くの作品の累積によって形成された「煙霞」の詩語としての性格が、伝来した漢籍の学習や、漢詩文の習作とともに、日本の漢詩人達に吸収、理解されていたと考えられる。ここで重要なのは、奈良及び平安時代の日本漢詩文の「煙霞」の用例の中に、「朝焼け」や「夕焼け」の意味で使用されているものが存在しないことである。古代日本における「煙霞」に対する理解は、小学書本位ではなく、用例の解説に基づいて行われていることは、これによって判明する。そして実際の日本漢詩文における「煙霞」の作例を分析すると、それに対する理解は、時代とともに展開していることも明らかになるものと考ええる。

### 第三節 『懷風藻』における「煙霞」

日本漢詩文における詩語「煙霞」の最古の用例は『懷風藻』にある。『懷風藻』における「煙霞」は、初唐四傑の一人である王勃の別集『王子安集』から直接借用する性格が認められる。王勃の別集は奈良時代に役人の手習いとして利用されていたことが、東野治之氏の研究によって明らかにされている<sup>15)</sup>。『日本国見在書目録』に見られるこの別集は、日本の漢詩人が詩語「煙霞」を撰取する際の、重要な文献である。完本は残っていないが、『王子安集』の現存本文によると、合計三十二例の「煙霞」が見られる。これは現存唐代別集の中で、「煙霞」の用例数をもっとも多いものである。『白氏文集』のように分量が『王子安集』を超える別集がいくつも現存する中、『王子安集』における「煙霞」を多用する傾向は極めて特徴的であり、『懷風藻』時代の詩人達が『王子安集』を介して「煙霞」を撰取、受容したことも頷けるのである。

しかし、その借用は、元となる文献の意味を十分に吟味せず、語句の継ぎ接ぎに留まる問題点が存在する。下毛野虫麻呂「五言秋日於長王宅宴新羅客」一首、并序、賦得「前字」(『懷風藻』、六五)の序文に見られる、「加以物色相召、烟霞有「奔命之場」、山水助「仁」、風月無「息肩之地」」がその例である。柿村重松氏が指摘するとおり、これは初唐楊炯「王子安集序」、つまり王勃の別集の序文に見られる対句「動「揺文律」、宮商有「奔命之勞」。沃「蕩詞源」、河海無「息肩之地」」を模倣したものである<sup>16)</sup>。またこの虫麻呂の四句は、王勃の作品から多くの影響を受けているとの指摘が小島憲之氏に見られる<sup>17)</sup>。全体として、王勃の別集に対する模倣の痕跡が明瞭に残された例と言える。虫麻呂は、長屋王宅の文雅な性格を、「煙霞」や「風月」がそこに集うという描写で詠出しようとしたが、山水世界の美しい雲気である「煙霞」を、「天下莫「不」奔「命於仁義」」(『莊子』駢拇)の「奔命」(忙しくかけまくる、東奔西走)と結びつけるにはやはり違和感が残る。対句において「風月」について、「無「息肩之地」」(休むいとまもない)とするのも同じである。もとより王勃の別集に見られるほとんどの「煙

霞」が隠逸の志向を内包するものであるが、虫麻呂の当該例にはこのような内包性を受容した痕跡はない。ここで「煙霞」が持ちだされているのは、先行例の対句を利用し、その用語の美景の表象としての側面のみに注目して対句を組み立てた結果と考えられる。

それに対して、藤原万里「五言暮春於弟園池置酒一首并序」(『懷風藻』九四)序文に見られる「宇宙荒茫、烟霞蕩而満目。園池照灼、桃李咲而成蹊」は「煙霞」の詩語としての意味を念頭において制作した例と言える。これも王勃の別集から多くの影響を受けている例で、「宇宙」、「照灼」、「桃李」と「煙霞」との組み合わせは、王勃の、

雖<sup>三</sup>形骸真性、得<sup>二</sup>礼樂於身中<sup>一</sup>、

而<sup>二</sup>宇宙神交、卷<sup>二</sup>煙霞於物表<sup>一</sup>。

(卷四「山亭思友人」序)

玄談清論、泉石縱橫。雄筆壯詞、烟霞照灼。

(卷七「秋晚入洛於畢公宅別道王宴序」)

桃李春風、芙蓉秋水。烟霞四面、関山千里。

(卷十五「梓州鄭県兜率寺浮図碑」)

などに見られる。竹林七賢の嵇康、劉伶を賛える藤原万里の詩序の中で登場する、「満目」の「煙霞」は、王勃が好んで詠んでいる隠逸世界の「煙霞」の面影を感じる。「煙霞」の内包性を理解して利用した例である。

また大伴旅人「初春侍宴」(四四)の「梅雪乱残岸」、煙霞接早春」が王勃「郊園即事」(『王子安集』卷三)の「煙霞春旦賞、松竹故年心」から影響を受けたという意見も見られる。ただ春の煙霞を詠む例は、王勃以外にもよく見られるので、この作品に認められる王勃の

影響は、前掲の二例ほど鮮明ではないことも確かである。

『懷風藻』に見られるもう一例の「煙霞」は、それを酒に見立てる犬上王「遊<sub>二</sub>覽山水<sub>一</sub>」の「雲疊酌<sub>二</sub>烟霞<sub>一</sub>、花藻誦<sub>二</sub>英俊<sub>一</sub>」である。この例もやはり下毛野虫麻呂の例と類似した問題点がある。確かに「霞」を仙人の食べ物とする例は『楚辞』や司馬相如の賦に見られる「朝霞」を服用するといった先例が見られるが、特に酒を表す時によく使用されている表現は、『論衡』の「仙人輒飲<sub>三</sub>我以<sub>二</sub>流霞一杯<sub>一</sub>、毎<sub>レ</sub>飲<sub>二</sub>一杯<sub>一</sub>、数月不<sub>レ</sub>飢」(卷七・道虚第二十四)に淵源を持つと考えられる「流霞」である。

愁人坐<sub>二</sub>狹邪<sub>一</sub>、喜得送<sub>二</sub>流霞<sub>一</sub>。

(北周庾信「衛王贈<sub>二</sub>桑落酒<sub>一</sub>奉答」『庾子山集』卷四)

賦<sub>レ</sub>詩開<sub>二</sub>広宴<sub>一</sub>、賜<sub>レ</sub>酒酌<sub>二</sub>流霞<sub>一</sub>。

(初唐韋述「奉<sub>下</sub>和聖制送<sub>三</sub>張説上<sub>二</sub>集賢學士<sub>一</sub>賜宴<sub>上</sub>、賦得<sub>二</sub>華字<sub>一</sub>」)

などがその例である。『懷風藻』にも、箭集宿禰虫麻呂「侍讌」(八一)に「流霞酒処泛、薰吹曲中輕」と見られる。六朝唐代の作例の中に、「煙霞」を酒の比喩として使うものは容易に見出せない。もちろん、そういった用例がないからといって、その使い方が誤りとはいえないが、先例が見つかりにくい用法を、漢文学の萌芽期の日本漢詩人が試みたことを評価するには、出典を重要視する漢文学の一般的な考え方からいって、慎重になる必要がある。犬上王の作例は、あるいは『論衡』に由来する「流霞」の語性を十分に理解せず、外示的な意味においてそれに近い「煙霞」も酒を表す時には使える表現だと考えて制作した結果かもしれない。

「煙霞」の内包性を十分に踏まえていない用例の存在は、古代日本漢文学の萌芽期に編まれた『懷風藻』の初学的性格を如実に反映している。しかし奈良朝の日本漢詩人達が、六朝初唐における詩語「煙霞」の流行を鋭敏に察知し、そして積極的に創作の中で用いていること

は、注目すべき点であろう。

#### 第四節 勅撰三集における「煙霞」

「煙霞」の詩語としての意味が日本漢詩文において広く摂取、受容されたのは、勅撰三集の時代である。嵯峨朝の漢文学隆盛の気運に乗じて成立したこの三つの勅撰漢詩文集には、「煙霞」に内包される儒、道、釈のイメージを正しく汲みとった作品が複数確認される。

まず注目したのは、遊仙隱逸の志向を内包する「煙霞」である。この種の「煙霞」は滋野善永「同前（奉<sub>レ</sub>和<sub>二</sub>太上天皇青山歌<sub>一</sub>）」（『経国集』、一二三）の、

春光寂寂暮山家、独<sub>レ</sub>藜杖<sub>二</sub>煙霞

に見られる。この詩は山林に隱逸する楽しみを詠んだ嵯峨天皇「青山歌」（『経国集』、二〇九）に和したものである。善永詩の中にある「雲中静<sub>レ</sub>逸人居、棟裏雲<sub>レ</sub>兮時卷舒」、「追<sub>二</sub>訪赤松<sub>一</sub>兮遺跡、長年隱<sub>レ</sub>几兮閑余」などといった隱遁、神仙の表現から見て（「逸人」は隱者のこと）、「赤松」は『楚辞』「遠遊」においても登場する神仙の名前である）、ここの「煙霞」は遊仙隱逸のイメージを汲んだ表現であることは明白である。この詩の末聯の欠落文字を考えるため、小島憲之氏は盛唐王維「菩提寺禁、口号又示<sub>二</sub>裴迪<sub>一</sub>」の「悠然策<sub>二</sub>藜杖<sub>一</sub>、帰向<sub>二</sub>桃花源<sub>一</sub>」を参考として挙げている<sup>20</sup>。詩の意趣から見ても、両者の共通点は多いと言える。善永の言う「煙霞」は、陶淵明「桃花源記」を意識した王維詩の「桃花源」に相当すると見てまず大過はない。「煙霞」を含む末聯は、隱者が一人隱逸の世界へと向う場面を描いたものと考えられる。山林世界を「煙霞」で表す例は、中唐皇甫冉「送<sub>二</sub>李山人還<sub>一</sub>」の「從來無<sub>二</sub>檢束<sub>一</sub>、只欲<sub>レ</sub>老<sub>二</sub>煙霞<sub>一</sub>」や中唐王仲舒「寄<sub>二</sub>李十員外<sub>一</sub>」の「惟愁又入<sub>二</sub>煙霞<sub>一</sub>去、知在<sub>二</sub>盧峰第幾重<sub>一</sub>」などが挙げられる。また「藜」で作った杖と「煙霞」とが共に詠まれた例として、中唐錢起「山

園秋晚寄「杜黄裳少府」の、「泉石思携手、烟霞不閉関。杖藜仍把菊、对卷也看山」が見られる。平安漢詩と類似した表現が唐詩において確認されるということは、これらの表現が日本において正確に使用されていることを示す。善永は遊仙隱逸の世界を表す「煙霞」の先行例を踏まえて、当該詩を制作したと考えられる。

長生のための煉丹、昇仙のための修行、あるいは精神を養うための遁世隱居、これら道教と深く関わる行為に対して、日本の天皇や貴族は必ずしも中国の文人ほど熱心ではなかった。中国において数多くの用例が見られる道教的な「煙霞」が、勅撰三集において、帝王という立場から、隱逸生活に対して一定の興味を示した嵯峨天皇の詠に対する奉和作の中にのみ見られるのは、このような道教に対する受容の姿勢と関係していると考えられる。それに対して、勅撰三集の時代において、複数の用例が確認されるのは、仏教に関わる文脈の中で詠まれた「煙霞」である。

松栢料知甚静黙、烟霞不<sub>レ</sub>解幾年飡。

（嵯峨天皇「贈<sub>レ</sub>綿寄<sub>二</sub>空法師<sub>一</sub>」『凌雲集』、二四）

法堂寂寂煙霞外、禪室寥寥松竹間。

（藤原冬嗣「扈<sub>二</sub>從梵釈寺<sub>一</sub>応製」『文華秀麗集』、七五）

道性本来塵事遐、独将<sub>二</sub>衣鉢<sub>一</sub>向<sub>二</sub>煙霞<sub>一</sub>。

（嵯峨天皇「見<sub>二</sub>老僧歸<sub>レ</sub>山<sub>一</sub>」『経国集』、三〇）

不<sub>レ</sub>知別後相思伴、何处煙霞訪<sub>二</sub>姓名<sub>一</sub>。

（惟良春道「送<sub>二</sub>伴秀才入道<sub>一</sub>」『経国集』、四五）

などがそれである。

「贈<sub>レ</sub>綿寄<sub>二</sub>空法師<sub>一</sub>」の一聯に関して、小島憲之氏は「空海が松栢煙霞などの自然の中にあつて、幾年も静かに修行してゐることを松栢煙霞に託して述べた表現」と解釈している<sup>30</sup>。更に一步踏み込んで読み解くと、ここで擬人化された「松栢」と「煙霞」とは、山林世界に修行する空海の身近な存在として描かれている。「煙霞」を山林にある修行場所の景物とする例は、六朝唐代において広く見られる。六朝の例は第二節に挙げたので、唐代の例をあげると、中唐朱放「題<sub>二</sub>竹林寺<sub>一</sub>」の「歲月人間促、烟霞此地多」や朝鮮僧侶金地藏「送<sub>二</sub>弟子下山<sub>一</sub>」の「好去不<sub>レ</sub>須<sub>二</sub>頻下<sub>レ</sub>涙、老僧相伴有<sub>二</sub>煙霞<sub>一</sub>」などが分かりやすい例である。嵯峨天皇の一聯は、「煙霞」に内包される、仏教的なイメージを活かし、空海のいる、松柏と煙霞とに囲まれた神秘的な修行世界を、見事に詠出したのである。

「扈<sub>二</sub>從梵釈寺<sub>一</sub>応製」の「煙霞」は、俗世との境界線という意味を持つ表現と見られる。「煙霞外」は、唐詩に数例が見られる表現である。またその上句と類似する表現は中唐崔峒「題<sub>二</sub>桐廬李明府官舎<sub>一</sub>」の「訟堂寂寂對<sub>二</sub>烟霞<sub>一</sub>」、五柳門前聚<sub>二</sub>曉鴉<sub>一</sub>」や、中唐戴叔倫「贈<sub>二</sub>韓道士<sub>一</sub>」の「桃源寂寂煙霞閑、天路悠悠星漢斜」が見られる。唐代の用例と類似した表現を持つ点から、冬嗣詩の表現の正確さが窺える。

「見<sub>二</sub>老僧歸<sub>レ</sub>山<sub>一</sub>」と「送<sub>二</sub>伴秀才入道<sub>一</sub>」における「煙霞」は、滋野善永の例と同じく、山林世界そのものを指す表現と考えられる。ただ善永の場合、その山林世界が神仙的、隱者的であるのに対して、この二例の「煙霞」は、仏教的な修行世界という意味を有しているものである。

このように、第二節で述べた、六朝、唐代文学に見られる、「煙霞」の道教的イメージを仏教的文脈の中で生かす手法は、勅撰三集の中にも確認できるのである。

次に注目したいのは、山水を賞美する立場で描かれている「煙霞」である。

記得煙霞春興足、況乎河畔草青青。

煙霞処処飛、花鳥番番遇。

（嵯峨天皇「江亭曉興」『凌雲集』、一二）

（賀陽豐年「三月三日侍宴応詔」『凌雲集』、三七）

蜂蝶紛飛寧換<sub>レ</sub>葵、煙霞澹蕩不<sub>レ</sub>復<sub>レ</sub>空。

（都腹赤「同前」〔雜言奉<sub>二</sub>和清涼殿画壁山水歌<sub>一</sub>〕『經国集』、二〇七）

などがそれである。この種の「煙霞」は、遊仙隱逸や仏教的な色合いが薄く、その背景には、儒家的仁智山水の思想があると考えられる。為政者の立場から春の「煙霞」を賞美する例は、前掲太宗の「帝京篇」があげられる。臣下側の、君主賛美及び太平謳歌の意味合いが込められた「煙霞」の用例は、初唐宋之間「龍門応詔」の「鳥来花落紛無<sub>レ</sub>已、称<sub>レ</sub>觴献<sub>レ</sub>寿煙霞裏」があげれる。勅撰三集に見られる仁智山水の色合いを有する「煙霞」は、こういった初唐の宮廷文学の先行例を念頭において制作されたものと見られる。春の美景である「煙霞」を賞美する例は、ほかにも淳和天皇「奉<sub>二</sub>和江亭晚興<sub>一</sub>、呈<sub>二</sub>左神策清藤將軍<sub>一</sub>」〔『凌雲集』、二八〕や、滋野貞主「觀<sub>二</sub>闢百草<sub>一</sub>簡<sub>二</sub>明執<sub>一</sub>」〔『文華秀麗集』、一二九〕に見られる。

それらの春の「煙霞」と異なるのは、嵯峨天皇「和<sub>下</sub>左衛督朝臣嘉通秋夜寓<sub>二</sub>直周廬<sub>一</sub>、聴<sub>二</sub>早雁<sub>一</sub>之作<sub>上</sub>」〔『凌雲集』、一六〕の「朝搏<sub>二</sub>渤澥<sub>一</sub>事<sub>二</sub>南度<sub>一</sub>、夕宿<sub>二</sub>煙霞<sub>一</sub>耐<sub>二</sub>朔風<sub>一</sub>」である。詩題が示すように、これは秋の「煙霞」を詠む例である。その「煙霞」は、「朔風」に耐えながら野宿をする場面に登場するもので、景物としては前掲の春の美景である「煙霞」とは明らかに異なる。しかしこの種の「煙霞」も唐



代に先例が見られるものである。例として、蕭瑟とした秋の野原に覆う雲気を「煙霞」で表す、初唐李百藥「登三葉峴故城」謁沈諸梁廟二の「煙霞共掩映、林野俱蕭瑟」が挙げられる。したがって嵯峨天皇のこの例も、中国における秋の「煙霞」の先例を踏まえたものと見られる。

このように、勅撰三集に見られる「煙霞」の使用は、その中に内包される儒、道、釈のイメージを理解した上でものと見られる。「煙霞」に対する理解が、「煙霞」と「奔命」とを結びつける下毛野虫麻呂の例や、「煙霞」を酒の比喻として使用する犬上王の例に比べ、一段と深まったと言える。また王勃の影響を多く受けた『懷風藻』の「煙霞」と異なり、勅撰三集の「煙霞」は六朝から中唐までの、様々な作品からその詩語としてのイメージを摂取したものとみられる。この受容の特徴は、「平安初頭詩に於ては、唐詩のうち、初唐・盛唐より更に中唐の詩の一部にも及んで利用借用したのである」<sup>30</sup>とする小島憲之氏の指摘とも一致している。伝来した様々な漢籍を積極に受容し、そこから学んだ表現を意欲的に漢詩文の創作の中に取り組んだ結果、多彩なイメージを持つ「煙霞」が使用されるようになったのである。このことは、奈良朝より一歩進んだ嵯峨朝漢文学の制作水準を示していると同時に、当時の日本における広範な中国文学受容の様相をも表していると考えられる。

## おわりに

小島憲之氏が言うように、上代中古初頭の日本漢詩文は、中国の表現を借用利用する傾向があり、その受容の形は「舶載将来書の語句の「綴り合わせ」が多い」<sup>31</sup>。第三節であげた下毛野虫麻呂の詩序はその典型的な例である。しかし日本漢文学の萌芽期において、いわゆる和臭的な表現を避け、中国文学と同等の漢文水準の漢詩文を作るためには、こういった綴り合わせの方法は最も無難なものであるとも言え

る。漢籍にある先蹤例を踏まえて漢詩文を作することは、日本が唐、あるいは渤海、新羅と、文明度の近い層面に位置する文明国家であることを顕示するための有効な手段であり、と同時に、唐土憧憬を背景とする日本宮廷の漢文学の空間の構築においても、必要不可欠な方法だと考えられる。当時の日本の漢詩人達にとって、漢籍の表現を借用利用して、日本の風物や人事を中国風に詠出することに意味があるので、その借用利用が、摂取した中国の詩文に左右されてしまうことも、当然の結果と言える。萌芽期の古代日本漢文学に見られるこういった初学的な性格を一概に否定する考え方は、必ずしも的を射たものではない。もとより、典拠を必須とする中国文学も、先例のある表現を借用利用して文章を構成する一面を持っている。第一節であげた曹植「洛神賦」と何晏「景福殿賦」とに見られる「遠而望之、（…）若

迫（近）而察之、（…）若…」という表現パターンがその例である。このパターンを使用した対句は多く、数例をあげると、後漢朱公叔「鬱金賦」（『藝文類聚』卷七十三・鬱金）の「遠而望之、絜若三羅星出雲垂」。近而觀之、曄若三丹桂曜湘涯」。西晋嵇康琴賦（『藝文類聚』卷四十四・琴）「遠而聽之、若三鸞鳳和鳴、戲雲中。迫而察之、若三衆葩敷榮、曜春風」。西晋夏侯湛「宜男花賦」（『藝文類聚』卷八十一・鹿葱）の「遠而望之、灼若三丹霞照青天。近而視之、煒若三芙蓉鑒淥泉」などがそれである。また有名な例として魏の武帝曹操の代表作「短歌行」に、『毛詩』鄭風「子衿」の句「青青子衿、悠悠我心」や小雅「鹿鳴」の句「呦呦鹿鳴、食野之苹」。我有三嘉賓、鼓瑟吹笙」が一字も変更されずに詩の本文に組み込まれていることがあげられる。要するに、漢詩文に対する評価は、ほかの作品からの借用利用があるかどうかではなく、借用利用された表現が、新しい作品の中で活かされているのかどうかで判断すべきである。同じ「綴り合わせ」であっても、その出来栄の良し悪しを見極める必要があると考えられる。

中国文学の長い歴史の中で形成された文化的蓄積は相当に分厚いものである。将来された文献も限られている中、このような分厚い蓄積がたつたの数十年で、日本において余すところなく理解、吸収されることは不可能というほかない。実際奈良、平安初頭の日本漢詩文に見

られる漢籍に対する借用利用は、巧妙、精緻といったレベルに達していないものも見られる。その場合、借用利用された表現が、新しい作品の中で正確に生かされているのかどうか、漢詩文の出来栄を判断する重要な基準になるのではないかと考えられる。本章において注目した「煙霞」で言えば、使用されている意味の正確性においても、借用利用されている漢籍の多様性においても、勅撰三集の方が『懷風藻』より優れている。そうは言っても、『楚辞』から始まる「霞」の長い表現史の中で形成された「煙霞」の詩語としての意味が、嵯峨朝において、全面的に摂取、受容されていたとはいい切れない。しかし、勅撰三集が見せた詩語「煙霞」に対する運用の上達は、将来した新しい漢籍を積極的に学び、外国語文学である漢詩文の創作に力を注ぎ、苦労を重ねてようやく実現した結果である。「煙霞」のような、韻書、字書だけでは理解できない詩語を、将来された漢籍の中から、理解、摂取し、そして自作の漢詩文の中で正確に取り込むことは、決して容易なことではない。確かにまだ「綴り合わせ」の段階の漢文であるが、勅撰三集に見られる「煙霞」に対する理解の深化は、奈良朝から平安初頭までの間の日本漢文学の進展を如実に物語っている。注目したいのは、勅撰三集に見られる、「煙霞」が持つ儒、道、釈の多彩なイメージを、積極に取り入れる性格である。そういった性格を、伝来した漢籍に対する貪欲な吸収による結果と見るのか、それとも漢籍に対する手当たり次第の摂取の結果と見るのかは、意見の別れるところだが、中国当代のものを含めた広範囲な漢籍の摂取は、それ以前の奈良朝にはもちろん、それ以降の平安時代の漢文学においても、容易に見出せないものである。そこから窺える、唐風謳歌の時代精神を反映した漢籍に対する積極的な摂取の姿勢は注目すべきものであろう。

勅撰三集における「煙霞」を、唐詩と比較する際、以下のような独自性が窺える。即ち六朝唐代の「煙霞」は、主に遊仙隱逸の志向を表す場合に使用されているのに対して、勅撰三集の「煙霞」は、仁智山水及び仏教関係の場面に使用されていることが多いということである。しかしこういった独自性は、当時の日本漢文学のおかれた環境による制約がもたらしたものと考えられる。道家思想の受容が不十分で

あることや、文壇の主導者、後援者である嵯峨天皇から離れた私的な場における漢詩文の制作の場がほとんどないことが、こういった現象をもたらした要因と考えられる。そういった独自性のみを焦点化することには、慎重にならなくてはならない。

嵯峨朝の漢文学が目指しているのは、あくまでも唐風の宮廷文化の構築である。勅撰三集は、その精一杯の努力の結実である。しかしながらその文学は、唐の文学との間にはまだ大きな差がある。とは言うものの、『懷風藻』を代表とする奈良朝の文学に比べ、嵯峨天皇時代の日本漢文学が大きく発展をしていることは誰しもが認めることである。そのことは、本章の考察によって明らかになったように、両者における詩語「煙霞」の受容の差からも窺える。従来の研究は、「煙霞」のような重層的な意味を有する言葉に対して、必ずしも十分な注意を払っていなかったが、こういったことばに対する解説は、日本における漢文学の受容及び創作の水準を考える際の有効な方法であると考えられる。

「かすみ」に「霞」を宛てたのは、外示的な意味における両者の類似性に、日本の歌人が注目した結果と考えられるのに対して、「煙霞」が古代日本の漢詩文において多く詠まれていたのは、日本の漢詩人が、六朝及び唐代の中国文学における「煙霞」を多用する流れを汲んだ結果である。同じ「霞」であっても、和歌と日本漢文学との流れは別々の特徴を持っていることは前章と本章の考察によって明らかになったと考える。

## 【注】

<sup>1</sup> 用例の調査にあたって、以下の資料を参考した。芳賀紀雄氏編『文華秀麗集索引』（和泉書院、一九八八）、本間洋一氏編『凌雲集索引』（和泉書院、一九九一）、早稲田大学日本古典籍研究所「平安朝漢詩文総合データベース」。

(db2.littera.waseda.ac.jp/wever/kanshi/goLogin.do)。

<sup>2</sup> 小島憲之氏『国風暗黒時代の文学』中（中）〜下Ⅲ（塙書房、一九七九〜一九九八）『凌雲集』一六、二四、『経国集』三〇、四四、二一〇七、二一二三など）の詩注。

<sup>3</sup> 『玉台新詠』における「霞」の全十四例のうち、「朝霞」の四例が一番多く、それに対して「煙霞」は一例のみである。

<sup>4</sup> 彫龍古籍全文検索シリーズ3『先秦漢魏晉南北朝詩／文選（繁体字版）』による。

<sup>5</sup> 「全唐詩検索系統」(cls.hs.yzu.edu.tw/QTS/)による。いずれも詩の本文の用例数である。

<sup>6</sup> 波戸岡旭氏『懷風藻』に見える煙霞（上、下）―その六朝及び初唐詩との関連』（漢文学会々報）三二、三三、一九八六、一九八八）。

<sup>7</sup> 小島憲之氏「上代に於ける詩と歌―「霞」（カ）と「霞」（かすみ）をめぐる―」（美夫君志会編『万葉学論攷松田好夫先生追悼論文集』、続群書類従完成会、一九九〇）。

<sup>8</sup> 辰巳正明氏『懷風藻全注釈』当該詩序注（笠間書院、二〇一二）。

<sup>9</sup> 小尾郊一氏『中国文学に現われた自然と自然観』（岩波書店、一九六二）二九〇ページ。

<sup>10</sup> 小町谷照彦氏「古今和歌集評釈・三十八―色も香も同じ昔に咲くらめど」（『国文学―解釈と教材の研究』三一―三、一九八六）

<sup>11</sup> 合山究氏『雲烟の国―風土から見た中国文化論』（東方書店、一九九三）。

<sup>12</sup> 同右、一五五ページ。

<sup>13</sup> 同右、第三章。

<sup>14</sup> 東野治之氏『正倉院文書と木簡の研究』（塙書房、一九七七）第二部第三章、同氏『書の古代史』（岩波書店、一九九四）第二章。

<sup>15</sup> 柿村重松氏『上代日本漢文学史』（日本書院、一九四七）第二編第十七章。

<sup>16</sup> 小島憲之氏『上代日本文学与中国文学（下）』（塙書房、一九六五）、第六篇第一章。

<sup>17</sup> 注六に同じ。

<sup>18</sup> 注二小島氏著書の当該詩注。

<sup>19</sup> 同右。

<sup>20</sup> 注一六に同じ、一八一九ページ。

<sup>21</sup> 注一六に同じ、一四八八ページ。

〔引用本文〕

『懷風藻』、『文華秀麗集』は小島憲之氏校注『日本古典文学大系69』（岩波書店、一九六四）、『凌雲集』、『経国集』は小島憲之氏『国風  
暗黒時代の文学』中（中）く下目（塙書房、一九七九く一九九八）、『篆隸万象名義』は呂浩氏校注『篆隸万象名義校釈』（学林出版社、二  
〇〇七）、『史記』は『史記』（中華書局、一九五九）、『南斉書』は『南斉書』（中華書局、一九七二）、『魏書』は『魏書』（中華書局、一九  
七四）、『論衡』は黄暉氏撰『論衡校釈』（中華書局、一九九〇）、『藝文類聚』は『藝文類聚』（上海古籍出版社、一九八二）、『遊仙窟』は蔵  
中進氏編『江戸初期無刊記本游仙窟・本文と索引』（和泉書院、一九七九）、『広弘明集』、『庾子山集』は『文淵閣四庫全書電子版』（迪志文  
化出版）、『楚辞章句』は『楚辞補注』（中華書局、一九八三）、『王子安集』は『王子安集注』（上海古籍出版社、一九九五）、『白氏文集』は  
謝思煒氏校注『白居易詩集校注』（中華書局、二〇〇六）、『全唐詩』は『全唐詩』（中華書局、一九六〇）、『文選』は『文選』（上海古籍出  
版社、一九八六）、『文苑英華』は『文苑英華』（中華書局、一九八二）によった。なお漢字については一部を改めた。

## 第二部

## 第一章 平安和歌における年内立春詠の展開

### はじめに

本章では、『古今集』以降の平安和歌史における年内立春詠の展開を考察する。

日本における年内立春詠が、中国の暦法を受容した段階で発生した日本独自のものであることは、第一部第一章において論じた。この題材は、中国においてそれほど注目されていないが、日本では早く『萬葉集』から年内立春を意識した和歌が確認され、『菅家文草』、『菅家後集』の漢詩を経て、『古今集』巻頭歌によって、広く知られるようになったのである。契沖は『古今餘材抄』において、在原元方の年内立春詠の後世への影響に関して、次のように説いた。

業平朝臣の孫にて哥も上手なれば此集の巻頭に載られて、わらはへに至るまでしらざるもなく、後の哥人年内立春とだにいへば、いかによめども此哥のおもかげをだにかる事はいたれる面目なり。

このように、後世の年内立春詠に対する元方歌の影響力はまことに大きいものである。ところで契沖が言う「此哥のおもかげ」とは一体どのようなものなのかは、なお検討を要する部分である。しかし元方歌だけに焦点を当て、それ以降の年内立春詠を看過する傾向は、年内立春詠に関する諸先行研究の中においても確認できる。確かに『古今集』巻頭歌に関する議論は重要であるが、元方歌の文学史的評価を考える際、のちの実作に対する影響の解明も必要であろう。その意味において、元方歌の受容という視点に立った、鈴木健一氏の「近世文化



と古今集―「年内立春」歌の転生―」は注目すべき論である。これによって、近世における年内立春詠の受容はいかにも多彩であることが明らかとなった<sup>9)</sup>。しかし、年内立春詠の展開に関する考察は、近世のみならず、『古今集』成立以降の平安時代においても重要な課題の一つである。本章では、今まで注目されることの少なかった、平安和歌の年内立春詠を考察の対象とし、それらの歌の表現を分析しながら、契沖が言う元方歌の「おもかげ」の実相を探りたい。

## 第一節 初期の私家集における年内立春詠

『古今集』が成立して間もなくの作として、『貫之集』の一連の歌がある。

延喜十二年十二月春たつあしたに定方の左衛門のかみのないしのかみに、賀たてまつれるときのうた

ことしおひの新桑<sup>にひくはまゆ</sup>繭のから衣千世をかけてぞいはひそめける

(六八〇)

いはの上に塵もなけれど蟬の羽の袖のみこそはたぐふべらなれ

(六八一)

年をのみ思ひつめつゝ今までに心をあけることのなきかな

(六八二)

年のうちに春たつことを春日野の若菜さへにもしりにけるかな

(六八三)

住のえの松の煙はよとゝもに浪のなかにぞかよふべらなる

これは延喜十二年十二月二十二日の立春の朝、藤原定方が、妹の満子に対して算賀を行った時、紀貫之が詠んだものである。五首のうち、六八三番歌のみが、年内立春を意識した詠作と見られる。それを除いた他の歌には年内立春を表す表現がなく、詞書がなければ年内立春かどうか判別できない詠作である。ここで注意したいのは、詞書にある「延喜十二年十二月春たつあした」は創作の時間を示す材料にすぎず、尚侍満子に「賀たてまつれる」ことこそが一連の詠作の主旨であるという点である。この点は、六八三番歌においても同じである。算賀の歌に、「若菜」が詠まれた先例として、

内侍のかみの、右大将藤原朝臣の四十賀しける時に、四季の絵かけるうるしの屏風にかきたりける歌

素性法師

春日野に若菜摘みつつ万世を祝ふ心は神ぞしるらむ

『古今集』卷七・賀、三五七

が挙げられる。

このように、六八三番歌は本来年内立春を主題とする詠ではなく、賀の歌として作られたものと考えられる。しかし和歌史における受容の面から見ると、この貫之歌は意外にも年内立春歌として受容された歴史を持っている。『金葉集』初度本及び『新撰朗詠集』において、この歌はいずれも年内立春詠として春の巻頭に配された。またその際、事情説明として欠かせないと思われる詞書も省かれ、一首は一般的な季節詠として位置づけられた。しかし歌を見ると、年内立春を示す言葉があるものの、年内立春と新年立春との区別については特に描かれていない。六八三番歌における年内立春表現は、暦法上の事実を述べることに留まっていると言える。

一方、元方歌以降、季節詠として作られた年内立春詠は中務と源兼澄との私家集に見られる。まず中務の歌をみよう。

としのうちに春たつ、雪ふる、梅さきけり

ふる雪のしたにはへる梅の花しのびにかけて春はきにけり

『中務集』一の配列から見て、この歌は藤原頼忠の五十歳賀の屏風歌の一首と見られる。ここでは雪の中に咲く梅が詠まれている。冬の景物である雪と春の景物である梅とが一緒に詠まれたことは、年内立春における暦月の冬と節月の春とが重なる構造と一致している。そしてその構図から導き出された「しのびにかけて春はきにけり」には明確な年内立春意識がよみとれる。年内の冬の中で来る春の性質を、「しのぶ」を通じてよく表現できているといえよう。なお、この歌と類似した歌は『信明集』一、二〇にも見られる。

次に兼澄の歌を見よう。

栗田のおとど、まだ弁にておはせし時に、ふるとしに節分のはじめにて侍し日、梅の花をよませたりしに

枝わけてにほひやすらん梅の花年のうちなる春のしるしは

詞書が示すとおり、これは栗田殿、藤原道兼がまだ弁官の頃、ある年の十二月の節分（立春前日）に、源兼澄に梅の花を詠ませた時の歌である。この歌について『兼澄集全釈』は「梅の花は、立春から咲く枝と新年を迎えて咲く枝とを区別して咲き匂っているでしょうか。旧年の内に春になった証拠として」と解釈しているが、この歌に影響を与えたと思われる次の『古今集』歌を念頭におくと、春が東からやってくるという発想に基づいた詠として解釈した方が妥当だと考えられる。

貞観御時、綾綺殿のまへに梅の木ありけり。西の方にさせりける枝のみぢはじめたりけるを、上にさぶらふをのこどものよみける

ついでによめる

藤原かちおむ

おなじえをわきてこのはのうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ

勝臣の歌は詞書が記すように、綾綺殿の梅の、西の方に向かって伸びていた枝が色づき始めたところに詠んだものである。「西こそ秋のはじ

めなりけれ」は、秋が西より訪れるという中国的四季観に基づいた表現である。この歌を意識した兼澄も、そこにある観念的認識を理解した上で、春が東より到来するという観念を踏まえた歌を作ったと推測される。即ち「この梅の木が、東の枝を先に咲かせて、私達に春の到来を知らせてくれよう」という意味が込められた一首と考えられる。春が東からやってくるという認識が、「東風解凍」を記した具注暦の頒行によって、知識人の中で広まったと考えられる。兼澄歌もその典故を踏まえたものとして見たほうが自然であろう。

元方歌に比べ、貫之、中務、兼澄の年内立春詠の最も大きな特徴は、景物を登場させた点である。年内立春詠の更なる展開は、それに相応しい景物表現の創出を求めているのである。その意味において、次の大中臣能宣の歌は注目に値する。

#### 立春ののちの雪

春はたちまたふるとしの雪はふり空に心をわきぞかねつる

〔能宣集〕一、六五

新年立春の歌とも取れる作品だが、ここでは『能宣集注釈』に従い、年内立春の歌として見る<sup>52</sup>。貫之歌、中務歌、兼澄歌と違って、能宣歌には春の景物が一切登場せず、唯一詠まれたのは雪である。しかしそれは普通の雪ではなく、「ふるとしの雪」である。元方歌の詞書にあるように、年内立春の年は「ふるとし」と呼ばれているので、その「ふるとし」が持つ「降る」の掛詞的機能が生かされ、一首が作られたのである。この発想は、のち年内立春詠の実作に大きな影響を与え、年内立春独特の「ふるとし」の風景が詠まれるようになったのである。その一例として、源師頼の歌があげられる。

吉野山つもれる雪の消えゆくはまだふるとしに春やたつらん

〔堀河百首〕春二十首・立春、四

一首は「あの雪の名所である吉野山の雪が消えたのは、雪がまだ降っているこの年内に、立春が来たためであろう」と詠んでいる。こうして、年内立春詠は、その特徴を表す表現の創出とともに、次第に多く詠まれるようになったのである。

## 第二節 『永久百首』と冬の年内立春詠

『堀河百首』の成立から十年以上が経った永久四年、堀河天皇と中宮との追善のため、藤原仲実を勧進者とし、源俊頼、源忠房、常陸（肥後）など当代有力な歌人七人により、『永久百首』の百首組題が編まれた。この『永久百首』は、その私的な性格や歌題の特異性、また追悼を目的とする歌人群と無難な歌を詠もうとする歌人群とによる詠歌姿勢の分裂などから、従来後世に対して影響の小さい定数歌集とされていたが、院政期における題詠展開の実態を示す資料として、十分評価に値する。『堀河百首』の歌題との重複が一切見られないこの歌集は、先の百首組題に対して一種補完的な性格を有していると言える。一方巻の構造において、『永久百首』が『堀河百首』の春夏秋冬恋雑の六巻構成を継承したため、新しく選ばれた歌題は、『堀河百首』と重複せず、かつ各巻の内なる秩序を反映し得る性格が求められている。その特徴を端的に示したのは、春の巻頭と冬の巻軸に設置された「元日」（『堀河百首』の場合は「立春」と「旧年立春」（『堀河百首』の場合は「除夜」）の二題である。元日の歌を巻頭に置く先例は『後撰集』や『後拾遺集』などが挙げられるが、年内立春の歌を冬の巻末に置く先例は見当たらない。しかし年内立春の発生時期——十二月の後半（永久四年の場合は十二月二十六日）——を考えると、一つ前の歌題「仏名」に比べ、冬の巻末歌題としてより相応しいということも言える。『永久百首』の歌題の性格に関して、既に『校本永久四年百首和歌とその研究』において、詳しく検討され、「それ以前の勅撰和歌集（私家集）に明示されている歌題・歌合題として出題されたもののいずれも該当しない歌題」が三十七題にのぼることや、新しい歌題の配列が試みられたことなどが指摘されている。歌題「旧年立春」の登場も、前の百題歌集の題詠世界を更に拓こうとする『永久百首』の編纂者達の志向をよく表していると言える。その結果、年内立春詠が立春詠の付属歌題から脱却し、冬の部の巻軸歌題としての変貌を遂げたのである。

明らかに堀河天皇及び中宮への追善追慕の意味合いが込められた仲実の長歌（四一五）と短歌（四一六）とを除いて、通常の季節詠とし

て見ることができるほかの六首（冬・旧年立春）を一覧すると次のとおりである。

顕仲

年すぐる山べなこめそ朝霞さこそは春とともに立つとも

（四一四）

俊頼

あは雪もまだふるとしにたなびけばころまどはせる霞とぞみる

（四一七）

忠房

谷の戸をいずとなけや鶯は年もあけぬに春はきにけり

（四一八）

兼昌

とどむるにとどまらざりし春なれどまつにはきけり年のうちにも

（四一九）

常陸

あづまやの軒ばのたるひ鶯は雪かき分けて春や立つらん

（四二〇）

大進

年のうちに春は立ちぬとうちつけに雪げの雲を霞とぞみる

第一節であげた『兼澄集』の年内立春詠の詞書を考慮すると、年内立春に関連する集団創作がもっと早い時期にあった可能性も十分考えられるが、まとまった形として残された年内立春歌群は、この『永久百首』が最初である。この一連の詠作は、当時の歌人達がもつ、年内立春に対する関心の高さを知る資料としても貴重であるが、それ以上に、院政期における年内立春詠の創作様相をよく表している。きわめて観念的な詠作である『古今集』巻頭歌と異なった、景物表現の豊かな年内立春世界が構築されたのである。

それぞれの歌の景物表現の拠り所を探てみると、晩冬始春を題材とした歌からの受容や、新出歌語の使用など、実に多様な詠作様態が確認できる。

春と共に立つ朝霞に向かって、年が過ぎて行く山辺を隠さないでほしいと歌う源頭仲の歌(四一四)は、大江匡房の、

同卅日後番哥合、霞

かづらきやたかまの山の朝霞春とともに立ちにけるかな

『匡房集』I、(三)

に類似した表現が見られるが、「年すぐる山べ」が詠まれたのは、他ならぬ年内立春を意識したためであろう。

淡雪を霞と見間違えると歌う俊頼(四一七)の場合、冬の実景と春の連想の論理的繋がりととして、年内立春の二重季節の特性が生かされ、二句の「まだふるとし」は、第一節にあげた能宣歌と同じく、「ふるとし」の掛詞的機能に注目した表現である。また「あは雪」に対して、霞に多用する表現である「たなびく」を使った点からも、歌人が持つ年内立春意識が窺える。

次の忠房歌(四一八)にある「谷の戸をいはずとなけや鶯は」という表現は、『拾遺集』に入集した藤原道長の歌、

右衛門督公任こもり侍りけるころ、四月一日にいひつかはしける 左大臣

谷の戸をとぢやはてつる鶯のまつにおとせで春もすぎぬる

にある、四月一日になると閉門する谷の戸という発想によるものと考えられるが、谷の戸が大晦日まで閉じたままであるという発想を加えていた。その状態の中で立春がやって来たので、閉じた谷の戸の内側から鶯が鳴くと詠んだわけである。

続く源兼昌の作(四一九)は唯一景物が含まれていない歌であるが、暦のズレに注目した元方歌の発想を継承したわけではない。一首は、いつも留まってくれない春だけれど、心をこめて待てば、その気持ちに気づいてくれたように、年のうちにも早速春がやってきたよと、春の早めの到来を感懐深く詠みあげているのである。

四二〇番の肥後(常陸)歌は、次の二首からの影響が認められる。前半は相模の、

はての冬

あづまの軒のたるひを見渡せばただ白がねをふけるなりけり

『相模集』一、二七七

を明確に踏まえたもので、「はての冬」を詠んだ表現をほぼそのまま利用し、年末の雰囲気を醸し出そうとしている。一方後半にある雪をかき分ける鶯は、『堀河百首』の異本歌(日本大学総合図書館蔵曼殊院本)、

国信

消えのこる谷のふる雪かきわけて都へいづる鶯の声

『堀河百首』異本春二十首・鶯、五一

による表現と推測される。ほぼ同時代の新しい歌表現を積極的に取り入れ、年内立春における冬と春との二重構造を描出したものである。

最後の大進歌(四二二)は、冬の景色を春の風物と見間違える点において、俊頼歌と同じと言えるが、歌ことば「雪げの雲」の使用が注目される。このことばは、同時代の源国信、源師時の『堀河百首』歌よりも古い用例が見当たらず、院政期に生まれた新しい歌語とされて



いる。<sup>80</sup>『堀河百首』受容例の一つとして見るべきであろう。

このように見てくると、『永久百首』にある年内立春詠の歌表現の源泉は、『古今集』以降の、とりわけ院政期の季節詠の中に点在していることが分かる。しかもその多くは、年内立春詠ではない歌々からの摂取である。このような摂取の方法によって、歌人達は新しい年内立春詠の表現空間の構築に成功した。確かに和歌史の視点から見ると、「堀河歌壇の残映」、「時代の先端を走り過ぎた仇花」と評された『永久百首』は、『堀河百首』ほどの完成度と影響力とを有していない。<sup>81</sup>ただし既に先行論にも指摘されたように、歌題の面においてのちの時代に一定の影響を与えたことも事実である。<sup>82</sup>その冬の巻軸に位置する「旧年立春」歌群は、題詠としての年内立春詠の成立を意味すると同時に、院政期における年内立春詠の活発な創作実態を示す資料としても、重要な価値を持っていると考えられる。

興味深いことに、『永久百首』の「旧年立春」の長歌の作者で、事実上の推進者ともされる仲実の、若い頃に詠んだ年内立春詠が大僧正行尊の私家集に収められている。

二月、むまのすけ仲実がもとより<sup>83</sup>

年のうちに春立ちぬとはしりぬらんなどおとづれぬ谷の鶯

（『行尊集』一、五三）

かへし

やまがつは春立つこともしらぬかなたもとの氷とけぬかぎりは

（『行尊集』一、五四）

行尊に歌を贈ったのは、まだ右馬寮の次官だった時の仲実である。仲実歌は、鶯が訪れてこないことをいうのに対し、行尊は解けぬ氷という表現を持って応酬している。仲実が『永久百首』の歌題を選定する際、「旧年立春」を採用したのは、若い頃から持っていた、年内立春に対する関心も要因の一つと考えられよう。

一方『永久百首』に見られる年内立春詠を冬の部に配列する部立意識は、参加者の一人である俊頼の私家集『俊頼集』Ⅰ（『散木奇歌集』）の中にも見られる<sup>13）</sup>。ところで俊頼が単独撰者となつて編纂した『金葉集』初度本において、第一節にあげた『貫之集』Ⅰ、六八二番歌は春の巻頭に配列されていた。『俊頼集』Ⅰの二首の歌題は、『金葉集』初度本の巻頭歌と同じく「歳中立春」となっている点から考えると、俊頼は両方の歌を同じく年内立春の作品として取ったことが明白である。同じ歌題を、勅撰集と私家集において、それぞれ違った部立に配する理由は何だろう。

その問題に関して、私は古くから指摘されてきた『金葉集』初度本の保守的な撰集性格に注目したい<sup>14）</sup>。三代集の歌人と当代歌人とを均等に配するなど、伝統的な撰集原則を守った俊頼が、『古今集』筆頭撰者である貫之の年内立春詠を、『古今集』の季節配列に沿った形で巻頭に置いたことも不思議ではなからう。それに対して『俊頼集』Ⅰの配列は、おそらく『永久百首』を踏まえたものと推測される。

平安和歌と暦法との関連性を考えると、暦月と直接的な関連性を有する歌題は「元日」や「三月尽」などといった、季節の首尾に位置するものや、「中秋」や「七夕」などといった年中行事と関連するものなど、数多く存在する。それに対して節氣と直接的な関連性を有する歌題は「立春」と「立秋」以外、ほとんど見当たらない<sup>15）</sup>。『古今集』巻頭の配列は、文学史の視点から見ると、重要な意味を持つ一方、歌の世界において、圧倒的に優位を占める暦月が節氣に優先順位を譲ったことに、違和感を覚えた歌人も存在すると推測される。平安文学の中に、節氣をもつて季節を判断する作例がそれほど多くないことは、既に田中新一氏に指摘があり<sup>16）</sup>、『後撰集』や『後拾遺集』などにおいて試された元日詠を巻頭とする配列も、節氣優先の姿勢を打ち出した『古今集』や『拾遺集』に対する、一種の反発として見られる。そういった流れの中で、年内立春詠を再考する発想が生まれたのではないか。しかしその配列を直ちに勅撰集において実行するのはやはり困難であり、私撰集や私家集がその実験の場となったのはむしろ自然な流れである。このように、『永久百首』や『俊頼集』Ⅰに見られる、年内立春詠を冬の部に配置することは、暦月本位の時間感覚を重視した結果と考えられる。

### 第三節 『月詣集』と雑の年内立春詠

寿永元年十一月、当代歌人三十六人の私家集をもとに、賀茂社の神主重保が『月詣集』を編纂した。この私撰集は十二ヶ月の順序に沿って、正月から十二月までの十二巻によって構成されている。それ以外の歌は賀、別などの十二部に分類され、各巻の後半に付として加えられている。この私撰集において、「旧年立春のころをよめる」という詞書を持つ三首の歌が巻七の後半、雑上部の最初に配置されている。

刑部卿頼輔

かきくもりまだしら雪のふるとしに春ともみえで春はきにけり

(六六五)

丹波重長女

年のうちに春はきぬるをなにを又おくりむかふといそぐなるらん

(六六六)

賀茂重保

年のうちに春はたちきぬいづかたに残る日かずを思ひ分かまし

(六六七)

一見特殊な配列と思われるかもしれないが、これは「なにを又おくりむかふといそぐなるらん」(六六六)や「いづかたに残る日かずを思ひ分かまし」(六六七)などの表現から読みとれる、述懐的な要素を意識した配列と考えられる。年内立春は春の早めの到来というめでたい意味を持つ一方、一年が早めに終結するという消極的な意味をも持っている。その消極的な意味に注目して作ったのがこの二首である。年

の過ぎ行くことを嘆く述懐歌を雑の部に分類する方法は、『古今集』から見られる一般的な配列法である。一方、立春関連の述懐歌を巻頭に置く先例は、『拾遺集』雑春の部から確認できる。

題しらず

凡河内躬恒

春立とおもふ心はうれしくて今年のおいぞそひける

(巻十六・雑春、一〇〇〇)

躬恒歌は、立春が来たことを喜ぶとともに、歳が増えることを詠嘆する、述懐的な性格を含んだ作品である。先行研究が指摘したとおり、雑春部は『拾遺抄』の雑上部から分離された、雑歌の性質を持つ部立である<sup>20</sup>。『月詣集』の雑上部と『拾遺集』の雑春部とを比べてみると、両者は子日、霞、春の雪など一致する題材を多く有する上に、春の始めから夏の終わりまでを一区切りとする配列法においても類似していることが分かる。『月詣集』の現存諸本が全て雑中部を欠いているので、雑部全体にわたって言えるかどうかは分からないが、雑上部において、『拾遺集』の雑春部と類似した配列意識が存在したことは、ほぼ間違いないであろう。年内立春詠の三首が雑上の巻頭に配列されたことも、こういった整然たる分類意識による産物と考えられる。

問題になるのは藤原頼輔の歌(六六五)である。この歌は、頼輔の自撰家集においては、春の部の巻頭に置かれていた。しかもこの『頼輔集』は、寿永元年に頼輔が『月詣集』編纂の資料として賀茂社に奉納した、いわゆる「寿永百首」の一つである<sup>21</sup>。つまり重保は、頼輔歌が元々春の巻頭歌であることを承知した上で、あえてそれを雑上の部に配置したのである。撰者の意識によるそのような変更は珍しいことではないが<sup>22</sup>、この場合、重保がどういった理由をもって、頼輔歌の部を変えたのかを考える必要がある。ほかの二首と比べ、頼輔歌には述懐的な要素は容易に見いだせないが、春に関わる景物表現は一切ない上、「かきくもりまだしら雪のふる」といった冬さながらの描写が目立っている。恐らく重保は、頼輔歌に描かれた「春ともみえで春はきにけり」の表現を特別視して、この歌を雑上に配列したと推測される。『月詣集』の場合、撰集資料から取った歌の部立を変更する例は他にも存在し、『頼輔集』に限って言えば、前掲の年内立春詠のほか、

「旅行たびのみちのあられ歌」と題する一首の部立も変更された。『頼輔集』において、冬の部（四六）に配置されたこの歌は、『月詣集』においては羈旅の部（二八四）に置かれた。それぞれ「あられ」と、「たびのみち」とに注目した配列と思われる。この例を見ても、撰集資料の部立に束縛されない重保の編纂方針が窺えよう。

では『月詣集』に入集した三首の年内立春詠の先蹤歌を探してみよう。頼輔歌（六六五）は清原深養父の、

春、雪のふる日

かきくもり冬にをくれてふる雪の春ともみえでけふもくらしつ

（『深養父集』一、二）

を踏まえたものと考えられる。景物表現はほぼ同じだが、春の実感を否定することで一首を収束させた深養父歌に対し、頼輔は春が目に見えなくてもやって来たと、立春の確実性を主張している。三句の「ふるとしに」は、能宣や俊頼の歌にも見られる「ふるとし」の掛詞的機能を生かした表現である。

重長女歌（六六六）は平兼盛の、

師走のつごもりのよよみはべりける 兼盛

かぞふれば我が身につもる年月をおくりむかふとなにいそぐらん

（『拾遺抄』卷四・冬、一六二）

の影響を受けていると考える。兼盛の大晦日の歌から述懐の表現を抽出し、年内立春詠に転用したわけであるが、春の早めの到来が、「年月をおくりむかふ」際の慌ただしさを一層引き立たせる効果を持つと言える。

最後の重保歌（六六七）は出羽弁の年内立春歌、

宮の宣旨殿の、年たちかへりてしるしも見えず晴れ間なきに、九重はいぶせさもまさりて、などやうによみたまへりし御ふみ、とう

うしなひて、わすれて、御かへりことの限りおぼゆるぞあやしき、師走に節分してしなり

年の内にたちにし春の日数には残るつらゝもあらじとぞおもふ

(『出羽弁集』、九)

と類似する用語が多く見られるが、出羽弁歌には明確な述懐的要素が認められず、重保がその一部の表現を借りて、述懐詠として歌を再構成したと考えられる。以上のように、『月詣集』の三首は、初春歌、晦日歌、年内立春歌という、三者三様の受容の様相が認められる。

『月詣集』に見られる年内立春詠を雑に配列する方針は、ほかに『言葉集』、『西行集』、『山家集』から確認できる<sup>20</sup>。両歌集は、『古今集』と異なった配列意識が、平安後期の和歌史に存在することを示す資料として、共に重要な価値があると考えられる。

『永久百首』における冬の年内立春詠の登場を、『古今集』を頂点とする伝統的な部立意識に対する一種の挑戦と見なせば、『月詣集』における雑の年内立春詠の編纂は、『拾遺集』などに見られる季節雑詠の世界を拓こうとする意識の産物と見ることができる。十二世紀の初期と末期に成立したこの二つの歌集は、院政期における年内立春詠の活発な詠作実態をよく表していると言える。この二つの歌群における景物表現や歌ことば摂取の多様性が物語っているように、後世の年内立春詠に対する『古今集』巻頭歌の影響は、決して歌表現そのものを束縛するようなものではなかったことが理解できよう。

## おわりに

勅撰集における年内立春詠の入集は、『後撰集』から『新古今集』までの長い空白期があった(ただし『金葉集』初度本を除く)。年内立春詠の実作における部立の多様性が見られる中、『古今集』の本流を守りつつ、『新勅撰集』における年内立春詠の再入集の下地となったのは、『和漢朗詠集』を始めとする、複数の私撰集、私家集である<sup>21</sup>。

中でも、構成上勅撰集に近かったのものと、寂超が『詞花集』の革新的な体裁を批判すべく編纂した『後葉集』が注目される。この私撰集の巻頭に置かれたのは、輔仁親王の年内立春詠である。

ふるとしに春たつ日

延久第三親王

年のうちに春立ちくればひととせにふたたびまたる鶯のこゑ

(巻一・春上、一)

『後葉集』における『古今集』尊重の性格については、既に佐藤明浩氏の指摘があり、巻頭の配列もまさにそれである<sup>13)</sup>。しかし歌表現から見ると、輔仁親王歌にも、年内立春詠ではない歌から表現を摂取するという、第二、三節にあげた諸例と共通する詠歌方法が確認できる。この歌は、同じ一年の中に二回も春がやってくることに着眼し、再びの鶯という表現を通じて年内立春の特徴を表している。歌の初二句は元方歌と類似しているが、その歌想の中核を担うものは、藤原興風の、

寛平御時后宮の歌合の歌

興風

声たえずなけや鶯ひととせにふたたびとだにくべき春かは

『古今集』巻二・春下、一三二

であると考えられる。

このように、平安和歌史における、年内立春詠の展開の特徴として、元方歌による表現の摂取がほとんど見られないという点が挙げられる。そのことは、藤原定家が『近代秀歌』において主張した「年のうちに春は来にけり(中略)などよむべからずとぞ教え侍りし」という、名歌の発想や表現を再利用すべきではないという考えとも関連するが、別の原因として、一切の景物表現が含まれていない元方歌は、先蹤歌として利用しづらいという点も指摘できる。こうした意味において、元方歌の影響を受けた平安和歌の年内立春詠が、様々な景物を詠む形で展開されていくのは、当然の流れとも言えよう。実作に対する影響という面において、元方歌が果たした最も重要な役割は、『古今集』

巻頭歌として、後世の歌人達に年内立春詠という題材の存在を、強く提示したところにあると考えられる。後の歌人が、どのような年内立春詠を作ったところで、脳中には必ず元方歌の存在がある。そしてそこが契沖が言う「おもかげ」ではないだろうか。

さて、平安和歌史における年内立春詠の実作を時期ごとにまとめると、次の三つの時期になる。第一期は『古今集』から『拾遺集』までの約百年間で、私家集において、貫之、中務、兼澄の年内立春詠が試みられたが、作品数が少ない。第二期は『拾遺集』以降『後拾遺集』までの約八十年間、題詠が急速に発展する中、時代の流れに遅れた年内立春詠の創作は低迷する。というものの、仲実と行尊との贈答や、『和漢朗詠集』の成立など、後の時代に影響を与えた重要な出来事もいくつかが注目される。第三期は、院政期に相当する『後拾遺集』以降『千載集』までの百年余りで、年内立春詠の題詠の実現によって、この題材が本格的に詠まれるようになったのである。その首尾に位置するのが新しい配列が試された『永久百首』と『月詣集』である。そのほか、『基俊集』Ⅰ、『俊頼集』Ⅰ、『頼輔集』、『教長集』、『貧道集』、『西行集』Ⅰなどの私家集や、『堀河百首』、『久安百首』、『後葉集』、『言葉集』、『治承三十六人歌合』などの私撰集、編纂歌合においても、年内立春詠が確認される。『教長集』に「山寺につれづれとしてこもりけるに、ふるとしに春の立ちければよめる」四首の独詠（一三〇一六）があるように、当時において、年内立春を題材とした作品が既に自覚的に詠まれるようになったのである。

このように、『古今集』以降の年内立春詠の展開は、元方歌の影響を受けつつも、発想、表現、抒情の面において、様々な新しい要素を取り入れている。特に第三期には、活発かつ自由な年内立春詠の創作活動が目立っていると言える。それらの歌における元方歌の影響は、より内面的な、いわば詠作の前提として存在しているものと見られる。元方歌の表現を用いずとも、年内立春の歌を詠めば、その背後には必ずそれに対する意識が存在する。契沖の発言は元方歌の後に生まれた数々の年内立春詠の蓄積こそが、『古今集』の影響力を何よりも雄弁に示す資料であることを、我々に提示したものと考えられる。

## 【注】



- <sup>1</sup> 『萬葉集』卷二十、四四九二。『菅家文草』卷四、二七八「立春」。『菅家後集』、四九二「元年立春」。
- <sup>2</sup> 新井栄蔵氏「春立ちける日―古今集巻頭歌私見―」（『文学』四四―二、一九七六）、神尾暢子氏「在原元方と立春映像」（『王朝国語の表現映像』新典社、一九八二）、小松英雄氏「春は来にけり」（『みそひと文字の抒情詩―古今和歌集の和歌表現を解きほぐす』笠間書院、二〇〇四）。
- <sup>3</sup> 鈴木健一氏『江戸古典学の論』（汲古書院、二〇一一）。
- <sup>4</sup> 春秋会『源兼澄集全釈』（風間書房、一九九一）当該歌注。
- <sup>5</sup> 増田繁夫氏『能宣集注釈』（貴重本刊行会、一九九五）当該歌注。
- <sup>6</sup> 橋本不美男氏・滝沢貞夫氏『校本永久四年百首和歌とその研究』（笠間書院、一九七八）。なおその詠歌姿勢における分裂を、衆議の場という視点から考察する伊倉史人氏『『永久百首』とその背景』（『三田国文』二七、一九九八）がある。
- <sup>7</sup> 同右橋本氏・滝沢氏著書。「研究編」一六五ページ。
- <sup>8</sup> 用例は『堀河百首』冬十五首・炭窯、一〇七五、一〇八一などが挙げられる。「雪げの雲」に関する指摘は、『金葉和歌集・詞花和歌集』（新日本古典文学大系7、岩波書店、一九八九）の『金葉集』巻四・冬、二九〇の歌注に見られる（川村晃生氏・柏木由夫氏校注）。
- <sup>9</sup> 竹下豊氏『堀河御時百首の研究』（風間書房、二〇〇四）第二章第二節をも参照。
- <sup>10</sup> 橋本不美男氏『院政期の歌壇史研究』（風間書房、一九六六）第六章。注六橋本氏・滝沢氏著書、一七一ページ。
- <sup>11</sup> 上野香織氏「為忠家両度百首について―初度百首から後度百首への展開」（『国語と国文学』六七―八、一九九〇）、佐藤明浩氏「為忠家両度百首」に関する考察―歌作の場の問題を中心に」（『語文』五七、一九九一）。注六橋本氏・滝沢氏著書をも参照。
- <sup>12</sup> 詞書は「二月」となっているが、歌意から考えると、「十二月」の誤りと見られる。

<sup>13</sup> 『俊頼集』一、六七九、六八〇の二首。

<sup>14</sup> 『金葉集』の諸本の性格に関して、『袋草紙』や『八雲御抄』、『今鏡』など古くから指摘があり、平沢五郎氏『金葉和歌集の研究』（笠間書院、一九七六）において詳しく検討されている。

<sup>15</sup> 立夏と立冬の歌も存在するが、数は少ない。題詠として広く詠まれたのは、立春と立秋のみである。

<sup>16</sup> 田中新一氏『平安朝文学に見る二元的四季観』（風間書房、一九九〇）。

<sup>17</sup> 小町谷照彦氏校注『拾遺和歌集』（新日本古典文学大系7、岩波書店、一九九〇）。

<sup>18</sup> 森本元子氏『私家集の研究』（明治書院、一九六六）。

<sup>19</sup> 例えば『拾遺抄』巻九・雑上に収められた田融院の「春日野に多くの年は積みつれど老いせぬ物は若菜なりけり」（三七六）が、詞書も変えないまま『拾遺集』の巻一・春、二〇に配列された例がある。

<sup>20</sup> 『西行集』一、一〇六〇。

<sup>21</sup> 年内立春詠を春の部に配列する歌集は、ほかにも『新撰朗詠集』、『後葉集』、『頼輔集』などが見られる。

<sup>22</sup> 佐藤明浩氏「『後葉和歌集』の構成および性格」（『待兼山論叢（文学）』二二、一九八八）。

#### 〔引用本文〕

私家集は『新編私家集大成』（古典ライブラリー版）、それ以外の和歌集は『新編国歌大観』（古典ライブラリー版）、『近代秀歌』は橋本不美男・有吉保・藤平春男校注・訳『歌論集』（新編日本古典文学全集87、小学館、二〇〇二）、『古今餘材抄』は久松潜一氏監修『契沖全集（8）』（岩波書店、一九七三）によった。なお漢字、仮名については一部を改めた。

## 第二章 平安和歌における立春関連詠作の展開

### はじめに

本章では、古代和歌における立春関連作の展開を考察する。

二十四節気の冒頭に位置する「立春」は和歌の中の重要な題材の一つである。立春日の和歌は『古今集』巻頭の在原元方詠が最古であるが、第一部第一章に述べたように立春を意識した歌はすでに『萬葉集』に見られる。『古今集』以降の二十の勅撰和歌集において、立春の歌は欠かさず入集している。私撰集、私家集、定数歌集においても、立春と関連する詠作はよく見られる。しかし今までの研究にこの題材に注目したものはほとんどない。この中国から伝来した節気概念が日本の和歌においてどのように詠まれていたのか。本章では平安和歌の立春関連詠作を対象に、この問題を考えていく。

古代和歌における立春関連詠作を概観するためには、現存の和歌資料の中に広く分布しているそれらの詠作を一度整理する必要がある。本章は、詞書に立春、あるいはそれと関連する表現が含まれている歌、及びそれに準じる歌を立春関連詠作の考察対象とする。「それと関連する表現」についての説明は次節に譲るとして、「それに準じる歌」は季節の配列意識が認められる歌集の中における、立春関連詠作の前後に位置する、題が明確ではない歌を指す。実際の例を見てみよう。『俊恵集』『林葉集』の四番から七番の四首である。

きさみの宮の御方に歌合あらんとて、九条太政大臣よませ侍りしかば、立春の心

いつしかと朝日の影のしるきかな長閑けかるべき千世の初春

(四)

左大将実定家にて、おなじ心を

春といへば霞みにけりなきのふまで浪まに見えしあはぢ島山

(五)

大納言定国家歌合に

春のくる所はわかじものゆへにあしたの原のまづ霞むらん

(六)

皇太后太夫俊成十首歌よませ侍りした、春たつところを

春は今朝こえぬとおもふに相坂の関の杉むら猶霞むらん

(七)

四番と七番との二首の立春関連詠作の間に、二首の歌が配列されている。五番歌は「おなじ心を」という詞書を持っているので、四番歌と同じ立春を詠んだものであることが分かる。一方の六番歌の詞書は詠作の場しか記していない。しかし歌集の配列意識及び六番歌の歌意から見て、この歌は立春をテーマとする詠作であることが分かる。立春関連詠作の定義の中において述べた「それに準じる歌」は、六番歌のような作品を指すものである。

今回の調査は『新編国歌大観』（以下『新編大観』と略す）と『新編私家集大成』（以下『新編大成』と略す）という二つのデータベースを利用して行った。調査範囲の下限は二つのデータベースにおいて、平安時代と分類されている作品集までとするが、私家集に関しては、『新編大成』の分類に従う。

詞書、あるいは題詞に立春と関連する表現が含まれている歌を調べると、『新編大観』の場合は『古今集』巻頭歌、『新編大成』の場合は『人麿集』目、六六〇番歌が最初である。『人麿集』目は『古今和歌六帖』から『拾遺集』の頃に成立した編纂物とされているので、実質、奈良時代の歌集の中には題詞に立春と関連する表現が見られる歌が存在しないということが判明する。この『人麿集』目は『萬葉集』の人麻呂関係歌及び作者不明歌を中心に、編纂、部類されたもので、「立春」と題する六六〇番歌「冬すぎて春しきぬれば年月はあらたまれとも人はふりゆけ」は『萬葉集』の、

旧りゆくことを嘆く

冬すぎて春しきたれば年月はあらたなれども人はふりゆく

(卷十・春雑歌、一八八四)

から取ったものと見られる。『新編大成』において、奈良時代に分類されている私家集の中で立春関連表現が見られるのはこの一例のみであり、したがって詞書に立春関連表現が見られる歌は、全て平安時代以降に成立した歌集の中のものと思われる。この調査を通じて検出した平安和歌の立春関連詠作を整理したのが付録の『平安和歌の立春関連詠作一覧』である。それによると、平安時代には、約三〇〇首程度の立春関連詠作が存在していることが分かる。以下に、いくつかの視点からこれらの歌について考察を加える。

## 第一節 「立春」を表すことば

詞書において立春はどのように表現されているのだろうか。平安時代の用例を調べると、「立春」を含めて主に以下の三種類のものが見られる。

まずは「春立つ」である。『古今集』の三例はいずれも「春立ちける日」となっているように、和歌の詞書において立春を表す表現とし

ては一番古い。その中には、「春立ちける日」(『古今集』、一など)、「春立つ日」(『後撰集』、二など)、「春たちし日」(『惟方集』、一など)といったような「春たつ」を一語として使用する例もあれば、「春もたちぬ」(『後拾遺集』、九四三)、「春のたちけるに」(『金葉集』初度本、一七など)のような、「春」と「たつ」との間に助詞を入れる例もある。また動詞「立つ」の活用語尾を省略した「春立日」の例も『躬恒集』三種を始め、多くの用例が見出だせる。ただしその場合、「立」の後には必ず「日」が加えられていて、「春立」の二文字だけの用例はなかった。「春たつ」の後に加える表現は「日」のほか、「あした」(『貫之集』一、六八〇)、「ころ」(『道信集』一、八六)、「ころ」(『実家集』、二など)も見られる。

次は「立春」である。勅撰集の最古の用例は『後撰集』、二、私家集の最古の用例は『友則集』、一と『貫之集』一、三二とである。『友則集』は後人編纂のもので詞書の信憑性はそれほど高くないので、貫之死後まもなく編纂された『貫之集』一の用例が一番古いと考えられる<sup>5)</sup>。そして時代を下ると、『月詣集』、四に「たつ春の心を」と題する歌が現れる。「たつ春」はそのほか、『俊頼集』三、六七三、『有房集』二、一、『実国集』、一、『宗家集』、一二二、『西行集』一(『山家集』)、一、『師光集』、三二、『小侍従集』一、三などにも見られる。主流の表現にこそなっていないが、「たつはる」は院政期以降の平安和歌史において、立春を意味することばとして使用されているのである。

最後は「節分」である。「節分」は、本来二十四節気の中のある節の前日を指す表現だが、和歌の中では立春の前日を指す言葉として一般的に使用されている。平安時代の用例を調べると、立春前日以外の例は『伊勢集』三、五二の「節分のつとめて四月朔みやにて」のみであり、そのほかの七例は全て立春前日を指す表現となっている。すなわち『為信集』、一九の「節分のつとめて」、『兼澄集』二、四六の「ふる年に節分のはじめにて侍し日」、『道命集』、一一四の「歳内に、節分ある年」、二九八の「年内に節分する年」、『和泉式部集』一、三三〇の「節分のつとめて」、『主殿集』、一四の「これは節分の夜」、『出羽弁集』、九の「師走に節分してしなり」である。そのうち、『為信集』の例と『和泉式部集』一の例は「節分のつとめて」、つまり立春当日のことをさす表現となっているが、それ以外の例に関しても、全

て翌日の立春日を意識したものであることが歌から判明する。『兼澄集』四、『出羽弁集』の例は既に前章において述べたので、それ以外の歌を見てみよう。

まずは『為信集』の例、

節分のつとめて、ある女に

にしへゆく風もあらなんぬれころもひとみこぼるる涙とかせん

傍線部は「東風解凍」を踏まえた表現であることが明白である。

次は『道命集』の例、

歳内に節分ある年、方違へに、ものへまかりて、月をみて

あらたまの年はしらねどありあけの月はかはらぬものにぞありける

(一一四)

年内に節分するとし、方違へにまかりて、ありあけの月を見て

あらたまの年はすぐれどありあけの月のかはらぬことぞあやしき

(二九八)

傍線部が示すように、いずれも年内の立春による節月の年の交替を意識した詠作と見られる。

最後は『主殿集』の例、

これは節分の夜、おとこにとられたる女にやりし

こほりだにとくめるよはのぬま水にむすびてけりなそこのちぎりは

傍線部は東風解凍、囲み線部は『古今集』二番の貫之歌の「むすびし水の」を念頭においた表現と考えられる。また波線部は『順集』一、

一「今日とくる氷にかへてむすぶらしちとせの春にあはむちぎりを」の用法と類似していることも指摘できる。以上の点からこの歌も立春を意識した詠作であることが分かる。附録に掲載している『和泉式部集』一の「節分のつとめて」の歌も解凍を踏まえた作品である。立春前日の節分を意識した歌は、本編第二章で論じた『萬葉集』巻二十の三首が最初であるが、平安時代の節分歌に大きな影響を与えたのは、『古今集』から始まる「東風解凍」という題材である。

## 第二節 立春関連詠作の題詠化

詞書に見られる立春関連表現の役割は主に二つある。時間を示すことと、歌のテーマを示すことである。別の言い方をすれば、前者は「立春日に詠んだ歌」、後者は「立春を詠んだ歌」ということになる。ただ「立春日」に詠んだ歌に「立春」をテーマとするものもあれば、「立春」をテーマとする歌の中に立春当日に詠んだものも存在するかもしれない。この区分は、あくまでも詞書における立春関連表現の役割を基準にするものである。

平安和歌の基本の流れの一つは、実景詠から題詠への転換である。立春関連詠作の展開もこの流れの中にある。初期の立春関連詠作の中に、題詠に近い詞書を持つものとして、『躬恒集』一、二二三、『躬恒集』二、二五六、『友則集』一、『順集』一、一の「立春日」、『重之集』、三九「又、春たつ」の四つがあげられる。『躬恒集』の二例は重複歌で、同じ歌は『躬恒集』二に「春たつ日よめる」（一八二）として見られる。これによれば立春日の詠作となる。『友則集』は、後人編纂のものなので、詞書は後々に加えられた可能性が高い。『順集』一の歌は『順集』二、一六四「天曆御時御屏風歌、立春」として収録されている。これによれば屏風歌である。『重之集』例に関しても、前後の歌の詞書からみて、題詠である可能性が低いと考えられる。まだ同集には「立春日、雪ふる」（七五）、「立春日、又、ゆきふる」（七七）も見られるので、当該歌もやはり立春日の詠と見るべきである。



明確に立春題詠として記された最初の例は『拾遺集』の歌人長能の家集の二例である。すなわち、

三月二十九日にては侍けるとし、春たつ心、人々よみ侍けるに、花山院にて

こころうきとしにもあるかな廿日あまり九日といふに春のくれぬる

『長能集』二、五一

春たつといふ題を、院むたまはせたるに

もろともにわかなもつまむ妹背山やまたのさはの水もるるなり

『長能集』二、五四

である。しかし『長能集』一によると、『長能集』二、五一番歌の詞書は「花山院に、三月〇なりしとき、春のくれをしむこころ、人々よみに」(六八)。『長能集』二、五四番歌の詞書は「花山院の、春恋といふ題をたまへりしかば」となっている。歌意から見て、両首に立春を表す表現がなく、『長能集』一の本文が正しいと考えられる。その次に立春の題詠が見られるのは『経信集』一、一の「立春氷」である。しかしこの私家集は勅撰二十一代集が成立した後の他撰家集とされているので、詞書の信憑性が低い。その次に見られるのは『公実集』一と『匡房集』二、一との二例である。両方ともに『堀河百首』の立春歌である。周知のように、『堀河百首』は当代歌人一六名による百首組題で、「立春」は春の二十題の冒頭に位置づけられている。題詠としての立春詠がここにおいて確実に成立したと考えられる。そして『堀河百首』以降、立春の題詠が立春関連詠作の主流となったのである。

俊頼の次の時代になると、立春詠の集団創作の作品がよく見られるようになる。平安末期の立春題詠の集団創作の一端を示す資料として重要な価値を持つのは、『俊恵集』である。そこには計十四首の立春関連詠作が見られる。詞書によると、この十四首の立春関連詠作は、異なった八つの場において制作されているもので、そのうちの七つは立春詠の集団創作の場である。すなわち「花園の左大臣仁和寺にて、

立春の歌あまた人人によませられ侍りしによめる」(一)、「きさめの宮の御方に歌合あらんとて、九条太政大臣よませ侍りしかば、立春の心を」(四)、「左大将実定家にて、おなじ心を」(五)、「大納言実国家歌合に」(六)、「皇太后太夫俊成十首歌よませ侍りしに、春たつところを」(七)、「中院入道右大臣家にて、人人十首歌読み侍りにし」(八)、「右大臣家人人に百首歌よませられ侍りに、読めとありしかば、おなじ題を五首」(一〇)である。俊恵が参加した歌合に現存するものが極めて少ないことは築瀬一雄氏の指摘のとおりである。それを別の視点から見れば、当時の歌壇の、複数の場における立春詠の集団創作の記録を残した『俊恵集』は、『堀河百首』以降の平安末期における、立春関連詠作の展開の様相を示す貴重な資料だと言える。

一方、『堀河百首』の後、立春詠の集団創作の記録をまとめた形で保存した作品集として重要な意味を持つのは『実国家歌合』である。この歌合集に『堀河百首』を上回る当代歌人計二十名による立春詠の集団創作が記録されている。判者清輔の判詞も残されているので、六条家の歌字を反映した立春詠判の資料としても興味深い。

こうした立春関連詠作の累積は、私撰集にも影響を与えた。建久初頭に成立した『玄玉集』は、私撰集として過去最大の二十三首の立春関連詠作を収録している。平安末期における立春詠の活発な創作活動がもたらした結果と言える。

そしてこの時期の立春関連詠作に見られるもう一つの重要な変化は、複合型題詠の出現である。その初期の作品は『古今集』巻頭歌を意識した「歳中立春」(『俊頼集』一(『散木奇歌集』、六七九)と「旧年立春」(『基俊集』一、五六)である。その後『清輔集』三の「立春暁」、『公重集』四三八の「处处立春」、『重家集』五三三の「立春観遊」、『覚綱集』一の「旅宿に春たつといふことを、よみ侍りける」、『惟方集』四の「海辺立春」など、そのバリエーションが増えていく。平安末期に見られるこれらの立春題は、やがて中世の多彩な複合型題詠に発展してゆくのである。

### 第三節 立春関連詠作の基盤

平安和歌の立春関連詠作を考える際、重要な意味を持つのは『萬葉集』と『古今集』という二つの歌集の存在である。

結論から言うと、古代和歌における立春関連詠作の源は『萬葉集』にあり、そしてその表現の基盤が『古今集』において整えられたと考えられる。

古代和歌における立春関連詠作の展開からみる、『萬葉集』の意義は以下の三点にある。

まずは和語「春たつ」の創出である。「春たつ」ということばが人麻呂歌集所収の「ひさかたの天の香具山この夕かすみたなびく春立つらしも」（巻十・春雑歌、一八一二）に見られることは第一部第二章に述べたとおりである。この歌ことばの創出によって、暦法の概念である「立春」が和歌の世界に導入されたのである。漢語「立春」を和語「春立つ」に変換することで、平安和歌における立春関連詠作の道が開かれたと言っても過言ではない。そのことは、二十四節気において立春と同等の重みを持つ立夏、立冬が和語化されていなかったため、それを題材にした歌がほとんど残されていない点からも窺える。

次は立春関連詠作の風景である「かすみ」と「鶯」との創出である。前段落でも引いた一八一二番歌において創出された「春の徴としてのかすみ」は、平安の立春関連詠作の中にもっとも多く詠まれた景物の一つである。一方、立春の鶯を詠む題材の先蹤歌は、本論文において度々引用した天平宝字元年十二月十八日の節分の宴において制作された三形王の歌「み雪降る冬は今日のみ鶯の鳴かむ春へは明日にし有らし」（巻二十、四四八八）や「あらたまの年ゆきがへり春たたばまづ我がやどに鶯はなけ」（巻二十、四四九〇）にまで遡ることができる。平安和歌の立春関連詠作に見られる鶯の用例はかすみほど多くはないが、やはり数としては上位に入る題材である。その流れに直接的な影響を与えたのは後述する『古今集』の歌であるが、三形王歌と家持歌は、その嚆矢にあたるものである。

最後は立春に対する二つの捉え方の創出である。この二つの捉え方とは即ち、

A. 自然暦の季節感を以って具注暦によつて記された春の正確性を検証するという方法、

B. 自然暦の季節感を表す景物を太陰太陽暦の季節定義の中において位置づける方法、

である。Aの方法は、『萬葉集』一八一二番歌に見られ、Bの方法は天平宝字元年十二月十八日の節分の宴に詠まれた甘南備伊香歌「うちなびく春を近みかぬばたまの今夜の月夜かすみたるらむ」（巻二十、四四八九）に見られる。この二つの方法は平安和歌の立春関連詠作においてよく使用されている。実際の例を見てみよう。

まずは方法Aを用いた例である。

#### 立春歌

みわたせばよもの山辺のかすめるを春たちぬとはいふにぞありける

（『教長集』、三）

山ざとに春たつと云ふ事

山ざとはかすみわたれるけしきにて空にやはるの立つを知るらん

（『西行集』一、七）

立春のころを

はるたつとしらでもみばや天の原かすむは今朝の思ひなしかと

（『小侍従集』一、一）

#### 立春

清輔

いつしかと春のしるしのみゆるかな三輪の杉はらうちかすみつつ

（『実国家歌合』、九）

いずれも霞を見て春の到来を認識することを詠んだものである。暦法上の春という知識を排して、自然の景物であるかすみを視認することで春の到来を判断するという小侍従歌において、自然暦の季節感を第一義とする姿勢は明白に読み取れる。ただしそれは暦上の立春を無視し、自然の景色のみをもつて春の到来を判断するというものではない。この歌においてかすみが春の徴になり得たのは、歌の題が「立春のこころ」を詠んだものであるからにはかならない。この歌について、『小侍従集全釈』では、『拾遺集』の忠岑の巻頭歌「春立つといふばかりにやみよし野の山もかすみて今朝は見ゆらん」の「発想を逆転し、自分の感覚による春発見を主張する。既成概念にとらわれないでいこうという精神」があると評している。「立春のこころを」と題する歌の中で、立春の知識を排する姿勢をとったところに、この歌の面白みがあると考えられる。

次は方法Bを用いた例である。

みちのくにに侍りける時、春立つ日よみ侍りける 三朝法師母  
出でて見よいまは霞も立ちぬらん春はこれより過ぐるところを聞け

〔後拾遺集〕、二二

左大将実定家にて、おなじ心を

春といへば霞みにけりなきのふまで浪まに見えしあはぢ島山

〔俊恵集〕、五

立春

あづまぢや一夜がほどにくる春をいかでさきだつ霞なるらん

〔忠度集〕、一

などがそれである。かすみの発生を立春の到来をもつて推測する三朝法師母歌、忠度歌、そして春といえばかすみの発生が思い浮かぶと詠

む俊恵歌、いずれも太陰太陽暦の四季観を優先にする方法を用いた例である。

『萬葉集』歌と同じくかすみを詠んだ例を挙げたが、それ以外の歌の中にもこの二つの方法の使用が見られる。『萬葉集』において創出されたこの二つの方法は、平安時代の季節詠に受け継がれていたのである。

以上述べたように、古代和歌における立春関連詠作の展開を考える際、『萬葉集』は暦法概念である立春を和歌の世界に導入したこと、その立春と対応する景物であるかすみと鶯とを提起したこと、そして立春に対する二つの捉え方を完成したことにおいて、重要な意味を持っていると考えられる。

一方、平安和歌の立春関連詠作の基調を決めたのは『古今集』である。その巻頭歌が平安和歌の年内立春詠に与えた影響については第二部第一章において述べた。そして平安和歌によく見られる立春の三つの景物——「東風解凍」、「かすみ」、「鶯」も、この平安中期に成立した初の勅撰和歌集に出揃ったのである。

春たちける日よめる

紀貫之

袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつけふのかぜやとくらむ

(巻一・春上、二)

題しらず

よみ人しらず

春霞たてるやいづこみよし野の吉野の山に雪は降りつつ

(巻一・春上、三)

二条のきさきの春のはじめの御歌

雪のうちに春はきにけり鶯のこほれる涙今やとくらむ

(巻一・春上、四)

『古今集』冒頭の元方詠に続く二番から四番の三首である。貫之歌は東風解凍、読人しらず歌はかすみ、そして二条の後藤原高子歌は鶯と東風解凍とを詠んでいる。<sup>100</sup>『萬葉集』の立春風景を継承した「かすみ」と「鶯」に、「東風解凍」が加わったのである。

この東風解凍詠の論理について、多くの注釈書は『礼記』『月令』という、『顕昭古今集注』に言及された文献を出典としているが、なお疑問が残る。滝川幸司氏が言うように、『礼記』『月令』の当該箇所は、「立春日」に「東風解凍」が発生するとは書かれていない<sup>101</sup>。

孟春之月、日在<sup>レ</sup>宮室（中略）。東風解凍、蟄虫始振、魚上<sup>レ</sup>氷、瀬祭<sup>レ</sup>魚、鴻雁来。（中略）是月也、以<sup>レ</sup>立春。

原文を見ると一目瞭然だが、「月令」にいう東風解凍は、孟春月に起きる現象であり、立春日と対応するものではない。貫之歌に見られる東風解凍と立春とを直接に結ぶ論理関係の拠り所は、『礼記』ではなく、暦学者の内田正男氏が指摘する具注暦にあると考えるべきである<sup>102</sup>。

平安時代の具注暦の姿をそのまま残している『御堂関白記』自筆本を見ると、「立春」を記す箇所のすぐ側に「東風解凍」が書かれていることが分かる<sup>103</sup>。「東風解凍」は七十二候の冒頭に位置づけるもので、その七十二候と二十四節気との間には、対応関係が存在する。立春と対応するのは、まさに「東風解凍」である。『古今集』二番歌や四番歌に見られる、立春日に東風解凍を思う発想の淵源は、この対応関係を記す具注暦の中にあると考えられる。

しかしこの立春日に東風解凍が記された暦法は、最初から施行されたわけではない。『日本暦日総覧』によると、天平宝字七年までの暦法において、立春と対応する候は「鶏始乳」である<sup>104</sup>。「東風解凍」が立春の候になったのは、天平宝字七年八月から使用し始めた大衍暦からである。「東風解凍」と立春とを関連付ける発想が、『萬葉集』ではなく、『古今集』に初めて現れたのは、こういった暦法の事情とも関連していると考えられる。

「東風解凍」詠の成立の背景について述べてきたが、古代和歌の立春関連詠作の流れにおける『古今集』の意義という議論に戻ろう。平安和歌史における立春関連詠作の展開を考える際、『古今集』の持つもう一つの重要な意味は、初めて詞書の中に立春日を明記したことである。一番歌と二番歌の詞書に「春立ける日よめる」という文言がある。いずれも立春日に詠んだものと考えられるが、歌意を吟味すると、

実景と繋がりがなく、もっぱら立春という暦法概念に関する思索、想像が詠まれていることが分かる。立春日のでき事や、目にした風物ではなく、「立春」そのものが詠作のきっかけ、そして主題となったのである。以降の平安和歌に見られる「立春の心」や題詠の「立春」は全て、この『古今集』における「立春日」の歌を起点とするものと言っても過言ではなからう。

そして『古今集』巻頭歌群の持つもう一つの重要な意味は、「立春」を季節詠の春の巻頭に置くという試みである。「年のはて」を詠む歌を冬の巻末に、「年のうち」の立春を詠む歌を春の巻頭に置くという、太陰太陽暦における年末年始の繋がりにからみてやや変則的な配列にはなっているが、以降の平安和歌における季節詠の歌題配列の、一つの手本になったことは間違いない。以降の和歌において、立春関連詠作を春の巻頭に置くことが主流となったのも、この『古今集』の影響を抜きにしては考え難いものであろう。

『萬葉集』において、和歌の立春関連詠作の土台が完成されたが、それだけでは平安時代の膨大な立春歌群は生まれてこない。立春が平安和歌の季節詠の重要なテーマになりえたのは、最初の勅撰和歌集である『古今集』の強い影響力によるところが大きい。古代和歌における立春関連詠作の表現の基盤は、この『古今集』の成立によって整えられたと考えられる。

#### 第四節 立春関連詠作の風景

平安和歌の立春関連詠作は、一部の雑歌、恋歌を除けば、ほとんどの作品は季節詠として位置づけることができるものである。その季節詠の中においても多く詠まれた自然現象は、東風解凍とかすみとである。それらに次ぐのは立春の鶯である。本節はこの三つの立春風景が、平安和歌においてどのように詠まれていたのかを考察する。

東風解凍詠は『古今集』二番歌と四番歌とによって創出された題材である。平安和歌における東風解凍を詠んだ立春関連詠作は、いずれもこの二首を念頭において制作されたものと見られる。



まず、明らかに『古今集』の二首の表現を踏まえた例を見てみよう。

立春日

水の面にあやふきみだる春風や池の氷を今朝はとくらん

『友則集』、一

立春

顕季

うちなびき春はきにけり山川の岩まの氷今日やとくらむ

『堀河百首』、五

俊成卿家の十首歌中に、立春の心を人人よみ侍りける 源行頼

あふ坂の関ふきこゆる春風に小かはの氷今やとくらん

『玄玉集』、三六四

右の三首の、解凍を詠出する傍線部は、『古今集』二番歌（五句「いまやとくらむ」と四番歌（五句「今日やとくらむ」とを踏まえたものと見られる。また、歌の四句に解凍の主体を詠む点においては、『古今集』四番歌（四句「こほれる涙」とも一致している<sup>15)</sup>。三首はすべて『古今集』の東風解凍詠を踏まえた作と考えられる。

天曆御、御屏風歌、立春

今日とくる水にかけてぞむすぶらしちとせの春にあはんちぎりを

『順集』二、一六四

波線部は、『古今集』二番歌の「むすびし水を」を踏まえている。東風解凍に「ちとせの春にあはんちぎりを」を加えることで歌の慶賀の色彩がより濃厚になった、晴れの場にふさわしい格調の高い表現と言える。そしてこの歌から更に次のような歌が生まれる。

堀川院御時に立春の朝に御前にて、今日の心よめと宣旨ありければつかまつれる

君がためみたらし川を若水にむすぶや千世のはじめなるらん

『俊頼集』一、六八五

春立つ日よみ侍りける

新院御歌

うちなびき今日たつ春の若水はたがいた井にかむすびそむらん

『続詞花集』、二

「水」を「結ぶ」という『古今集』二番歌の表現に、「若水」という表現が加えられた。歌の公的な性格が一層強化された東風解凍詠である。

また『古今集』四番歌の「鶯のこほれる涙」の解凍を踏まえたものとして、

右大臣家人人に百首歌よませられ侍りしに、読めとありしかば、おなじ題を五首

春きぬと今朝つげわたる鶯は涙の水まづやとけぬる

『俊恵集』、一〇

讃岐院百首歌たてまつれとおほせられしとき、立春をよめる

春たてば水の涙うちとけて今日ぞなくなるたにの鶯

『教長集』、四

が挙げられる。そしてこの涙の解凍を人事に援用する例も見られる。

節分のつとめて、ある女に

西へゆく風もあらなんぬれごろもひとみこぼるる涙とかせん

〔為信集〕、一九)

立春

としくれし涙のつららとけにけり苔の袖にも春やたつらん

〔俊成集〕Ⅰ〔長秋詠藻〕、四八五

更には、

春二首 此日則立春也

氷とも人の心をおもはばや今朝たつ春の風にとくべく

〔能因集〕Ⅰ、一)

のような、人の心の「こほり」の解凍を詠む例も見られる。これらの歌の場合、『古今集』四番歌は必ずしも出典歌として位置づけられないが、「東風解凍」が意味する自然界の水の解凍を、生き物の涙に持っていくという発想の創出において、『古今集』四番歌は先蹤歌として重要な意味をもつと考えられる。

平安和歌の立春関連詠作における東風解凍の歌を一通り読み通すと、解凍の主体である水の表現に、豊富なバリエーションが存在していることがわかる。

又、春たつ

山みづの水とけつつはるくればぬるきかぜにもはやきなりけり

〔重之集〕、三九)

立春

月よめばけふはるたつひなりけりあしまの水とけやそむらん

『行宗集』、一八三

花園の左大臣仁和寺にて、立春のあまた人人によませられ侍りしに、よめる

山ざとは たな井の氷 とけ行くに春きにけりとみてしるかな

『俊恵集』、三

立春

顕輔

春たつと水のおもにぞ聞きそむる かけひの氷 とくるやま里

『実国家歌合』、六

など、様々な「こほり」が詠出されている。そして解凍するのは「こほり」にとどまらず、

讃岐院百首歌たてまつれとおほせられしとき、立春をよめる

みよしののやまぢのゆき をけさみればとくるやはるのしるべなるらん

『教長集』、五

立春

頼政

めづらしき春にいつしかうちとけてまづ物いふは 雪のした水

『実国家歌合』、八

に詠まれた「雪」や

春たつ心を

今朝みれば のきのたるひ もとけにけりしのぶ草に春やたつらん

『実家集』、二

に詠まれた「軒のたるひ」、また前掲俊成歌に見られる「涙のつらら」(『俊成集』一、四八五)なども詠歌の対象とされている。

一方、解凍の描写は、前掲例の傍線部からもわかるように、ほとんどが「とく」であるが、

あをやぎのいとよりかくる春くれば  
いけのこほりもほころびにけり

(『重之集』、四〇)

氷面の割れる現象を表す「ほろこぶ」や、

春たつ日

今朝みればみねに霞はたちけり  
谷の下水いまやもるらん

(『忠通集』、一)

解凍後の増水に着目する「もる」や、

春たつひ、ある所のおほせごとにて

うは氷とくるなるべし山川のいはまく清水音まさるなり

(『重之子僧集』、一)

解凍後の水音に注目する「まさる」など、いくつかの表現も見られる。

解凍の豊富なバリエーションに対して、解凍という現象をもたらす「風」がよまれたことは少ない。前掲の例を見ると、歌に風が詠まれた例よりも、詠まれていない例のほうが多いということがわかる。もちろん、視覚、聴覚を通じて確認できる「解凍」という現象に対して、それをもたらす「東風」の持つ表現の空間はやや狭いとも言えるが、多くの東風解凍詠の中に「風」が詠まれていなかったのは、当時の人々にとって、「解凍」が「東風」によってもたらされることが一つの自明の前提として存在していたためと考えられる。「解凍」を読めば、その背後に「東風」が存在していることは、具注暦の知識を持つ人間なら、言わずとも分かっている。そのため、「解凍」を詠む度

に、「それを引き起こすのは東風だ」と明言する必要がないと推測される。その中で、あえてその風を「東風」とせず、鴛鴦のおのがはぶく風と詠んだ俊成の、

をしのゐる池の水のとけゆくはおのがはぶきや春の初風

〔俊成集〕Ⅰ、四八四〕

は独特な面白味を持つ一首である。

このように、平安和歌の立春関連詠作に見られる、東風解凍の表現のバリエーションは多彩である。

次にかすみを詠む立春関連詠作の例を見てみよう。立春のかすみは、第三章に述べたように『萬葉集』に由来する、和歌における立春関連詠作の最初の題材である。その題材を詠む歌は勅撰集においてよく採られている。この点は、勅撰集に入集することの少ない東風解凍詠とは対照的である。前節に述べた東風解凍の特徴を念頭において平安和歌の立春かすみ詠を見渡すと、景物の主体である「かすみ」の表現のバリエーションは比較的に少ないということが分かる。「東風解凍」における「解凍」の主体が「こほり」、「ゆき」、「たるひ」、「つらら」、「解凍の描写が「とく」、「ほろぶ」、「もる」、「まさる」などを通じて表現されるのに対して、立春かすみ詠の表現は動詞「かすむ」と名詞「かすみ」という二語でまとめることできる。動詞「かすむ」の例に関して、その表現上のバリエーションは、「かすめる」〔後拾遺集〕、四、「かすむらん」〔俊恵集〕、七〕のような助動詞の差が見られる程度である。名詞「かすみ」に関しては、一般的に使用されている「かすみ」のほか、「春霞」〔新撰朗詠集〕、七、「朝霞」〔教長集〕、二、「八重霞」〔教長集〕、一〇、「霞の衣」〔玄玉集〕、三四八〕なども見られる。その「かすみ」の状態を表す動詞に関していえば、「たつ」の用例がもっとも多く、そのほか「たなびく」〔後拾遺集〕、五など、「たちかはる」〔金葉集〕二度本、一、「わたる」〔西行集〕Ⅰ、七、「着る」〔親盛集〕、一、「かかる」〔俊成集〕Ⅰ、二〇二、「く（来）」〔俊成集〕Ⅰ、四八二〕などが見られる。また「かすみひとむら」〔玄玉集〕、三五四〕という表現も一例見られる。

平安和歌における立春のかすみを詠む歌を見渡すと、その最も注目すべき特徴は、多彩な地名、歌枕が見られる点である。それを一覧す

ると、次のようになる。

「吉野山」(『古今集』、三)、「音羽山」(『後拾遺集』、四)、「小野山」(『覚性集』(『出観集』)、五)、「二見の浦」(『覚性集』、六)、「淡路島山」(『俊恵集』、五)、「難波の潟」(『経盛集』、一)、「逢坂の関」(『惟方集』、二)、「みかきの原」(『教長集』、二)、「末の松山」(『教長集』、八)、「須磨」(『経正集』、一)、「明石」(『経正集』、一)、「香具山」(『親盛集』、一)、「ふじの嶺」(『実国家歌合』、三)、「三輪の杉原」(『実国家歌合』、九)、「志賀のわたり」(『実国家歌合』、一九)、「賤機山」(『月詣集』、二) などである。

ここで想起してほしいのは、第三章において述べた「かすみ」の在来性である。それを示す『萬葉集』卷十の春雑歌冒頭の「霞」の歌群には、「天の香具山」(二八一二)、「卷向の檜原」(二八一三)、「卷向山」(二八一五)、「弓月が岳」(二八一六)、「朝妻山」(二八一七)、「朝妻の片山崖」(二八一八) などといった、具体的な地名が示されている。「かすみ」は在来性の強い景物であるため、このように、多くの歌の中で具体的な地名と一緒に詠まれたと考えられる。「立春霞詠」における景物の主体、及び動作に関する表現が限られている中、「かすみ」の在来性を生かした地名、歌枕のバリエーションによって、平安和歌における「立春霞詠」が展開していくのである。

東風解凍、立春のかすみに次ぐ題材は立春の鶯である。その中には、さらに『古今集』四番歌に由来する「鶯の涙」を詠むものと、鶯の谷よりいづる声なくは春くることを誰かつげまし

(『寛平御時后宮歌合』、二二)

春のはじめの歌

壬生忠岑

春きぬと人はいへども鶯のなかぬかぎりはあらじとぞおもふ

(『古今集』卷一・春上、一一)

に由来する、「春を告ぐ鶯」に二分される。「鶯の涙」を踏まえた歌については、東風解凍詠を述べた部分において見てきたので、今は「春を告ぐ鶯」について見てみよう。

立春の日、又ゆきふる

はるごとに鶯のみぞしらせけるとりのはらにやはなもこもれる

『重之集』、七七

花園の左大臣仁和寺にて、立春のあまた人人によませられ侍りしに、よめる

春来ぬと人こそいはめいつのまにけさ鶯の宿に告ぐらむ

『俊恵集』、一

右大臣家人人に百首歌よませられ侍りしに、読めとありしかば、おなじ題を五首

としのうちにさきにし梅に今日よりぞおのが春とも告げよ鶯

『俊恵集』、一二

立春

はるきぬとけさぞつぐなるうぐひすはねぐらの竹に一夜すぐして

『公重集』(風情集)、三〇三

右の四首は、いずれも鶯によつて春が告げられたことを詠むものである。俊恵歌にはこれといって新しい表現が見られないが、重之歌の「とりのはらにやはなもこもれる」は和歌に先例が見出し難い新しい表現である。一方公重歌の「ねぐらの竹に一夜すぐして」は院政期以降の歌の中に複数の例が見られる表現で、一例として『堀河百首』の竹の題に藤原顕仲の「うぐひすのねぐらにしむるなよ竹はいづれの枝かふしどなるらん」(一二三二)が挙げられる。

平安和歌の立春関連詠作に、東風解凍、かすみ、鶯以外の景物を詠む歌もあるが、どれも数の少ないものである。平安和歌に見られる立春風景作の主流を占めているのは、『古今集』において詠まれていたこの三つの景物である。



## 第五節 立春関連詠作の周辺

立春関連詠作は春の巻頭に位置するにふさわしい題であるが、春の巻頭に位置づけることのできる唯一の題材ではない。平安和歌の立春関連詠作以外の、春のはじめを意味する題材（初春題）を調べると、その中には、立春関連詠作と類似する歌表現を持つ歌が少なからず存在することが判明する。第一編第二章で挙げた『古今集』四番歌（巻一・春上）

二条の後の春のはじめの御歌

雪の内に春はきにけり鶯のこほれる涙今やとくらむ

の詞書にも見られる「春のはじめ」を題とする作品はその一例である。この歌が立春を意識した歌であることは既に第一部第二章において述べたが、立春と関係の薄い「春のはじめ」の歌も見られる。『好忠集』一（『曾丹集』の前半、いわゆる『毎月集』の中には「春のはじめ」と題する歌十首が見られるが、正月から十二月の歌を「上（はじめ）」、「中」、「をはり」の三つの題でまとめた『毎月集』の配列からみて、元日の歌群と見られる。また、

春のはじめ

春日野にけふもみ雪の降りしくは雲井に春のまたやこざらん

（『深養父集』一、一）

のような、立春か、元日か、それとも春の始まる頃を詠んだものかが判別しづらい例もある。この「春のはじめ」、あるいは「はじめの春」の題は、院政期までの和歌集の中によく見られるが、『堀河百首』成立以降になると、減少する傾向が見られる。題詠の「立春」が春のはじめの歌題という地位を確立したためと考えられる。

次は『輔親集』一、二に見られる「はつ春」の例である。

おやの家のぞうしずみにて、人人歌よむに、はつ春のこころ

去年の冬今年の春の徴には山の霞ぞたちへだてける

「春の徴としての霞」を明確に踏まえ、自然暦の季節感を第一義とする方法を用いた歌である。これは後に重要な季節歌題となった「初春」をテーマにした初期の作品であるが、その中に立春の意識が含まれているかどうかは判断し難い問題である。この「はつ春」の題は『金葉集』三奏本巻頭歌などにも見られる。

言葉上の意味を考えると、「立春」という特定の日を指す「春たつ」は狭義的な表現であるのに対して、「春のはじめ」、「はじめの春」、「はつ春」は春の始める頃とも解せる広義的な表現である。だが実際の歌の表現を見ると、両者の境界線は必ずしも明確なものではない。『好忠集』一の「春のはじめ」と題する歌にある次の三首はその例である。

みしま江につのぐみわたる葦のねのひと夜ばかりに春めきにけり

(三)

あなしがは春山かけてくる春のしるしとけさは水ぞぬるめる

(四)

なるたきのいはまの氷いかならし春のはつかぜよはにふくなり

(五)

傍線部が示すように、この三首は、春の始まる特定の日を意識したものであるが、前述のように、これは孟春月の一日を詠んだものである。元日を春の始まる日とする捉え方は、ほかに、

睦月の朔日、雪のふりけるに

藤原範永

春のたつしるしは見えて白雪のふりみまさる身とぞ成りぬる

『続詞花集』卷十八・雑下、八六六

元日

仲実

万代の春のはじめの今日しよりつかへまつらん年にあひつつ

『永久百首』春、二

に見られる。さらに元日に分類された歌の中にも「春の徴としてのかすみ」を詠んだ、

ついたちの日

源重之

よしの山みねの白雪いつきえて今朝は霞のたちかはるらん

『古今六帖』第一帖・春、一七

などが見られる。元日の風景と立春の風景とは、もはや詞書なしでは弁別できなくなったのである。なおこの歌は、「はつ春のこころをよめる」という詞書をもって『金葉集』三奏本の巻頭歌に選ばれている。

ここで注目したいのは、元日歌と立春歌との混同が見られるという点である。『堀河百首』に収められている俊頼の立春歌「庭もせにひきつらなれるもろ人のたちある今日やちよのはつ春」が、彼の私家集『俊頼集』一の巻頭に据えられているが、その詞書は「堀河院御時百首歌めしけるに元日の心をつかうまつれる」(二)となっている。この歌を康和五年元日詠とする推論が大井洋子氏に見られるが、確かなことはわからない。そして俊頼が単独撰者となって編纂していた『金葉集』においても同じ現象が見られる。即ち『堀河百首』に収められている顕季の立春歌「うちなびき春はきにけり山川間の氷今日やとくらむ」(五)は『金葉集』二度本、三奏本のいずれにも入集しているが、二度本の詞書は「堀河院の御時百首歌めしけるに立春の心をよみ侍りける」(二)であるのに対して、三奏本では「堀河院御時百首の歌めしけ

るに元日の心をつかうまつれる」(二)となっている点である。部立の整合性を考慮した撰者の作為なのか、三奏本の段階で元日となるテキストからそれをとったのかは不明だが、当時の季節観の中における立春詠と元日詠との境界線の曖昧さを示す恰好の材料である。

春のはじめと関連する題はほかにも「早春」、「初春」などがあげられる。

早春の心をよめる

太宰大弐長実

いつしかと春のしるしに立つものは朝あしたの原の霞なりけり

『金葉集』二度本卷一・春、六)

初春

岩間とぢし氷も今朝はとけそめて苔の下水みちもとむらん

『西行集』二(『西行上人集』、一)

に「春の徴としてのかすみ」や、「東風解凍」が詠まれたことから、これらの歌における季節表現と立春関連詠作のそれとの差は、必ずしも明確なものではなかったことが分かる。

一方景物、地名をテーマとする歌の中にも、立春詠の表現と類似する歌が存在する。歌題として『萬葉集』において登場するかすみがその典型的な例である。

霞を詠む

昨日こそ年ははてしか春霞春日の山にはやたちけり

『萬葉集』卷十、一八四三)

附録の立春関連詠作一覧表を見ると、勅撰集に入集することの多い立春のかすみは、私家集において登場する時期はかなり遅いということが分かる。しかしそれは「春の徴としてのかすみ」が一般的に詠まれていないということではない。立春が題詠として定着する前の段階

において、その題材は主に「かすみ」を題とする歌の中で詠まれていたためである。

右方を、また霞

あさみどり春をきぬとやみ吉野の山の霞のおびにみゆらん

『忠見集』一、七〇

霞

霞だにたちおくれせば春きぬとなにをしるしに人もしらまし

『能宣集』一、六八

霞

みよしのは雪ふりやまずさむけれど霞ぞ春のしるべなりける

『麗景殿女御歌合』、二二

右の三例はいずれも「春の徴として霞」を詠んだものである。

そのほかにも、

よしの山

よしの山雪かふあともたえにしを霞ぞ春のしるべなりける

『中務集』一、二二

のような例が見られる。立春関連詠作における「霞」は、これらの歌の蓄積によって形成されたものと考えられる。

このように、平安和歌の立春関連詠作の周辺には、それと類似する表現や方法を使用した様々な初春詠、景物詠、名所詠が存在する。その中には、実際に立春を意識した歌も存在していると考えられるが、立春詠とほかの初春詠との境界線が曖昧である以上、それを断定する

ことは困難である。しかしそういった歌の中には立春関連詠作の先蹤歌、あるいは派生歌が少なからず存在することは確かである。平安時代における立春関連詠作の流れは、決して立春をテーマにした歌のみによってできたものではなく、その周辺にある歌と交渉しながら形成されたものと考えられる。

## おわりに

今回の調査によって、約三百首の立春関連詠作を検出したが、現存する平安時代すべての立春関連詠作を網羅したわけではない。明らかに立春を意識しているのに、今回の調査方法では検出の対象に入らない例も少なからず存在している。『拾遺集』巻頭歌、

平定文が家歌合に詠み侍りける      壬生忠岑

春立つといふばかりにやみよし野の山もかすみて今朝は見ゆらん

『拾遺集』巻一・春、一

はその一例である。しかしこのような歌を検出の対象に入れると、キーワードで検索する方法は使えない上、個別検討を必要とする歌の数も大幅に増えるため、検出作業の中に含まれている主観的要素が一気に上がってしまう恐れがある。主観的な要素が多く入ってしまうと、検証が困難になるという弊害も伴うので、調査結果の再現性を考慮して、今回のような方法を取ったのである。それによって得られたデータはすべての立春関連詠作を収めたものではないが、平安和歌の立春関連詠作の全体の流れを概観するための資料としては十分であると考ええる。

それによって見えてきたもっとも大きな特徴は、やはり平安和歌に対する『古今集』の強い影響力であろう。第三節に述べたように、『萬葉集』歌は古代和歌における立春関連詠作の源として重要な意味を持っているが、『古今集』が『萬葉集』において創出された歌こと

ば、景物表現、そして立春に対する捉え方を継承していたからこそ、後の平安和歌に多くの立春関連詠作が生まれたと考えられる。

立春は中国の太陰太陽暦に由来する概念であるが、平安和歌の立春関連詠作の展開は、『古今集』の季節詠を土台とするものである。その中における中国文学の影響は必ずしも強いものではない。その独自性は次章の唐代の立春関連詠作の展開を見ることによっていっそう明瞭なものになると考えられる。

## 【注】

<sup>1</sup> たとえば隆信の私家集は、『新編国歌大観』では平安時代に分類しているのに対して、『新編私家集大成』では鎌倉時代に分類している。  
<sup>2</sup> 『新編私家集大成』『人麿集』解題、島田良二氏・竹下豊氏（新編補遺）、なお後藤利雄氏は『人麿集』を『拾遺集』以降の成立としている（『人麻呂歌集とその成立』第二編第二章、至文堂、一九六一）。

<sup>3</sup> 阿蘇瑞枝『人麻呂集・赤人集・家持集』（和歌文学大系17、明治書院、二〇〇四）当該歌注。

<sup>4</sup> 附録の「平安和歌の立春関連詠作一覧」に入っている歌については、歌集名と歌番号のみを掲げる。

<sup>5</sup> 『新編私家集大成』解題（『貫之集』萩谷朴氏・奥村恒哉氏、田中登氏（新編補遺）、『友則集』奥村恒哉氏、久保木哲夫氏（新編補遺））。

<sup>6</sup> 詞書にある「三月〇」が歌意に合わない問題について、『長能集注釈』（平安文学輪読会、塙書房、一九八九）当該歌注は「に」が「小」の誤写「尔」から生じたものとして、「三月小」という本文を提示している。

<sup>7</sup> 久松潜一氏・松田武夫氏・関根慶子氏・青木生子氏校注『平安鎌倉私家集』（日本古典文学大系80、岩波書店、一九六四）解説。

<sup>8</sup> 築瀬一雄氏『俊恵研究』（加藤中道館、一九七七）第三章第四節。

<sup>9</sup> 目加田さくを氏・中井一枝氏・堀志保美氏『小侍従集全釈』（新典者、二〇〇五）。

<sup>10</sup> 貫之歌の典拠を『礼記』の「東風解凍」とする注釈書は片桐洋一氏『古今和歌集全評釈』を始め、多くの『古今和歌集』注釈に見られる。

<sup>11</sup> 滝川幸司氏『天皇と文壇——平安前期の公的文学』（和泉書院、二〇〇七）第三編第四章。

<sup>12</sup> 内田正男氏『暦の語る日本の歴史』（吉川弘文館、二〇一二）第五章第三節。

<sup>13</sup> 長保元年十二月二十二日、寛弘元年正月七日などがその例である（近衛通隆氏監修『御堂関白記（一）』思文閣出版、一九八三）。

<sup>14</sup> 大谷光男氏・古川麒一郎氏・岡田芳朗氏・伊東和彦氏編『日本暦日総覧具注暦編（古代中期）第二版』（本の友社、一九九六）。

<sup>15</sup> 本節において引用された東風解凍の歌の囲み線部は解凍の主体（解凍前のものか、後のものかについては区分せず）を、傍線部は解凍の描写を表す言葉を示す。

<sup>16</sup> 「若水」に関する考察は、第三編第二章を参照。

<sup>17</sup> 大井洋子氏「散木集の二首をめぐって」（『和歌文学研究』二五、一九六九）。

#### 〔引用本文〕

『萬葉集』は『萬葉集（全四冊）』小島憲之氏・木下正俊氏・東野治之氏校注・訳（新編日本古典文学全集6・9、小学館、一九九四～一九九六）、全ての私家集は『新編私家集大成』（古典ライブラリー版）、その他の歌集（勅撰集、私撰集、歌合、定数歌集）は『新編国歌大観』（古典ライブラリー版）、『礼記』は『十三経注疏』（芸文印書館、一九七九）によった。なお漢字、仮名については一部を改めた。



### 第三章 唐詩における立春関連詠作の展開

#### はじめに

本章では、唐代の立春関連の漢詩について考察する。

「立春」を記す中国の文献は『礼記』『月令』の「是月也、以<sub>二</sub>立春<sub>一</sub>」がもつとも有名であるが、それと同じ記述は戦国時代の『呂氏春秋』『孟春紀』にも見られる。一方、二十四史の場合、「立春」に関する最古の記載は、『史記』『天官書』の「立春日、四時之始也」に見られる。このように、経、史、子の文献において、「立春」の用例の初見は前漢に下ることがない。しかし、この孟春の節、四時の始とされる「立春」の用例が詩という、文学性の強い分野において確認されるのは、南朝以降である。

『先秦漢魏晉南北朝詩』によれば、詩における「立春」の初見は、南朝陳徐陵「雜曲」の

立春<sub>メ</sub>歴日自<sub>レ</sub>当<sub>レ</sub>新、正月春幡底須<sub>レ</sub>故。

である。また、陳の後主陳叔宝にも二首の立春関連詠作が見られる。すなわち「立春日泛<sub>レ</sub>舟<sub>二</sub>玄圃<sub>一</sub>、各賦<sub>二</sub>一字<sub>一</sub>、六韻成<sub>レ</sub>篇」と「獻歲立春、風光俱美、泛<sub>レ</sub>舟<sub>二</sub>玄圃<sub>一</sub>、各賦<sub>二</sub>六韻<sub>一</sub>成<sub>レ</sub>篇」である。陳叔宝は宴遊を好む君主として有名であり、上巳、七夕、重陽などと関連する宴遊詩を残している。この二首もその宴遊詩のグループに属するものと見られる。当然散逸文献の中に立春関連詠作が存在する可能性も考慮する必要はあるが、南朝の詩に見られる「立春」が、その最後の王朝である陳の三例に留まっているという事実を鑑みると、やはり立春が

詩において注目される時代はそう古くないと考えるべきであろう。

ただし、「立春」という二文字が含まれていない、立春と関わる詠作は、陳以前にも見られる。『歳時雜詠』「立春」に収録された南朝梁劉孝威「剪綵花絶句」、南朝梁徐勉「詠<sub>三</sub>司農府春幡」の二首はそれである。「綵花」と「春幡」とは、いずれも立春の節物である。この立春節物、あるいは年中行事をテーマにしたものは、唐代においても見られる。『歳時雜詠』に、初唐宋之間「剪綵」、盛唐皇甫冉「東郊迎氣」、中唐雍裕之「剪綵花」、晚唐李勉「剪綵」の四首も立春の詩として収録されている。『全唐詩』に収録されている初唐沈佺期「剪綵」（卷八十五、三三）もその類のものである。本章は詩題、題下注、あるいは詩の本文に「立春」という表現が含まれているものを対象とするため、これらの詠作については触れないが、『歳時雜詠』所収の詩が示す通り、立春の節物（綵花、春幡）や行事（東郊迎氣）をテーマにしたこれらの詠作も、古代中国立春関連詠作の重要な形式と考えられる。

中国において、「立春」に関する詩作がある程度の数で残されているのは、唐からである。「立春」をキーワードとして「全唐詩検索系統」で検索した結果、合計六十六例を検出した。内訳は、詩題五十四例（題下注、「一作」の詩題も含め）、詩序〇例、詩本文十二例となる。その中から、まず「閑立<sub>三</sub>春塘<sub>一</sub>煙澹澹」（鄭谷「鷺鷥」）のような、節氣「立春」に当たらないものを除外した。その次に、詩題と詩本文との両方に「立春」を含んだ例を統合した。最後に、本文が類同する例、作者の異なる例を整理し、重複するものを省いた。その結果、合計五十六首の立春関連詠作を見出し得た。それを一覧にすると、次のようになる。

- 一・初唐李頎「立春日遊苑迎春」（卷二、一三）
- 二・初唐上官昭容「奉<sub>三</sub>和聖制<sub>一</sub>、立春日侍宴、內殿出<sub>三</sub>剪綵花<sub>一</sub>、應<sub>レ</sub>制」（卷五、二二）
- 三・初唐崔日用「奉<sub>三</sub>和立春遊苑迎春<sub>一</sub>、應<sub>レ</sub>制」（卷三十五、一四）
- 四・盛唐張九齡「立春日晨起對<sub>三</sub>積雪<sub>一</sub>」（卷三十七、一三）
- 五・初唐宋之間「奉<sub>三</sub>和立春日侍宴、內出<sub>三</sub>剪綵花<sub>一</sub>、應<sub>レ</sub>制」（卷四十、一）

- 六・初唐崔湜「奉<sub>三</sub>和春日幸<sub>二</sub>望春宮<sub>一</sub>」(一題「立春內出<sub>二</sub>綵花<sub>一</sub>」應<sub>レ</sub>制)(卷四十三、一二)
- 七・初唐李嶠「立春日侍宴、內殿出<sub>二</sub>剪綵花<sub>一</sub>」應<sub>レ</sub>制(卷四十七、四)
- 八・初唐閻朝隱「奉<sub>二</sub>和立春遊苑迎春<sub>一</sub>」應<sub>レ</sub>制(卷五十八、七)
- 九・初唐韋元旦「奉<sub>二</sub>和立春遊苑迎春<sub>一</sub>」應<sub>レ</sub>制(卷五十八、一八)
- 一〇・初唐李適「奉<sub>二</sub>和立春遊苑迎春<sub>一</sub>」(卷五十九、一三)
- 一一・初唐劉憲「奉<sub>二</sub>和聖制<sub>一</sub>、立春日侍宴、內殿出<sub>二</sub>剪綵花<sub>一</sub>」應<sub>レ</sub>制(卷六十、一)
- 一二・初唐劉憲「奉<sub>二</sub>和立春日、內出<sub>二</sub>綵花樹<sub>一</sub>」應<sub>レ</sub>制(卷六十、一一)
- 一三・初唐蘇頌「立春日侍宴、內出<sub>二</sub>剪綵花<sub>一</sub>」應<sub>レ</sub>制(卷六十二、一六)
- 一四・初唐蘇頌「人日兼<sub>二</sub>立春<sub>一</sub>、小園宴」(卷六十三、四四)
- 一五・初唐盧藏用「奉<sub>二</sub>和立春遊苑迎春<sub>一</sub>」應<sub>レ</sub>制(卷八十二、六)
- 一六・初唐馬懷素「奉<sub>二</sub>和立春遊苑迎春<sub>一</sub>」應<sub>レ</sub>制(卷八十二、三四)
- 一七・初唐沈佺期「立春日內出<sub>二</sub>綵花<sub>一</sub>」應<sub>レ</sub>制(卷八十五、一)
- 一八・初唐沈佺期「奉<sub>二</sub>和立春遊苑迎春<sub>一</sub>」(卷八十五、六二)
- 一九・初唐武甄「奉<sub>二</sub>和立春內出<sub>二</sub>綵花樹<sub>一</sub>」應<sub>レ</sub>制(卷九十一、一〇)
- 二〇・初唐趙彥昭「奉<sub>二</sub>和聖制<sub>一</sub>、立春日侍宴、內殿出<sub>二</sub>剪綵花<sub>一</sub>」應<sub>レ</sub>制(卷九十二、一)
- 二一・盛唐孫逖「和<sub>下</sub>左司張員外自<sub>レ</sub>洛使入<sub>レ</sub>京中路、先赴<sub>二</sub>長安<sub>一</sub>、逢<sub>二</sub>立春日<sub>一</sub>、贈<sub>二</sub>韋侍御等諸公<sub>一上</sub>」(卷百七、一)
- 二二・盛唐孫逖「和<sub>下</sub>左司張員外自<sub>レ</sub>洛使入<sub>レ</sub>京中路、先赴<sub>二</sub>長安<sub>一</sub>、逢<sub>二</sub>立春日<sub>一</sub>、贈<sub>二</sub>韋侍御等諸公<sub>一上</sub>」(卷百七、四五)
- 二三・盛唐李頎「寄<sub>二</sub>司勳盧員外<sub>一</sub>」(詩本文に「秦地立春伝<sub>二</sub>太史<sub>一</sub>」とある)(卷百二十三、一七)

- 二四、盛唐岑参「題<sub>二</sub>苜蓿峰<sub>一</sub>寄<sub>二</sub>家人<sub>一</sub>」（詩本文に「苜蓿峰辺逢<sub>二</sub>立春<sub>一</sub>」とある）（巻百九十、四七）
- 二五、盛唐包佶「立春後休沐」（巻百九十四、一九）
- 二六、盛唐杜甫「立春」（巻二百十八、二三）
- 二七、盛唐杜甫「雨」（詩本文に「已度<sub>二</sub>立春<sub>一</sub>時」とある）（巻二百二十、七五）
- 二八、盛唐張繼「人日代<sub>二</sub>客子<sub>一</sub>、是日立春」（巻二百三十一、三八）
- 二九、中唐顧況「山徑柳」（詩本文に「年年立春後」とある）（巻二百五十六、七）
- 三〇、中唐耿漳「立春日宴<sub>二</sub>高陵任明府宅<sub>一</sub>」（巻二百五十七、六四）
- 三一、中唐竇常「途中立春寄<sub>二</sub>楊郇伯<sub>一</sub>」（巻二百六十、一七）
- 三二、中唐竇常「立春後言<sub>レ</sub>懷招<sub>二</sub>汴州李匡衡推<sub>一</sub>」（巻二百六十、二八）
- 三三、中唐李益「立春日寧州行營因<sub>レ</sub>賦<sub>二</sub>朔風吹<sub>二</sub>飛雪<sub>一</sub>」（巻二百七十二、一九）
- 三四、中唐冷朝陽「立春」（巻二百九十四、三三）
- 三五、中唐張南史「宣城雪後還望<sub>二</sub>郡中<sub>一</sub>寄<sub>二</sub>孟侍御<sub>一</sub>」（一作「立春後、開元觀送<sub>二</sub>強文學還<sub>レ</sub>京<sub>一</sub>」）（巻二百八十五、一四）
- 三六、中唐李応「立春日曉望<sub>二</sub>素雲<sub>一</sub>」（巻二百五十七、一三）
- 三七、中唐陳師穆「立春日曉望<sub>二</sub>素雲<sub>一</sub>」（巻三百五十七、一四）
- 三八、中唐李季何「立春日曉望<sub>二</sub>素雲<sub>一</sub>」（巻三百五十七、一五）
- 三九、中唐盧仝「人日立春」（巻三百七十六、一六）
- 四〇、中唐白居易「立春後五日」（巻四百二十、二六）
- 四一、中唐白居易「立春日酬<sub>二</sub>錢員外曲江同行見<sub>レ</sub>贈<sub>一</sub>」（巻四百二十六、三三）

- 四二. 中唐白居易「六年立春日人日作」(卷四百四十九、三八)
- 四三. 中唐皇甫曙「立春日呈<sub>二</sub>宮傳侍郎<sub>一</sub>」(卷四百七十九、八)
- 四四. 中唐李紳「發<sub>二</sub>壽陽<sub>一</sub>、分司敕到、又遇<sub>二</sub>新正<sub>一</sub>感懷書<sub>レ</sub>事」(題注に「七年正月八日立春、在<sub>二</sub>壽陽凡四年<sub>一</sub>」とある)(卷四百六十九、二一)
- 四五. 中唐王初「立春後作」(卷四百八十、二二)
- 四六. 晚唐李遠「立春日」(卷五百十二、一)
- 四七. 晚唐李郢「酬<sub>二</sub>劉谷立春日吏隱亭見<sub>レ</sub>寄<sub>一</sub>」(卷五百八十三、八)
- 四八. 晚唐李郢「立春一日江村偶興」(卷五百八十三、二八)
- 四九. 晚唐陸龜蒙「立春日」(卷六百十六、一六)
- 五〇. 晚唐羅隱「自<sub>二</sub>湘川<sub>一</sub>東下、立春泊<sub>二</sub>夏口<sub>一</sub>、阻<sub>レ</sub>風登<sub>二</sub>孫權城<sub>一</sub>」(卷六百五十、八)
- 五一. 晚唐羅隱「京中正月七日立春」(卷六百五十七、三八)
- 五二. 晚唐吳融「渚宮立春書<sub>レ</sub>懷」(卷六百七十八、八)
- 五三. 晚唐韋莊「立春日作」(卷六百九十、二)
- 五四. 晚唐韋莊「立春」(卷六百九十、四四)
- 五五. 晚唐曹松「立春日」(卷七百十一、六)
- 五六. 前蜀花蕊夫人徐氏「宮詞一百五十七首之八」(詩本文に「立春日進<sub>二</sub>內園花<sub>一</sub>」とある)(卷七百九十三、一)
- 以下、初唐、盛唐、中唐、晚唐という時代順に沿って、唐代における立春関連詠作の特徴を考察していく。

## 第一節 初唐の立春関連詠作

初唐の立春関連詠作は合計十九首が見られる（一〇三、五〇二）。そのうちの十八首は、君臣唱和の場で詠まれたものである。この十八首の作品群は、中宗李顕一首、女官上官昭容一首、そして修文館と関わる臣下十四名の十六首（崔湜詩（六）を除くと十五首）によって構成されている。修文館は、初唐武徳年間設置された機構で、「中宗景龍二年、始於修文館置大学士四員、学士八員、直学士十二員」（『新唐書』卷二百一・李適伝）とあるように、大学士、学士、直学士の職が設けられて、中宗時代の宮廷文学の重要な拠点となった場所である。十四名の臣下側の作者は、いずれもその修文館の大学士、学士、直学士に任命されたことのある人物であり、唯一の女官上官昭容も修文館と深く関わる人物として知られている。唐代の立春関連詠作の約三〇％を占めるこの作品群だが、全て中宗景龍年間の応制作と見られる。そのうち詩題に「遊苑迎春」が含まれるものは景龍二年十二月、「綵花」が含まれているものは景龍四年一月八日に制作されたものと考えられる。なお、『歳時雜詠』において、「和立春日内出綵花樹」の題で初唐張説と、初唐岑羲との二首も収録されているが、『全唐詩』では、両詩が中宗の「幸望春宮」の際の応制作として収録されている。

これらの作品は、陳後主の立春関連詠作と同じく、公的な性格を持つものと見られる。初唐の宮廷詩の全盛期とされる景龍年間に制作されたこの二つの作品群は、総じて君主賛美、帝都称揚の色彩が鮮明である。数例をあげると、

願得長繩繫取日、光臨天子萬年春<sup>一</sup>。

（閻朝隱「奉和立春遊苑迎春」、応制）

年年斗柄東無限、願挹瓊觴壽北辰<sup>一</sup>。

（韋元旦「奉和立春遊苑迎春」、応制）

天杯慶壽齊南岳<sup>一</sup>、聖藻光輝動北辰<sup>一</sup>。

などがそれである。中身の無い太平を粉飾するような当時の時代性を物語る作品群である。そしてそれらの詩における「立春」に対する捉え方も、李適詩(一〇)の「金輿翠輦迎<sup>二</sup>嘉節<sup>一</sup>、御苑仙宮待<sup>二</sup>獻春<sup>一</sup>」といったような、迎春の喜びを述べるものばかりである。

初唐のもう一首の立春関連詠作は、蘇頌の「人日兼<sup>二</sup>立春<sup>一</sup>、小園宴」である。詩の内容から見て、迎春の宴における集団創作の一首と見られる。君主こそ不在であるが、創作の場合は、修文館学士群の「遊苑迎春」の作品群と類似していると言える。

このように、初唐詩に見られる「立春」は、全て公的な場と密接な関連性を有するものである。詩の制作が求められる場がまず用意され、その後場の性格にふさわしい詩が制作されたのである。制作の場に強く依存しているため、この時期の「立春」は題材としての独立性が低いと言える。君臣唱和による天下太平の演出の一コマとして存在している修文館学士群の立春関連詠作はその典型的なものである。

そして景龍四年の剪綵花作品群を最後に、君臣唱和の立春関連詠作は唐詩の舞台から姿を消したのである。これには以下のような理由が考えられる。西村富美子氏が言うように、「初唐の時代の詩壇は天子自らが組織した学士集団がその主流を占めていた」。全体として作品の散逸は激しいけれど、現存初唐詩の多くは、やはり当時の主流である宮廷文学に属するものである。しかし新体詩の完成という役割を果たした後、君臣唱和を中心とする宮廷文学は盛唐における個人の抒情詩の抬頭に伴い、翳りを見せ始めたのである。盛唐にも多くの君臣唱和の作が生まれたが、文学作品として高い評価を受けることなく、まもなく歴史の流れの中で湮滅されたのである。その散逸した宮廷文学の中に、立春関連詠作も含まれているかもしれないが、今ではそれを知るすべはない。ただしあったとしても、その様相は、初唐の修文館学士群の立春関連詠作とさほど変わらないことは想像される。立春関連詠作の新たな展開は、宮廷から離れた新しい場を必要としているのである。

## 第二節 盛唐の立春関連詠作

盛唐時代の立春関連詠作は合計九首が見られる（四、二二―二八）。数としては四つの時代の中で一番少ないが、立春関連詠作の史的展開を見る時、その転換点に位置するものはこの盛唐時代である。場に強く依存する公的な立春関連詠作が姿を隠したこの時代において、「立春」は、個人の抒情詩の中で、自覚的に詠まれ始めたのである。

張九齡「立春日晨起對『積雪』」（四）は、公的な性格の強い初唐のものと、私的な性格の強い盛唐のものとを繋ぐ一首である。そのことは、公的な性格の強い初唐のものとは明らかに異なるその詩題からも窺える。「立春」に関わる行事が行われたから詩が詠まれたのではなく、「忽對『林亭雪』、瑤華處處開」というように、立春の雪の美しさに詩興が催され、一首が制作されたのである。しかし天子が自ら行う「東郊迎氣」という公的な行事を踏まえた「今年迎氣始、昨夜伴春回」と「東郊齋祭所、応見五神來」との二聯を見ると、公的な性格から脱却し切れていない性格も指摘できる。「東郊迎氣」は立春祭祀のことで、その原型は『礼記』『月令』の「天子親帥三公、九卿、諸侯、大夫以迎春於東郊」である。この行事に関する唐代の資料は、次の『旧唐書』の二つが挙げられる。

自是立春、立夏、立秋、立冬之日、各於其方迎氣所用、自分別矣。

（『旧唐書』卷二十三・封禪志）

丁丑、親迎氣于東郊、祀青帝。

（『旧唐書』卷九・玄宗開元二十六年）

これに関する詳細な考察は、簡濤氏の著書に見られる<sup>10</sup>。崔日用の立春関連詠作（三）の「乘時迎氣正璿衡、灞澹煙氣向晚清」もこの行事を詠んだものである。なお、『歳時雜詠』の立春部に収録されている、張九齡詩の和詩である孟浩然「立春日對雪」（『全唐詩』では「和張丞相春朝對雪」）として収録されている）の中にも「迎氣當春至、承恩喜雪來」と、「東郊迎氣」を意識した表現



が見られる。

唐代立春関連詠作の展開において、特に重要な意味をもつものは、杜甫の「立春」（二六）である。題材としての「立春」の独立は、この杜甫の詩から始まる。

立春

杜甫

春日春盤細生菜、忽憶二兩京梅發時<sup>一</sup>。

盤出<sup>二</sup>高門<sup>一</sup>行<sup>二</sup>白玉<sup>一</sup>、菜伝<sup>二</sup>織手<sup>一</sup>送<sup>二</sup>青絲<sup>一</sup>。

巫峽寒江那對<sup>レ</sup>眼、杜陵遠客不<sup>レ</sup>勝<sup>レ</sup>悲。

此身未知歸定所、呼<sup>レ</sup>兒覓<sup>レ</sup>紙一題<sup>レ</sup>詩。

春の節物である「春盤」に触発された都への思いを述べる首聯に続いて、天子から「春盤」が下賜された場面を回想する頷聯を経て、地方滞留の苦悩を述べる頸聯、そして未来に対する不安を述べる尾聯によって構成される一首である。

この詩において、「立春」は初めて場という制限から解放され、独立の題材として詠まれたのである。詩の内容には、宮廷における春盤の下賜という公的なものも含まれているが、それを受けて詠まれたのは、張九齡詩に見られるような万人共通の迎春の喜びではなく、都から離れた我が身を哀れむ私的な抒情である。立春関連詠作の創作の主流が公的な慶賀から私的な抒情へと転換したことを象徴する一首である。

この詩に見られる、節日に注目する姿勢は、杜甫のほかの作品の中にも確認できる。既に先行論が指摘するように、杜甫は民俗や節日に對して高い関心を持っている<sup>二</sup>。杜甫が詩において「立春」を一つの独立した題材として扱ったのは、節日民俗を積極的に詠む彼の創作の姿勢が関係していると考えられる。

そしてこの杜甫の詩にも見られるように、盛唐において、新しい捉え方で「立春」を詠む詩が現れたのである。すなわち、客寓立春、旅

中立春というものである。杜甫詩のほか、「昔蓓峰辺逢<sub>レ</sub>立春<sub>一</sub>、胡蘆河上淚沾<sub>レ</sub>巾。閨中只是空相憶、不<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>沙場<sub>一</sub>愁<sub>二</sub>殺人<sub>一</sub>」と留守中の妻の気持ちを推し量って悲しむ岑参「題<sub>二</sub>昔蓓峰<sub>一</sub>寄<sub>二</sub>家人<sub>一</sub>」(二四)や、「人日兼<sub>二</sub>春日<sub>一</sub>、長懷復短懷。遥知双彩勝、併在<sub>二</sub>金釵<sub>一</sub>」と「客子」の立場に立つて詠んだ張継「人日代<sub>二</sub>客子<sub>一</sub>、是日立春」(二八)なども挙げられる。「綵勝」は人日の節物で、当時はその日にそれを簪の上に飾る習俗があった。しかし故郷を離れた客子はそれを行うことができない、故に彼は自分の分の綵勝が、妻のものと一緒に妻の「金釵」に飾られているのではないかと想像しているのである。

この客寓立春、旅中立春という題材の創出によって、詩における立春関連詠作の抒情空間が広げられたと言える。

さらに杜甫詩に見られる、立春を対比の対象として用いる方法も注目すべきである。杜甫詩において、節物の春盤が目に触れることで、長安で経験した立春の記憶が喚起され、その結果、都、朝廷から遠く離れた身という今の立場が再確認され、「杜陵遠客不<sub>レ</sub>勝<sub>レ</sub>悲」という情緒が引き起こされたのである。この立春、あるいは立春の民俗行事を、消極的な事象、あるいは情緒と対比的に用いる方法は、以降の立春関連詠作においても多く見られる。「心与<sub>二</sub>青春<sub>一</sub>背、新年亦掩<sub>レ</sub>扉」と老齡のため新しくやってきた春を素直に喜べないと詠んだ大暦年間の詩人包佶の「立春後休沐」(二五)はその一例である。

盛唐の立春関連詠作に関するもう一つの特色は、皇帝不在の場における寄贈、唱和の立春関連詠作の出現である。孫逖の同題詩二首

(二二、二三)、及び岑参詩(二四)、李頎詩(二三)はそれにあたる。岑参の詩は前述のとおり、留守中の妻を思いやった作品である。

孫逖の詩は「寒尽歳陰催、春帰物華証」、「河辺淑氣迎<sub>二</sub>芳草<sub>一</sub>、林下輕風待<sub>二</sub>落梅<sub>一</sub>」というように立春の到来を喜ぶべき事象として捉えるものである。この点は、初唐の立春関連詠作に通じるものがあるが、君臣唱和による太平演出といったような桎梏に捕らわれることなく、立春を迎えた喜びと、相手に対する思いとがゆったりと述べられた一首である。一方「秦地立春伝<sub>二</sub>太史<sub>一</sub>、漢宮題柱憶<sub>二</sub>仙郎<sub>一</sub>」と詠んだ李頎詩の上句は、『礼記』『月令』の「先立春三日、大史謁<sub>二</sub>之天子<sub>一</sub>曰、某日立春、盛徳在<sub>レ</sub>木」を踏まえたもので、この寄贈詩が都(秦地)にいる虚象のもとに届く時期が立春前後であろうと推測する表現となっている。このように、単調気味な初唐の立春関連詠作と異な

り、盛唐詩に見られる、「立春」に対する捉え方は多彩である。

盛唐の立春関連詠作の数は少ないが、詠作の場の転換、客寓立春や旅中立春という捉え方の創出、そして立春を対比的に用いる手法の運用など、初唐の立春関連詠作と一線を画する特徴が多く見られる。それ以降の立春関連詠作の展開は、概ねこの盛唐の流れを汲んだものである。

### 第三節 中唐の立春関連詠作

中唐の立春関連詠作は合計十七首が見られる（二九〇四五）。作品数は初唐に次ぐ二番目の多さである。公的な性格からの脱却を実現した盛唐の「立春」像は、中唐において更なる展開を迎えたのである。

杜甫「立春」のような、「立春」を一つの独立した題材として扱う例は冷朝陽「立春」（三四）と盧仝「人日立春」（三九）とが挙げられる。冷朝陽の詩は、首聯から尾聯までが立春と関わる表現で一貫しており、「詠立春」とも言うべき作品である。

そして中唐において、寄贈、唱和の性格を持つ立春関連詠作も複数確認される。竇常「途中立春寄楊郇伯」（三一）、「立春後言懷招沐州李匡衡推」（三二）、張南史「宣城雪後還望郡中寄孟侍御」（三五）、白居易「立春日酬錢員外曲江同行見贈」（四一）、皇甫曙「立春日呈宮傳侍郎」（四三）などがそれである。これらの詩に見られる「立春」は、詩全体に関わるキーワード的な存在である場合が多い。立春に出逢う（出逢った）ことが、詩の創作の重要なきっかけとなったのである。一例として竇常「途中立春寄楊郇伯」（三一）を見てみよう。

浪跡終年客、驚心此地春。

風前獨去馬、河畔耦耕人。

老大交情重、悲涼外物親。

子雲今在<sup>レ</sup>宅、応<sup>レ</sup>見<sup>二</sup>柳条新<sup>一</sup>。

「客」の状態での「立春」との出逢いを驚くことから始まり、故郷の柳の芽吹きに思いを寄せることで結ぶ一首である。立春は詩の首聯と尾聯とにおいて、重要な意味を持っていることが分かる。

そして旅中、客寓立春を詠む例も複数確認できる。前掲寶常詩（三一）もそうだが、地方に左遷された牛僧孺（循州）、楊嗣復（潮州）、李宗閔（封州）らの、洛陽の春を見ることのできない苦境を想像した白居易「六年立春日人日作」（四二）の「試作<sup>二</sup>循潮封眼<sup>一</sup>想、何由得<sup>レ</sup>見<sup>二</sup>洛陽春<sup>一</sup>」や、寿陽における四年の任期が終える際に詠んだ李紳の詩（四四）もそうした例である。

中唐において、もっとも多くの立春関連詠作を残したのは白居易である。彼もまた節日民俗に対して高い関心を持つ詩人として知られている。張勃氏の調査によると、白居易は数多くの節日関連詠作を制作している<sup>120</sup>。特に多く制作されていたのは、寒食（二十四首）、重陽（十七首）、除夜（十四首）、元日（十三首）と関連する詠作である<sup>121</sup>。それらに比べると、立春詠の数は決して多くはない。彼が立春関連詠作三首を残したのも、彼のもつ節日に対する高い関心によるものと考えられる。

中唐の立春関連詠作の中には「立春日曉望<sup>二</sup>三素雲<sup>一</sup>」と題する三首（三六―三八）が存在する。『歳時雜詠』と『文苑英華』によると、この詩題は貞元十一年進士試験の題目である。三首の作者はいずれもこの一首の詩しか残っていない詩人である。「三素雲」は道教の概念で、立春との関連性は不明というほかない。「茲辰三見後、希得<sup>レ</sup>從<sup>二</sup>元君<sup>一</sup>」（李応詩）、「彩光浮<sup>二</sup>玉輦<sup>一</sup>、紫氣隱<sup>二</sup>元君<sup>一</sup>」（陳師穆詩）、「年年瞻<sup>二</sup>此節<sup>一</sup>、応<sup>レ</sup>許<sup>二</sup>從<sup>二</sup>元君<sup>一</sup>」（李季何詩）を見ると、立春日に「元君」（女性の仙人）に従うという表現が共通している。しかし『四庫全書』を調べても、「立春」と「三素雲」及び「元君」との関連性は容易に見出すことができない<sup>122</sup>。典拠とされる文献が既に散逸してしまった可能性も否定できないが、道教的な表現が中心となったこの三首はほかの立春関連詠作に比べるとかなり特殊であることは確かである。

中唐の立春関連詠作は、概ね盛唐のそれを継承している。ただし、題詠のような立春詩が現れることや、立春関連の贈答唱和の詠作の重みが増した点などから見ると、詩の題材としての立春の独立化は着実に進んでいたことが窺い知れる。その傾向が一層進んだのは次の晩唐時代である。

#### 第四節 晩唐の立春関連詠作

晩唐の立春関連詠作は合計十首が数えられる（四六～五五）。この時代になると、詩における立春の重みは更に増したのである。十首中、計五首は、立春だけを題にしたものである。すなわち李遠「立春日」（四六）、陸龜蒙「立春日」（四九）、韋莊「立春日作」（五三）、韋莊「立春」（五四）、曹松「立春日」（五五）である。それ以前の「立春」だけを題にしたものは、杜甫と冷朝陽との二首のみである。詩において、立春が一つの独立した題として不動の地位を獲得したのは晩唐であったことが分かる。

次に内容から見ると、この時代の立春関連詠作のもっとも注目すべき特徴は、立春関連詠作の二分化である。即ち現実に目を向けるものと、そうではないものである。

まず前者の例を見てみよう。この場合の立春は、個人の不遇や天下の情勢との対比として詠まれることが多い。典型的な例を一首あげると、

立春一日江村偶興

李郢（四七）

旧曆年光看<sub>レ</sub>卷尽、立春何用<sub>二</sub>更相催<sub>一</sub>。

江辺野店寒無<sub>レ</sub>色、竹外孤村坐見<sub>レ</sub>梅。

山雪乍晴嵐翠起、漁家向<sub>レ</sub>晚笛声哀。

南州近有<sub>二</sub>秦中使<sub>一</sub>、聞道胡兵索<sub>レ</sub>戰来。

がそれである。

そのほか「道孤逢<sub>二</sub>識寡<sub>一</sub>」、身病買<sub>レ</sub>名遲。一夜東風起、開<sub>レ</sub>簾不<sub>二</sub>敢窺<sub>一</sub>」と老病不遇を詠んだ陸龜蒙「立春日」（四九）や、「近聞驚<sub>レ</sub>御火、猶及<sub>二</sub>灞陵西<sub>一</sub>」と戦乱を心配する吳融「渚宮立春書<sub>レ</sub>懷」（五二）、「九重天子去蒙<sub>レ</sub>塵、御柳無情依<sub>レ</sub>旧春」と唐僖宗が都を捨てて四川へ逃げるといふ時事を示す王政の荒廢に相変わらずやってくる立春の無情さを対比させる韋莊「立春日作」（五三）なども挙げられる。これらの作品において、本来喜ぶべき節日である立春は、不幸、不遇、不安などの消極的な事態、情緒との対比の対象として位置づけられているのである。「立春」を対比の手法で用いる例は、杜甫「立春」（二六）に既に見られるが、様々な場面において用いられるようになったのは晩唐である。

一方後者の立春は、「一二三四五六七、万木生芽是今日。遠天帰雁拂<sub>レ</sub>雲飛、近水遊魚迸<sub>レ</sub>冰出」と季節風物のみを目を向け、遊戲的に詠む羅隱「京中正月七日立春」（五一）や、「罽袍公子樽前覺、錦帳佳人夢裡知。雪圃乍開紅菜甲、綵幡新剪綠楊糸」と女性美の世界に目を向けた韋莊「立春」（五四）があげられる。

この現実を目を向けるものとそうではないものとに二分化する傾向は、晩唐詩全体において見られる現象であり<sup>51</sup>、立春関連詠作に見られるこの特徴も、晩唐詩の性格を反映したものと言える。

## 第五節 成立の背景と詠作の姿勢

立春関連詠作の史的展開に関する考察を踏まえ、その成立の背景について考えてみよう。

「立春」はいわゆる「四立」の一つで、中国伝統の四季観の中では、春の到来を示す節として位置づけられている。そしてそれが伝統的

な政治観の中においても重要視されていることは、「四立」の祭祀の作法を記す『礼記』月令の記載によって分かる。この太陰太陽暦の概念が、詩という題材において注目されるようになったのは、以下のような背景が考えられる。

まずあげられるのは、詩における季節に対する関心の高まりである。詩の中で季節の風景が詠まれたことは『毛詩』まで遡ることができるが、季節の風物が詩にとつての重要な素材として注目されるようになったのは、南朝以降である。山水詩の発達により、様々な景物が季節を詠むための素材として扱われるようになったのである。そして創作が重ねられていくうちに、景物の季節性に焦点を当てた詠物詩が生まれたのである。季節の風物を詠む六朝の詠物詩を見ると、その中には既に、季節に対する高い関心が読み取れる。

兔園標<sup>二</sup>物序<sup>一</sup>、驚<sup>レ</sup>時最是梅。

(中略)

知<sup>レ</sup>応<sup>二</sup>早飄落<sup>一</sup>、故逐<sup>二</sup>上春<sup>一</sup>来。

(梁何遜「詠<sup>二</sup>早梅<sup>一</sup>詩」『藝文類聚』卷八十六・梅)

垂<sup>レ</sup>陰滿<sup>二</sup>上路<sup>一</sup>、結<sup>レ</sup>草早知<sup>レ</sup>春。

(梁簡文帝「詠<sup>レ</sup>柳詩」『藝文類聚』卷八十九・楊柳)

梅を詠む一首と柳を詠む一首である。引用句から分かるように、両詩には、詠作対象の季節性も詠まれている。「驚<sup>レ</sup>時最是梅」、「結<sup>レ</sup>草早知<sup>レ</sup>春」が示すように、ここでの梅と柳とは春をいち早く示す景物として位置づけられている。このように、六朝の山水詩、詠物詩の発達により、詩における季節に対する関心が高まったのである。そしてそれがやがて暦法上の立春と結びついて、詩における「立春」の登場を促したのである。この六朝の詠物詩の季節感を受け継いだのは、杜甫詩(二六)の「春日春盤細生菜、忽憶<sup>二</sup>兩京梅發時<sup>一</sup>」、竇常詩(三一)の「子雲今在<sup>レ</sup>宅、応<sup>レ</sup>見<sup>二</sup>柳条新<sup>一</sup>」である。「立春」を認知することで、初春の景物に関する記憶が蘇ったのである。同じことは、羅隱詩(五一)の「遠天歸雁拂<sup>レ</sup>雲飛、近水遊魚迸<sup>レ</sup>冰出」についても言える。これは『礼記』月令の孟春月の「是月也、以立春(中略)東風解凍、鴻

雁来、魚上<sub>レ</sub>氷」を踏まえたものである。詩における季節に対する関心が高まる中、その春の到来を示す「立春」が注目されるようになったと考えられる。

二つ目の理由は、立春の節日化による影響である。立春行事の初期の形態は、『礼記』月令に記載されている迎春の祭祀である。簡濤氏はその儀式が正式に行われたのは後漢であるという考えを示した<sup>80</sup>。氏の考察によると、後漢時代における立春の祭祀は、厳かなものだが、時代が下るにつれ、立春の行事が節日の色彩を帯びるようになり、その内容も多彩になっていくのである。そして六朝における詠物詩の流行の中で、立春の節物を詠む作品が生まれたのである。本章の冒頭にあげた劉孝威「剪綵花絶句」、徐勉「詠<sub>二</sub>司農府春幡<sub>一</sub>」はその初期のものである。それを受け継いだ唐代の立春節物詠は、既に冒頭にあげたが、そうではない立春関連詠作の中でも、節物がよく詠まれている。初唐の宮廷唱和作に見られる「綵花」、「綵燕」、「綵鷄」、杜甫詩に見られる「春盤」、「生菜」、冷朝陽詩に見られる「土牛」、韋庄詩に見られる「題<sub>二</sub>宜春<sub>一</sub>」などがそれである<sup>81</sup>。そしてその節日化に伴うのは、立春日の宴会、遊覧を描く詩作の増加である。その濫觴は本章冒頭にあげた陳後主の二首の立春関連詠作であり、初唐宮廷詩の作品群、蘇頲「人日兼<sub>二</sub>立春<sub>一</sub>」、小園宴<sup>82</sup>（一四）、耿漳「立春日宴高陵任明府宅」<sup>83</sup>（三〇）などがそれに続く。立春の節日化によって、それと関わる民俗、行事が詩の素材として加わり、節日立春の詠が成立したのである。

立春関連詠作の成立背景と関係するのは、立春に対する捉え方である。唐代の立春関連詠作には、主に以下の三種類の捉え方が見られる。まずは春を迎える喜びを述べるものである。初唐の君臣唱和の作品群はその典型的なものである。次は立春日に故郷、都への思慕を述べる作品である。杜甫「立春」<sup>84</sup>（二六）はその代表作である。最後は晩唐に多く作られている立春日に健康、仕官、天下の情勢などに対する不安や憂慮を述べる作である。

このように、唐代の立春関連詠作において、迎春の喜び、旅中の郷愁、新春の苦悩など、立春に対する多様な捉え方が確認される。唐代の詩人達にとって「立春」は単に春の到来を示す節気であるだけではなく、故郷や都への思いを引き起こすものであり、苦悩の念、感傷の情を催す節日でもあったのである。



## おわりに

初唐の中宗時代の活潑な宮廷文学の創作は、数多くの君臣唱和の立春詠作を生み出し、詩のテーマとしての「立春」の可能性を示した。盛唐になると、詩人達が自発的に立春に注目し、独詠ともいえるべき立春関連詠作を詠むようになった。そして立春に対する捉え方も多彩になり、立春だけを題目とする詩も現れたのである。次の中唐時代においても、数々の詠作が行われ、立春関連詠作の表現の世界が一層広げられたのである。晩唐の場合、日々廃れる政治、時世と、いつものようにやってくる新しい立春との対比に注目した立春詠が作られ、晩唐特有の立春像が創出されたのである。

唐代の立春関連詠作の史的展開を見る際、とりわけ重要な意味を持つのは杜甫の「立春」(二二八)である。この詩を境に、唐代の立春関連詠作は大きく変わったのである。まず詩の性格の面からいうと、杜甫の詩は公的な立春関連詠作から私的な立春関連詠作への転換点に位置する作品である。次に立春に対する捉え方というと、杜甫以前の立春関連詠作は迎春の喜びを述べるものばかりだが、それ以降のものは辺地に滞在する時の郷愁、天下の情勢に対する憂慮、加齢による老衰の嘆きなど、様々な捉え方が見られるようになったのである。また「立春」を一つの題材として独立させたのも、この杜甫の詩である。さらに杜詩に見られる、対比の中で「立春」を表現する方法も、後の立春関連詠作に大きな影響を与えたと考えられる。このように、杜甫の「立春」は、様々な意味において、唐代の立春関連詠作の史的展開の中において、重要な位置を占める一首と言える。

唐代の立春関連詠作は、一つの作品群として当時の人々が持つ立春観を示す最良の材料であると同時に、それ以降の立春関連詠作を方向づけるものとして、大きな影響を發揮し続けたと考えられる。

【注】

<sup>1</sup> 于欧洋氏『南朝皇族文学研究』（博士論文、東北師範范大学、二〇一三）第六章第五節。

<sup>2</sup> 全唐詩檢索系統 (cls.hs.yzu.edu.tw/QTS/)。

<sup>3</sup> 鄭谷の例のほか、曹脩古「池上」の「佳人南陌上、翠蓋立春風」、花蕊夫人徐氏「宮詞、一百五十七首之六」の「每日日高祇候处、滿堤紅艷立春風」、同「宮詞、一百五十七首之一百一十八」の「亭高百尺立春風」、引<sup>2</sup>得君王<sup>1</sup>到此中<sup>2</sup>も除外した。

<sup>4</sup> 統合したのは白居易「立春後五日」、同「六年立春日人日作」、李郢「立春一日江村偶興」の三例。

<sup>5</sup> 省いたのは竇常「立春後言」懷招<sup>1</sup>汴州李匡衡推<sup>2</sup>と重複した令狐楚の同題詩、張繼「人日代<sup>3</sup>客子<sup>1</sup>、是日立春」<sup>2</sup>と重複した陸龜蒙「人日代<sup>3</sup>客子<sup>1</sup>」（題注に「是日立春」とある）、冷朝陽「立春」の一部と重複した曹松「客中立春」の三首である。

<sup>6</sup> 王殊寧氏「唐景龍年間修文館学士考略」『社会科学論壇』（七、二〇〇六）、李宜蓬氏「上官婉儿与中宗文壇」『北方論叢』（二、二〇一〇）。

<sup>7</sup> 西村富美子氏「初唐期の応制誌人——景龍年間の修文館学士群」『四天王寺女子大学紀要』九、一九七六。

<sup>8</sup> 祝良文氏『初唐宮廷詩考論』（博士論文、華東師範大学、二〇〇五）上編、余論。

<sup>9</sup> 注七に同し。

<sup>10</sup> 簡濤氏『立春風俗考』（上海文芸出版社、一九九八）。中村喬氏『中国歳時史の研究』（朋友書店、一九九三）をも参照。

<sup>11</sup> 李霞鋒氏・李桂英氏「試析杜詩中的唐代節日民俗」（『杜甫研究學刊』二、一九九五）、林弘氏「杜甫与唐代節令習俗研究」（『杜甫研究學刊』四、一九九六）。

<sup>12</sup> 張勃氏『唐代節日研究』（中国社会科学出版社、二〇一三）第四章第二節。

<sup>13</sup> 同右。

<sup>14</sup> 『文淵閣四庫全書電子版』（迪志文化出版）。

<sup>15</sup> 章培恒氏・駱玉明氏編『中国文学史』（復旦大学出版社、二〇〇五）第四編第六章。

<sup>16</sup> 注一〇に同じ。

<sup>17</sup> 唐詩における立春民俗の表現に関する整理は、注一二張勃氏の著書第一章第一節に見られる。

〔引用本文〕

『礼記』は『十三經注疏』（芸文印書館、一九七九）、『史記』は『史記』（中華書局、一九五九）、『旧唐書』は『旧唐書』（中華書局、一九七五）、『新唐書』は『新唐書』（中華書局、一九七五）、『藝文類聚』は『藝文類聚』（上海古籍出版社、一九八二）、『先秦漢魏晉南北朝詩』は彫龍シリーズ、『歳時雜詠』は『文淵閣四庫全書電子版』（迪志文化出版）、『全唐詩』は『全唐詩』（中華書局、一九六〇）によった。なお漢字については一部を改めた。

## 第三部

## 第一章 菅原道真の年内立春詠

### はじめに

本章では、年内立春を意識した、菅原道真の二首の漢詩「立春」（『菅家文章』巻四、二七八）と「元年立春」（『菅家後集』、四九二）について考察する。

「立春」詩は、仁和四年（八八八）十二月、讃岐守在任中の作である。一方の「元年立春」詩は、延喜元年（九〇一）十二月、大宰府時代の作である。両詩の創作背景は大きく異なるものの、いずれも辺地に滞在した時の詠である。この両詩において、道真は年内立春の季節構造を巧みに利用して独創的な季節表現を創出し、その中に自身の境遇と感情を緻密に織り込むことで、独自の年内立春世界の構築に成功した。和歌の世界に多く見られる季節詠としての年内立春詠と異なつて、詠懐を目的とするこの二首は極めて個性的なものである。しかし年内立春詠として大いに注目された『古今集』巻頭歌に比べ、この二首に関する研究はまだ十分とは言えない。従来 of 注釈に見られる語釈の問題もさることながら、道真はなぜ辺地に滞在した際に年内立春詠を作ったのかという大きな問題も残されている。第一部第一章の考察を踏まえ、本章は作品論という視点から、「立春」と「元年立春」とをそれぞれ讃岐時代と大宰府時代との詩人の心境を表す作品として位置づけた上で、両詩の新しい解釈の可能性を検討したい。

## 第一節 「立春」——「閑客」の苦悶と希望

まず讃岐時代の「立春」詩を見てみよう。

立春 在二十二月廿六日

偏因曆注覺春來 偏に曆注に因り春の來たることを覺る、

物色人心尚冷灰 物色と人心と 尚冷灰なり。

誣告浪徒氷下動 誣告す 浪 氷下より動くことを、

暗思花在雪中開 暗思す 花 雪中に在りて開くことを。

浮雲自後寒応暖 浮雲 自後これよりのち 寒さ応に暖かなるべし、

壯日如今去不廻 壯日 如今いま 去りて廻らず。

消息窮通皆有運 消息と窮通と 皆運あり、

莫言壻戸不驚雷 言うなかれ 壻戸 雷に驚かずと。

（『菅家文草』卷四、二七八）

曆と現実とのギャップを描いた首聯だが、実は詩人自身の理想と現実との間の落差を意識したものである。注目したいのは副詞「偏」の使用である。副詞「偏」を「ひとえに」と訓読するのが一般的であるが、和語の「ひとえに」は漢語の副詞「偏」の同義語ではない。副詞「偏」に「ことさら」や「あやにくに、人の気も知らないで」などの意味も含まれているという点については、既に小川環樹氏による指摘がある。『広韻』によると、偏の字義は「不正也。鄙也。衰也」である。「衰」は正当ではない、邪惡を意味する言葉で、「不正」と「鄙」と同じく負のイメージを含む言葉である。その字義を根源とした「偏」は、副詞として使用される際に、公正ではない、道理に合わない、期

待はずれなどといった負のニュアンスを持つ場合が多い。白居易の例を挙げると、例えば「客中守<sub>レ</sub>歳」（『白氏文集』卷十三、六九八／卷十三、六九四）にある「畏<sub>レ</sub>老偏驚<sub>レ</sub>節、防<sub>レ</sub>愁預惡<sub>レ</sub>春」がそれである。白居易が「節」に驚いたのは、今年の大晦日がとりわけおかしいなどの理由ではなく、彼自身が「老」に畏怖しているからである。異常のない「節」に対して驚きを覚えたという「不正」を表わすための「偏」と考えられる。類似の用例は道真詩文の中にも少なからず確認できる。

偏信琴書学者資、三余窓下七条糸。

「停<sub>レ</sub>習弾<sub>レ</sub>琴」（『菅家文草』卷一、三八）

がその一例である。首聯にある「偏信」とは「ひたすら信じる」ことであるが、それは決して「篤信」のような賞賛すべき行為ではない。その詩意は、「琴も学者にとって必須な資質だ」とむりやり信じこんだ結果、多くの日々を無駄にしまった、というものである。当初「琴書学者資」と信じ込んだ自分に対する反省が、この「偏」によって表現されたのである。このように、詩文の中に使われる副詞「偏」を解釈する際は、和訓の「ひとえに」の語義に囚われず、その中にある負のニュアンスを注意深く読み取る必要がある。

では「立春」詩における「偏」はどういう「不正」を現しているのだろうか。結論から言うと、この「偏」は「事実与希望相反（事実と希望とが相反する）」という負のニュアンスを含んだ表現と考えられる。周知のとおり平安時代の改暦及び頒暦は全て朝廷によって行われるものであり、陰陽寮によって頒行される具注暦は王権と密接な関係を有している。そしてその具注暦によって定められた春、夏、秋、冬は、何よりもまず王権の中心である都の四季を規定するものである。たとえ実際の四季が精確に反映されていないとしても、平安京の貴族達はその暦を唯一の基準にして、年中行事を定め、一年の日程を立てていた。貴族たちにとっての具注暦は、都の一年の生活の基準表に相当するものである。そしてこの基準表によって定められた都の四季と年中行事の空間とは本来、「公事でもある宮廷詩宴で「言志」を行い、「詩」をもって国家に仕える「臣」という詩臣を理想とする道真が直接に関わるべき世界である。しかし、辺地に赴任することで、道真は都の四季と年中行事の世界から疎外されることとなった。その疎外感が一種の苦痛となって彼を幾度も悩ませ、「苦思洛下新年事、再到二

家門「一夢中」(「旅亭除夜」『菅家文章』卷三、二二三)、「今日低<sub>レ</sub>頭思<sub>二</sub>昔日<sub>一</sub>」紫宸殿下賜<sub>二</sub>恩盃<sub>一</sub>」(「九日偶吟」『菅家文章』卷四、二六七)といったような作品を残すこととなった。そのような苦悶の日々の中で、都の季節環境との唯一の繋がりとして機能しているのは具注暦である。しかし暦を頼りに都の季節を認知することが、却って彼に都から疎外された実感をもたらしてしまい、結局詩人の苦痛は増すばかりであった。この詩において、道真が暦に対して消極的な感情を抱いたのはそのためである。恐らく彼の本当の願いは、都にいて、天子の側で、臣下達と共にこの春の到来を祝い、詩臣としての務めを果たすことであろう。その希望が叶わず、暦のみを頼りに春の到来を認識せざるを得ないという事象に直面した時の落胆を表すために、「偏」が用いられたのである。類似した用例は、「元年立春」詩の尾聯にもあるが、それについてはまた後述する。

では首聯下句の表現を見てみよう。「物色人心尚冷灰」は一見讃岐の冬がもたらした結果のように思われるが、実は上句と同様に、辺地に赴任している道真の苦悶の心境を描いたものである。というのも、讃岐守在任中の作品の中には、類似した心情や景色描写が数多く見られるので、それらの表現を詠作当時の具体的な景色や状況に還元して解説するよりは、まず讃岐時代の道真の心境の基調を反映するものとして見るべきである。以下、心情表現を中心に類例を見ていく。

強勸<sub>二</sub>微心<sub>一</sub>雖<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>死、頻収<sub>二</sub>落涙<sub>一</sub>自為<sub>レ</sub>悲。

(「同<sub>二</sub>諸小兒<sub>一</sub>」旅館庚申夜、賦<sub>二</sub>静室寒灯明之詩<sub>一</sub> 『菅家文章』卷三、二二一)

挫折した志を失わないように強いて励もうとしたが、結局頻りに涙を収めて悲しまずにいられない、ということである。「落涙」について、川口久雄氏は「旅愁、辺愁、辺地に赴任していることの憂愁から涙をこぼすこと」と解釈している。詩臣の志が実現できず、辺地に赴任するという不本意な境遇にひどく落ち込んでいる道真の心境を描く一聯である。

早起灰心坐、冥冥是夢魂。

(「早春閑望」『菅家文章』卷三、二一五)



道家の雰囲気は漂う二句だが、これは表向きの虚像にすぎない。影響こそあるが、道真は生涯にわたって道家思想によって現実の苦悶から超脱することがない。「早春閑望」の「閑」は、白居易の閑適詩の中に多く見られるような、好ましい状態を表す言葉ではない。谷口孝介氏が指摘するとおり「道真が「閑」を言うばあいにはことばとは裏腹に焦燥感がそこには看取される」。この詩もその一例である。上句の「灰心」は、莊子が主張した理想的な心身の状態を指すものではなく、下句の「夢魂」と関わる、晴れない気持ちを表現する言葉である。「夢魂」というのは、古代、夢を見る際、魂が肉体から離れていくという考え方からの表現で、唐詩に多くの用例が見られる言葉である。道真がどのような夢を見たのかははっきりしないが、「思家竹」（巻三、二二六）や「秋雨」（巻四、二七〇）に詠まれた「客夢」と推定して良い（前掲の「旅亭除夜」も参照）。その「客夢」から目覚めた道真の落胆ぶりを表すのは、「灰心」という言葉である。

従<sub>二</sub>初到<sub>一</sub>任心情冷、被<sub>レ</sub>勸<sub>二</sub>春風<sub>一</sub>適破顔。

（「春日尋<sub>レ</sub>山」『菅家文草』巻三、二一八）

仁和三年春のこの作は一番分かりやすく、上句が示すように、讃岐守赴任して以来、道真の晴れない気分は長く続いていたのである。

一方、景色描写に関して、例えば

花凋鳥散冷<sub>二</sub>春情<sub>一</sub>、詩興催来試出行。

（「春日独遊三首」（その二）『菅家文草』巻四、二四八）

自<sub>レ</sub>古人言春可<sub>レ</sub>楽、何因我意凜<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>秋。

（「春詞二首」（その一）『菅家文草』巻四、二八二）

などがあげられる。詳論する余地はないが、在京の時期に多く作られた春の詠作と比較すれば、景色描写における落差は歴然としている。辺地赴任の苦悶が景物に投影した結果と考えられる。

このように、讃岐守時代の作品の中から、意気消沈の表現は随所に見出すことができ、冷たい色調の景色描写も少なからず確認できる。

それらの作品を前提に、「立春」詩にある「物色人心尚冷灰」の状態を考えると、これは単なる現実の冬がもたらした一時的なものではなく、讃岐守赴任以来の暗い心境と密接な関連性を有する表現であることが理解できよう。このように、首聯の叙述の根底には、讃州時代の苦悶の情が流れているのである。

続いて『新撰朗詠集』にも引かれた頷聯の表現を見てみよう。春に関する想像が展開されるこの二句は、技巧に凝った対句である。ところでこの二句の表現を道真早年の作「臘月独興」（卷一、二）の頷聯「冰封水面聞無浪、雪点林頭見有花」と比べると、両詩における氷・浪と雪・花との景物設置が同じであるだけではなく、景物の虚实関係もまったく一緒であることが分かる。注目したいのは両詩における表現手法上の差異である。「臘月独興」の場合、浪が聞き取れず、花も雪の譬えとして詠まれたのに対し、「立春」の場合、浪が動き出し、花が咲き始めるという想像が展開されている。実際の景色には大差がないものの、道真は両詩の季節設定、即ち「年内立春」と「臘月」とに沿って、意図的に異なった表現手法（「臘月独興」の場合は「聞」、「見」などの実際の景物に着眼しているのに対し、「立春」の場合は「誣告」、「暗思」という想念の中の景物に注目している）を取ったのである。

この一聯について、もう一つ留意したい点がある。律令用語「誣告」の使用である。「誣告」とは「自今以来、諸年八十以上、非誣告殺傷人、佗皆勿坐」（『漢書』卷八・宣帝紀）という一文が示すように、故意に事実を偽って告訴することを意味する犯罪の一種である。それを詩の中に用いる例は唐代にはなく、後代においても稀である。そして何より、道真のような自分の想像という意味で使用された例はない。「誣告」が日本においても律令用語として受容されていたことは、『律』名例律第一の「初位非職事者、品秩卑微、誣告反坐、与白丁無異、故不用比徒之律」などから確認できる。また『日本三代実録』貞観八年九月二十二日条の中には「貞観之初、与左大臣源朝臣信有隙。数年之後、誣告大臣謀为反逆」という一文があつて、道真もその言葉の意味を熟知していたことが窺える。これらの点から考えると、「立春」詩における「誣告」の使用は、漢詩の中に律令用語を用いる傾向を持つ道真による独創である可能性が見えてくる。浪が氷の下より動き出すと告げたことは空言だという認識が、「誣告」によって表現されたのである。一方、下句の「暗思」も事実でないと

いうことを背景に持つ表現で、花が雪の中に咲いているという想像は、心の中に秘めているものである。「誣告」と「暗思」との二語によって、二つの春に関する想像は何れも自分を慰めるために作ったウソであることが明らかとなり、告ぐと思うという二つの行為の中に含まれる心もとなさも的確に描出されたのである。首聯に書かれた冷灰の心境をうけ、この任地における立春を素直に喜べない気持ちも、この二語によって見事に表現し得たのである。

讃岐の苦悶の日々を人生の冬だとすれば、一年後に控える任満帰京は、道真にとって人生の新たな春を意味しているに違いない。この胸に秘めた気持ちが吐露されたのは、「立春」詩後半の四句である。

領聯において詠まれたのは、帰京後の人生に対する期待感と任地で消耗した人生に対する喪失感である。ところが『菅家文草』の本文を確認すると、対句が整っていないということが分かる。頸聯と領聯との対は七言律詩の法則であり、生涯に渡って多くの七言律詩を作った道真の作として、『菅家文草』の本文「浮雲自後寒夜暖、壮日如今去不廻。」は不審であると言わざるをえない。調べた限り、この一聯が整った対句の形となったのは、『新撰朗詠集』（立春）に収められた同詩の本文のみである。

浮雲自後寒夜<sup>レ</sup>暖、壮日如今去不<sup>レ</sup>帰。

『菅家文草』の本文と比べると、上句の「夜」が「応」となり、下句「廻」が「帰」となる二つの異同が見られる。まず「夜」と「応」との異同に関して、対句や句意の面から見て「応」は本来の形と考えられる。両者の書写例の中に形の近いものもあるので、『菅家文草』の本文は「夜」の誤写である可能性が高い。一方、「廻」と「帰」との異同について、「帰」は「立春」詩の脚韻に合わないもので、『菅家文草』の本文に劣ることは明白である。両者が共に和訓「カヘル」を持つという点がその異文を生み出す原因だと推測される。なお『新撰朗詠集』の諸本中で、鎌倉期の書写と言われるハーバード大学付属フィッツ美術館所蔵本では「浮雲自後寒夜暖、壮日如今去不廻」となっている。今回は、この本文を用いて、句意の考察を進めることとする。

まず問題となるのは浮雲という景物が詠まれた理由である。確かに「浮雲」は道真愛用の詩語の一つであるが、その多くの用例の中で、

「立春」詩の解釈と関連するものはない。ところでこの詩について、『菅原道真（日本漢詩人選集）』が指摘するように、白居易の次の用例との関連性が注目される<sup>10</sup>。

潯陽遷客為<sub>二</sub>居士<sub>一</sub>、身似<sub>二</sub>浮雲<sub>一</sub>心似<sub>二</sub>灰<sub>一</sub>。

（贈<sub>二</sub>韋練師<sub>一</sub>）『白氏文集』卷十七、一〇二四／卷十七、一〇一八）

年内立春とまったく関係のない作品であるが、都から離れた「遷客」という生活状態と「心似<sub>レ</sub>灰」という精神状態は、「立春」詩を創作する際の道真の心境と幾分類似していることが認められる。この詩は白居易が江州司馬に左遷された時の詠作で、その場合の「浮雲」は白居易自身の比喻として使われている。道真の場合、左遷とは言えないが、都より離れた身という点においては、白居易と共通している。しかも彼が讃州刺史という身分に不平不満を抱いていることは、既述したとおりである。道真が讃州の客という自意識のもとで、白居易の詩に強い共感を覚えたことは十分に考えられる。白居易詩にある「身似<sub>二</sub>浮雲<sub>一</sub>」と「心似<sub>レ</sub>灰」とは本来、功名心を捨てた無欲無想の状態を指す比喻であるが、それを独自の創作意識で解説したのが道真である。遷客であるゆえに、体が都と離れた浮雲のようになった、遷客であるゆえに、打ちひしがれた心が灰のようになった。白居易の詩に対して、こういった解説が道真において可能であれば、「立春」頷聯にある「浮雲」は、白居易詩を踏まえた比喻表現としてみることができよう。

「浮雲」を道真自身の比喻表現として解釈するもう一つの理由は、頷聯の二句の対応関係にある。上句を単なる叙景とすれば、詠懐の下句との対応はかなり悪くなる。対句のバランスの面から見ても、やはり上下ともに詠懐が含まれる句として解釈するのが妥当である。

詠懐の下句を見てみよう。「壯日」という言葉の使用が白居易の影響を受けた点は既に指摘されたとおりである<sup>11</sup>。注目したいのは、類似した表現が歳暮題材の中に使われているという点である。

壯日苦曾驚<sub>二</sub>歲月<sub>一</sub>、長年都不<sub>レ</sub>惜<sub>二</sub>光陰<sub>一</sub>。

（「歳暮道<sub>レ</sub>情」）『白氏文集』卷十五、八九八／卷十五、八九二）

窮陰急景坐相催、壯齒韶顏去不廻。

〔歳暮〕『白氏文集』卷十七、一〇五三／卷十七、一〇四六

歳暮に老を慨嘆するのは、漢詩によくあるパターンである。そのことを熟知した道真が歳暮の特徴を備えた年内立春の時期（十二月後半）に着眼し、頷聯の下句を作ったのではないか。同様に、上句の「寒応暖」も、年内立春の中にある立春の要素を意識した表現と見られる。しかし、頻りに作品の中で老を嘆いた白居易と違って、道真の「壮日」慨嘆には深いわけがある。道真にとっての「壮日」は、本来中央において詩臣として務めるべき日々である。そうであるはずの時間が任地讃岐に費やされたことから、彼はやるせない気持ちで胸がいっぱいだったであろう。辺地に消耗した我が「壮日」は、もう取り戻すことができない。頷聯の下句にはこのような意味が含まれている。詩意は、「今の自分の身は都から離れた浮雲のような存在であるが、いよいよあと一年で、都へ帰還できる。この立春がやってきて、世界が暖くなるように、私の身も、帰還する日が近づくに連れ、暖かくなっていくのであろう。とは言うものの、いままで讃岐で消耗した時間はもう取り戻せない」となる。道真の立春詩が作られたのは仁和四年十二月、讃岐守の任期がのこりあと一年の時点である。年内立春の特徴を踏まえながら、当時の複雑な心境を如実に描く一聯である。

尾聯の表現を見てみよう。人生の得意と不得意とを天運に任せるという上句の表現は、白居易詩の中でも多く見られるものである。用語の面から、道真詩と比較的近いものとして、次の一聯が挙げられる。

窮通与二榮悴一、委運随二外物一。

〔曲江感秋〕『白氏文集』卷十一、五七二／卷十一、五六九

しかし表現こそ類似しているが、人生の遇と不遇、成長と衰退とを悉く運に任せて外物にしたがうという白居易の姿勢は、詩臣を唯一の目指すべき道とする道真には到底真似できないものである。「立春」詩尾聯上句にある「消息」と「窮通」とに対する余裕ぶりの裏には、来たるべき都への帰還を見通した詩人の自信を覗かせる。それを証するように、上句においてある程度の超脱を示した後、下句にはすかさず今

後の栄転に対する期待が述べられている。ここで注目したいのは「驚雷」という表現である。『礼記』月令を踏まえた表現であるが、次に挙げた白居易詩の影響をも受けていると推測される。

晦厭<sup>二</sup>鳴鷄雨<sup>一</sup>、春驚<sup>二</sup>震蟄雷<sup>一</sup>。

旧恩収<sup>二</sup>墮履<sup>一</sup>、新律動<sup>二</sup>寒灰<sup>一</sup>。

(酬<sup>二</sup>盧秘書<sup>一</sup>二十韻)『白氏文集』卷十五、八〇八／卷十五、八〇四)

これは服喪があけた元和八年、都に帰還して、太子左贊大夫に任ぜられた時の詠である。『新釈漢文大系』にいうように、「春驚<sup>二</sup>震蟄雷<sup>一</sup>」は「白居易の復職活動を指す」ものであり、「新律動<sup>二</sup>寒灰<sup>一</sup>」は、「田舎に蟄居隠遁していた白居易が再び官吏として活動する気になった」ことを指すものである<sup>55</sup>。「立春」詩と比較すると、まず気づくのは、都から離れた生活を送った時の心境を表す言葉として、白居易詩にある「寒灰」が、「立春」詩にある「冷灰」と幾分類似している点である。白居易はそういった状態の中で、太子左贊大夫に任命されるという「震蟄雷」を受け、一新された生活を迎えた。それを受けた道真も、「冷灰」状態だった自身に、類似した「驚雷」効果を期待していたに違いない。彼にとつての春雷は、今の「窮」の状態を変える力を持つ、都への栄転の吉報にはかならない。このように、尾聯の下句に秘められているのは、再び詩臣として天子の側で仕官する日の到来に対する、道真の切なる期待である。詩意は、「今の私は扉や窓の隙間が泥で塞がれた部屋の中で明け暮らしているが、いざ春雷(朝廷からの吉報)が轟いたら、地中に潜った蟄虫がそうであるように、私もそれに驚かされて目を覚ますのだろう(詩臣として出仕する)」、となる。「墮履」とは諸先行論が指摘したとおり『毛詩』や『礼記』に典故を持つ表現であり<sup>56</sup>、初唐の宋之問「冬宵引贈<sup>二</sup>司馬承禎<sup>一</sup>」にも「河有<sup>レ</sup>氷兮山有<sup>レ</sup>雪、北戸墮兮行人絶」(『全唐詩』卷四十、四五)と見られる。冬の防寒対策の一つと考えられる。一方「驚雷」とは、先掲した白居易詩にある「春驚<sup>二</sup>震蟄雷<sup>一</sup>」と同じく、春の節気の一つである「驚蟄(啓蟄)」を意識した表現と考えられる。道真はこの結句において、詩臣としての中央帰還に強い期待感を示すと同時に、「墮履」と「驚雷」との二語を使って、年内立春の特徴をも見事に表現し得たのである。

道真が讃岐時代の自身の生活状態を「閑客」の時期、「失道」の時期と位置づけていることは自作の中に述べたとおりである<sup>15</sup>。「失道」は「詩臣」の勤めが果たせなかったことを指す言葉であり、「閑客」も自分の理想的な生き方ではない状態を意味する言葉である<sup>15</sup>。その悶々たる日々の中で、彼を終始支えてきたのは、任期を終えた後、再び詩臣として中央に出仕できるといふ希望である。その苦悶と希望とが入り混じった複雑な心境が、「立春」詩において、巧に詠出されたのである。道真がこの時生涯に三十回近くも経験した年内立春を題材としたのは、自身の境遇と共通するものをそこから感じ取ったためであろう。その共通するものから発展されたのが「立春」詩にある、「現実の冬」と「想像の春」との対比構造である。その構造の裏には、「任地の冬」と「都の春」、または「苦悶が溢れる現実」と「希望のある未来」という二重のカラクリが仕掛けられている。詩人の詠懐は、その曲折のある抒情と複雑な表現手法によって実現され、一首はいかにも道真らしい精巧さと晦渋さを備えた作品として仕上げられていたのである。

## 第二節 「元年立春」——「遷客」の絶望と忠貞

延喜元年十二月十九日、道真が追放先の大宰府において、人生二十九回目の年内立春を迎えた。「立春」詩を作った年から、既に十四年の月日が経っていた。大宰府に流された今、道真はなぜ再び年内立春に詩情を催したのだろうか。その主な理由は以下の二点にある。一つ目の理由はこの立春の年、延喜元年にある。後述のように、延喜改元が道真にもたらした衝撃は、絶望そのものであった。かつてない絶望の中で迎えた立春は、詩人に強い刺激を与えた。その刺激こそが、「元年立春」詩を生み出す原動力である。もう一つの理由は年内立春の特徴、即ち冬の十二月に春が立つという構造にある。その冬と春とが交錯する構造は、既に断腸の思いに駆られている詩人の気持ちに更なる揺さぶりをかけ、天下の春と我が身の冬という、強烈な孤独感を味わせたのである。そのような絶望と孤独とが詩情を募らせ、一首を創作せしめたと考えられる。

元年立春 十二月十九日

天啓長寒万物凋 天 長寒と万物の凋むことをあは慄れぶ、

晚冬催立早春朝 晚冬 早春の朝の立つことを催す。

浅深何水氷猶結 浅深 何れの水か氷猶結べる、

高卑無山雪不消 高卑 山として雪の消えざることなし。

根拔樹応花思斷 根拔けたる樹 応に花思絶ゆべし、

骨傷魚豈浪情揺 骨傷むる魚 豈に浪情揺がんや。

偏憑延喜開元曆 偏に延喜開元の曆を憑んで、

東北廻頭拌斗杓 東北に廻頭して 斗杓を拌す。

『菅家後集』、四九二

この詩に関して、柳澤良一氏により詳しい注釈が施されている<sup>3)</sup>。そのため、本章では、主に「元年立春」詩に見られる天下の春と我が身の冬という対比構造の解説と、「読「開元詔書」」（『菅家後集』、四七九）との関連性の検討という二点から、考察を進めることとする。

まず注目したいのは前半の四句に見られる世界全体を言い表す発想である。首聯の上句にある「万物凋」は天下の冬を表し、それに対して頸聯は天下の春を表している。讃岐時代の「立春」詩に比べると、両詩における年内立春の表現の差は歴然としていることが分かる。「立春」詩の場合、春は「氷下動」、「雪中開」といったひっそり芽生えるものであるのに対して、「元年立春」詩の春は浅深高低を問わず、至る所で一気に、しかも確実に到来するものとされている。同じ年内立春なのに、なぜそのような差が発生したのだろうか。その答えは、「元年立春」詩の後半に登場する、根拔きの樹と骨を傷んだ魚という、二つの比喩の中にある。花への想いが断たれ、浪への情も動かない、天下の春から取り残されたこの二つの個の登場によって、前半の天下の春との間に、一種強烈な対比効果が生まれたのである。周りが一斉に春



の世界に入ってゆくことを目の当たりにして、「根拔樹」、「骨傷魚」に譬えられる詩人は極度の孤独に陥ったことが容易に推察される。そして何よりも残酷なのは、その除外が一時的なものではなく「根拔」「骨傷」という決定的な損傷による、根源的なものだという点である。そこから読み取れるのは、一種終末的な絶望である。一方は春の景色が広がる天下、また一方は春と無縁となった個体、頸聯と頷聯との四句によつて、一種ドラマチックな対比構造が完成されている。二つの比喩が一人の詩人に帰着し、最終的に「天下の春」と「我が身の冬」という対比が構築されたのである。では、道真はなぜ延喜元年の立春にそこまでの孤独と絶望を感じたのか、それを理解するために欠かせないのは、次の「読ニ開元詔書」である。

開元黄紙詔 開元黄紙の詔、

延喜及蒼生 延喜 蒼生に及ぶ。

一為辛酉歳 一つは辛酉の歳の為なり、

一為老人星 一つは老人の星の為なり。

大辟以下罪 大辟以下の罪、

蕩滌天下清 蕩滌して天下清む。とらてき

省徭優壯力 徭を省きて壯力を優す、

賜物恤頽齡 物を賜ひて頽齡を恤む。あは

茫茫恩徳海、 茫茫たる恩徳の海、

独有鯨鯢横 独り鯨鯢の横れる有り。よこたは

具見于詔書 具に詔書に見ゆ。ぐけん

此魚何在此 此の魚何ぞ此に在らん、

人導汝新名　人は導ふ　汝が新しき名なりと。

吞舟非我口　舟を吞むは我が口にあらず、

吐浪非我声　浪を吐くは我が声にあらず。

哀哉放逐者　哀れなるかな　放逐せらるる者、

蹉跎喪精靈　蹉跎として精靈を喪ふ。

（『菅家後集』 四七九）

延喜の改元は、天下の大赦を伴うものである。第三聯が示すように、死罪以下は悉く赦免するという詔があった。しかし流罪の身である道真は、対象外とされていた。第四聯で述べるように、彼は「鯨鯢」に譬えられ、謀反の逆賊として、赦免の対象から除外されたのである。常に自身の潔白を主張している道真にとって、この「開元黄紙詔」がもたらした衝撃は、計り知れないものであった。第七と第八聯に記されたように、詔を受け、永遠の放逐者となった詩人は、「精靈」を喪い、絶望の淵に彷徨うしかなかったのである。注意したいのは「読開元詔書」詩の中にも、「元年立春」詩に見られる天下と個体との対比構造が確認されるという点である。天下とは「延喜及蒼生」という天下の改元と「蕩滌天下清」という天下の大赦である。個体とは「独有鯨鯢横」が示す、改元の世界から除外された詩人のことである。この点からも両詩の関連性が確認できよう。さて、その延喜改元の詔がもたらした孤独と絶望とが、今度は延喜元年の立春の際に、再び詩人の胸を満たしたのである。開元の新暦は、開元の詔書と密接な関係を有するからである。反逆の巨魁という理由で、開元の恩赦から除外された道真にとって、「開元暦」によって定められたこの春もまた、流された我が身とは無縁なものにはかならなかった。そういった認識のもとで、天下の春から除外された「根拔樹」と「骨傷魚」という二つの景物が創出されたのである。

春とは、しばしば天子の徳と関連づけられる季節である。『菅家文草』の「賦得春之徳風」（卷三、三四三）の、

開花驚老樹、解凍放潜鱗。

号令今如此、応<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>養<sub>二</sub>長<sub>一</sub>仁<sub>一</sub>。

はその一例である。その詩にある「老樹」「潜鱗」の比喻を、「元年立春」詩にある「根拔樹」「骨拔魚」の比喻と比較してみれば、大宰府時代の道真の心境がいかに孤独で絶望的であつたかが容易に知られる。

しかし、大宰府時代の詠作に「恩賜御衣今在<sub>レ</sub>此、捧持毎<sub>レ</sub>日拜<sub>二</sub>余香<sub>一</sub>」（『九月十日』『菅家後集』、四八二）とあるように、道真はどんな状況においても、朝廷への忠誠、天子への思いを捨てることがなかった。その胸の奥に根強く存在した感情が一気に吐露されたのが、「元年立春」詩の尾聯である。

尾聯上句の「偏」は、「立春」詩の「偏」と同じく負のニュアンスを含んだ表現である。延喜開元の世界から除外されたという事実にも関わらず、なおこの延喜開元の暦を頼ろうとしている詩人の強い信念は、この「偏」によつて詠出されるのである。そしてその揺るぎない忠誠心を書き記したのは、全詩を結ぶ尾聯の下句である。

下句を考える際、まずこの句にある「<sub>二</sub>斗杓<sub>一</sub>」の解釈を検討する必要がある。「斗杓」とは、北斗七星の中の第五から第七星を指す言葉である。北斗七星を柄杓と見立てる時、その棒状の部分が「斗杓」である。漢詩の中にも散見する言葉だが、一般的には方位、もしくは季節を判断するための指針として詠まれている。唐代の詩作を調べたところ、「斗杓」またはその同義語「斗柄」を拝むという表現はなかった。道真がどうしてそれを拝んだのか、理解に苦しむ部分である。ところで「斗杓」が韻脚として使われる際、次のような用例が見出せる。

露渥灑<sub>二</sub>雲霄<sub>一</sub>、天官次<sub>二</sub>斗杓<sub>一</sub>

（初唐蘇頌「恩制尚書省僚宴<sub>二</sub>昆明池<sub>一</sub>」同用<sub>二</sub>堯字<sub>一</sub>」『全唐詩』卷六十三、九）

『増訂全唐詩注釈』によれば、ここの「斗杓」は北斗七星全体を指す言葉で、『後漢書』卷六十三・李固伝の「今陛下之有<sub>二</sub>尚書<sub>一</sub>、猶<sub>二</sub>天之有<sub>二</sub>北斗<sub>一</sub>也。斗為<sub>二</sub>天喉舌<sub>一</sub>、尚書亦為<sub>二</sub>陛下喉舌<sub>一</sub>」を踏まえ、尚書省の譬えとして使われているという<sup>1)</sup>。この詩において、北斗七星の代替として「斗杓」が使われているのは押韻のためである。類似の例は、盛唐杜甫の「巫峽長<sub>二</sub>雲雨<sub>一</sub>、秦城近<sub>二</sub>斗杓<sub>一</sub>」（『哭<sub>二</sub>王彭州掄<sub>一</sub>』『全

唐詩』卷二百二十、六六）や中唐韓愈の「憶昔与<sub>レ</sub>君同貶官、夜渡<sub>二</sub>洞庭<sub>一</sub>看<sub>二</sub>斗柄<sub>一</sub>」（『寒食日出遊』『全唐詩』卷三百二十七、二五）などが挙げられる。そのような用例を念頭において「元年立春」詩の尾聯を考えると、韻脚を担う「斗杓」も、北斗七星を表す代替語として用いられている可能性が見えて来る。『晋書』卷十一・天文志「北斗七星在<sub>二</sub>太微北<sub>一</sub>、七政之樞機、陰陽之元本也。（中略）又曰、斗為<sub>二</sub>人君之象<sub>一</sub>、号令之主也」とあるように、当時において、北斗七星は「人君之象」というイメージを有しているので、それを拝む行為は天子を拝む行為として理解することができる。しかし七星を拝むのに、天子を意味する北極星を意識していないことは考えられない。『論語』為政第二に「子曰、為<sub>レ</sub>政以<sub>レ</sub>徳。譬如<sub>下</sub>北辰居<sub>二</sub>其所<sub>一</sub>、而衆星共<sub>レ</sub>之」とあるように、道真は恐らく天子と朝廷とを両方意識し、「拝<sub>二</sub>斗杓<sub>一</sub>」を行つたのではないか。実際、辺地に滞在する際、北極星を天子の化身として認識する類例は、讃岐の時代の作の中からも確認できる。

朝夕翹<sub>レ</sub>誠望<sub>二</sub>北辰<sub>一</sub>、趨<sub>二</sub>拜<sub>二</sub>宮門<sub>一</sub>或佞士。

（『懺悔会作』『菅家文章』卷四、二七九）

そして「東北廻頭」という行為からも、都への意識が読み取れる。道真が東北の方位にある朝廷に対して常に強い関心を持っていたことは、讃岐時代の「春独遊三首」の次の一句によつて確認できる。

唯有時時東北望、同僚指目白痴人。

（『春日独遊三首』（その一）『菅家文章』卷三、二四七）

このように、「元年立春」詩の尾聯には、延喜開元の世界から除外されたにもかかわらず、その新暦を頼りに、忠義を貫こうとする道真の姿勢が描かれているのである。

「元年立春」詩は、延喜の大赦から除外された後、深い孤独と絶望との世界に陥つた道真の心境を如実に反映したものである。「遷客」となつて以来長く胸の中に蓄積していた負の感情が、「延喜元年十二月の立春」をきっかけに、一気に噴出することとなった<sup>80</sup>。道真の円熟した七言律詩の実力は、「天下の春」と「我が身の冬」との対比構造の創出において、遺憾なく発揮され、その精巧な対句によつて実現された

ドラマチックな抒情は、述懐作の多い『菅家後集』中でも異彩を放つ。一方、あくまでも天子に忠節を尽くすという尾聯の姿勢も、詩臣という唯一の人生目標に囚われ、最後まで王権の束縛から解放されずにいた道真の貴族官僚としての思想的特徴をよく表していると言えよう。

### おわりに

この二首の年内立春詠は、二つの辺地滞在時代の道真の心境を象徴する作品である。讃岐時代の作「立春」において、詩臣の志が挫折した苦悶と中央復帰への切なる希望とが、想像の春と現実の冬とによって詠出された。一方、延喜開元の世界から除外された絶望と最後まで天子に忠節を尽くすという信念とは、大宰府時代の「元年立春」詩にある天下の春と我が身の冬とを通じて描き出された。年内立春に触発されて完成したこの二つの春と冬との対比構造は、道真の独特の季節審美眼と優れた漢詩の技量とを余すところなく反映している。年内立春を意識した詠作は唐代にも見られるが、その中における年内立春の表現は一部の詩句に限られているに過ぎず、道真詩のような一貫した年内立春意識が見られる詠作はない。また語句の面においても、両者の直接の受容関係は認めがたく、道真の二首の年内立春詠は、高度な自覚をもって作られた詠懐の作であることは明らかである。以上に述べたように、日中両国における多くの年内立春を意識した作品の中でも、「立春」と「元年立春」とは、独特な魅力を持つ二首の漢詩として評価できよう。

### 【注】

1 小川環樹氏『唐詩概説』（岩波書店、一九五八）、二八六ページ。

2 『漢語大詞典 CD-ROM 版』の「偏」の語釈を参照（商務印書館、二〇〇一）。

<sup>3</sup> 『令義解』職員令に「陰陽寮、頭一人、掌天文、曆数、風雲氣色、有異秘封奏事」とあるように、当時における暦法の制定、頒行は中央政府によって行われている。

<sup>4</sup> 滝川幸司氏「菅原道真の「言志」（和漢比較文学会編『菅原道真論集』勉誠出版、二〇〇三）三五ページ。

<sup>5</sup> 川口久雄氏校注『菅家文章・菅家後集』（岩波書店、一九六六）当該詩注。

<sup>6</sup> 谷口孝介氏『菅原道真の詩と学問』（塙書房、二〇〇六）一〇九ページ。

<sup>7</sup> 白居易「長恨歌」を含め、『全唐詩』には多くの用例が見られる。

<sup>8</sup> 後藤昭雄氏「菅原道真の詩と律令語」（『中古文学』二七、一九八一）、「菅原道真の詩と律令語 続稿」（『静岡大学教育学部研究報告 人文・社会科学篇』三三、一九八二）、「平安朝詩と律令語」（川口久雄氏編『古典の変容と新生』明治書院、一九八四）。

<sup>9</sup> 『広韻』によれば、「来」と「開」は上平十六咍に属し、「灰」、「廻（迴）」、「雷」は上平十五灰に属し、同用する。一方、『新撰朗詠集』の本文である「帰」は上平八微に属す。

<sup>10</sup> 小島憲之氏・山本登朗氏『菅原道真』（研文出版、一九九八）当該詩注。

<sup>11</sup> 金子彦二郎氏『平安時代文学と白氏文集 道真の文学研究篇第二冊』（藝林舎、一九七八）研究資料編第一。

<sup>12</sup> 岡村繁氏『白氏文集（三）』（新釈漢文大系90、明治書院、一九八八）当該詩注。

<sup>13</sup> 注五、注一〇に同じ。

<sup>14</sup> 『菅家文章』巻四、逍遙遊詩三首（三三三～三三五）前の序文に「予罷秩帰京、已為閑客」とあり、「献家集状」（六七四）には「客意者以叙二微臣之失道也」と見られる。

<sup>15</sup> 注六に同じ、第一章第五節を参照。

<sup>16</sup> 柳澤良一氏『菅家後集』注解稿（二十八）（『北陸古典研究』二六、二〇一一）。

『陳貽煥氏編『増訂注釈全唐詩（一）』（文化芸術出版社、二〇〇一）当該詩注。

『遷客』は『菅家後集』「題竹床子」（五〇一）に「応是商人留別去、自<sub>レ</sub>今遷客著相将」と見える。

〔引用本文〕

『新撰朗詠集』は『新編国歌大観』（古典ライブラリー版）、『菅家文章』、『菅家後集』は川口久雄氏校注『菅家文章・菅家後集』（日本古典文学大系72、岩波書店、一九六六）、『律』は井上光貞氏・関晃氏・土田直鎮氏・青木和夫氏校注『律令』（日本思想大系3、岩波書店、一九七六）、『日本三代実録』は黒板勝美氏編『新訂増補国史大系（4）』（吉川弘文館、一九六六）、『令義解』は黒板勝美氏編『新訂増補国史大系（22）』（吉川弘文館、一九六六）、『論語』は『十三経注疏』（芸文印書館、一九七九）、『広韻』は余迺永氏校注『新校互註宋本廣韻定稿本』（上海人民出版社、二〇〇八）、『漢書』は『漢書』（中華書局、一九七五）、『後漢書』は『後漢書』（中華書局、一九七三）、『晉書』は『晉書』（中華書局、一九七四）、『白氏文集』は謝思煒氏校注『白居易詩集校注』（中華書局、二〇〇六）、『全唐詩』は『全唐詩』（中華書局一九六〇）によった。なお漢字、仮名については一部を改めた。

## 第二章 紀貫之「袖ひちてむすびし水」の解釈

### はじめに

本章では、『古今集』に入集した紀貫之の立春歌の解釈を考察する。

春たちける日よめる

紀貫之

袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつけふのかぜやとくらむ

『古今集』卷一・春上、二

この歌の解釈をめぐる、「夏冬春」の季節を表す「三季の心」の説が古来根強く存在している。それを歌に対する深読みとする契沖の意見も『古今餘材抄』に見られるが、近代の諸注釈は「三季の心」の説を無批判に扱うことが多く、契沖の指摘を更に発展させることはなかった。しかし東風解凍は、第二編第二章において述べたような、立春と対応する七十二候の一つとして歌に取り込まれていた概念であり、とすると、なぜそれを詠んだ立春歌に夏の心を入れなければならないのかという疑問を禁じ得ない。本章は、「三季の心」の説が成立する背景の考察、および「むすびし水」の季節性の分析を通じて、契沖説の可否と貫之歌の解釈とを検討する。



## 第一節 問題の所在

袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつけふのかぜやとくらむ

むすびし夏、こほれる冬、春たつ季也。袖ひちて、ひたしてと云也。故人好詠歎。

右に挙げた『古今集注（伝冬良作）』は「三季の心」の説（以下「三季の説」と称する）を唱えた古注の一例である。深津睦夫氏によると、これは頼阿の古今説に、竺源惠梵すなわち師成親王が自らの注説を書き加えた注釈書である。頼阿は為世門下の和歌四天王の一人であって、二条流古今伝授の正統を受け継いだ人物である。その系譜は十五世紀後期に二条堯惠流古今伝授と二条宗祇流古今伝授に分かれ、更に宗祇流から御所伝授と地下伝授が生まれ、近世まで至ったと言われている。現在見られる「三季の説」を主張するほとんどの古注釈はこの系統のものである。一方、非二条流のものとして、比較的早い時期に「三季の説」を唱えた注釈書は『毘沙門堂注』などがあげられる。現存の中世の注釈書の中に、「三季の説」を明確に否定する説は見当たらないが、永正年間に成立した諸注集成の性格を持つ『永正記』には、次のような記述がある。

袖ひちて結びし水のこほれるを春たつけふの風やとくらん

此哥、元日によく叶へり。月令云、立春ノ日東風解氷といへる心也。此哥三季をよめる也。四季と云儀用之ト云一説あり。（中略）此哥三季を詠と云事無也と云人有。如此用捨心に懸テ思へとの事也。

これによると、中世において既に「三季の説」に対する反対意見があった。しかしその具体的内容は不明である。

「三季の説」に対して、適切な根拠をもって鋭い疑問を投げ掛けたのは契沖の『古今餘材抄』である。

或説に夏よりの事をかけていへるはあまりにふかき心をいひつけんとての後の人のしわざ也。かほをあらひ手をすゝぐには冬も水をむすばぬ事かは。土左日記に

手をひてゝ寒さもしらぬいづみにぞくむとはなしに日比へにける

これは二月五日の哥也。もし夏をかけてよめる歌ならば、顯昭のさも釈せられざりければ、定家卿注しそへ給ふべきを、此歌の心ことにこもれる所なし。不<sup>カラ</sup>可有<sup>ル</sup>自<sup>カラ</sup>他之説<sup>ル</sup>とのみかゝれたるにてこゝろうべし。

契沖は「三季の説」を貫之歌に対する深読みと評している。その根拠として、『土佐日記』に水を掬う行動を詠む二月の歌があることと、『顯注密勘』の歌注に顯昭も藤原定家も夏の心に言及していないことを挙げている。

しかし契沖のこの説に対して、『藤井新釈』は次のように反論した。

余材抄に「むすびし水」とは夏よりの事をかけていへるにはあらず。顔をあらひ手をすぐには冬も水をむすばぬ事かは。といへるは「袖ひちてむすびし」と云詞のさまをも歌の情をもえ見しらぬ説なり。

傍線で示したように、藤井高尚の『古今和歌集新釈』は『古今餘材抄』の説を、歌の心を分かっていないものとして一蹴した。しかし契沖が挙げた『土佐日記』や『顯注密勘』については一切触れず、いかにも主観的な独断という印象が残る。近代の諸注釈を見ても、契沖の説に対して言及が見られるのは諸注集成の性格を持つ小町谷照彦氏の『古今和歌集評釈』のみで、それも引用に留まっているに過ぎない。そもそもなぜ「袖ひちてむすびし水」が夏でなければならないのか。この「三季の説」がどのように生まれてきたのか。この二つの問題を追究することで、貫之の名歌「袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つ今日の風やとくらむ」の解釈を再検討する必要があると考える。

## 第二節 「三季の説」の成立と納涼詠

頓阿以下の堯恵流及び宗祇流古今伝授に属する古注釈の中に「三季の説」が多く見られるので、その流れの源をまず追ってみたい。頓阿は二条流正説を受け継いだ歌人と考えられるが、その二条流正説に「三季の説」が存在するという確証はない。『僻案抄』と『六卷抄』とを

見てみよう。

ひちてとは、ひたしてといふ心也。この詞、昔の人このみよみけるにや。古今には、おほく見ゆ。後撰には、すくなし。今の世の歌にはよむべからずとぞ、いましめられし。

#### 『僻案抄』

万葉ニハ漬ト云。ムスビシハ酌ナド云心也。月令云、立春日東風 文字消也。

袖ひちてむすびし水、袖ヒタシテ也。御抄云（『僻案抄』筆者注）、ヒチテトハ、ヒタシテト云心也。此詞、昔ノ人ノコノミヨミケルニヤ。古今ニハオホク見ユ。後撰ニハヒトツフタツアルニヤ。今ノ世ノ哥ニハヨムベカラズトゾイマシメラレシ。

#### 『六卷抄』

『僻案抄』は藤原定家の撰で、二条家の祖である御子左家の歌学を代表する古注釈である。一方の『六卷抄』は「為世と定為法印によって述べられた為家以来の二条家の家説を、行乗法師が聞書してまとめたもの」<sup>1)</sup>であり、二条家を代表する注釈書の一つとして挙げられる。前後の両文を比較して容易に気付かれるのは、『六卷抄』の「最も顕著な特色は、定家がその家説・庭訓をまとめた『僻案抄』のすべてを引用している」という片桐洋一氏の指摘する点である<sup>2)</sup>。これらによれば、定家から為世までの伝授の中に「三季の説」はなかった。また和歌四天王の一人である淨弁が為世より伝授され注説をまとめた注釈書『淨弁注』に「三季の説」がないことも、初期の二条流において「三季の説」が問題になっていなかったことを表しているよう。そのほか、『僻案抄』と『六卷抄』と内容が近い注釈書として、藤原盛徳の『古今秘聴抄』や『北畠親房注』などがあげられる。例として『北畠親房注』を挙げてみよう。

袖ひちてハ、ひたしてと云也。定家卿の口傳には、昔の人の好ミヨミてるにや、古今には多「く」ミゆ、後撰には少し、今の世の哥には不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>詠とそ誠られしと、云々、是は父俊成卿の誠られける詞也、

以上の三例を見ると、貫之歌に対する注は「ひちて」のみであることが分かる。しかも注釈の構成も同じである。まず「ひちて」を解釈

し、次にそれが『古今集』の歌人が好んだ表現だと指摘し、最後に『後撰集』に用例が少ないと説くのである。これらの古注釈によると、いわゆる二条流正説において、「三季の説」が土俵に上がることは一度もなかったのである。同じことは、六条家直系の古注釈においても言えるので、由緒正しい系譜を持つこの二つの歌道の家の家説に「三季の説」が存在しなかったことが分かる。

「三季の説」が二条流を汲む注釈書の中で登場するのは、おそらく第一節冒頭部分で挙げた『古今集注（伝冬良作）』の辺りではないかと考える。その注の構成（後掲）をみると、今までの二条流の説である「ひちて」の解釈の前に「三季の説」を加え、後に東風解凍説を添えた形となっている。この中で見られる「三季の説」はどこから来たものなのだろうか。

『古今集注（伝冬良作）』の性格に関して、片桐洋一氏は親房流古今集注を土台にする説と頼阿流古今集注を土台にする説との二説を示した。しかし「三季の説」は『北畠親房注』には見られない。一方、深津睦夫氏はこの注が頼阿注を基本としたものであるという根拠が弱いとした上で、その大部分は師成親王が書き加えたものと推定している。この歌の注を見ると、確かに鳥井千佳子氏や深津睦夫氏が指摘したような諸注集成の色彩が感じられる。「東風解凍」の説は、『顕注密勘』に見られるほか、『六巻抄』の傍注にもある。「三季の説」については、先述したように二条正流の注釈の中にはないので、同時代或いはそれ以前の他流の注釈から引用したものと考えられる。その可能性の一つとして挙げられるのは、鎌倉末期から南北朝期にかけて成立した『毘沙門堂注』である。『古今集注（伝冬良作）』と『毘沙門堂注』との内容を比較してみると、両注の類似性が認められる。

紀貫之 九十或七九首内長一旋一。于時御書所預。後為木工頭從五位上。童名、内教坊阿子久嚙。

袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつけふのかぜやとくらむ

むすびし夏、こほれる冬、春たつ季也。袖ひちて、ひたしてと云也。故人好詠歎。

此集多有之。後撰には少し。今世不可詠之由、定家卿口伝有之。俊成庭訓也。春立けふの風やとくらむ、月令、東風解凍と云心也。

（『古今集注（伝冬良作）』）

註曰

○春立日者延喜三年正月三日也此哥一首二季ヲヨメリ春立ハ春也袖漬ハ夏也コホレルハ冬也（中略）

○于時御書所預延喜六年任越前權掾後仍從五位上木工權頭 天慶九年辛童名内教房阿子久曾哥九十七首其中短歌一首旋頭一首 ○樂云内教房内裏ニ有也○或人云吾子○此哥東風解凍久也 ○貫之哥正本九十七首而如御本ハ忠峯并一首貫之歌ハ九十八首如目六賀部貫之三首也而如此本ハ一首也若定国賀屏風哥中貫之哥有二首歟九十九首也除忠峯之外也

『毘沙門堂注』

両注を比べて容易に気づかれるのは、歌人紹介、「三季の説」、東風解凍説などにおいて、両注は共通しているという点である。この歌人紹介の部分は、清輔本『古今集』（保元二年本）などにも見られるが、そこに三季の説に関する記載はない。『古今集注（伝冬良作）』に見られる三季の説は、師成親王が『毘沙門堂注』あるいはそれに近い注釈書から取ったものと考えられる。なお毘沙門堂本の異本とされる『古注』（曼殊院蔵）にも三季の説が見られる。こうしてみると、後の宗祇流、堯惠流古今伝授の中で重んじられた「三季の説」は、定家から為世への二条流正説ではなく、『毘沙門堂注』のような非二条流の古注釈に由来するものである可能性が高いと思われる。

貫之歌に関する古注釈を年代順で整理してみると、北畠親房が亡くなった十四世紀中葉辺りを一つの分界点として、前後の様相が大きく異なるということが分かる。それまでに成立した注釈書の多くが三季の説を有しないのに対して、それ以降の注釈書のほとんどが三季の説（四季の説も含む）を挙げている。そしてそれより以前に成立した注釈書の中で、三季の説が掲げられているのは『毘沙門堂注』あるいはその系統に属するもののぐらいである。すると『毘沙門堂注』において提出されたこの説が、十四世紀中葉以降、書入れの形で二条流をはじめ諸家の古今集注に混入され、次第に貫之歌の代表的な解釈になっていくという道筋が見えてくるわけである。

この『毘沙門堂注』について、片桐洋一氏は「六条流の末流ともいうべき知家・行家の流で伝えられてきたものを、（中略）二条正流とは距離を置くポーズをとり、そしてそれゆえに京極為兼に好意を抱く人物が今の形にまとめあげたもの」と推定している。しかし前述のよ

うに、二条家家説にも六条家家説にも「三季の説」は確認されない。となると、その説が『毘沙門堂注』独自の説である可能性が高いと言わねばならない。ここで注意したのは、『毘沙門堂注』に見られる付会注釈の性格である<sup>10</sup>。『毘沙門堂注』を見ると、その中には、間違つた歴史事実、出典を平然と挙げることや、『古今集』歌の中に深い奥義が秘められていると説くなどの特徴がある。数例をあげると、『古今集』の書名に付会し、その巻頭歌に「古今二字有義」とする説や、四番歌の出典として、「左伝云山鶯猶声寒涙凍不解ト云リ」と、全く存在しない『左氏伝』の本文を挙げるなどがそれである。『毘沙門堂注』のこの性格について、片桐洋一氏が『古今和歌集全評釈』においても屢々言及している<sup>11</sup>。そういった性格の背景には『古今集』を和歌の聖書として神聖化、神秘化する意識の働きの認められる。そしてそれを極めた形でできたのは、横井金男氏が言う注釈の本質を忘れ、外的粉飾だけに注目する性格を持つ「古今伝授」である<sup>12</sup>。

この特徴を念頭に置いて「むすびし水」の歌注を見ると、「春立日者延喜三年正月三日也」という誤った記述が当然注目される<sup>13</sup>。そしてその後に書かれた「三季の説」は、巻頭歌を「古今二字有義」のものと仕立てた後に、二番歌を三つの季節を秘めた精妙な歌として祭り上げるために、案出された説と考えられる。同様の性格は、『冷泉持為注』（宝徳二年）などに見られる「四季の説」においても言える。

また俊頼説には、此歌は四季を讀と也。其故は、袖ひちて結ぶは夏也。水のこほれるは冬也。春立はもとより春也。むすびしのしの字にて秋をおもはせたるとも

（『冷泉持為注』）

源俊頼説に仮託されたが、「四季の説」も貫之歌を深読みしようとする意識の働きの結果と考えられる。この傾向は同注の『古今集』巻頭歌注、「又俊頼説には、此一首に年といふ字四あり。是は四季の心なりの」からも窺える。ここも源俊頼説に仮託している。「四季の説」は『延五記』を初めとする堯恵流古今伝授によって継承されたが、宗祇流古今伝授の中でしばしば批判の対象として挙げられ、その後堯恵流の衰退とともに古今伝授の舞台から消えたのである。

一方「三季の説」を継承した宗祇流古今伝授は中世から近世までの数百年間に大きく発展した。「三季の説」が宗祇流古今伝授の隆盛とと

もに、貫之歌の揺るぎない解釈としての地位を確立したのである。しかし貫之の歌を見ると、確かに冬と春とに対する意識は容易に読み取れるが、夏の心を示す明確な証拠は見当たらない。「三季の説」を主張する注釈を見ると、どうも「結びし水」という行為を夏の納涼と結びつけることがその根拠のように見える。

むすびし水とは夏の水を翫ぶ心也。

『耕雲聞書』

袖ヒチテハ夏納涼也。

『三条抄』

夏ノ間ハ水ヲ愛スル物也。

『伝心抄』

確かに、中世の和歌を調べると、納涼詠の中で「水を結ぶ」（水を掬う）という表現がよく使われている。いくつの用例を挙げると、

おなじ大嘗会主基方屏風、増井納涼の人あり 従二位隆博

すずしさをます井のし水むすぶ手にまづかよひくる万代の秋

『風雅集』卷二十・賀、一二二〇

樹蔭納涼

日比よりくち木の柳かげあさみむすぶし水ぞぬるくなりぬる

『為尹千首』夏百首、二九八

水辺納涼

夏ぞなき千代のよはひもひさごもてむすふに清き玉の泉は

などがそれである。右の例が示すように、中世の納涼詠の中では水を掬うという意味での「むすぶ」が一般的に使用されている。「三季の説」が中世から近世までの多数の古注釈の中で重んじられた要因の一つはまさにこれである。それゆえに、高尚が契沖の意見をものともせず「歌の情をもえ見しらぬ説」として否定したのである。しかし実際、中古においても中世においても「むすびし水」（水を掬う）という表現が夏あるいは納涼に限定された事はなかった。中古の例に関しては次節に譲るが、中世の用例を一つ挙げると

立春

君がため結ぶつかさの若水に今日や氷のとけはじむらん

（『公賢集』、七四四）

がある。これは立春日に東風解凍の水を掬うことを詠む好例である。この歌があるように、中世においても、立春日に水を掬うことを詠む歌が存在するのである。

### 第三節 「むすびし水」の季節性

では平安和歌における「むすびし水」の季節性はどのようなものだろうか。

先ず「三季の説」の主張と同じ、夏の納涼詠で詠まれた例を見てみたい。それに関して、既に岩井宏子氏の先行研究がみられる<sup>28</sup>。氏が和漢比較研究を通じて日本漢詩より「和歌の世界での「納涼」の受容は緩慢であった。『拾遺集』の夏部に至ってようやく納涼歌群が登場することとなる」と指摘し、その上、貫之の立春詠を『古今集』の中で唯一暑さを避け「涼」を求めている様子を叙述したもの<sup>29</sup>としながら、『古今集』において夏の景物としての「納涼」が歌のテーマになっているものはない<sup>30</sup>と結論付けた<sup>31</sup>。氏があげた納涼詠の用例の中から、



貫之に近い時代に制作された、水を掬うという表現が含まれる納涼詠を挙げると、

いづみ

したくくる水に秋こそかよふらしむすぶ泉の手さへ涼しき

『中務集』Ⅰ、四〇

人の家の泉のつらにすずむ

山の井をかつ結びつつ夏衣ひもうちとけてすずむころかな

『源順集』Ⅱ、二〇六

がそれである。調べた限りでは、それ以前の用例は見当たらない。納涼歌の中で、水を掬うことを詠んだ最古のものは、『後撰集』時代の歌人中務の例である。

次は貫之の時代に見られる、季節性がはっきりしない作である。

志賀の山越えにて、石井のもとにて、物言ひける人の別れける折によめる 貫之

結ぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人に分かれぬるかな

『古今集』卷八・離別、四〇四

世中心細く常の心地もせざりければ、源公忠朝臣のもとに此歌をやりける、このあひだやまひをもくくなにけり

手に結ふ水にやどれる月影のあるかなきかの世にこれありけれ

『貫之集』Ⅰ、八七八

岩くぐる山井の水をむすびあげてたがためをしき命とか知る

『伊勢集』Ⅰ、四二四

山水を手にもずびてもこころみぬるくは石の中もたのまじ

『伊勢集』一、四三八

『古今集』四〇四番歌の季節は明確ではないが、『古今集』における「志賀の山越」に関連する歌を見ると、春、秋、冬の部に入っている歌はあるものの、夏の部にはない<sup>20</sup>。『貫之集』一八七八番の歌について、渡辺秀夫氏が「例によつていかにも貫之らしくことわり強く冠された（手にむすぶ水に宿れる月）」という歌句もまた、「安寝北堂上」。明月入我牖。照之有余輝。攬之不盈手」『文選』卷三十・陸機・擬古詩）、「山人見月寧思寝。更掬寒泉滿手霜」（金立之・峽山寺翫月・『千載佳句』（月））、「掬水月在手。弄花香滿衣」（唐・于良史・春山夜月）などにみえる漢詩の秀逸で洒落た趣向の利用に出るものとみなしてよいであろう<sup>21</sup>と指摘している。氏が上げた三首の詩の季節を見てみると、陸機と金立之の作は秋、于良史の作は春である。漢詩においても、水を掬うことを夏や納涼に限定する認識はないことが分かる。

そして忘れてはいけなはなのは、契沖も挙げた『土佐日記』二月四日の歌<sup>22</sup>、「手をひでて寒さもしらぬ泉にぞくむとはなしに日ごろへにける」である。結局どの貫之歌も、納涼を詠むものではないのである。

『伊勢集』一の二首は、作者と作歌事情とが不詳の恋歌とされている<sup>23</sup>。両歌における水を掬うという行動からは、はっきりとした季節性が読み取れない。

貫之が活動していた撰者時代の歌の中に、夏の心が含まれる水を「結ぶ」と詠んだ例はなかったことが以上のように再確認される。

ここで注目したいのは、『古今集』二番歌の意味を考える際、今までの注釈書がほとんど注目しなかった春歌の中にある水を掬う表現である。歌については、第二部第二章において既に挙げたが、重複を厭わずもう一度挙げてみよう。

天曆御時御屏風歌、立春

今日とくる水にかけてぞむすぶらしちとせの春にあはんちぎりを

前掲の納涼詠の中で水を掬うという表現を使った源順だが、その歌よりはむしろこの歌の方が貫之の立春歌を踏まえていると言える。そしてこの歌から生まれたのは、立春の東風解凍詠に「若水」という概念を導入した次の歌である。

堀川院御時に立春の朝に御前にて、今日の心よめと宣旨ありければつかまつれる

君がためみたらし川を若水にむすぶや千世のはじめなるらん

『俊頼集』一『散木奇歌集』、六八五

「若水」は立春の日で主水司が天皇に奉った水で、平安時代にはこれが宮中行事として行われていた。歌言葉として登場する時期はやや遅いが、若水を汲む行事は既に『延喜式』卷四十・主水司の条から確認できる。

擇<sup>ニ</sup>宮中若京内一井堪<sup>レ</sup>用者一定。前冬土王。令<sup>ニ</sup>牟義都<sup>ムキツノオフトヲキヨメ</sup>首<sup>ム</sup>渌治<sup>一</sup>即祭之。至<sup>ニ</sup>於立春日昧旦<sup>一</sup>。牟義都首汲<sup>レ</sup>水付<sup>レ</sup>司擬<sup>ニ</sup>供奉<sup>一</sup>。一汲之後廢而不<sup>レ</sup>用。

瀧川政次郎氏によると、「この天皇・中宮・東宮の御生氣御井から立春の日の早朝に汲む水が、爰にいう立春水であつて、立春水より転化したものが、正月一日の早朝に汲む若水である」という<sup>120</sup>。『延喜式』の条にある「若水」は立春日に汲む井戸水だが、後の時代になると、「若水」は立春あるいは元日に汲む水を指すことばとなった。元日の若水を詠んだ歌を一首あげると、

ついたちの日

家良

いつしかと池のこほりのけさはまたとくればむすぶ春の若水

『新撰六帖』第一帖・ついたちの日、一三

がそれである。

立春水を特別視する考えは、古代中国の立春習俗の中にも存在する。唐代の月令式農書『四時纂要』正月の部には、

立春日、貯<sup>レ</sup>水、謂<sup>ニ</sup>之<sup>一</sup>神水<sup>一</sup>。釀<sup>レ</sup>酒不<sup>レ</sup>壞。

という記述がある。日中両国において立春の水が特別視されることは、これによって明らかになるであろう。もちろん貫之が汲んだ立春水を、『延喜式』に書かれた天皇に献上する井戸水と同一のものと考えする必要はない。しかし同時代の日中両国に立春水を縁起物として扱う風俗が存在することは、当時の日本の貴族階級の人々にとって、立春の水を汲むことが一種めでたい意味を含む行為であった可能性を示すのに十分な材料である。立春の当日に、春の到来を象徴する東風解凍の立春水を汲んだ記憶が蘇る、至って明快で分かりやすい論理である。ここで改めて「むすびし水」を夏とする見方の問題性を見てみよう。貫之にとって、今は寒暖の交替を喜ぶ時であり、解凍された水は、まさにその象徴的なものである。一方、納涼の水は、暑熱を軽減するための存在である。暖かい春とその暖かさによって解凍された水とを喜ぶ歌の中で、涼しさを求めるために扱う納涼の水を想起する理由はどこにあるのだろうか。ここに大きな論理的飛躍が存在することは明白である。「むすびし水」を納涼と解釈する三季の説は、やはり契沖の言うように、『古今集』の歌に「あまりにふかき心をいひつけ」た産物であろう。

『古今集』の歌人たちにとって、東風解凍はあの素晴らしい春の水との再会を意味するものでもある。『古今集』の源当純歌「谷風にくる水のひまごとに打ちいづる浪や春の初花」（巻一・春上、一二）があるように、解凍された春の水は賞翫の対象として認識されている。また春の水に袖を濡らしたことを風流めいて詠んだ伊勢の「春ごとに流るる川を花と見て折られぬ水に袖やぬれなむ」も『古今集』（巻一・春上、四三）に入集している。そのほか、春の水を「花の鏡」として詠む伊勢歌（巻一・春上、四四）や、深山の花を運んでくれる「谷の水」を詠む貫之歌（巻二・春下、一一八）が見られるなど、『古今集』に詠まれた四季の水の中で、春の水は特に愛でられているのである。その素晴らしい春の水を汲むことが、曆に記された立春の候「東風解凍」を髣髴させ、春の到来の実感をもたらすことは想像に難くない。それゆえに、新しい春が来るたびに春の水を掬った記憶が蘇り、春を愛でる歌人の心に感興を催させたのであろう。

## おわりに

「三季の説」は中世の古今伝授の中で秘説として作られたもので、その背後には『古今集』を神聖化する意識の働きが認められる。しかし納涼詠すら成立してない『古今集』の時代に制作された、東風解凍の立春歌に、夏の納涼の思いを加えるのはやはり無理がある。契沖の言うように、三季の心は、貫之歌を深読みしすぎた「後人のしわざ」にほかならないと考えられる。

貫之の歌の心を「東風解凍」の水を楽しんだ去年の春の思い出の再生とすれば、今まで諸注釈に書かれた解釈も大きく修正しなければならない。

一首は「去年の春に袖を濡らして掬ったあの立春の水は、冬の寒さの中で凍結してしまったけれども、立春となった今日では、「東風解凍」の言われのとおり、解凍するのであろう（またあの春の清水が掬えると思えば、一冬に凍っていた私の楽しい思いも、あの氷と一緒に解けたのであった）」と詠んだものと解釈したい。

正岡子規の行き過ぎた古今風批判による負の影響が払拭され、『古今集』の再評価が進められるこの時代だからこそ、契沖が貫いた実証的な姿勢を、よく吟味してからの注釈研究が、求められるのではないだろうか。

## 【注】

「深津睦夫氏編『浄弁注・内閣文庫本古今和歌集注』（笠間書院、一九九八）解題。

「片桐洋一氏『中世古今集注釈書解題（六）』（赤尾照文堂、一九八七）二。

<sup>3</sup> 小町谷照彦氏の『古今和歌集評釈二 袖濡ちてむすびし水の』（『国文学』二十八―三、一九八三）。

<sup>4</sup> 片桐洋一氏『中世古今集注釈書解題三（上）』（二三ページ）（赤尾照文堂、一九八一）。

<sup>5</sup> 同右。

<sup>6</sup> 六条家の古注釈は、『顕昭注』、『顕註密勘』、清輔本『古今集』（永治二年本）勘物、清輔本『古今集』（保元二年本）勘物などが挙げられる。

<sup>7</sup> 注二片桐氏著書Ⅰの二、注四片桐氏著書Ⅰの五。

<sup>8</sup> 注一に同じ。

<sup>9</sup> 鳥井千佳子氏「頼阿の「古今集注」追尋」（『鴨東論壇』一、一九八五）。

<sup>10</sup> 清輔本『古今集』（永治二年本）勘物、清輔本『古今集』（保元二年本）勘物、『顕昭注』、『顕註密勘』、『僻案抄』、『寂恵注』、『大江広貞注（為相注）』、『古今秘聴抄』、『伝兼好注』、『浄弁注』、『北畠親房注』、『古今集注』（伊達文庫本）、『六巻抄』などである。

<sup>11</sup> 『古今集抄』（平松文庫本）、『耕雲聞書』、『古今集注（伝冬良作）』、『冷泉持為注』、『古今集童蒙抄』、『延五記』、『両度聞書』、『蓮心院殿説』、『古今栄雅抄』、『永正記』、『鉛訓和謌集聞書』、『古今私秘聞』、『伝心抄』、『教端抄』などである。

<sup>12</sup> 『毘沙門堂注』のほか、その異本とされる『古注』（新井栄蔵氏編『曼殊院蔵古今伝授資料（1）』（汲古書院、一九九〇）所収）にも『三季の説』が書かれている。また正応二年（一二八九）以降成立したと考えられる『古今集注抄出』にも三季の説が見られるが、『毘沙門堂注』を撰取吸収する性格を有するものとされている（『古今和歌集注抄出・古今和歌集聞書』（汲古書院、一九八五）久保田淳氏解題）。

<sup>13</sup> 片桐洋一氏『毘沙門堂本古今集注』解題二八ページ。

<sup>14</sup> 同右、解題。

<sup>15</sup> 片桐洋一氏『古今和歌集全評釈（上中下）』（講談社、一九九八）

<sup>16</sup> 横井金男氏『古今伝授の史的研究』（臨川書店、一九八九）第二編第一章。

<sup>17</sup> 湯浅吉美氏『日本暦日便覧』（汲古書院、一九八八）によると延喜三年の立春は一月一日である。

<sup>18</sup> 岩井宏子氏『古今的表現の成立と展開』（和泉書院、二〇〇八）第一章第三節。

<sup>19</sup> 同右、六五ページ、七二ページ。

<sup>20</sup> 『古今集』卷二・春下、一一五、一一九、卷五・秋下、三〇三、卷六・冬、三二四などがその例である。

<sup>21</sup> 渡辺秀夫氏『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、一九九一）一四三ページ。

<sup>22</sup> 『古今餘材抄』では二月五日の歌としているが、正しくは二月四日の歌である。

<sup>23</sup> 関根慶子氏・山下道代氏『伊勢集全釈』（風間書房、一九九六）。

<sup>24</sup> 瀧川政次郎氏『日本社会経済史論考』（日光書院、一九三九）。

#### 〔引用本文〕

『古今集注（伝冬良作）』は深津睦夫氏編『浄弁注・内閣文庫本古今和歌集注』（笠間書院、一九九八）、『永正記』は片桐洋一氏『中世古今集注釈書解題（六）』（赤尾照文堂、一九八七）、『古今餘材抄』は久松潜一氏監修『契沖全集（8）』（岩波書店、一九七三）、『古今和歌集新釈』は藤井高尚『古今和歌集新釈（復刻版）』（風間書房、一九八九）、『僻案抄』は久曾神昇氏編『日本歌学大系（別巻五）』（風間書房、一九八一）、『六卷抄』は片桐洋一氏『中世古今集注釈書解題（三・下）』（赤尾照文堂、一九八一）、『北畠親房注』は神道大系編纂会編『神道大系論説編（十九）』（神道大系編纂会、一九九二）、『毘沙門堂注』は片桐洋一氏編『毘沙門堂本古今集注』（八木書店、一九九八）、『冷泉持為注』は山崎真克氏・田野慎二氏編『冷泉持為注古今抄（広島大学蔵）上』（『広島平安文学研究会 翻刻平安文学資料稿』三一―一、一

九九六）、『耕雲聞書』は耕雲聞書研究会編『耕雲聞書』（笠間書院、一九九五）、『三条抄』は徳江元正氏編『古今和歌集三条抄』（三弥井書店、一九九〇）、『伝心抄』は伝心抄研究会編『伝心抄』（笠間書院、一九九六）、『古今集』、『風雅集』、『為尹千首』、『新撰六帖』は『新編国歌大観』（古典ライブラリー版）、私家集は『新編私家集大成』（古典ライブラリー版）、『土佐日記』は萩谷朴氏『土佐日記全評釈』（角川書店、一九六七）、『延喜式』は黒板勝美氏編『新訂増補国史大系（26）』（吉川弘文館、一九六五）、『四時纂要』は『四時纂要』（山本書店、一九六一）によった。なお漢字、仮名については一部を改めた。



# 終章

## 終章

### 第一節 和歌の立春と唐詩の立春

成立論、展開論、作品論の視点による考察を通じて、古代和歌における立春関連詠作の形成は、高い独自性を有することが明らかになった。本節は、日中の詩歌に見られる立春表現の差を、唐詩と古代和歌との比較を通じて考察する。

既に序章において述べたように、平安和歌に詠まれた立春は季節の始まる日という性格が強いのに対して、唐詩に見られる立春は節日の色彩が強い日にちである。

唐詩における立春の節日としての性格は、立春関連詠作の中に多く見られる綵花、綵燕、綵鶏、春盤、土牛など、民俗行事と関連する節物の描写や、立春祭祀である「東郊迎氣」を意識した表現から窺える。また、立春日に催された公私の宴会や、遊覧を描く作品が多く見られることも、その節日としての性格を反映していると言える。そして遠くにいる家族、友人を思いやったり、離れた都、故郷を偲んだりする立春関連詠作が複数見られるのも、立春が持つ節日の性格によることである。更に唐詩に多く見られる人日立春を詠む作品も、人日と立春という二つの節日の民俗行事が同じ日に行われることに、詩人達が注目した結果と考えられる。立春を季節の始めとして詠むものもあるが、全体の印象として、やはり唐詩において立春は、節日の色彩の強い日にちとして描かれている。

一方、和歌の立春関連詠作に、立春の行事や俗信に関する表現が確認されるのは、若水『俊頼集』一（『散木奇歌集』、六八五など）、門

松『公重集』、『風情集』、一八二、初夢『西行集』、『山家集』、一〇〇ぐらいで、いずれも用例が少ないものである。また宮中の立春行事の場面を描く歌も数首程度見られるが『堀河百首』、八、一五など、こちらも用例数が少ない。平安和歌における立春関連詠作を通覧すると、その大半を占めるのは、民俗行事が一切書かれていない季節詠であることが分かる。そして『古今集』をはじめ、多くの歌集が立春関連詠作を春の部の巻頭に置いたことも、「立春」が季節の分界点として一般的に認識されていることを示す。季節詠が中心となっていることは、平安和歌の立春関連詠作の特徴と言えよう。

和歌と唐詩における立春表現の差は、立春の景物描写からも窺える。

唐詩の立春関連詠作における景物表現は豊富である。梅、柳をはじめ、桃、杏、李、苔、蝶、蜂、燕、鶯、鷄、鵲、魚など、五十首あまりの詠作の中には、十種以上の季節風物が確認される。それに対して平安和歌は、二百首を越えるという立春関連詠作を有しながら、その大半が東風解凍、かすみ、鶯の三種類によつて占められている。そこには、明確なパターン化の傾向が認められる。唐代の立春関連詠作の中にも梅、柳のような比較的によく詠まれている景物が存在するが、定式化の特徴が鮮明な平安和歌の立春関連詠作に比べ、やはり多彩かつ自由な景物描写が目立つのである。

そして立春表現の、詩歌の本文における使用状況においても、平安和歌と唐詩との間には、大きな差が認められる。

唐詩において、合計五十六首の立春関連詠作のうち、そのほとんどは詩題に「立春」が見られ、詩の本文に「立春」が使用されているのは八例のみである。立春は詩の言葉としてそれほど馴染んでいないことが分かる。しかし和歌における「春立つ」は、歌の中でよく使用されている表現である。『萬葉集』一八二二番歌、『古今集』二番歌をはじめ、勅撰集、私撰集、私家集、定数歌集などにその用例が頻繁に確認される。しかもその使用は、立春関連詠作にとどまらず、春と関わる様々な歌の中にも使用されている。数例をあげると、

雪の木にふりかかれるをよめる

素性法師

春たてば花とや見らむ白雪のかかれる枝に鶯ぞなく

若菜

肥後

春たちて今日は七日にかすがの若菜はまだぞふた葉なりける

『堀河百首』・春二十首、七八

などがそれである。『新編国歌大観』を調べると、平安時代に分類されている和歌集の中における「春たつ」の用例数は、二〇〇に上る。このように平安和歌において、春の到来を「春たつ」で表すことは、一種の定形表現になったのである。第一部第二章において述べたように、「春たつ」は「立春」に由来する表現であるが、和歌の中では立春日から始まる太陰太陽暦の四季観を反映した春の到来を表す場合にも使用されている。独自の成長を遂げたこのことは、平安和歌に大きな影響を与えた三代集——『古今集』、『後撰集』、『拾遺集』——における詠作例の累積によって、平安時代の歌人達の脳中に「春」が「たつ」ものだという認識を植えつけたのである。その結果、「春たつ」が多くの歌に使用されるようになったと考えられる。一方、唐詩における「立春」は、あくまでも暦法上の立春日を指す表現として使用されているため、詩における用例数が伸びなかったと考えられる。ただし『全唐詩』に一例だけ、和歌の「春立つ」と類似する「春立」の用例が見られる。

春立二窮冬後一、陽生二旧物初一。

晩唐薛能「和二曹侍御除夜有懷一」(卷五百五十二、四〇)

しかしこの詩に見られる春の到来を「春立」で表す方法は、結局唐詩の中で広まることはなかった。同じく「立春」に由来する表現だが、漢詩における「春立」と和歌における「春たつ」とは、異なった展開を見せたのである。日中の詩歌における立春表現の差は、この点からも窺える。

また詠作姿勢においても、平安和歌と唐詩とは、それぞれ独自の視点を有している。両者は、立春の到来を喜ぶ気持ちを詠む点や、立春

日の愁いを述べる（述懐）点において、一定の共通性を有している。とはいっても、迎春の気持ちちが節日寄りか、季節寄りに差が存在することは先に述べた通りである。また述懐においても、官位の不遇や老齡の慨嘆がほとんどの和歌に対して、唐詩には、離れ離れになった家族への思いを述べるものや、天下の情勢に対する憂慮を述べるものが存在するといった差が見られる。唐詩の立春関連詠作に儒家や、老荘思想による影響が認められるのに対して、和歌における立春は、そういった色合いが薄い。唐詩と比較する際、日本和歌の独自性をよく反映しているのは、観念的立春風景を詠む題詠や、立春風景に託けた恋歌の存在である。全体の様態として、古代日本和歌における立春関連詠作は、都、朝廷に強い依任意識を持つ日本平安の貴族の性格を反映するものであるのに対して、唐詩の立春関連詠作は、儒、道の思想に深く染められている中国文人の性格を反映した題材である。貴族の文学と文人の文学との差は、日中の詩歌における立春関連詠作の創作からも窺える。

このように、和歌と漢詩との立春世界は、通じ合う部分を有しながらも、様々な面において、各々独自の性格を有し、展開していたのである。

## 第二節 和歌の伝統と日本漢詩の伝統

前節の比較を通じて、和歌における立春関連詠作の独自性は明らかになった。しかし忘れてはいけないのは、古代日本詩歌に、もう一つ漢詩の伝統が存在していることである。本節は考察の視点を日中文学の和漢比較から、日本文学内部における和歌と日本漢詩との比較に移し、両者の性格の差異を考察する。

古代日本の詩歌の体裁は概ね、和歌と漢詩とに二分することができる。和歌は『萬葉集』以前の記紀歌謡にまで遡ることができる在来の文学体裁であるのに対して、漢詩は、六朝及び隋唐の詩を手本とする伝来の体裁である。この二つの伝統は古代日本文学の流れの中で、常

に交渉、影響し合いながら展開していくのだが、各自の独自性も維持されている。和歌は、中国および日本の漢文学の影響を受けながら、枕詞、序詞、掛詞、縁語、余情表現などといった修辞手法を維持、発展させた一方、日本漢詩は、和語的表現を極力排して、あくまでも中国の漢詩と、語彙、文法、修辞などの面において同等のものを作ることを目標としている。この二つの詩歌体裁の間の壁は、時代を遡るにつれ、厚くなつていく傾向が見られる。白居易の漢詩を難なく和歌で表現できる藤原定家の時代になるまでは、長い年月を要したのである。詩歌における季節表現の形成という視点から見ても、中国漢詩に対する模倣をベースに成立した日本漢詩の季節表現と、中国文化の刺激を受けて発生した和歌の季節表現とは、ともに日本的な要素を持ちながらも、どの程度中国寄りかという点に、明確な差が認められるのである。

その差を示す好例は、古代日本の和歌と漢詩とにおける漢字「霞」の受容である。第一部第二章において述べたように、和語「かすみ」に漢字「霞」をあてたのは、「霞」の持つ高い文学性と外示的な意味において「かすみ」と一部重なっている点に日本の歌人が注目した結果と考えられる。それによって完成した「霞」<sup>かすみ</sup>は、漢字「霞」と一定の距離を持つ、日本在来の季節感を示す表現となったのである。確かに外示的な意味において「霞」と「煙霞」とは相通じる部分があるが、「霞」の一字を、「赤くない雲気」である「かすみ」に当てた点に、和歌の独自性が窺える。赤くない雲気を「霞」の一字で表す例は、中国文献の中からは容易に見出すことが出来ない。小島憲之氏が、大津皇子「春苑言宴」(『懷風藻』、四)の「曖曖霞峯遠」を誤りとしたのも、漢詩における「霞」の普遍的使用特徴を踏まえた判断と考えられる。第一部第二章において論じた「霏微」<sup>たなびく</sup>も、意味の近似性より、漢語表現に内包される高い文学性に注目し、和歌のことに当てた例である。

一方古代日本漢文学における「霞」の用例は、多用される「煙霞」のほか、「霞」の本義である「赤い雲気」を踏まえた「丹霞」(『懷風藻』、九〇)や「江霞」(『経国集』、一)も見られる。第一部第三章において論じたとおり、「煙霞」の用例が多く見られるのは、六朝唐代の漢詩における「煙霞」多用の流れを汲んだ結果である。日本漢詩と中国文学との直接の繋がりには、「煙霞」に内包される儒、道、釈の文化的な意

味が、勅撰三集においてきちんと踏まえられている点からも窺える。

日本の歌人は「霞」の持つ高い文学性に注目し、その語の外示的な意味の一部を取って和語「かすみ」に当てたのに対して、日本の漢詩人は「霞」に内包されている詩語としての意味と、中国における使用の状況を踏まえた上で、漢詩文の創作に取り掛かっている。両者の差は明白である。中国文学の傍流という性格を持つ日本漢文学と異なり、和歌は、中国の表現を摂取しながらも、それに囚われず、独自の表現空間の構築に成功したのである。

この和歌と日本漢文学との性格の差は、立春関連詠作の創作にも反映されている。

和歌の立春関連詠作は、「かすみ」、「東風解凍」の二大歌群を中心に展開していくことは、第二部第二章において述べた通りである。そのうちの「かすみ」が日本在来の季節感を反映する景物であることも第一部第二章において述べた。一方の「東風解凍」は、確かに『礼記』に見える表現だが、それを立春の題材にしたのは、天平宝字八年以降の暦法において、「東風解凍」が七十二候の冒頭に位置する、つまり「立春」と同じ日に記される注記になったという、暦法の事情が関連している。結局かすみも、東風解凍も、漢詩文に直接な出典を持つ表現ではなかったのである。そして前節において述べたように、古代和歌における立春と唐詩における立春との間には明確な差異が存在している。和歌における立春関連詠作は、中国文学から一步離れた存在であることは確かである。

一方、古代日本漢詩における立春関連詠作は、やはり中国文学の傍流という性格の方が強いのである。第三部第一章において考察した道真の二首の年内立春詠はその好例である。両詩の各聯に、中国文学に出典を持つ表現が、散りばめられていることから、中国文学の出典を重んじる姿勢が窺える。暦法に対する高い依存度が見られる点は、日本の季節認識の特質を反映しているが、比喩、擬人、対句の面において、どれも漢詩の先例や法則にきっちり則っていることが分かる。在来の季節感を表す「かすみ」は、どの詩にも詠まれていなかったのである。

このように、同じく中国文化を受容して形成された季節表現だが、和歌は在来の季節感と伝来の四季観との融合によって、日本の独自の

流れを作ったのに対して、日本漢詩は、日本のものでありながらも、中国漢詩の一つの傍流として存在し続けたのである。

### 第三節 季節表現の形成と太陰太陽暦の受容

古代日本詩歌における季節表現の形成過程に、伝来した中国の暦法による影響があることは、誰しもが認める事実である。しかしそれは、日本側が中国の暦法における四季措定を鵜呑みにし、そのまま詩歌創作に取り掛かったということではない。在来の自然暦の視点に立つて見れば、太陰太陽暦の四季観は、暦月節月という複雑な二重構造を持つ上、四季の措定が日本在来の感覚と約半月から一ヶ月程度ずれているという厄介なものである。そのため、それを日本の季節意識の中に完全に取り込むには、長い年月を要したのである。日本詩歌、とくに和歌における季節表現はその過程で形成されたものと考えられる。そしてこの暦法の受容と古代日本詩歌との関係を一番よく示している題材は「立春」である。

和歌における立春関連詠作は、「春たつ」と「春の徴としてのかすみ」という二つの表現の創出によって始まったと言える。在来の季節感の中に存在する「はる」を「たつ」をもって表現することは、その「はる」を太陰太陽暦の四季措定の中に位置づけることを意味し、「かすみ」を「春立つ」の徴として詠むことは、在来の季節感を内包する「かすみ」を、伝来の四季観の中の「春」と関連づけることを意味する。「はるのはじまり」を「はるたつ」で表現することは、「はる」と「春」という二つの抽象の概念が連結された結果であり、その連結の正確性を示すために用意されたのは、「はる」の季節感を具現化した「かすみ」という風景の、「春たつ」に合わせた登場である(『萬葉集』巻十、一八一二)。それによって、暦法における春の季節措定の正確性が顕揚されたとともに、伝来した概念である「立春」と関係のない「かすみ」も暦法の四季措定の中において位置づけることができたのである。

「かすみ」はもともと在来の季節感を持つ景物で、『萬葉集』の中では冬以外の春夏秋冬にも登場するが、「立春」に対応する景物というイ



メージが定着すると、後の平安和歌において、春専用の景物への変質を遂げたと考えられる。

そして太陰太陽暦の浸透とともに、実景を見て季節を判断する自然暦の季節感が、次第に天体観測による計算で決める暦法の四季観の支配下に置かれたのである。その中で「立春」を春の第一義とする認識が形成したのである。それによって、最初は「立春」の正確性を検証するために選ばれた「かすみ」は、「立春」の到来とともに、おのずと発生するものとして見られるようになったのである（『萬葉集』巻二十、四四九二）。こうして古代和歌に見られる立春に対する二つの捉え方が成立したと考えられる。

そして天平勝宝八年の改暦をきっかけに、「東風解凍」を立春と対応する候とする認識が広まったと考えられる。すると『萬葉集』以降の空白期を経て、『古今集』において再び登場した和歌の立春関連詠作に、「東風解凍」という新しい立春題材が現れたのである（『古今集』巻一、二）。

しかし、暦法の四季観と実際の季節感とのズレはどうしても回避しがたい問題で、唐詩の立春関連詠作に見られるような、様々な春の実景を見ながら春を楽しむことは、日本では実現が困難である。その中で、古代日本の歌人達が見出した解決策は、現実と切り離れた仮想の空間の中で春の到来を表現することである。春の実景を見ることが無理ならば、その春の到来を想像の世界の中で楽しめばいい。実感で詠むのが困難ならば、先蹤歌を踏まえた観念の世界の中で立春の風景を構築すればいい。日本の歌人達は、あくまでもこの実際の季節とズレのある立春を春の第一義として、季節詠の題材として扱い続けたのである。

一方、立春を季節の第一義とする考えが浸透すると、日本の歌人達は、その立春が一年のどの部分に来るのかという暦法上の事実に対して、中国の唐代詩人以上にセンシティブになったとも考えられる。それを背景に成立したのが年内立春詠である。年内立春のような、暦月と節月との季節指定がずれる現象は、太陰太陽暦の二重季節構造の仕組み上、季節ごとに発生するものである。しかし「立春」の到来に敏感である日本の歌人達は、その当たり前のようなズレの中から、詩的面白みを見出したのである。立春が年内にいくと、冬と春とが重なったよと面白がったり、新年と旧年とが重なったよと訝しんだりするわけである。和歌における年内立春詠は、日本の歌人達が、実感として

の季節よりも、暦法における四季措定に多くの関心を寄せた結果、生まれたものと考えられる。

この暦法に対する高い関心は、平安漢詩の立春関連詠作の中からも窺える。道真の二首の年内立春詠に、暦法に対する強い依存意識が認められることは、第一部第一章において述べた。それ以外の平安漢詩の立春関連詠作にも、暦に対する関心を窺わせる表現が存在する。元日立春をテーマとする『田氏家集』の「七年歳旦立春」（四四〇）や、『本朝無題詩』に所収する藤原周光「早春言志」（巻四・春、二二九）の、

上月下旬警策程、王春芳節始相迎。【立春節当二十三日、故云】

や藤原平衡「歳暮即事」（巻五・冬、三四〇）の、

晴雨月光千里遍、閏余風景一句残。【于時間十二月二十一日】

青陽催<sub>レ</sub>律春先至【去十五日立春】、素性嗜<sub>レ</sub>書老尚看。

に暦日に関する注記が見られることはその例である。平安和歌の盛んな立春関連詠作の展開と違って、平安時代の日本漢詩に「立春」に関する記述が見られることはかなり少ない。そのわずかな詠作の中に、暦日に関する注記や表現がいくつも見られることは、日本漢詩人が持つ暦に対する高い関心を窺わせる。なお唐詩の立春関連詠作にも、正月七日立春の詠作が多くみられるが、それは人日と立春という二つの節日が重なるという三十年に一度の珍しい現象に感動を覚えたためであって、一般的な立春の暦日に対する関心度は、日本ほど高くないと見られる。

以上に述べたように、古代日本詩歌における立春の季節表現は、日本における太陰太陽暦の四季観の受容、変容の中で形成されたものである。その受容、変容の様態は単に中国文学の立春詠を模倣したのではなく、在来の季節感と伝来の四季観とのズレに悩まされつつ、暦法の四季措定をどのように理解すべきかを思索し、ようやく辿り着いたものである。その成立及び展開の様相には、高い独自性が認められる。伝来と在来の二つの季節認識が衝突、交錯、融合した結果として誕生した古代日本詩歌の立春関連詠作は、まさに季節のズレの中から生ま

れた文学ということができよう。

## 【注】

「春たつ」（はるたつ）、「春たち」（はるたち）、「春たて」（はるたて）をキーワードにして検索した結果である。

小島憲之氏「上代に於ける詩と歌―「霞」（カ）と「霞」（かすみ）をめぐる―」（『万葉学論攷松田好夫先生追悼論文集』美夫君志会、一九九〇）。

## 〔引用本文〕

『古今集』、『堀河百首』は『新編国歌大観』（古典ライブラリー版）、『経国集』は小島憲之氏『国風暗黒時代の文学』下Ⅰ・下Ⅱ（塙書房、一九八五・一九九八）、『田氏家集』は小島憲之氏監修『田氏家集注（全三冊）』（和泉書院、一九九二）、『本朝無題詩』は本間洋一氏『本朝無題詩全注釈（全三冊）』（新典社、一九九二・一九九四）、『全唐詩』は『全唐詩』（中華書局、一九六〇）、『懷風藻』は小島憲之氏校注『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』（日本古典文学大系69、岩波書店、一九六四）によった。なお漢字、仮名については一部を改めた。

## 参考文献

### 一. 単行本（電子化資料も含む）

- 『王子安集注』（上海古籍出版社、一九九五）  
『漢書補注』（上海古籍出版社、二〇〇八）  
『藝文類聚』（上海古籍出版社、一九八二）  
『古今和歌集新釈（復刻版）』（風間書房、一九八九）  
『史記会注考証附校補（上下）』（上海古籍出版社、一九八六）  
『四時纂要』（山本書店、一九六一）  
『十三經注疏』（芸文印書館、一九七九）  
『先秦漢魏晉南北朝詩／文選（繁体字版）』（彫龍古籍全文検索シリーズ3）  
『全唐詩』（中華書局、一九六〇）  
『楚辭補注』（中華書局、一九八三）  
『文苑英華』（中華書局、一九八二）

『文選』（上海古籍出版社、一九八六）

『文淵閣四庫全書電子版』（迪志文化出版）

『拜經堂叢書』（東方文化學院京都研究所、一九三五）

標点本二十四史（『史記』、『漢書』、『後漢書』、『三國志』、『晉書』、『魏書』、『南齊書』、『旧唐書』、『新唐書』（中華書局、一九五九～一九七四）

青木賢豪・家永香織・久保田淳・辻勝美・吉田朋美『堀河院百首和歌』（和歌文学大系15、明治書院、二〇〇二）

秋永一枝・田辺佳代編『古今集延五記』（笠間書院、一九七八）

阿蘇瑞枝『万葉和歌史論考』（笠間書院、一九九二）

阿蘇瑞枝『人麻呂集・赤人集・家持集』（和歌文学大系17、明治書院、二〇〇四）

阿蘇瑞枝『萬葉集全歌講義（既刊九冊）』（笠間書院、二〇〇六～二〇一四）

阿部猛・義江明子・相曾貴志編『平安時代儀式年中行事事典』（東京堂出版、二〇〇三）

新井栄蔵・田村緑編『古今集註（京都大学蔵）』（臨川書店、一九八四）

新井栄蔵編『曼殊院蔵古今伝授資料（既刊七冊）』（汲古書院、一九九〇～一九九二）

育徳財団編『古今和歌集清輔本（上下）』（育徳財団、一九二八）

石川日出志『農耕社会の成立』（シリーズ日本古代史1、岩波書店、二〇一〇）

井手至『遊文録・説話民俗篇』（和泉書院、二〇〇四）

伊藤博『萬葉集訳注（全十巻）』（集英社、一九九五～二〇〇〇）

- 伊藤博・稲岡耕二・青木生子・木下正俊・橋本達雄〔ほか〕『萬葉集全注（既刊十九冊）』（有斐閣、一九八三～二〇〇六）
- 伊藤正義・黒田彰・三木雅博編『和漢朗詠集古注釈集成（全四冊）』（大学堂書店、一九八九）
- 稲岡耕二『萬葉集の作品と方法』（岩波書店、一九八五）
- 稲岡耕二『萬葉集（既刊三冊）』（和歌文学大系1～3、明治書院、一九九七～二〇〇六）
- 稲岡耕二編『萬葉集事典』（学燈社、一九九九）
- 犬養廉・平野由紀子・いさら会『後拾遺和歌集新釈（上下）』（笠間書院、一九九七）
- 犬養廉・井上宗雄・大久保正・小野寛・田中裕〔ほか〕編『和歌大辞典』（明治書院、一九九二）
- 井上光貞・関晃・土田直鎮・青木和夫校注『律令』（日本思想大系3、岩波書店、一九七六）
- 岩井宏子『古今の表現の成立と展開』（和泉書院、二〇〇八）
- 内田順子編『田氏家集索引』（和泉書院、一九九二）
- 内田泉之助・中島千秋・高橋忠彦・原田種成・竹田晃〔ほか〕『文選（全八冊）』（新釈漢文大系14、15、79～83、93、明治書院、一九六三～二〇〇一）
- 内田泉之助『玉台新詠（全二冊）』（新釈漢文大系60、61、明治書院、一九七四）
- 内田正男『暦の語る日本の歴史』（吉川弘文館、二〇一二）
- 内田賢徳『萬葉の知―成立と以前』（塙書房、一九九二）
- 王克讓校注『河嶽英靈集注』（巴蜀書社、二〇〇六）
- 大曾根章介・堀内秀晃校注『和漢朗詠集』（新潮日本古典集成61、新潮社、一九八三）
- 大谷光男・古川麒一郎・岡田芳朗・伊東和彦編『日本暦日総覧具注暦編（古代中期）第二版』（本の友社、一九九六）

- 大野晋・大久保正編『本居宣長全集（3）』（筑摩書房、一九六九）
- 岡田芳朗『暦ものがたり』（角川学芸出版、二〇一二）
- 岡村繁『白氏文集（既刊十一冊）』（新釈漢文大系98、105、108、117、118、明治書院、一九八八）
- 小川環樹『唐詩概説』（岩波書店、一九五八）
- 奥村恒哉校注『古今和歌集』（新潮日本古典集成19、新潮社、一九七八）
- 小沢正夫・松田成穂校注・訳『古今和歌集』（新編日本古典文学全集11、小学館、一九九四）
- 小長谷恵吉『日本国見在書目録解説稿附同書目録、同書索引』（小宮山書店、一九五六）
- 小尾郊一『中国文学に現われた自然と自然観』（岩波書店、一九六二）
- 澤潟久孝『萬葉集注釈普及版（全二十二冊）』（中央公論社、一九八二～一九八四）
- 柿村重松『上代日本漢文学史』（日本書院、一九四七）
- 柏木由夫・錦仁『金葉和歌集・詞花和歌集』（和歌文学大系34、明治書院、二〇〇六）
- 片桐洋一『中世古今集注釈書解題（全六冊）』（赤尾照文堂、一九七一～一九八七）
- 片桐洋一『古今和歌集全評釈（上中下）』（講談社、一九九八）
- 片桐洋一編『毘沙門堂本古今集注』（八木書店、一九九八）
- 片桐洋一『歌枕歌ことば辞典増訂版』（笠間書院、一九九九）
- 片桐洋一訳注『古今和歌集』（笠間書院、二〇〇五）
- 金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集、道真の文学研究篇第二冊』（藝林舎、一九七八）
- 金子元臣『古今和歌集評釈昭和新版』（明治書院、一九二七）

- 神尾暢子『王朝国語の表現映像』（新典社、一九八二）
- 上条彰次校注『千載和歌集』（和泉書院、一九九四）
- 川上新一郎『六条藤家歌学の研究』（汲古書院、一九九九）
- 川口久雄・志田延義校注『和漢朗詠集・梁塵秘抄』（日本古典文学大系73、岩波書店、一九六五）
- 川口久雄校注『菅家文草・菅家後集』（日本古典文学大系72、岩波書店、一九六六）
- 川口久雄『平安朝日本漢文学史の研究三訂』（一九七五～一九八八）
- 川口久雄・若林力編『菅家文草・菅家後集詩句総索引』（明治書院、一九七八）
- 川口久雄『和漢朗詠集全訳注』（講談社、一九八二）
- 川口久雄編『古典の変容と新生』（明治書院、一九八四）
- 川村晃生・柏木由夫・工藤重矩校注『金葉和歌集・詞花和歌集』（新日本古典文学大系7、岩波書店、一九八九）
- 川村晃生校注『後拾遺和歌集』（和泉書院、一九九二）
- 川村晃生『能因集注釈』（貴重本刊行会、一九九二）
- 川村晃生・佐藤道生編『新撰朗詠集校本と総索引』（三弥井書店、一九九四）
- 川村晃生・久保田淳『長秋詠藻・俊忠集』（和歌文学大系22、明治書院、一九九八）
- 漢語大詞典編輯委員会編『漢語大詞典Online版』（商務印書館、二〇〇二）
- 韓兆琦『史記箋証』（江西人民出版社、二〇〇四）
- 簡濤『立春風俗考』（上海文芸出版社、一九九八）
- 木船重昭『後撰和歌集全釈』（笠間書院、一九八八）



- 木船重昭『中務集・相如集注釈』（大学堂書店、一九九三）
- 木船重昭『久安百首全釈』（笠間書院、一九九七）
- 木船重昭『堀河院百首和歌全釈』（笠間書院、一九九七）
- 木村正中校注『土佐日記・貫之集』（新潮日本古典集成80、新潮社、一九八八）
- 久曾神昇・樋口芳麻呂編『日本歌学大系（全十冊）』（風間書房、一九五七～一九六三）
- 久曾神昇編『日本歌学大系別卷（全十冊）』（風間書房、一九五九～一九九七）
- 久曾神昇編『古今和歌集成立論資料編（全三冊）』（風間書房、一九六〇）
- 久曾神昇訳注『古今和歌集全訳注（全四冊）』（講談社、一九七九～一九八三）
- 久曾神昇編『古今和歌集伊達本』（笠間書院、一九九五）
- 京都大学文学部国語学国文学研究室編『倭名類聚抄諸本集成』（臨川書店、一九六八）
- 京都大学文学部国語学国文学研究室編『古今集抄京都大学蔵』（臨川書店、一九八〇）
- 工藤重矩校注『後撰和歌集』（和泉書院、一九九二）
- 久保木哲夫・平安私家集研究会『肥後集全注釈』（新典社、二〇〇六）
- 久保木哲夫『出羽弁集新注』（青簡舎、二〇一〇）
- 久保木哲夫『うたと文献学』（笠間書院、二〇一二）
- 窪田空穂『古今和歌集評釈新訂版（上中下）』（東京堂、一九六〇）
- 窪田空穂『窪田空穂全集（卷十三～十九）』（角川書店、一九六六）
- 久保田淳監修『八代集総索引』（新日本古典文学大系別巻、岩波書店、一九九五）

- 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九）
- 窪田章一郎注『古今和歌集』（角川学芸出版、一九七三）
- 藏中進編『江戸初期無刊記本游仙窟・本文と索引』（和泉書院、一九七九）
- 倉住薫『柿本人麻呂——ことばとこころの探求』（笠間書院、二〇一一）
- 黒板勝美編『新訂増補国史大系（4、22、26、28）』（吉川弘文館、一九六四～一九六六）
- 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『古今集注釈書伝本書目』（勉誠出版、二〇〇七）
- 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫監修『古今和歌集註』（勉誠出版、二〇〇八）
- 耕雲聞書研究会編『耕雲聞書』（笠間書院、一九九五）
- 合田時江編『聖武天皇『雑集』漢字総索引』（清文堂出版、一九九三）
- 合山究『雲烟の国——風土から見た中国文化論』（東方書店、一九九三）
- 鈺訓和謌集聞書研究会編『鈺訓和謌集聞書』（笠間書院、二〇〇八）
- 古今和歌六帖輪読会著『古今和歌六帖全注釈第一帖』（お茶の水女子大学附属図書館、二〇一二）
- 小島憲之校注『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』（日本古典文学大系69、岩波書店、一九六四）
- 小島憲之『国風暗黒時代の文学（全九冊）』（塙書房、一九六八～二〇〇二）
- 小島憲之『上代日本文学与中国文学（全三冊）』（塙書房、一九六二～一九六五）
- 小島憲之・新井栄蔵校注『古今和歌集』（新日本古典文学大系5、岩波書店、一九八九）
- 小島憲之監修『田氏家集注（全三冊）』（和泉書院、一九九一～一九九四）
- 小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳『萬葉集（全四冊）』（新編日本古典文学全集6～9、小学館、一九九四～一九九六）

小島憲之・西宮一民・毛利正守・直木孝次郎・藏中進校注・訳『日本書紀（全三冊）』（新編日本古典文学全集2、4、小学館、一九九四、一九九八）

小島憲之・山本登朗『菅原道真』（研文出版、一九九八）

古代学協会・古代学研究所編『平安時代史事典』（角川書店、一九九四）

古典索引刊行会編『萬葉集索引』（塙書房、二〇〇三）

後藤利雄『人麻呂歌集とその成立』（至文堂、一九六一）

近衛通隆監修『御堂関白記（全五冊）』（思文閣出版、一九八三、一九八四）

小町谷照彦校注『拾遺和歌集』（新日本古典文学大系7、岩波書店、一九九〇）

小町谷照彦訳注『古今和歌集』（筑摩書房、二〇一〇）

小町谷照彦・倉田実編『王朝文学文化歴史大事典』（笠間書院、二〇一一）

小松茂美監修『新撰朗詠集』（日本名跡叢刊85、86、二玄社、一九八四）

小松茂美編『伝藤原公任筆古今和歌集』（旺文社、一九九五）

小松英雄『みそひと文字の抒情詩——古今和歌集の和歌表現を解きほぐす』（笠間書院、二〇〇四）

斎藤国治編『小川清彦著作集——古天文・暦日の研究』（皓星社、一九九七）

崔富章・李大明主編『楚辞集校集釈』（湖北教育出版社、二〇〇三）

佐伯梅友校注『古今和歌集』（日本古典文学大系8、岩波書店、一九五八）

佐佐木信綱『佐佐木信綱全集（全七冊）』（六興出版部、一九四八、一九五四）

佐佐木信綱・橋本進吉・佐竹昭広・木下正俊（ほか）編『校本萬葉集（全十八冊、別冊三）』（岩波書店、一九七九、一九九四）

- 佐竹昭広・山田英雄・大谷雅夫・山崎福之・工藤力男校注『萬葉集（全四冊）』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九九九～二〇〇三）
- 佐竹昭広・山田英雄・大谷雅夫・山崎福之・工藤力男編『萬葉集索引』（新日本古典文学大系別巻5、岩波書店、二〇〇四）
- 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫校注『萬葉集（既刊四冊）』（岩波書店、二〇一三～二〇一四）
- 静慈円編『性霊集一字索引』（東方出版、一九九一）
- 島田良二『人麿集全釈』（風間書房、二〇〇四）
- 謝思煒校注『白居易詩集校注』（中華書局、二〇〇六）
- 朱紅『唐代節日民俗与文学研究』（博士論文、復旦大学、二〇〇二）
- 祝良文『初唐宮廷詩考論』（博士論文、華東師範大学、二〇〇五）
- 春秋会『源兼澄集全釈』（風間書房、一九九一）
- 章培恒・駱玉明編『中国文学史』（復旦大学出版社、二〇〇五）
- 新撰萬葉集研究会編『新撰萬葉集注釈（巻上1、2）』（和泉書院、二〇〇五～二〇〇六）
- 新藤協三・徳原茂実・西山秀人・吉野瑞恵『三十六歌仙集（二）』（和歌文学大系52、明治書院、二〇一二）
- 神道大系編纂会編『神道大系・論説編十九』（神道大系編纂会、一九九二）
- 菅根順之『詞花和歌集全釈』（笠間書院、一九八三）
- 菅野禮行校注・訳『和漢朗詠集』（新編日本古典文学全集19、小学館、一九九九）
- 鈴木健一『江戸古典学の論』（汲古書院、二〇一一）
- 関根慶子・山下道代『伊勢集全釈』（風間書房、一九九六）
- 関守次男『和歌文学积考』（笠間書院、一九七九）

- 高木市之助・五味智英・大野晋校注『萬葉集（全四冊）』（日本古典文学大系4～7、岩波書店、一九五七～一九六二）
- 高田祐彦訳注『新版古今和歌集現代語訳付き』（角川学芸出版、二〇〇九）
- 滝川幸司『天皇と文壇——平安前期の公的文学』（和泉書院、二〇〇七）
- 瀧川政次郎『日本社会経済史論考』（日光書院、一九三九）
- 滝澤貞夫編『古今和歌集正義』（勉誠社、一九七八）
- 滝澤貞夫『基俊集全釈』（風間書房、一九八八）
- 滝澤貞夫『堀河院百首全釈（上下）』（風間書房、二〇〇四）
- 武井和人・西野強編『一条兼良自筆古今集童蒙抄（影印付）・校本古今三鳥剪紙伝授』（笠間書院、二〇一三）
- 竹内照夫『礼記（全三冊）』（新釈漢文大系27～29、明治書院、一九七一～一九七九）
- 竹岡正夫『古今和歌集全評釈古注七種集補訂版（上下）』（右文書院、一九八二）
- 竹下豊『堀河御時百首の研究』（風間書房、二〇〇四）
- 武田祐吉『萬葉集全註釈増訂版（全十四巻）』（角川書店、一九五七～一九五八）
- 多田一臣『萬葉集全解（全七冊）』（筑摩書房、二〇〇九～二〇一〇）
- 辰巳正明『懷風藻全注釈』（笠間書院、二〇一二）
- 田中喜美春・田中恭子『貫之集全釈』（風間書房、一九九七）
- 田中新一『平安朝文学に見る二元的四季観』（風間書房、一九九〇）
- 田中幹子『和漢・新撰朗詠集の素材研究』（和泉書院、二〇〇八）
- 谷口孝介『菅原道真の詩と学問』（塙書房、二〇〇六）

- 張曉青『中国古典詩歌中的季節表現——以中古詩歌為中心』（博士論文、中国社会科学院研究生院、二〇一二）
- 張勃『唐代節日研究』（中国社会科学出版社、二〇一三）
- 陳貽焮主編『增訂注釈全唐詩（全五冊）』（文化艺术出版社、二〇〇一）
- 築島裕『訓点語彙集成（全九冊）』（汲古書院、二〇〇七～二〇〇九）
- 土井洋一・中尾真樹編『本朝文粹の研究』（勉誠出版、一九九九）
- 土屋文明『萬葉集私注新訂版（全十卷）』（筑摩書房、一九七六～一九七七）
- 丁福保編『説文解字詁林（全二十冊）』（中華書局、一九八八）
- 伝心抄研究会編『伝心抄』（笠間書院、一九九六）
- 東京大学国語研究室編『古今和歌集注抄出・古今和歌集聞書』（汲古書院、一九八五）
- 徳江元正編『古今和歌集三条抄』（三弥井書店、一九九〇）
- 杜鳳剛編『新撰萬葉集総索引』（和泉書院、一九九五）
- 中西進『萬葉集全訳注原文付（全四冊）』（講談社、一九七八～一九八六）
- 中野方子『平安前期歌語の和漢比較文学的研究』（笠間書院、二〇〇五）
- 中村喬『中国歳時史の研究』（朋友書店、一九九三）
- 中村裕一『中国古代の年中行事（1）』（汲古書院、二〇〇九）
- 名古屋和歌研究会編『私撰集作者索引』（和泉書院、一九九六）
- 二玄社編集部編『大書源（全四冊）』（二玄社、二〇〇七）
- 西澤美仁・宇津木言行・久保田淳『山家集・聞書集・残集』（和歌文学大系21、明治書院、二〇〇三）

- 西下経一『古今和歌集新解』（明治書院、一九五七）
- 西下経一・滝沢貞夫『古今集校本（新装ワイド版）』（笠間書院、二〇〇七）
- 日本古典文学会編『古今和歌集清輔本（上下）』（日本古典文学会、一九七四）
- 日本古典文学大辞典編集委員会編『日本古典文学大辞典（全六巻）』（岩波書店、一九八三～一九八五）
- 能田忠亮『暦』（至文堂、一九五七）
- 芳賀紀雄編『文華秀麗集索引』（和泉書院、一九八八）
- 芳賀紀雄『萬葉集における中国文学の受容』（塙書房、二〇〇三）
- 萩谷朴『土佐日記全評釈』（角川書店、一九六七）
- 橋本不美男『院政期の歌壇史研究』（風間書房、一九六六）
- 橋本不美男・滝沢貞夫『校本永久四年百首和歌とその研究』（笠間書院、一九七八）
- 橋本不美男・有吉保・藤平春男校注・訳『歌論集』（新編日本古典文学全集87、小学館、二〇〇二）
- 波戸岡旭『宮廷詩人菅原道真——『菅家文草』・『菅家後集』の世界』（笠間書院、二〇〇五）
- 東野治之『正倉院文書と木簡の研究』（塙書房、一九七七）
- 東野治之『書の古代史』（岩波書店、一九九四）
- 久松潜一・松田武夫・関根慶子・青木生子校注『平安鎌倉私家集』（日本古典文学大系80、岩波書店、一九六四）
- 久松潜一監修『契沖全集（1～8）』（岩波書店、一九七三～一九七五）
- 久松潜一『萬葉秀歌（全五冊）』（講談社、一九七六）
- 久松潜一監修『賀茂真淵全集（1～5、9～11）』（続群書類従完成会、一九七七～一九九一）

- 平岡武夫・今井清校定『白氏文集(全三冊)』(京都大学人文科学研究所、一九七二～一九七三)
- 平岡武夫・今井清編『白氏文集歌詩索引』(同朋舎出版、一九八九)
- 平沢五郎『金葉和歌集の研究』(笠間書院、一九七六)
- 平沢竜介『古今歌風の成立』(笠間書院、一九九九)
- 平田喜信・徳植俊之『道信集注釈』(貴重本刊行会、二〇〇一)
- 平野由紀子『信明集注釈』(貴重本刊行会、二〇〇三)
- 深津睦夫編『浄弁注・内閣文庫本古今集注』(笠間書院、一九九八)
- 藤本一恵『後拾遺和歌集全釈(上下)』(風間書房、一九九三)
- 藤本一恵・木村初恵『深養父集・小馬命婦集全釈』(風間書房、一九九九)
- 平安文学輪読会『長能集注釈』(塙書房、一九八九)
- 細井浩志『日本史を学ぶための〈古代の暦〉入門』(吉川弘文館、二〇一四)
- 本位田重美『古今和歌集選釈』(武蔵野書院、一九五五)
- 本間洋一編『凌雲集索引』(和泉書院、一九九一)
- 本間洋一『本朝無題詩全注釈(全三冊)』(新典社、一九九二～一九九四)
- 増田繁夫『能宣集注釈』(貴重本刊行会、一九九五)
- 増田繁夫『拾遺和歌集』(和歌文学大系32、明治書院、二〇〇三)
- 松田武夫『新釈古今和歌集(上下)』(風間書房、一九六八～一九七五)
- 松田武夫『古今集の構造に関する研究』(風間書房、一九八〇)



- 松野陽一校注『詞花和歌集』（和泉書院、一九八八）
- 松本真奈美・高橋由紀・竹鼻績『中古歌仙集（二）』（和歌文学大系54、明治書院、二〇〇四）
- 三木雅博『和漢朗詠集とその享受』（勉誠社、一九九五）
- 三木雅博訳注『和漢朗詠集』（角川学芸出版、二〇一三）
- 室城秀之・高野晴代・鈴木宏子『小町集・遍昭集・業平集・素性集・伊勢集・猿丸集』（和歌文学大系18、風間書房、一九九八）
- 目加田さくを『源重之集・子の僧の集・重之女集全釈』（風間書房、一九八八）
- 目加田さくを・中井一枝・堀志保美『小侍従集全釈』（新典者、二〇〇五）
- 桃裕行『暦法の研究（上）』（桃裕行著作集7、思文閣出版、一九九〇）
- 森晴彦『新勅撰和歌集巻頭巻軸歌の研究』（おうふう、二〇〇八）
- 森本元子『私家集の研究』（明治書院、一九六六）
- 安田徳子『中世和歌研究』（和泉書院、一九九八）
- 柳澤良一編『本朝麗藻総索引』（勉誠社、一九九三）
- 柳澤良一『新撰朗詠集全注釈（全四冊）』（新典社、二〇一一）
- 柳田国男『柳田国男全集（16）』（筑摩書房、一九九〇）
- 築瀬一雄『俊恵研究』（加藤中道館、一九七七）
- 山崎真克・田野慎二編『（広島大学蔵）冷泉持為注古今抄（上）』（『広島平安文学研究会、翻刻平安文学資料稿』三一六、一九九六）
- 湯浅吉美編『日本暦日便覧増補版』（汲古書院、一九九〇）
- 楊江涛『中国伝統節日の美学研究』（博士論文、中国人民大学、二〇〇八）

- 于欧洋『南朝皇族文学研究』（博士論文、東北師範大学、二〇一三）
- 横井金男『古今伝授の史的研究』（臨川書店、一九八〇）
- 吉沢義則編『未刊国文古註釈大系（四）』（清文堂出版、一九六八）
- 吉田賢抗『史記（四）』（新釈漢文大系41、明治書院、一九九五）
- 余迺永校注『新校互註宋本廣韻定稿本』（上海人民出版社、二〇〇八）
- 呂浩校注『篆隸万象名義校釈』（学林出版社、二〇〇七）
- 冷泉家時雨亭文庫編『冷泉家時雨亭叢書（全八十四卷）』（朝日新聞社、一九九二～二〇〇九）
- 和漢比較文学会編『菅原道真論集』（勉誠出版、二〇〇三）
- 渡瀬昌忠『人麻呂歌集非略体歌論上』（渡瀬昌忠著作集3、おうふう、二〇〇二）
- 渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、一九九一）
- 渡部保『西行山家集全注解』（風間書房、一九七二）
- 渡部泰明・小林一彦・山本一『歌論歌学集成（7）』（三弥井書店、二〇〇六）

## 二・論文

- 新井栄蔵「春立ちける日―古今集巻頭歌私見―」（『文学』四四―二、一九七六）
- 新井栄蔵「萬葉集季節観攷―漢語〈立春〉と和語〈ハルタツ〉」（『萬葉集研究（五）』、塙書房、一九七六）
- 伊倉史人「『永久百首』とその背景」（『三田国文』二七、一九九八）

石橋茂登・市大樹・竹内亮・富永里菜・小谷徳彦「石神遺跡（第15次）の調査―第122次」（『奈良文化財研究所紀要』二〇〇三、二〇〇三）

岩下武彦「人麻呂歌集と季節表現―「春立つ」をめぐる」（西條勉編『書くことの文学』笠間書院、二〇〇一）

井上富蔵「霞」考―萬葉集用語の研究―（『国文学攷』二三、一九六〇）

上野香織「為忠家両度百首について―初度百首から後度百首への展開」（『国語と国文学』六七―八、一九九〇）

大浜真幸「天平宝字三年正月一日の宴歌」（神野志隆光・坂本信幸企画編集『セミナー万葉の歌人と作品9・大伴家持2』（和泉書院、二〇〇三）

小川靖彦「人麻呂歌集の季節歌」（神野志隆光・坂本信幸企画編集『セミナー万葉の歌人と作品2・柿本人麻呂2』（和泉書院、一九九九）  
及川道之「神の山と霞―香具山・春日山の文芸空間」（『日本文学風土学会紀事』二四、一九九九）

王殊寧「唐景龍年間修文館学士考略」（『社会科学論壇』七、二〇〇六）

大井洋子「散木集の二首をめぐる」（『和歌文学研究』二五、一九六九）

岡田泰子「王湾『次北固山下』『江春入旧年』の句をめぐる―「年内立春」の詩歌の源泉としての可否」（『学芸国語国文学』一九、一九八四）

岡田芳朗・宇多喜代子・長谷川權「緊急座談会―そうなる！？二十四節氣―」（『俳句』六一―九、二〇一二）

岡田芳朗「日本最古の暦―持統三年木簡暦」（『歴史研究』五〇三、二〇〇三）

川上新一郎・佐々木孝浩・伊倉史人・山本令子・石神秀美「古今和歌集注釈書・伝授書年表（稿）」（『斯道文庫論集』四七、二〇一二）

川村晃生「詩語と歌語のあいだ―霞の色」をめぐる」（『国学院雑誌』九五―一一、一九九四）

小島憲之「漢語の摂取―漢語「立春・立秋」と「春立つ・秋立つ」など―」（『萬葉』一三五、一九九〇）

小島憲之「上代に於ける詩と歌―「霞」(カ)と「霞」(かすみ)をめぐって―」(美夫君志会編『万葉学論攷松田好夫先生追悼論文集』、続群書類従完成会、一九九〇)

小島憲之「暮年三省―「霏微」再考―」(『美夫君志』二六、一九八二)

後藤昭雄「菅原道真の詩と律令語」(『中古文学』二七、一九八一)

後藤昭雄「菅原道真の詩と律令語続稿」(『静岡大学教育学部研究報告、人文・社会科学篇』三三、一九八二)

小堀桂一郎「古代に於ける時間秩序感覚―『古今集』巻頭の年内立春歌に就いて」(『明星大学研究紀要(言語文化学科)』一一、二〇〇三)

小町谷照彦「古今和歌集評釈(一〇二八八)」(『国文学』二八―一〇五二―一、一九八三―二〇〇七)

佐藤明浩「後葉和歌集」の構成および性格」(『待兼山論叢(文学)』二二、一九八八)

佐藤明浩「為忠家両度百首」に関する考察―歌作の場の問題を中心に」(『語文』五七、一九九二)

城崎陽子「萬葉の霞」(古典と民俗学の会編集『古典と民俗学論集(桜井満先生追悼)』、おうふう、一九九七)

鈴木弘道「歌人藤原仲実考」(『立命館文学』一六二、一九五八)

高野正美「霞」の表現史」(多田一臣編『万葉への文学史・万葉からの文学史』笠間書院、二〇〇一)

武田祐吉「春山の霞壮夫(古事記)」(『国文学解釈と鑑賞』四―一二、一九三九)

田辺爵「契沖と年内立春歌」(『美夫君志』一七、一九七四)

鄧慶真「漢字「霞」の古代日本での受容―『萬葉集』と漢籍との比較研究を通して」(『皇学館論叢』三三―二、二〇〇〇)

鳥井千佳子「頓阿の「古今集注」追尋」(『鴨東論壇』一、一九八五)

西村富美子「初唐期の応制詠人―景竜年間の修文館学士群」(『四天王寺女子大学紀要』九、一九七六)

波戸岡旭「『懷風藻』に見える煙霞(上、下)―その六朝及び初唐詩との関連」(『漢文学会々報』三二、三三、一九八六、八八)

政所賢二「霞たつ」「霞たなびく」の表現について―萬葉集を中心に―（『解釈』二九―二、一九八三）  
村田通男「萬葉集の霞と霧」（『和歌文学研究』四、一九五七）  
柳澤良一『菅家後集』注解稿（二十八）（『北陸古典研究』二六、二〇一一）  
李宜蓬「上官婉儿与中宗文壇」（『北方論叢』（二、二〇一〇）  
李霞鋒・李桂英「試析杜詩中的唐代節日民俗」（『杜甫研究學刊』二、一九九五）  
林弘「杜甫与唐代節令習俗研究」（『杜甫研究學刊』四、一九九六）

### 三. インターネット資料

気象庁ホームページ「過去の地域平均気象データ検索」による（[www.data.jma.go.jp](http://www.data.jma.go.jp)）  
古典ライブラリー日本文学WEB図書館（[kjsystems.sakura.ne.jp/kotenlibrary/](http://kjsystems.sakura.ne.jp/kotenlibrary/)）『新編国歌大観』編集委員会監修『新編国歌大観』（角川書店）、『私家集大成』CD化委員会編『新編私家集大成』（エムワイ企画）のデータベース  
暦の上では（[24setuki.com](http://24setuki.com)）  
ジャパンナレッジ Lib（[japanknowledge.com/library/](http://japanknowledge.com/library/)）  
全唐詩検索系統（[cls.hs.yzu.edu.tw/QTS/](http://cls.hs.yzu.edu.tw/QTS/)）  
中央研究院瀚典全文検索系統（[hanji.sinica.edu.tw](http://hanji.sinica.edu.tw)）  
中国科学院国家授時中心（[www.time.ac.cn/serve/sunriseset/](http://www.time.ac.cn/serve/sunriseset/)）  
中国哲学書電子化計画（[ctext.org/pre-qin-and-han/zh](http://ctext.org/pre-qin-and-han/zh)）

日本気象協会 ([www.jwa.or.jp](http://www.jwa.or.jp))

早稲田大学日本古典籍研究所「平安朝漢詩文総合データベース」([db2.littera.waseda.ac.jp/wever/kanshi/gologin.do](http://db2.littera.waseda.ac.jp/wever/kanshi/gologin.do))

# 初出一覧

## 序章

※書き下ろし

## 第一部第一章

※初出 「年内立春詠」の和漢比較的研究『和漢比較文学』四七、二〇一一

## 第一部第二章

※書きおろし

## 第一部第三章

※書きおろし

## 第二部第一章

※初出 平安朝における年内立春詠の展開『和歌文学研究』一〇六、二〇一三

## 第二部第二章

※書き下ろし

## 第二部第三章

※書きおろし

## 第三部第一章

※初出 菅原道真の年内立春詠『和漢比較文学』五〇、二〇一三

## 第三部第二章

### 終章

※初出 紀貫之「袖ひちてむすびし水」の解釈『日本語と日本文学』五〇、二〇一〇

※書き下ろし



# 付録

# 平安和歌の立春関連詠作一覧

## 説明

本付録は平安和歌の立春関連詠作を収録したものである。

私家集の底本は『新編私家集大成』による。それ以外の歌集の底本は『新編国歌大観』による。なお漢字、仮名については一部を改めた。

検出の基準は、第二部第二章を参照。

歌集名の下のは番号は、巻数―整理番号（底本が『新編国歌大観』の場合）、整理番号（底本が『新編私家集大成』の場合）を示す。

例えば、「1.4」は、その歌集が『新編国歌大観』第一巻の4番目に位置することを意味する。「276」は、その歌集が『新編私家集

大成』の276番に配列されていることを意味する。

掲載順は、勅撰集（成立時代順）、私撰集（成立時代順）、私家集（成立時代順）、歌合（成立時代順）、歌学書（成立時代順）、定数歌（成立時代順）、私家集（私家集大成配列順）の順とする。

作者は通称で表記する。（安倍清行朝臣↓安倍清行、兼盛王↓平兼盛、一条院↓一条天皇、新院↓崇徳院、摂政前太政大臣↓九条兼実など）

歌集名 番号	巻・部立	歌番号	詞書	歌本文	作者
古今集 1-1	巻一・春上	1	ふるとしに春たちける日よめる	年の内に春はきにけり一年を去年とやいはむ今年とやいはん	在原元方
		2	春たちける日よめる	袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつ今日の風やとくらむ	紀貫之
		3	題しらず	春霞たてるやいづこみ吉野のよしのの山に雪はふりつつ	詠み人しらず
後撰集 1-2	巻十・物名	456	からことといふ所にて春のたちける日よめる	浪のおとのけさからことにきこゆるは春のしらべや改るらむ	安倍清行
		2	春立つ日よめる	春立つと聞きつるからに春日山に消あへぬ雪の花と見ゆらん	凡河内躬恒
		3	春立つ日よめる	今日よりは萩のやけ原かきわけて若菜つみにと誰をさそはん	平兼盛
後拾遺集 1-4	巻一・春上	2	みちのくににはべりけるとき春たつひよみ侍ける	いでてみよ今は霞むたちぬらん春はこれよりすぐるところきけ	光朝法師母
		3	春は東より来たるといふ心をよみ侍ける	東路はなこそその関もあるものをいかでか春の越えて来つらん	源師賢
		4	立春日よみ侍りける	逢坂の関をや春も越えつらん音羽の山の今日はかすめる	橘俊綱
		5	寛和二年花山院歌合によみ侍ける	春の来る道のしるべはみ吉野の山にたなびく霞なりけり	大中臣能宣
		425	天曆御時賀御屏風歌、立春日	今日とくるこほりにかへてむすぶらしちとせの春にあはむちぎりを	源順
		623	はじめて女のもとに春たつ日つかはしける	としへつる山した水のうすこほり今日春風にうちもとけなん	藤原能通
		943	むつまじくもなき男に名たちける頃、その男のもとより、春もたちぬ、今はうちとけぬかしなといひて侍りければよめる	さらでだに岩間の水はもるものをこほりとけなば名こそ流れめ	下野
金葉集 (初度本) 6-1	巻一・春	1	歳中立春ころをよめる	としのうちに春たつことを春日野の〔〕なさへにもしりにけるかな	紀貫之
		17	むつきの八日春のたちけるに、鶯のなきけるをききて	今日やさはゆきうちとけて鶯のみやこにいうるはつねなるらん	藤原顕輔
		1	堀河院の御時百首歌めしけるに、立春	うちなびく春はきにけり山河の岩間の氷今日やとくらむ	藤原顕季
金葉集 (二度本) 1-5	巻一・春	2	堀河院の御時百首歌めしけるに、立春	春たちて木末にきえぬ白雪はまだきに咲ける花かとぞ見る	藤原公実
		3	の心をよみ侍ける	いつしかとあけゆく空のかすめるは天の戸よりや春は立つらん	藤原顕仲
		4		つららぬし細谷のとけゆくは水上よりや春はたつらん	肥後
金葉集 (三奏本) 1-5'	巻一・春	14	むつきの八日春のたちけるに鶯のなきけるをききてよめる	今日やさは雪うちとけてうぐひすのみやこへいうるはつねなるらん	藤原顕輔
		14	む月の十日ごろに春たちけるに、鶯のなくをききてよめる	今日やさは雪うちとけてうぐひすのみやこへいうるはつねなるらん	藤原顕輔
		1	堀河院御時、百首歌たてまつり侍りけるに、春たつところをよめる	こほりぬし志賀の唐崎うちとけてさざ波よする春風ぞふく	大江匡房
詞花集 1-6	巻一・春	1	春たちける日、承香殿女御のもとへつかはしける	よととものにこひつつすぐるとし月はいかはれどかいはるこちこそせね	一条天皇
		192	春たちける日よみ侍ける	春のくる朝の原を見わたせば霞も今日ぞ立ちはじめける	源俊頼
千載集 1-7	巻一・春上	1	堀河院御時、立春の朝に、今日の心つかうまつるべきよし侍ければ奏し侍ける	君がためめたらし河を若水にむすぶや千代のはじめなるらん	源俊頼
		610			

歌集名 番号	巻・部立	歌番号	詞書	歌本文	作者
古今六帖 2-4	第一帖・歳時部・ 春	1	春たつ日	年のうちに春はきにけり一年を去年とやいはんことしとやいはいはん	在原元方
		2		袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつ今日の風やとくらん	紀貫之
		3		年のうちに春たつことを春日野のわかなさへにもしりにけるかな	
		4		春たつといふばかりにやみよし野の山も霞みてけさは見ゆらん	
		5		やま風にとくる氷のひまごとに打出づる浪や春のはつ花	王生忠岑
和漢朗詠集 2-6	巻上・春	3	立春	としのうちに春はきにけり一年をこそとやいはいはむことしとやいはいはむ	在原元方
		7		そでひちてむすびしみづのこほれるをはるたつ今日の風やとくらん	紀貫之
		8		春たつといふばかりにやみよしののやまも霞みて今日はみゆらむ	王生忠岑
		3		年のうちに春立つ事を春日野の若菜さへにも知りにけるかな	紀貫之
新撰朗詠集 2-8	巻上・春	3	立春	春霞たてるをみれば荒玉の年は山より超ゆるなりけり	紀文幹
		5		としの内に春立ちくれば一とせにふたたびまたる鶯のこゑ	輔仁親王
		1		春のくるあしたの原をみわたせば霞もけふぞ立ちはじめける	源俊賴
後葉集 2-9	巻一・春上	2	はるたつ心をよめる	雪ふかみいのはのかけみち跡たゆる吉野のさとも春はきにけり	待賢門院堀河
		3		いづしかと今朝は米もとけにけりいかでみぎはに春をしるらん	源俊賴
		1		打ちなびきけふ立つ春のわか水はたがいに井にかむすびそむらん	崇徳院
続詞花集 2-10	巻一・春上	2	春たつ日よみ侍りける	としのうちに春立ちぬとやよし野山霞かかれる峰のしら雪	藤原俊成
		1		けさみればかすみの衣おりかけてしうはた山に春はきにけり	藤原兼実
		2		けさみればこやの池水うちとけて氷ぞ春のへだてなりける	俊恵
月詣集 2-12	巻一・正月	4	たつはるの心を 大納言実国卿家歌合に、立春の心をよめる	あづまには春過ぎぬとやおもふらん都はけふぞはじめなれども	藤原兼実
		5		けさよりやすはのとわたる春風に氷の橋もとだえしぬらん	賀茂重保
		6		春やきて雪の下水さそふらんふじのなるさはおと増るなり	源仲綱
		7		春日山ふもとのさどに雪きえて春をしらする峰の松かせ	藤原定家
		8		去年といへば久しくなれるこちして思へばよはのへだてなりけり	藤原実国
		45	堀川院御時、立春の日、けふの心をつかうまつるべきよし仰ごとありければ、御前にて奏し侍りける	君が為みたらし川の若水にむすぶや千世のはじめなるらん	源俊賴
		665		かきこもりまだしら雪のふるとしに春ともみえて春はきにけり	藤原頼輔
		666		年のうちに春はきぬるをなをを又おくりむかふといそぐなるらん	丹波重長女
巻七・雑上	巻七・雑上	667	内大臣家にて人々百首歌よみ侍りけるに、山家立春といへることを	年のうちに春はたちきぬいづかたに残る日かずを思ひ分かまし	賀茂重保
		668		とけぬなるかけひの水のおとづれに春しりそむるみ山べのさと	小侍従
		670		何となく春たつけふのうれしきは思へば花のゆかりなりけり	寛延

歌集名 番号	巻・部立	歌番号	詞書	歌本文	作者
言葉集 10-176	巻十三・恋下	150	寄立春恋	いつしかとはるのけしきになりぬれどつれなき人はかはらざりけり	藤原通俊
		218	旧年立春を	おいゆけどをしけくもなし年のうちに春にふけたひあひぬとおもへば	藤原基俊
	巻十四・雑上	219	七日立春を	ふゆごもるよしの山のいはやにこけのしづくにはるをしるらし	源頼政
		220	寄述懐立春の心を	今日しあれかすがの原のかすめるは若菜つみにやはるもきつらん	寂念
	巻十六・述懐	348	おもふ事おはしけるころ、立春の心を	いつしかとけさは氷のとくれどもかしろの雪はきえずぞありける	源雅定
		349	伊勢の御社に百首歌奉られけるに、立春の心を	うらやましいかなるかたに春たちてなほわがもとぞ冬ごもるらん	藤原公光
		349	春の心を	いつしかと霞の衣立ちかけてみもすそ川にこほりとけゆく	藤原俊成
		350		あまの戸のあくるけしきもしづかにて霧ぬよりこそ春は立ちけれ	藤原俊成
		351	百首歌中に、同じ心を	岩まどろし氷もけさはとけそめて昔の下水もとむなり	円位法師
		352	百首歌中に、同じ心を	相坂の関の清水のうす氷とくるや春のこゆるなるらん	藤原隆信
		353		久かたの天のかぐ山てらす日のけしきもけふぞ春めきにける	藤原実定
		354	百首歌中に、同じ心を	きのふかもあはどながめしあはぢ島春としなればかすみーむら	藤原実定
		355	立春の心をよませ給ひける	朝まだき春の霞はけふたちぬくれにし年やおのがふるさと	慈円
		356	中院の右大臣家の会に、立春のころをよみ侍りける	年なみの立ちかへりぬるしるしあれや氷りし氷もしたむせがなり	守覚法親王
私撰集（二）	巻四・時節歌上	357	おなじ心を	今朝みればこやの池水うちとけて氷ぞ春のへだてなりける	俊恵
		358	中宮月次の御屏風に、小朝拝かきたる所をよみ侍りける	春といへばかすみにけりな昨日まで波まにみえしあはぢ島山	俊恵
		359	百首歌の中に、立春の心をよませ給ける	霞みしく春のはじめの庭の面にまつちわたる雲のうへ人	藤原定家
		360	前左大臣家会によみ侍りける	春たてば霞ばかりはみどりにてまだ雪しろしみ吉野の山	九条兼実
		361	俊成卿家の十首歌中に、立春の心を人よみ侍りける	霞みたつ春のみそらとおもはずはけふも雪げの雲とみてまし	登蓮法師
		362		おぼつかかな空に心やかよふらん霞も春もけふこそはたて	源師仲
		363		冬ごもるよしの山のいはやにこけのしづくに春やしるらん	源頼政
		364		あふ坂の関ふきこゆる春風に小川の氷今やとくらん	源行頼
		365		春やきて雪の下水さそふらんふじのなる沢おとまさるなり	源仲綱
		366		春はけさこえぬと思ふに逢坂の関の杉村なほかすむらん	俊恵
		367		東路をまだ夜をこめてくる春はしのぶのさとを立ちやしぬらん	顕昭
		368	大輔がよませ侍りける百首の中に、立春の心をよめる	春風の吹きくるままにしがの浦のなみにもかへるうす氷かな	藤原家隆
		369	春自東来という心よめる	心をやとどめて春も過ぎつらん清見が関のあけぼの空	顕昭
		370	題不知	春はまだ汀にかへるおとすなり遠ざかりにしがの浦浪	円賢
		371	山家立春という心を読める	一とけそむる岩まの水をしるべにて春こそつたへ谷のかけひを	藤原公信

歌集名 番号	歌番号	詞書	歌本文	作者
歌合・歌学書	1	立春	人はみなふり行くものを今日といへば誰が為なれやあたらしきとし	藤原隆季
	2		老の波立ちかきなれるけふしもあれなどわか水をくみ初めけん	藤原重家
	3		今日こそは春はきにけれふじのねのけふりとみるや霞なるらん	藤原美国
	4		一とせをおくりむかふる夜の程はいづくにありて今朝かへるらん	源師光
	5		めづらしき春のはじめのしるして山も霞の衣きてけり	藤原成範
	6		春たつと水のおもにぞ聞きそむるかけひの水とくるやま里	藤原顕輔
	7		蹠のやどにたてならべたる門松にするくぞみゆる千代の初春	藤原公重
	8		めづらしき春にいつしかうちとけてまづ物いふは雪のした水	源頼政
	9		いつしかと春のしるしのみゆるかな三輪の杉はら打ちかすみつつ	藤原清輔
	10		春のくる所はわかじものゆゑにあしたの原のまつ霞むらん	俊恵
	11		春ひたつはじめと人のつけがほにいつしか霞む朝まだきかな	源有房
	12		津の国のあしまの水とけにけりこやたつ春の始なるらん	平親宗
	13		水の面に昨日もふきし風なれど春たつけふぞ水をばとく	藤原資隆
	14		いつしかとたなびく山の霞かなけふをば春とたれかをしへし	藤原頼保
	15		相坂の関の水のうす氷とくるや春のこゆるなるらん	藤原隆信
	16		思ひやる程だにとほき東路をよのまにいかで春のきぬらん	藤原定長
	17		今朝よりやすはのとわたる春風に氷のはしのたえはじむらん	賀茂重保
	18		いつしかと霞みわたればわたつ海の浪のうへにも春立ちにけり	賀茂政平
	19		さざ浪や志賀のわたりのかすめるは今朝やまごえに春や立つらん	藤原敦頼(道因)
	20		いかなれば霞こめたる空をしも春のしるしといひ初めけん	顕昭
治承歌合 5-165	89	立春の心を	立ち帰る年はいづことわかねども霞める空を春とこそ見れ	寂念
	119	立春の心を	相坂の関の清水のうす氷とくるや春の超ゆるなるらん	藤原隆信
	248	旧年立春	歳の内の春のしるしは諸人の祝ふ気色の見えぬなりけり	寛盛
歌仙落書 5-271	37	立春のころを	相坂のせきのしみづのうすこほりとくるは春のこゆる成るらん	藤原隆信
中古六歌仙 5-272	1	歳中立春	かずそふとなげくもしらずとしのうちにいそぎたちぬるはるかすみかな	源俊頼
	151		やまざとばたなるぬのこほりとけゆくにはるきにけりとくみてしるかな	
	152	立春	春といへばかすみにけりなきのふまでなみまにみえしあはぢしま山	
	153		月よめば心のうちにたつはるをいかでかすみのそらにしるらん	俊恵

歌集名 番号	巻・部立	歌番号	詞書	歌本文	作者
堀河百首 4-26	春二十首	1	立春	春たちて木ずゑにきえぬ白雪はまだきにさける花かとぞみる	藤原公実
		2		氷ぬし志賀のからさきうちとけてさざ浪よする春風ぞふく	大江匡房
		3		三室山谷にや春のたちぬらん雪の下氷いはたくなり	源国信
		4		よし野山つもれる雪の消えゆくはまだふる年に春や立つらん	源師頼
		5		打ちなびき春はきにけり山川の岩まの氷けふやとくらむ	藤原顕季
		6		春たつといはせもはてず朝まだき風のけしきぞまづかはりける	源顕仲
		7		朝まだきゆるけき風のけしきにて春たちきぬとしられぬるかな	藤原仲実
		8		庭もせにひきつらなれるもろ人のたちぬるけふや千世の初春	源俊頼
		9		いかになく人にゑの鳥のひと声がとしに年をばそふるなるらん	源師時
		10		いつしかと明行く空のかすめるは天の戸よりや春はたつらん	藤原顕仲
		11		よし野山ふもともみえず春のけさ霞の衣たちてきたれば	藤原基俊
		12		昨日まで雪ふるとしとみしかどもけさは氷を春風ぞふく	永縁
		13		打ちつけに春たちきぬとみゆるかなきのふにかはるけるのけ色は	隆源
		14		つららぬしほそ谷川のとけ行けば氷上よりや春はたつらん	肥後
		15		春くれはおほ宮人はそれながらあらたまりてもめづらしきかな	紀伊
		16		春のくる夜のまの風のいかなればけさ吹きにも氷とくらん	河内
永久百首 4-27	冬十二首	414	旧年立春	年すぐる山べなこめそ朝がすみさこそは春と夜にたつとも	源顕仲
		415		あらたまの としに二たび はるたてば おいのかずのみ そはりつつ なきむかしこそ こひしけれ あはれわが君 ましとき たつのみかほに ちかづきて てる日の ひかり 身をてらし うれしきことを あさゆふの ま柚のうちに つつみても 春はや なぎの まゆひらけ はなのたもとも ほころびて よろこびのみぞ しげりける なつ のはじめの しらがさね たちきるままに ほとどぎす はなたち花に き鳴きては さ 月の玉を ときちらし 秋のはつかぜ ときをつげ 星合の空を みしほどに みねの 月かげ 木がくれて 嵐をそらに くもをいたみ 谷のゆふざり むせびあひて われ らが中は しぐれつつ 袖のつららも むすぼほれ いやかたまれる 庭なれや かし らのしもも はらひあへず いかい年月 つもるらん むかしのくすり けがさねど さ 一年に春は二たび立ちぬれど老木の花はいかがさくべき	藤原仲実
		416		あは雪もまだふるとしにたなびけばころまどはせる霞とぞみる	藤原仲実
		417		谷の戸をいえずとなけや鶯は年もあけぬに春はきにけり	源俊頼
		418		とどむるにとどまらざりし春なれどまつにはきけり年のうちに	源忠房
		419		あづまやの軒ばのたるひ鶯は雪かき分けて春や立つらん	源兼昌
		420		年のうちに春は立ちぬとちつけに雪げの雲を霞とぞみる	常陸(肥後)
		421			大進

歌集名 番号	巻・部立	歌番号	詞書	歌本文	作者
五社百首 10-06	伊勢大神宮百首和歌・春二十首	1	立春	今朝みれば霞の衣立ちかけてみもすそ川も氷とけゆく	藤原俊成
	賀茂御社百首和歌・春二十首	101	立春	つららぬしかもの河上うちとけて瀬瀬の岩なみ春とつぐなり	
	春日社百首和歌・春二十首	201	立春	古郷のまだふるとしに春たてば春日の山ぞまつかすみける	
	住吉社百首和歌・春二十首	301	立春	住の江の波より春や立ちぬらん松ふく風もあらたまるなり	
	日吉社百首和歌・春二十首	401	立春	春はまつにほの海をやわたるらん霞をよする志賀の浦波	
寂蓮結題百首 10-15		1	元日のたつ春	たちかへるとしとともはや春もまたゆきあふさかをこえてきつらむ	寂蓮

定数  
歌  
(二)



新編大成番号	略称	歌番号	詞書	歌本文
4	人麿Ⅲ	660	立春	冬すぎて春しきぬればとし月はあらたまれとも人はふりゆけ
34	躬恒Ⅰ	232	春立日	春たつとききつるからに春日山きえあえぬ雪の花とみゆらん
35	躬恒Ⅱ	181	春たつ日よめる	春たつと聞つるからに春日山消あへぬ雪の花とみゆらん
36	躬恒Ⅲ	256	春立日	春たつとききつるからに春日山きえあへぬ雪の花とみゆらむ
39	友則	1	立春日	水の面にあやふきみたる春風や池の水を今朝はとくらん
43	忠岑Ⅳ	14	春たちて、鶯のおそくなきしに	春きぬと人はいへども鶯のなかぬかぎりにはあらじとぞ思ふ
63	貴之Ⅰ	680	延喜十二年十二月春たつあしたに定方の左衛門のかみの ないしのかみに、賀たてまてうれるとき之歌	ことしおひのにひく桑籬のから衣干世をかけてそいはひそめける
		681		いはのうへにちりもなけれと蟬の羽の袖のみこそはたくふべらなれ
		682		としをのみ思ひつめつついままでに心をあけることのなき哉
		683		年の内に春たつことを春日野の若菜さへにもしりにけるかな
		684		住の江の松の煙はよととも浪のなかにぞかよふべらなる
64	貴之Ⅱ	32	立春日宰相中将師輔の君の御もとにたてまつる、つかさう つりけむとてなり、おほきおとどにたてまつり給へけり	朝日さすかたの浦風いまだにもみのうらさむき氷とけなむ
		33		かれはてぬもれ木あるをはるはなをよはなのたよりによくなとぞ思ふ
		76		ふる雪のしたににほへる梅の花しのびにかけて春はきにけり
		77		ふる雪のしたににほえる梅の花しのびにかけて春はきにけり
82	安法	1	正月つごもり春のたつ晦の夜	くれはつる年おしみかねうちふさは夢みむほどこに春はきぬべし
101	為信	19	節分のつとめて、ある女に	にしへゆく風もあらなんぬれころもひとみにこぼる涙とかせん
102	順Ⅰ	1	春立日	今日とくる氷にかへてむすぶらしちとせの春にあはもちぎりを
103	順Ⅱ	164	天曆御時御屏風歌、立春	今日とくる氷にかけてそむすぶらしちとせの春にあはんちぎりを
111	兼澄Ⅱ	46	あはたのおとど、また井にておはせし時に、ふるとしに節分 のはじめにて侍し日、梅の花をよませたりしに	えだわけてにほひやすらん梅の花年のうなる春のしるしは
126	能宣Ⅰ	65	立春ののちの雪	春はたちまたふるとしの雪はふり空に心をわきざかねつる
133	道信Ⅰ	83	春たつころ、人にきこゆる	春たつととなを鶯のまたれぬはわれかなくねにおもなれにけり
147	重之	39	又、春たつ	山水の氷とけつつ春くれば池の氷もほころびにけり
		75		はつ春のおもひ立らん山道にあやにくなりや今朝のふる雪
		76		またさかぬえたにうつまく白雪を花ともいはじ春の名たてに
		77		はるごどに鶯のみせしらせけるとりのほらにや花もこまれる
		78		山里はすみてあたにぞなりぬべきこよひはかりをしるべかりけり
		79	立春日、又、ゆきふる	ふく風をしるべにはして梅の花こよひはかりをしるべかりけり
		80		風さむみ春山にぬとおもふまに山の桜を雪かとぞ見る
		81		雪と見ておほつかなきに山桜はたとさつけてゆくやなになり

新編大成番号	略称	歌番号	詞書	歌本文
150	長能Ⅱ	51	三月二十九日にてはて侍けるとし、春たつ心、人々よみ侍けるに、花山院にて	こころうきとしにもあるかな廿日あまり九日といふに春のくれぬる
		54		もろとにもわかなもつまむ妹背山やまたのさはの水もるるなり
		55	春たつといふ題を、院むたまはせたるに	ささのはのさゆるしも夜もあかしてきゑみつむ春の袖ぞぬれぬる
		56		なにもせてあけぬるものをすかのねのながき春日をまたきくらさむ
155	重之子僧	1	春たつひある所のおほせことにて	うは氷とくるなるべし山川のいはまき清水音まさるなり
165	道命	114	歳内に節分ある年、方違へに、ものへまかりて、月をみて	あらたまのとしはしらねどありあけの月はかはらぬものにぞありける
		298	年内に節分するとし、方違へにまかりて、ありあけの月を見て	あらたまのとしはすぐれどありあけの月のかはらぬことぞあやしき
		330	節分のつとめて	今日よりはあしまの水やゆるからんたるわたちとの氷うすれて
187	能因Ⅰ	1	春二首 此日即立春也	氷とも人の心をおもはばや今朝たつ春の風にとくべく
		2		ねやちかき梅の匂ひにあさなあさなあやしく恋のまさる比哉
189	主殿	14	これは節分の夜、おとこにとられたる女にやりし	こほりだにとくめるよはのぬま氷にむすびてけりなそこのちぎりは
		15	返し	えもいはぬよはのこほりにあい口ければまたうちとけぬこちかもする
195	範永	49	女のもとに、春たつひ	春くれどかはるしるしもなかりけりすぎにし冬をなにうらむけむ
		165	春たつ 左大弁	春たつと人も見るべく鶯の宿のかきねにいつしかもなく
200	出羽弁	9	宮の宣旨殿の、年たちかへりてしるしも見えず晴れ間なきに、九重はいぶせさもまさりて、などやうによみたまへりし御ふみ、とううしなひて、わすれて、御かへりことの限りおほゆるぞあやしき、師走に節分してしなり	としのうちになちにしはるのひかずにはのこるつらもあらじとぞ思ふ
209	経信Ⅰ	1	立春氷	春風もまた吹とかすいかにばかりむすびかねたる氷なるらむ
218	公実	1	ほりかはの院御時、百首歌たてまつりしに、立春の心を	春たちてこずゑにきえぬ白雪はまたきにさける花かとぞみる
220	匡房Ⅱ	1	立春	氷ぬし志賀のから崎うちとけてさざ浪よする春風ぞふく
222	紀伊	40	春たつとよはるるなにてなむ、人のかへりことをいかにもせねば	かきつむるもしほの煙たちかへりなびきなびかずきよしもがな
227	顕季	181	立春	うちなびき春はきにけり山河の岩間の氷今日やとくらん
228	摂津	13	立春	はるたつとそらにするくもみゆる哉いつしか今朝は浅緑なる
		2	立春日よめる	いつしかと今朝は氷もとけにけりいかでみぎばに春をしるらん
		679	歳中立春	かすそふとなくもしらぬ年のうちにいそきたちめる春かすみかな
231	俊頼Ⅰ		おなじ心をよめる	あは雪もまたふる年にたなびけばころまどはせる霞とぞみる
		685	堀川院御時に、立春の朝に、御前にて今日の心よめと宣旨ありければつかまつれる	君がためみたらし川をわか氷にむすぶや千世のはじめなるらん

新編大成番号	略称	歌番号	詞書	歌本文
150	長能Ⅱ	51	三月二十九日にてはて侍けるとし、春たつ心、人々よみ侍けるに、花山院にて	こころうきとしにもあるかな廿日あまり九日というに春のくれぬる
		54		もろともにわかなもつまむ妹背山やまたのさはの水もるるなり
		55	春たつといふ題を、院むたまはせたるに	ささのはのさゆるしも夜もあかしてき糸みつも春の袖ぞぬれぬる
		56		なにもせてあけぬるものをすかのねのながき春日をまたきくらさむ
			うは氷とくるなるべし山川のいはまぐ清水音まさるなり	
155	重之子僧	1	春たつひある所のおほせことにて	あらたまのとしはしらねどありあけの月はかはらぬものにぞありける
165	道命	114	歳内に節分ある年、方違へに、ものへまかりて、月をみて	
		298	年内に節分するとし、方違へにまかりて、ありあけの月を見て	あらたまのとしはすぐれどありあけの月のかはらぬことぞあやしき
167	和泉式部Ⅰ	330	節分のつとめて	今日よりはあしまの水やゆるからんたるのたちとの氷うすれて
187	能因Ⅰ	1	春二首 此日即立春也	氷とも人の心をおもはばや今朝たつ春の風にとくべく
		2		ねやちかき梅の匂ひにあさなあさなあやしく恋のまさる比哉
189	主殿	14	これは節分の夜、おとこにとられたる女にやりし	こほりだにとくめるよはのぬま氷にむすびてけりなそこのちぎりは
		15	返し	えもいはぬおほのこほりにあい口ければまたうちとけぬこちかもする
195	範永	49	女のもとに、春たつひ	春くれどかはるしるしもなかりけりすぎにし冬をなにうらむけむ
200	出羽弁	165	春たつ 左大弁	春たつとも見るべく鶯の宿のかきねにいついかもなく
		9	宮の宣旨殿の、年たちかへりてしるしも見えす晴れ間なきに、九重はいぶせさもまさりて、などやうにのみたまへりし御らみ、とうしなひて、わすれて、御かへりことの限りおぼゆるぞあやしき、師走に節分してしなり	としのうちになちにしはるのひかずにはのこるつらもあらじとぞ思ふ
			といはるる、さるは(中略)この春さへたちかへり給へる、猶心うく	たちかへり猶春になる嘆きをばみを鶯の同じえになく
				春風もまた吹とかすいかにばかりむすびかねたる氷なるらむ
209	経信Ⅰ	1	立春氷	春たちてこず糸にきえぬ白雪はまたきにさける花かとぞみる
218	公実	1	ほりかはの院御時、百首歌たてまつりしに、立春の心を	氷おし志賀のから崎うちとけてさざ浪よする春風ぞふく
220	匡房Ⅱ	1	立春	かきつむるもしほの煙たちかへりなびきなびかずきくよしもがな
222	紀伊	40	春たつとよはるるなにてなむ、人のかへりことをいかにもせねば	うちなびき春はきにけり山河の岩間の氷今日やとくらん
227	顕季	181	立春	はるたつとそらにしくもみゆる哉いつしか今朝は浅緑なる
228	摂津	13	立春	いつしかと今朝は氷もとけにけりしかでみぎはに春をしるらん
231	俊頼Ⅰ	2	立春日よめる	かすそふとどなけくもしらぬ年のうちにいそきたちぬる春かすみかな
		679	歳中立春	あは雪もまたふる年にたなびけばこるまどはせる霞とぞみる
			おなじ心をよめる	君がためみたらし川をわか氷にむすぶや千世のはじめなるらん
		685	堀川院御時に、立春の朝に、御前にて今日の心よめと宣旨ありければつかまつれる	

新編大成番号	略称	歌番号	詞書	歌本文
233	俊頼Ⅲ	2	立春	いつしかと今朝は氷もとけにけりいかでいはまにをはをしるらむ
		673	としのうちのたつ春	かすそふとなけくもしらずとしのうちにいそぎたちぬる春霞かな
			おなじ心をよめる	あは雪もまたふる年にたなびけばころまどはせる霞とぞみる
		679	堀河院御時立春のあしたに御前にて、今日の心よめと宣旨 ありければつかうまつれる	君がよにみたらしかはをわか氷にむすぶやちよのはじめなるらん
234	二条大弐	1	立春	たにかはのこほりふきとく風のをとや春たつ今日のしるしなるらん
238	基俊Ⅰ	56	旧年立春	おひゆけどをしげくもなし年の内に春にふたたびあひぬと思へば
242	行宗	183	立春	月よめば今日は春たつ日なりけりあしまの氷とけやそむらん
246	顕輔	20	むつきの八日、春立けるに、子日にあたりたるに、鶯のなく そ	けふやさはゆきうちとけて鶯のみやこにいづるはつねなるらん
			国などもさりし後、さてのみやはとて公文かむかふるに (中略) 見れば、立春了後今日のつかさの奏にはせむとて	夜をかさねあかたの水のこほれるを老の春風今日ぞときつる
		54	いそかせたまへば、とくるよしかむかふるつかさのおさ、な かめ侍て、御使につけて	
		55	かへし	春風にあかたの氷とけぬれば流むみくつもあらはれにけり
250	忠通	1	春たつ日	今朝みればみねに霞はたちけり谷の下氷いまやもるらん
251	覚性	1	立春のころを	山風によこざる風のいつきえて緑ゆるけき春のたつらん
		2		雪きえて春たつそのうららにも鏡のかげのしもはさむけれ
		3		うちきけばこそとしとをけれと思へば昨日今日となりけり
		4		春立ばきしのかけひの霜くつれ窓ぞなをす氷もりくとして
		5		おの山は霞みにけりなすみがまの煙はきのふたえにしものを
		6		いつしかとふた見のうらのかすめるはあけゆくとしるのしるしなりけり
		7		春のくるよはの旅ねのかたたかへ帰あしたの道ぞかすめる
253	清輔	1	立春	いかはかりとしのかよひ路近ければ一夜のほどにゆきかえるらん
		2		いつしかとかすまざりせば音羽山音はかりにや春を聞まし
		3		今日こそは春はたつなれいつしかと気色ことなる明ほの空
		182		しづのやにたてならべたるかど松にするくぞみゆる千代のはじめは
254	公重	303	立春	春きぬと今朝ぞつぐなる鶯はねぐらの竹に一夜すべして
		438	処処立春	池水に氷とけゆく風ふけば野辺の霞もたなびきにけり
				春来ぬと人こそいはめいつのまにけさ鶯の宿につぐらむ
255	俊恵	1	花園の左大臣仁和寺にて、立春の歌あまた人人によませら れ侍りしによめる	鶯は春となけどもなよ竹の枝にも葉にも雪は降りつつ
		2		山ざとはたな井の氷とけ行くに春きにけりとくみてしるかな
		3		

新編大成番号	略称	歌番号	詞書	歌本文
256	俊恵	4	きさみの宮の御方に歌合あらんとて、九条太政大臣よませ侍りしかば、立春の心を	いつしかと朝日の影のしるきかな長閑けかるべき千世の初春
		5	左大将実定家にて、おなじ心を	春といへば霞みにけりなきのふまで浪まに見えしあはち島山
		6	大納言実国家歌合に	春のくる所はわかじものゆへにあしたの原のまづ霞むらん
		7	皇太后太夫俊成十首歌よませ侍りに、春たつころを	春は今朝こえぬとおもふに相坂の関の杉むら猶霞むらん
		8	中院入道右大臣家にて、人人十首歌読み侍りにし	うちたたき春やきぬらんこやの山の氷の戸ざし早明けてけり
		9	又、ある所にて、おなじ心を	鶯のはつねはやがて春なればおいもなれをや知べにはする
		10		雪の中に春くるとしと鶯もかぞへけりとは今朝ぞ知りぬる
		11	右大臣家人人に百首歌よませられ侍りに、読めとありしか	いつのまに今朝引きかへて難波がたいまは春べと霞こむらん
		12	ば、おなじ題を五首	としのうちにさきにし梅にけふよりぞをのが春とも告げよ鶯
		13		春きぬと今朝つけ渡る鶯は涙の氷まつやとけぬる
		14		月よめば心のうちに立つ春をいかで霞の空にしるらん
		1	立春	相坂の関にし春をとどめせば山のこなたはかすまざらまし
		2	同心を、俊成卿の家の十首会の中に	冬籠る吉野の山の岩やには昔のしづくも春をしろらん
258	重家	3	おなじ心をよめる心を、実国卿歌合に	めづらしき春にいつしかうちとけてまつ物いふは鶯の声
		463	立春	おいのなみたちかきさなれる今日しもあれなどわか水をくみはじめけん
		533	立春観道といふ題を	いつしかとはるのはじめにうちもれてちとせをかねて遊うれしき
259	教長	1	讃岐院百首歌たてまつれとおほせられしとき、立春をよめる	おしなべてしづのふせやをけき見ればまつとともにとぞはるはたちける
		2		いつしかとみかきのはらの朝霞あやしやなにのしるのしるしぞ
		3		みわたせばよものやまべのかすめるを春たちぬとはいふにぞありける
		4		春たてば氷の涙うちとけてけふぞなくなる谷の鶯
		5		みよしののやまざのゆきをけさみればとくるやはるのしるしなるらん
		6	立春歌	あさみどりそらにぞいとのおそびけるはるはこちよりくるとこそきけ
		7		あふさかのせきのすぎむらからすみだつ春のしるしはみわもたつねし
		8		いつしかと末の松山かすめるはなみとともにや春のこゆらん
		9		はつ春のちよもといはふしるしにはまづ一年を今日ぞそへつる
		10		九重に今日くる春のやへ霞たちやはすつるふるきみやこも
		11	むつきのついでちによめる	初春の千代のことは引かへて西へといそぐいはひをぞする
		12	讃岐院、百首の歌たてまつれとおほせられしとき、旧年立春をよめる	月よめばまだ冬ながら咲にけるこの花のみか春のしるしは
		13		一とせにふたたび春は立にけりまたふるとしの雪のまにまに
		14	山寺につれづれとしてこもりけるに、ふるとしに春のたちければよめる	春霞としの内にしたちぬれば池の氷のかたへとけけり
		15		をしみを思ひしりてや白雪のまたふるとしに春のきぬらん
		16		鶯も春たちぬとやしら雪のまたふるすより急ぎ出らむ

新編大成番号	略称	歌番号	詞書	歌本文
260	寛綱	1	旅宿に春たつといふことを、よみ侍りける	昨日まで雪をはらひいたひ衣けさは霞とともにたちぬる
262	有房Ⅱ	1	たつ春	わたのはらなみちもみえずかすめるはやそしまかけて春やたつらむ
		2	おなじ心を	あづまにはるやたつらむあふさかのせきのし水のけさはこほらぬ
263	資隆	1	立春	ふるとしに春のきぬれはきえあへぬこほりのしたになみやたつらむ
		2	立春	春のくる今日をわれやわすれまし老そのもりのかすまざりせば
266	実国	1	たつ春の心を	こそといへばひさしくなれるこちしておもへばおほのへだてなりけり
		2	たつ春の心を	山人の覧にむすぶ水たにとけずは今日を春としらめや
267	経正	1	立春の心を	けさみればすまもあかしもかすめるはうらづたひしてはるやきぬらん
268	忠度	1	立春	あづまぢや一夜がほどにくる春をいかでききだつ霞なるらん
269	経盛	1	立春	けふよりやあしまの氷うちとけてなにかたもはるめきぬらん
		1	としのうちにはるたつひ、ゆきのふるによめる	かきくもりまだしらゆきのふるとしにはるともみえてはるはきにけり
270	頼輔	2	立春をよめる	はるのくるしとみえてふるとしのたちへだつるはかすみなりけり
		3	立春をよめる	うぐひすのいつしかいでてつぐるかなはるはたによりたつにやあるらん
274	惟方	1	よかはに侍りし年、春たちしひ、そらのけしきもうらにて、た にの雪とけわたりしかば	したくさやもゆるはるひになりぬらんけふしもたにの雪のとけゆく
		2	春立日、あづまのかたより人のまうできたりしをみて	あふさかのせきを霞とちいでて春とともによけさはきつらん
		3	大原にかたがへにまかりてかへるあしたに	ひとよへてはるたちぬればいづるさのとしは山ちにかへるなりけり
		4	海辺立春といふところを	けさよりやはるになるみのうらならんなみにかすみのたちそはりぬる
275	宗家	121	たつ春のこひのころ	うらやましわかみにかたきあふさかをけさはこえてぞはるはきつらん
		1	たつ春のあしたよみける	としくれぬ春くべしとおもひねにまさしく見えてかなふ初夢
		2	たつ春のあしたよみける	山のはのかすむけしきにしるきかなけさよりやさは春のあけぼの
		3	たつ春のあしたよみける	はるたつとおもひもあへぬあさいでにいつしかかかすもおとは山かな
		4	たつ春のあしたよみける	たちかはる春をしれども見世がほにとしをへだつる霞なりけり
		7	山ざとに春たつと云ふ事	山ざとはかすみわたれるけしきにて空にやはるの立つを知るらん
276	西行Ⅰ	8	なにはわたたりに、としこしに侍りけるに、春たつところをよ みける	いつしかとはるきにけりと津のくにの難波のうちは霞こめたり
		1060	としのうちにはるたちて、あめのふりければ	はるとしもなをおもはれぬ心かなあめふるとしのこちのみして
		1061	野に人のあまた侍りけるを、なにする人にかととひければ、 なつものなりとこたへければ、としのうちにたちかいはるはる	としははや月なみかけてこえにけりむべつみはへししぼのわかたち
		1062	の、しるしのわかなか、さはと思ひてよめる	なにどなく春になりぬときく日より心にかかるみよしののやま
		1064	はるたつ日よみける	山路こそゆきのした水とけざらめ都のそらは春めきぬらん

新編大成番号	略称	歌番号	詞書	歌本文
277	西行Ⅱ	678 679	春たつころを	年くれぬ春くべしとはおもはねどまさしく見えてかなふはつ夢 とけそむるはつ若水の米にて春たつことのまつまれぬる
279	西行Ⅳ	1	ならの法雲院の、こうよほうげんのもとにて、立春をよみける	みかさやまはるををにとしらせけり氷をたたく驚のたき
280	西行Ⅴ	160	山さとをはるたつといふ事を	春しれとけにのほそ水もりそくるいはまのこほりひまたへにけり
281	実定	1	皇太后太夫俊成卿十首題よみてと申おくられしに、立春	けふこゆるはるまちはほにあらふさかのせきのし水もしたむせふなり
282	長方	1	立春の心を	あらたまのとしとはきくにいかなればただおなじ身のふりはゆくらん
286	実家	2 3	はるたつころを	今朝みればのきのたるひもとけにけりしのぶ草に春やたつらん あさ日さすまがきのたけのむらすずめこゑのいらこそ春めきにけれ
290	親盛	1	百首中に、はるたつころを	春きぬとそらにするきはあさまだき霞にきゆるあまのかごやま
293	親宗 守覚Ⅰ	1 1	権大納言実国家歌合に、立春の心を 立春	つのくへのあしまの氷とけにけりこやたつ春のしるしなるらん 年なみのたちかはりぬるしにやこほりし水もしたむせぶなり
294	守覚Ⅱ	1 2 3	立春	年なみのたちかはりぬるしにやこほりし水もしたむせぶなり あまのとのあくれはやがてくる春どりのねよりぞききはし としくれしなごりの雪()あたたにつけて()
295	師光	31	家にうたあはせし侍りしに、よりまさの朝臣たつ春のうたに、 めつらしき春にいつしかうちとけてまつものいろは雪のした 水、とよみ侍つること、おもしろくきこえ侍しかば、かの朝臣 のもとにけいはし侍し	さもこそは雪の下水うちとけて人にはこえてみえし波を
296	小侍従Ⅰ	1 2 3	立春のころを 左大将実定家の百首のうち、山家のたつ春	春たつしらでもみはや天の原かすむは今朝の思ひなしかと あらたまる春は今朝かと思よりいつる日影もめづらしきかな とけぬなるかけひの水の音信に春しりそむるみ山べの里
297	小侍従Ⅱ	1 2 3	たつ春のころを 左大将の家の百首のうち、山さとたつ春	春たつしらでも見はやあまのはらかすむはけさのおもひなしかと あらたまる春は今朝かとおもふよりいつる日影もめづらしきかな とけぬなるかけひの水のおとつれて春しりそむるみやまべのさと
298	小侍従Ⅲ	1	山家立春	とけぬなる簀の水の音つれに春しりそむるみ山へのさと
301	俊成Ⅰ	102 202 203 481 482 483 484 485	立春 家に十首歌人々によませける時、立春の歌とてよめる 正月ついでたちおほはらのにまうつとて、松原のかすめる を 立春 立春 立春 立春	去年もさてくれにきと思へば春たつときよりかねてものぞかなしき 年の内に春たちぬとや吉野山霞かかれける峯の白雪 春霞立にけらしなをしほ山に松かはらのうすみとりなる あまのとのあくるけしきものとかにてくるぬよりこそ春はたちけれ 相坂にけさはきにけり春かすみ夜はにやたちし白河の関 けふといへはもろこしまでもゆく春をみやこにのみと思ひけるかな をしのである池の氷のとけゆくはをのがはぶきや春の初風 年くれし涙のつららとけにけりこけの袖にも春やたつらむ

新編大成番号	略称	詞書		歌本文
		歌番号		
平安私家集（七）	俊成Ⅲ	1	十首のうた人々によませけるととき、立春の歌としてよめる	年のうちに春立ぬとやよしの山霞かかれる嶺の白雪
		2	崇徳院に百首歌めしける時、春のはじめのうた	春きぬと空にしるきは春日山嶺の朝日のけしきなりけり
		3		霞たち雪も消ぬやみよしののみかきが原にわかな摘てん
		4		天のとの明るけしきもしつかにて雲井よりこそ春は立けれ
		5	右大臣家に百首のうた人々によませらるとて、くはふべきよし侍ければ、よみてたてまつりけるととき、立春のうた五首	あふさかに今朝はきにけり春霞よはにや立し白川の関
		6		けふといへばもろこしまでも行春を都にのみとおもひけるかな
		7		をしのめる池の氷の解行はをのかはふきや春の初風
		8		年くれし涙のつららとけにけり苔の袖にも春やたつらん